

甲ツ原遺跡Ⅳ

(第1次・2次・3次・6次・7次調査)

— 一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査 —



1998. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

甲ッ原遺跡Ⅳ

(第1次・2次・3次・6次・7次調査)

— 一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査 —

1998. 3



甲ッ原遺跡C区南端からハヶ岳を望む
(右方向へ延びる新設道路が甲ッ原遺跡)



甲ッ原遺跡A区南端とC区全体を北から富士山を望む



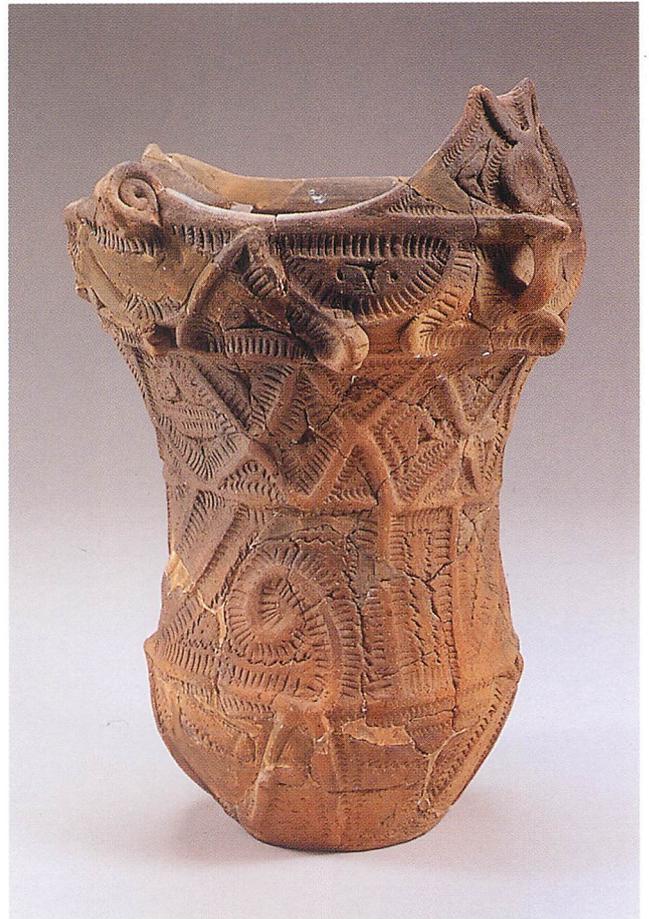
甲ッ原遺跡とその周辺



A区7号土坑



A区1号埋甕



C区45号住居出土遺物



序

本報告書は、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴って1989年度から1997年度に行われた、甲ツ原遺跡の第1次・2次・3次・6次・7次発掘調査の報告であります。

本遺跡が位置する北巨摩郡大泉村は、北には八ヶ岳が聳え、南には富士山を遠望することができる、八ヶ岳南麓の風光明媚な地域であります。また、この八ヶ岳南麓は、縄文時代を中心とする遺跡が数多く存在することでも知られ、本遺跡の近辺には、国指定遺跡である金生遺跡のほか、天神遺跡や寺所遺跡といった著名な遺跡があり、歴史的環境においても大変恵まれた地域となっております。

今回報告をします第1次・2次・3次・6次・7次発掘調査における調査総面積は、約6,730 m²であります。この広範囲にわたる調査におきまして、縄文時代の住居跡71軒・掘立柱建物跡5棟・平安時代の住居跡3軒、および500基近くの土坑と旧河道の存在などが確認されています。なお遺物につきましては、多数の縄文土器片をはじめ、土偶・石鏃・石棒・打製石斧・磨製石斧・石匙・石錐および土師器や須恵器などが確認されています。特に1997年度の第7次発掘調査では、本遺跡の埋甕としては初めての、両耳壺の埋甕も確認されています。

本遺跡は県内でも有数な縄文時代の大規模な集落遺跡として注目を受け、出土した多数の遺物は、他地域との交流や縄文時代の文化を考える上で貴重な成果を提供しております。

本遺跡の発掘調査は、1997年の第7次調査をもって全て終了したわけですが、近年特に関心の高い八ヶ岳南麓の歴史を究明する一資料として、本遺跡報告書が多くの方々にご利用いただければ幸甚です。末筆ながら、種々のご協力を賜った関係機関各位、並びに長年にわたり直接、調査と整理などに従事していただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例 言

1. 本報告書は、1989・1990・1991・1996・1997年度に、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡大泉村に所在する甲ッ原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が依頼され、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、1989年度（第1次）は同機関の山本茂樹・森原明廣が担当し、1990・1991年度（第2・3次）は同機関の山本・今福利恵が担当した。1996・1997年度（第6・7次）は同機関の山本・川手昌英が担当した。
4. 本報告書の執筆は、山本・今福・川手が行い、編集は山本が行った。また第I章および第III章第6節4凹石状石器については、川手が執筆した。また、第III章第6節2・3は網倉邦生が行った。
5. 写真撮影は、遺構を山本・森原・今福・川手が行った。遺物の写真撮影は山本・川手が行い、土器の展開写真は小川忠博氏に依頼した。尚航空写真については、株式会社シン技術コンサル・株式会社東京航業研究所に依頼した。
6. 本書にかかる出土品・記録図面・写真などは、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査および報告書作成にあたっては、関係諸機関・地元の多くの研究者の方々からご指導・ご協力を賜った。厚く感謝申し上げます。

凡 例

1. 図版の縮尺は、住居跡1/60・土坑1/40・土器実測図1/4・土器拓本1/3・石器1/3を基本としているが、一部変更している箇所があり、図版に明記した。
2. 土偶等の小遺物については1/1.5を基本とした。
3. 焼土部分については  のスクリントーンがかけてある。
4. 土器片で赤彩されている箇所には  のスクリントーンがかけてある。
5. 土坑番号については、A-X X X・C-X X XはA区のX X X号土坑・C区のX X X号土坑を意味する。

目 次

口絵
序
例言
凡例

第Ⅰ章	発掘調査経過	1
第1節	調査に至る経緯と調査経過	1
第2節	調査組織	4
第3節	調査方法	5
第Ⅱ章	環 境	6
第1節	地理的環境	6
第2節	歴史的環境	6
第Ⅲ章	遺構と遺物	14
第1節	住居跡	14
第2節	埋 甕	125
第3節	掘立柱建物跡	130
第4節	土 坑	133
第5節	土製品・石製品等	145
第6節	石 器	154
1.	石 棒	154
2.	石器観察	155
3.	甲ッ原遺跡における石核分類と石材	157
4.	凹石状石器	160
まとめ		162
あとがき		165

第Ⅰ章 発掘調査経過

第1節 調査に至る経緯と調査経過

甲ッ原遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村に所在し、八ヶ岳の南麓の緩やかに傾斜した尾根上に立地しており、東に油川、西には甲川によって挟まれたやせ尾根上にある。

本遺跡は、昭和46年度に遺跡分布調査が行われ、当時の記録によると、『東西150m、南北600mという規模で、範囲も広く出土遺物も多いことから代表される遺跡である』、と記載されている。遺物としては、『石斧・石皿・石棒』が表採されている。

このような遺跡地に、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業計画が開始され、工事に先立って遺跡の範囲確認のため、1989年度には発掘調査と並行して、山林地帯ということもあって表面採集による分布調査が困難であるために、八ヶ岳東南麓ほか遺跡分布調査が実施され、この調査によって南北の遺跡の範囲が明らかにされるに至った。

発掘調査は、第1次調査(1989年)から第7次調査(1997年)までの7ヶ年にわたって発掘調査が行われ、第7次をもって甲ッ原遺跡の発掘調査は全て終了した。発掘調査年度は以下に記したとおりであり、また第2節でもふれているので省略させていただく。

調査地区は年度によってそれぞれ異なり、地区を飛び越えて調査が行われた年度もある。そのため報告書の作成にあたり、まずA区の一部を1993年度に『甲ッ原遺跡Ⅰ』として報告を行い、次にC区のはほぼ全体として1995年度に『甲ッ原遺跡Ⅱ』の作成を行った。B区の報告については、未調査区が一部であったことから『甲ッ原遺跡Ⅲ』として1996年度に報告を行った。

今回の報告は、『甲ッ原遺跡Ⅳ』としてA区の全体および未調査区であった箇所について作成を行ったものである。A区は、南北にのびる道路部分の西側の縦半分が1991年度の調査区に設定されたこと、また集落の構成上から全体が明らかにされた時点で報告することが望ましいであろうと考え、全て調査が終了した段階で報告する運びとなった。

第1次調査 1989年11月6日から12月12日 調査面積は、約1000㎡が対象であった。重機による排土作業の(平成元年) 後、確認作業を行い、住居数9軒・土坑5基・配石遺構と思われる石組が確認された。その結果、遺構密度及び冬季の関係で約500㎡の調査で終了し、次年度のために埋め戻し作業を行った。

調査担当者 山本茂樹・森原明廣(最終報告『甲ッ原遺跡Ⅳ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集)

第2次調査 1990年5月14日から12月27日 県道建設のため調査範囲は南北に長く、調査の進行上便宜的に(平成2年) 北からB区・A区と調査区を分割して行った。調査面積は、約3000㎡を対象とし、昨年度の残り(A区)約500㎡の調査を行い、次にB区の設定の後、調査が行われた。発見された遺構は、A区では縄文時代前期の住居跡3軒、中期の住居跡13軒、土坑110基、掘立柱建物跡4棟および旧河道で、多くの縄文土器片のほか石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、土偶などが見つっている。

B区では、縄文時代中期の住居跡4軒、平安時代の住居跡2軒、旧河道、溝状遺構、土坑などが見つかり、縄文土器片のほか、土師器、須恵器や打製石斧、土偶などが発見された。

調査担当者 山本・今福利恵(B区の報告『甲ッ原遺跡Ⅲ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第144集・最終報告『甲ッ原遺跡Ⅳ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集)

整理 1991年1月7日から3月29日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野町子、千野あやめ、浅川たみ子、浅川三千代、浅川茂子、浅川

千代子、浅川八千子、浅川保代、藤森房子、藤森八千代、藤森里美、浅川もとじ、平井あさえ、細田絹代、浅川久代、井富保仁、平嶋弘子、八巻久子、山口淑江、須賀富雄、秋山松義、秋山半蔵、守屋敏子、保坂実香子、三井種子、斉藤かずみ、進藤きくえ、相吉よし江、藤森かねよ、三井光恵、藤森ます子、藤森秀子、藤森さち子、藤森さき子、平重蔵、平真寿美、平美与枝、石原はつ子、大森仁美、中澤敏雄、出月満寿江、梅林はなの、長田可祝、出月遊亀子、長田和子、長田明美、宇野文子、望月和佳子、伊林佳子、野中はるみ、若林初美、名取洋子、長田くみ子、山本潔、千野清江、宮坂晴幸、矢崎米子、小林よ志子、土屋ふじ子、米山八重子、斉藤律子、保坂典子
岸崎浩実（国学院大学）

第3次調査 1991年5月20日から12月27日 調査面積は、1800㎡を対象とし、A区の設定箇所より更に南へ
(平成3年) 調査が行われる関係で、区切りのよい現道路で調査区をわけC区を設定した。また道路が緩やかに東へ曲がっていくことも考慮した。今年度の調査は、A・B区及び今回新たに設定を行ったC区である。A区の調査区域南側とC区は確認面まで浅く、耕作による攪乱が著しい。

B区では、旧河道がほぼ北から南に傾斜をもってA区に及んでいる状態が認められた。A区は、昨年度の引き続き及び南側部分で、縄文時代前期前半の住居跡1軒、前期後半の諸磯b式期1軒、中期12軒の計14軒の住居跡が確認された。また中期後半と思われる掘立柱建物跡1棟及び土坑約150基の調査を行った。

C区は、縄文時代中期の住居跡が8軒確認され、掘立柱建物跡1棟が含まれている。土坑総数170基で、耕作による攪乱が激しく、住居跡の壁や床面が認められないものも存在している。

調査担当者 山本・今福（C区の報告『甲ッ原遺跡Ⅱ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第114集、B区の報告『甲ッ原遺跡Ⅲ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第144集、最終報告『甲ッ原遺跡Ⅳ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集）
整理1992年1月7日から3月30日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野町子、千野あやめ、浅川たみ子、浅川三千代、浅川茂子、浅川千代子、浅川八千子、藤森房子、浅川もとじ、細田絹代、浅川久代、山口淑江、千野仙造、千野富造、井富保仁、平嶋弘子、八巻久子、八巻知子、田中恒子、日向たまの、小宮山きよ、藤森秀子、藤森さき子、藤森かねよ、藤森ます子、藤森さち子、藤森里美、斉藤かずみ、藤森八千代、進藤キクエ、相吉よし江、宇野和子、出月満寿江、中込よしミ、出月遊亀子、長田和子、出月多津子、梅林はなの、長田可祝、相川一枝、平美与枝、宮坂晴幸、矢崎米子、秋山満州朗、高坂博子、秋山蕉治、小清水清隆、伊藤順子、長田てる美
岸崎浩実、下平博行、黒石亜矢子、藤倉美登理、加藤憲子、水本和美（国学院大学）

第4次調査 1992年4月20日から10月30日 本年度は、調査面積1720㎡を対象とし、C区の調査を行った。
(平成4年) 表土から確認面までは浅く、攪乱が著しい。なかには床面にまで達する攪乱が入り込み、炉が破壊されている住居跡が数軒存在する。このような状況のなかで発見された住居跡は29軒で、縄文時代前期後半の諸磯c式期が6軒、中期初頭の住居跡2軒、中期中葉15軒、後半3軒、平安時代の住居跡1軒である。土坑は、約130基が調査された。

今回の調査では、県内でも発見例の少ない琥珀玉が検出され、更に縄文時代の遺跡からの出土は極めて珍しいものである。また248号土坑からは、特殊脚付鉢が出土し、脚部には3ヶ所に三角形の透かしが施され、口縁部には漆と思われる赤彩が施されている。175号土坑からは、坑底

より土偶の頭部が出土している。

調査担当者 山本・五味信吾（C区の報告『甲ッ原遺跡Ⅱ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第114集）

整理1992年12月1日から1993年1月29日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野町子、千野あやめ、浅川たみ子、浅川三千代、浅川茂子、浅川千代子、浅川八千子、浅川保代、藤森房子、井富保仁、平嶋弘子、八巻久子、小宮山きよ、藤森八千代、藤森里美、細田絹代、浅川久代、山口淑江、浅川房子、三井種子、斉藤かずみ、進藤さくえ、相吉よし江、藤森かねよ、三井光恵、藤森ます子、藤森秀子、藤森さち子、藤森さき子、浅川ちづ子、石原はつ子、長田てる美、長田久江、塩島富美子、内藤安雄、越石力、大村昭三、菱山喜美子、長谷川巖、飯寄貞子、出月遊亀子、長田可祝、出月満寿江、中込よしミ

第5次調査 1993年6月1日から10月8日 本年度はA区の調査を行い、調査面積は1000m²である。住居跡（平成5年）は11軒で、その内訳は縄文時代前期後半の諸磯b式期6軒、中期初頭3軒、中期後半2軒である。また土坑は、72基である。遺物として特筆すべきものには、彩文土器の破片出土である。また炭化種子が出土し、ドングリ・栗・クルミ等が見つまっている。

調査担当者 山本・野代幸和（『甲ッ原遺跡Ⅰ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第96集）
整理1993年5月6日から1994年3月25日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野町子、千野あやめ、浅川たみ子、浅川三千代、浅川茂子、浅川保代、平嶋弘子、山口淑江、浅川清、千野金子、石原はつ子、大森仁美、中澤敏雄、平重蔵、西名博恵、高坂博子、長田てる美、青柳清、宮坂晴幸、平美与枝、小林よ志子、中込よしミ、志田由記子、長田可祝、出月遊亀子、出月満寿江、矢崎米子、越石力、中込星子、久保田明義、伊藤順子、清水真弓、小菅春江、望月和佳子、有賀ひろ子、大西真紀、土屋ふじ子、内藤安雄

1994年度は整理だけの期間：1994年4月4日から1995年3月24日まで行った。整理は1989年度からの続きで、（平成6年） 水洗い・注記・接合・復元遺物の補強のための石膏・遺物実測を主体として行った。

作業員・整理員 中澤敏雄、石原はつ子、大森仁美、長田てる美、中込星子、斉藤律子、有賀ひろ子、加納なおみ、渡辺優美子

第6次調査 1995年9月20日から11月28日 本年度はC区の調査を行い、2ヶ所の調査面積は820m²である。（平成7年） 縄文時代前期後半の住居跡が4軒、中期前半から中葉が7軒で、拡張された住居および時期不明2軒である。土坑は、10基前後である。

調査担当者 山本・川手昌英（最終報告『甲ッ原遺跡Ⅳ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第145集）

整理 1995年7月3日から1996年1月31日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野あやめ、浅川たみ子、浅川茂子、浅川保代、山中敏夫、戸島義和、高市雅司、川崎東洋雄、猿田定雄、石原はつ子、大森仁美、中澤敏雄

1996年度は整理だけの期間：1996年9月1日から1997年3月24日まで

（平成8年） 水洗い・注記・接合・復元および復元遺物の補強のための石膏・遺物実測を主体

として行い、報告書の作成を行った。また、甲ッ原遺跡の最終報告書に向けた作業も並行して行った。

作業員・整理員 中澤敏雄、石原はつ子、大森仁美、小林まなみ、堀口恵子、越石力、出月遊亀子、出月ますえ、長田可祝、長田くみ子、中込よしミ、原田みゆき

第7次調査 1997年5月19日から8月28日 本年度の発掘調査対象面積は610m²で、第1次から第6次調査まで(平成9年)での未調査区域となっており調査区の対象地は畑および山林で、今回の調査を持って一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業における甲ッ原遺跡の発掘調査はすべて終了となった。

調査区南のC区については住居跡が6軒確認され、縄文時代中期初頭3軒・中期の井戸尻式期1軒・中期末1軒、そして平安時代1軒である。土坑は10数基確認され、時期はほとんどが縄文時代である。

A区については、縄文時代の住居跡が4軒確認され、中期の井戸尻式期2軒・後半曾利Ⅲ式期1軒、中期と考えられる住居跡1軒である。また、今までの調査で見つかった旧河道も本調査区で確認された。

B区については、時期不明の溝が北から南へのびていることが明らかにされた。

調査担当者 山本・川手(最終報告『甲ッ原遺跡Ⅳ』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集)
整理1997年5月15日から1998年3月20日まで

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野あやめ、浅川たみ子、浅川茂子、浅川保代、山中敏夫、戸島義和、高市雅司、猿田定雄、曾根原久司、平嶋純一、平嶋弘子、石原はつ子、大森仁美、内藤由紀子、雨宮一二三、林久美子、石原清子

調査員 網倉邦生、五味孝広

整理作業は、今回の調査で出土した遺物を中心に行い、水洗い・注記・接合・復元および復元遺物の補強のための石膏・遺物実測を行い、『甲ッ原遺跡Ⅳ』の最終報告書に向けて第2・3次調査区と今回の第7次調査区とをつなげた全体図の作成、個別の住居をつなげた図面の作成等を行い、報告書作成にあたった。

第2節 調査組織

調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	第1次調査(1989) 山本茂樹、森原明廣 第2次調査(1990) 山本茂樹、今福利恵 第3次調査(1991) 山本茂樹、今福利恵 第4次調査(1992) 山本茂樹、五味信吾 第5次調査(1993) 山本茂樹、野代幸和 第6次調査(1995) 山本茂樹、川手昌英 第7次調査(1997) 山本茂樹、川手昌英
整理だけの期間	1994年度、1996年度 山本茂樹・野代幸和、山本・川手昌英

作業員・整理員 第1節で記載しているので、ここでは省略。

協力機関 大泉村教育委員会

第3節 調査方法

一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴い、1989年度から1997年度まで実施され、第1次調査の継続事業として設定された5m×5mを1区画とするグリッド方式をそのままちいた。1989年度第1次調査で500㎡にグリッドを設定した関係から、第2次調査においてB区の設定を行わなければならない、南から北へ数字の「1.2.3…」を付すことで補った。また遺跡内における集落の存在からも、このような設定が望ましいものであると判断したことによるものである。A区の集落は、グリッドの0設定から北では認められず南へ広がるものであること、B区の集落は、A区よりさらに離れた場所に存在していることである。このような理由によりA・B区は、地区分けされている。またグリッド番号は、南北方向に数字の「1.2.3…」、東西方向にアルファベットの「A.B.C…」を付した。尚C区については、A区の集落の密度が南へ下るにしたがい希薄となり、また東へ緩やかにカーブを描く関係上、現在の道路で分断されているところを基本として地区分けを行い、新たにC区ではグリッドを設定し、Aグリッドより東に位置するものについては「Z.Y.X…」と逆方向に設定を行った。

一連の事業のなかで、調査が点々とされてきたこと、そして集落が数カ所にわたって存在していることが明らかにされるとともに、道路ということでカーブを描くことから、結果としてこのような3区画の設定がなされている。

第6次調査は南のC区2ヶ所で、調査面積は820㎡であった。調査面積が狭いこともあって、確認面までの排土作業は、手作業で行った。2ヶ所のうちの一ヶ所は、C区の脇を南北に走る現道を挟んだ西側部分の一區画であり、現道から約1m下がった場所である。この区域は、道路等によりかなり攪乱されていることが予想されたが、発見された住居軒数は8軒と狭い場所でありながらその数は多く、重複した住居が確認されている。遺物もよく残されており、45-A・45-B号住居のように確認面から床面まで浅かったにもかかわらず、遺物の出土は豊富であったと同時に、炉の残存状態は極めて良好であった。

もう一ヶ所は、第4次調査区域の道路を挟んだ北側隣りで、別荘の敷地内と畑の一部である。この調査区は確認面まで浅く、攪乱が著しい。発見された住居軒数は4軒で、住居のほとんどは調査区外に存在している。幸いにも50号住居はほぼ完掘する事ができ、覆土中からの遺物の出土は豊富であった。また本住居は、炉に土器を埋設する埋甕炉で、その状態もよく残されている。

1997年度の第7次調査区においては、面積的には610㎡と少ないものの、A・B・C区の3箇所未調査区域の全てを調査する運びとなった。調査は、まず始めに畑である南側のC区を手作業によって排土作業を行い、排土は調査区の東と西の地権者の了解を得て置場とした。

またC区の排土作業と並行して山林地区であったA区を重機により排土作業を行った。その際、今回の調査区と1991年度と1992年度に実施した調査区の接する箇所を一部分遺構を掘り出しながら、遺構確認面まで掘り下げた。重機による排土作業の段階で、切り株等は抜根せずそのまま残し、ジョレン等による遺構確認作業の段階で遺構を壊すことのないように手作業によって除去することに努めた。排土は調査区の東と西の地権者の了解を得て置場とした。

次にB区では、伐採作業の後重機による排土作業を行なった。B区も山林地区であったが、道路の前後が調査されていることから遺構の数は極めて少ないことが予想され、切り株等はそのまま残して排土作業を行った。排土は、近くの地権者の了解を得て置場とした。

排土作業終了後、遺構確認作業およびグリッドの設定を行った。また遺構確認面までは非常に浅く、排土内にも遺物が混入していることが十分予想されるため、時期を見計らって排土内の遺物収集も行った。

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境

甲ッ原遺跡は、甲府盆地からほぼ北西に位置する山梨県北巨摩郡大泉村字大林と和田に所在し（第1図）、大泉村は、八ヶ岳の南部の赤岳、権現岳、編笠山などの主峰群と、火山体斜面および火山麓扇状地、葦崎火山岩屑流の地形から構成される八ヶ岳山麓と、八ヶ岳火山泥流によって形成されたところに位置している。

火山山麓は開析されて台地化しており、特に富士川、須玉川に沿っては急崖が続き、前者による崖は“七里ヶ岩”と呼ばれてきた。八ヶ岳火山地では、山頂から放射状に水系が発達しているが、一方火山麓扇状地では水系の発達は鈍くなる。特に火山扇状地の扇頂近くでは河川水は伏流することが多く、それらが再び湧泉するところが山麓に連なり、歴史時代以前から八ヶ岳山麓の集落の立地や土地利用に影響を与えてきた。

その中でも大泉村は、標高1000m付近に自然湧水帯を持ち、これらの湧水から流出する河川によって細長い尾根上に多くの遺跡が存在する結果となり、甲ッ原遺跡もまた例外ではなかったと考えられる。

このような環境にある本遺跡は、東に油川、西に甲川に挟まれ、南へ緩く傾斜した所に立地している。遺跡の標高は、800m前後である。遺跡の周囲は、畑、山林となっており、一段低い西側では圃場整備事業によって稲作が行われている。

第2節 歴史的環境

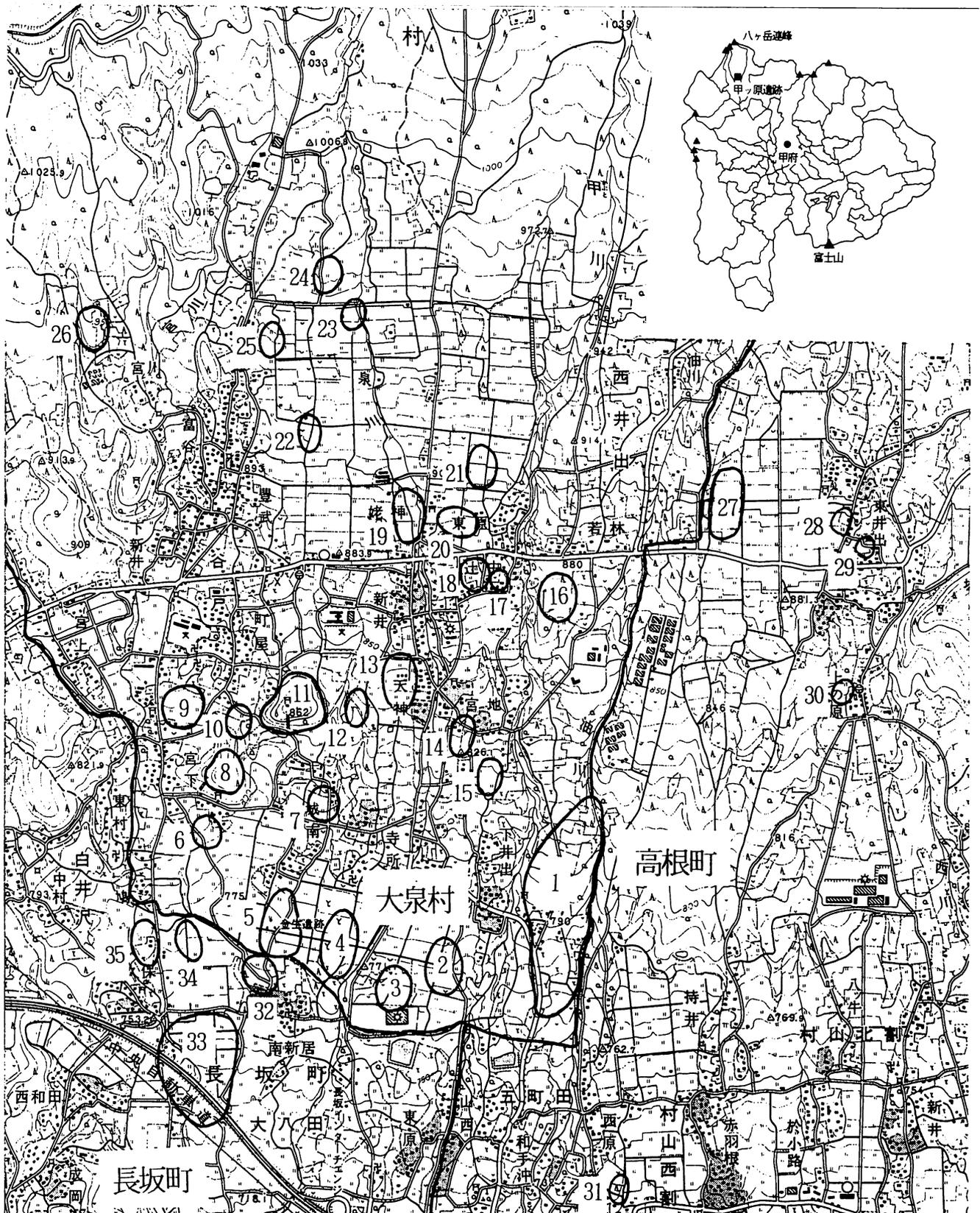
大泉村も含めて周辺の八ヶ岳山麓では、縄文時代と平安時代、中世の遺跡が突出して多く知られ、弥生時代、古墳時代の遺跡は極端に少なくなる。甲ッ原遺跡の周辺においても同様で、多くは縄文時代と平安時代、中世の遺跡が知られている。

周辺の発掘調査では、甲ッ原遺跡の北西約1kmの天神遺跡（第1図NO13）で縄文時代前期の諸磯期の住居跡49軒、土坑400基以上の環状集落が調査されている。また西1kmの寺所遺跡（第1図NO4）では諸磯期の住居跡2軒が調査されているほか平安時代の住居跡が31軒検出されている。このほか前期の住居跡が確認されているのは、原田遺跡（第1図NO2）がある。縄文時代中期では、北西約2.5kmの小坂遺跡（第1図NO26）があり、標高は約950mの高所に五領ヶ台期の集落跡が調査されている。また北西約500mに宮地第2遺跡（第1図NO14）、宮地第3遺跡（第1図NO15）が調査されている。特に、甲ッ原遺跡の北に位置する古林第4遺跡（第1図NO16）の発掘調査が大泉村教育委員会で実施され、その際縄文時代中期中葉の住居跡からヒスイ製の笛が出土したことで関係者を驚かせた。曾利期では、姥神遺跡（第1図NO19）や方城第1遺跡（第1図NO22）などの集落が調査され、特に甲ッ原遺跡の西約1kmには、昭和58年に国史跡に指定された縄文時代後晩期の配石遺構を伴う金生遺跡（第1図NO5）が存在している。

平安時代の遺跡としては、先に記した寺所遺跡（第1図NO4）のほか、原田遺跡（第1図NO2）では3軒、城下遺跡（第1図NO7）では20軒、宮地第2遺跡（第1図NO14）では3軒の住居跡が確認されている。

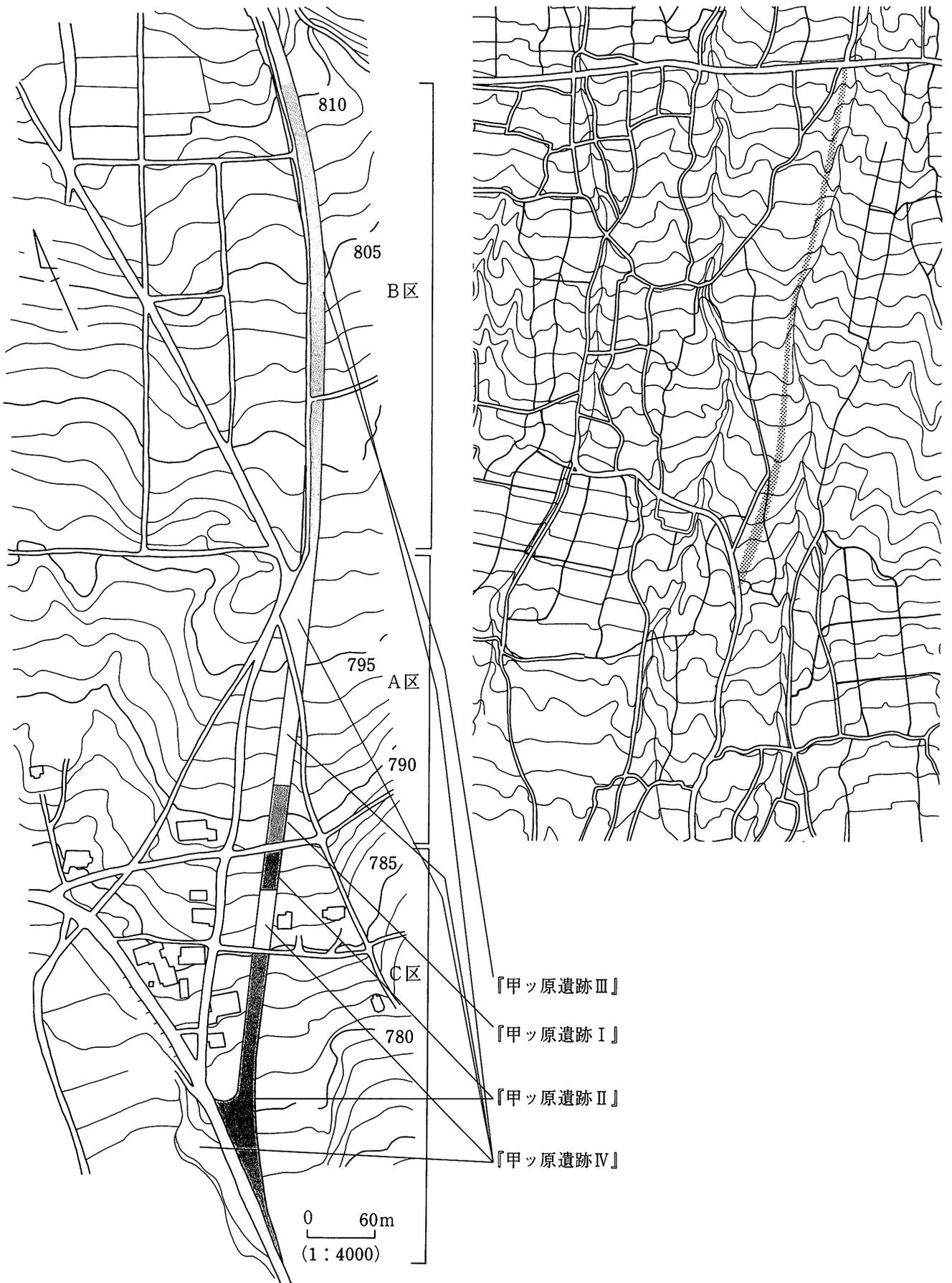
中世の遺跡として代表されるものには、大泉村谷戸城跡（第1図NO11）があり、国指定史跡にされている。さらに甲ッ原遺跡の南端部に位置する箇所では、大泉村教育委員会によって東側に隣接する約1800m²の調査で、諸磯b、c期の住居跡2軒と土坑約100基、平安時代の住居跡1軒が調査され、中でも諸磯c期の住居跡は径8mを越える大形住居跡で、該期のものとしては異例で注目される。

また近年では、大規模開発や宅地等に伴い本遺跡の周辺において大泉村教育委員会（1994 大泉村 10集）によって発掘調査が実施され、甲ッ原遺跡の規模が明らかにされつつあり、集落の研究の上でも重要な遺跡となることと思われる。



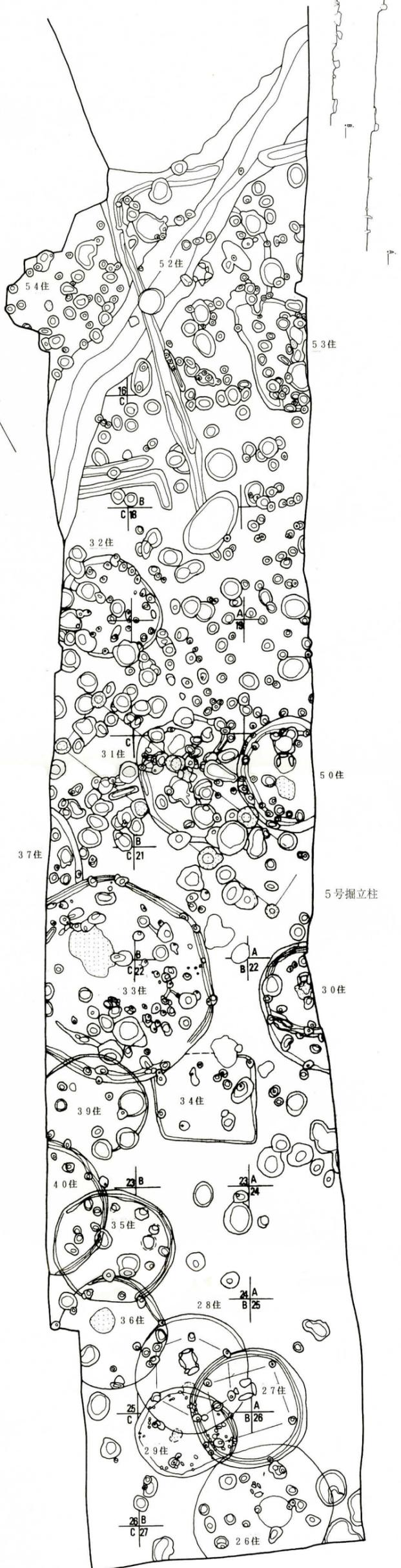
- [大泉村] 1. 甲ツ原遺跡 2. 原田遺跡 3. 木ノ下・大坪遺跡 4. 寺所遺跡 5. 金生遺跡 6. 豆生田第3遺跡 7. 城下遺跡 8. 前林山十三塚 9. 谷戸氏屋形跡 10. 御所遺跡 11. 谷戸遺跡 12. 山崎第4遺跡 13. 天神遺跡 14. 宮地第2遺跡 15. 宮地第3遺跡 16. 古林第4遺跡 17. 中村第2遺跡 18. 中村遺跡 19. 姥神遺跡 20. 東姥神遺跡 21. 東原遺跡 22. 方城第1遺跡 23. 大和田第2遺跡 24. 大和田第3遺跡 25. 大和田遺跡 26. 小坂遺跡 [高根町] 27. 石堂B遺跡 28. 石堂A遺跡 29. 野添遺跡 30. 山の神遺跡 31. 西原遺跡 [長坂町] 32. 深草遺跡 33. 小和田遺跡 34. 別当十三遺跡 35. 別当遺跡

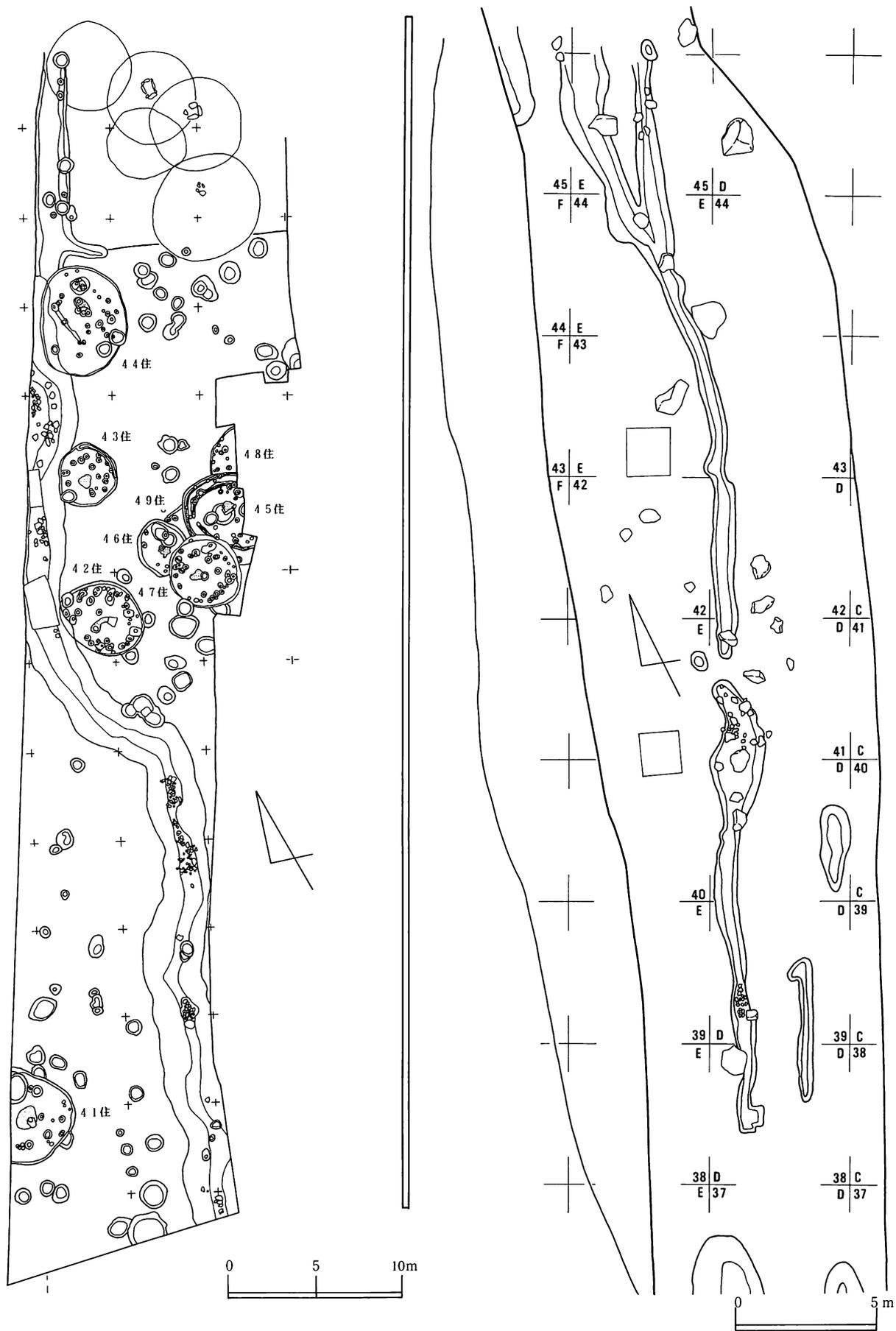
第1図 遺跡位置図及び周辺の遺跡図 (1/25000)



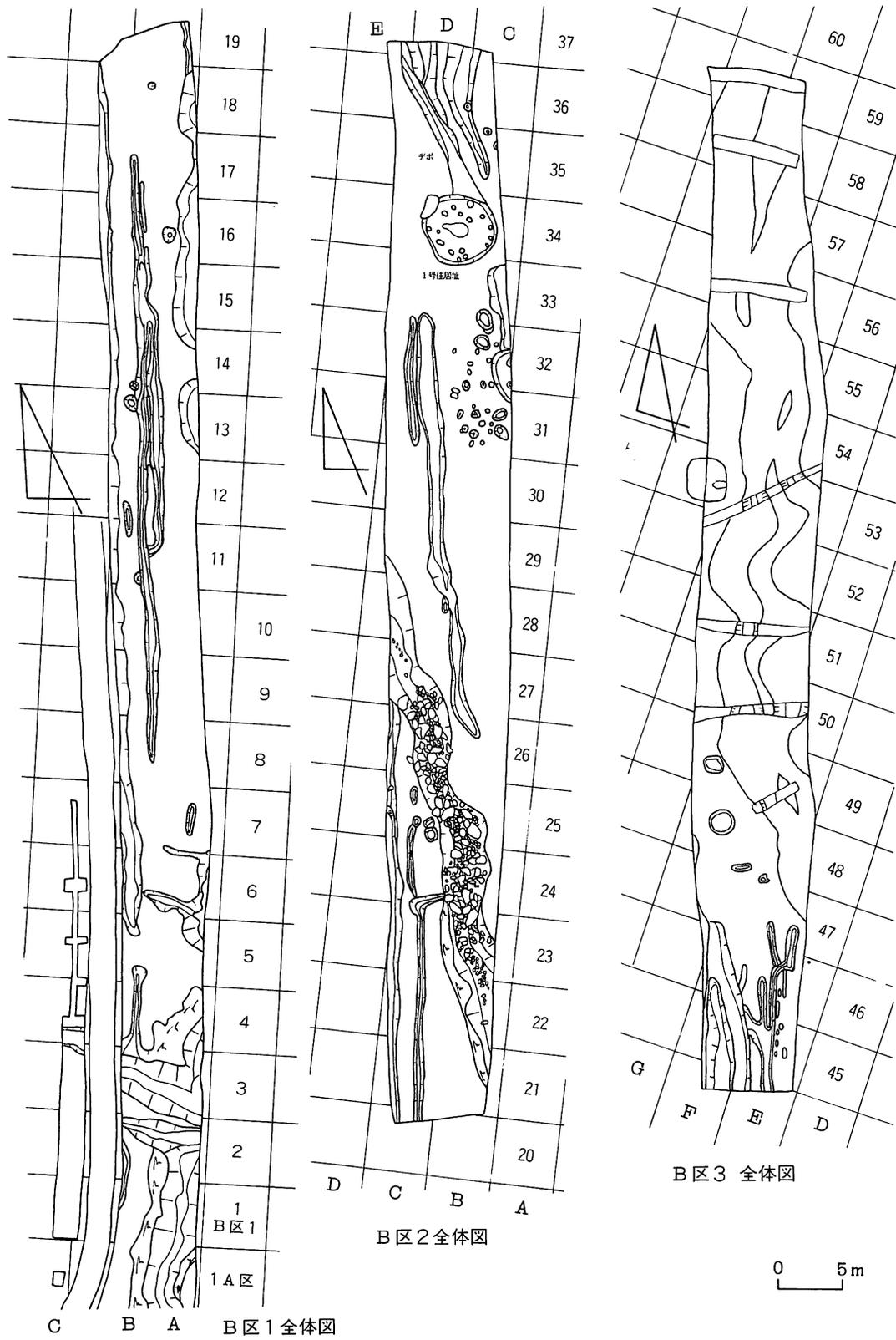
第2図 甲ッ原遺跡地区図及び周辺の地形図

第3图 第1次・2次・3次・7次調査区 (1/200)

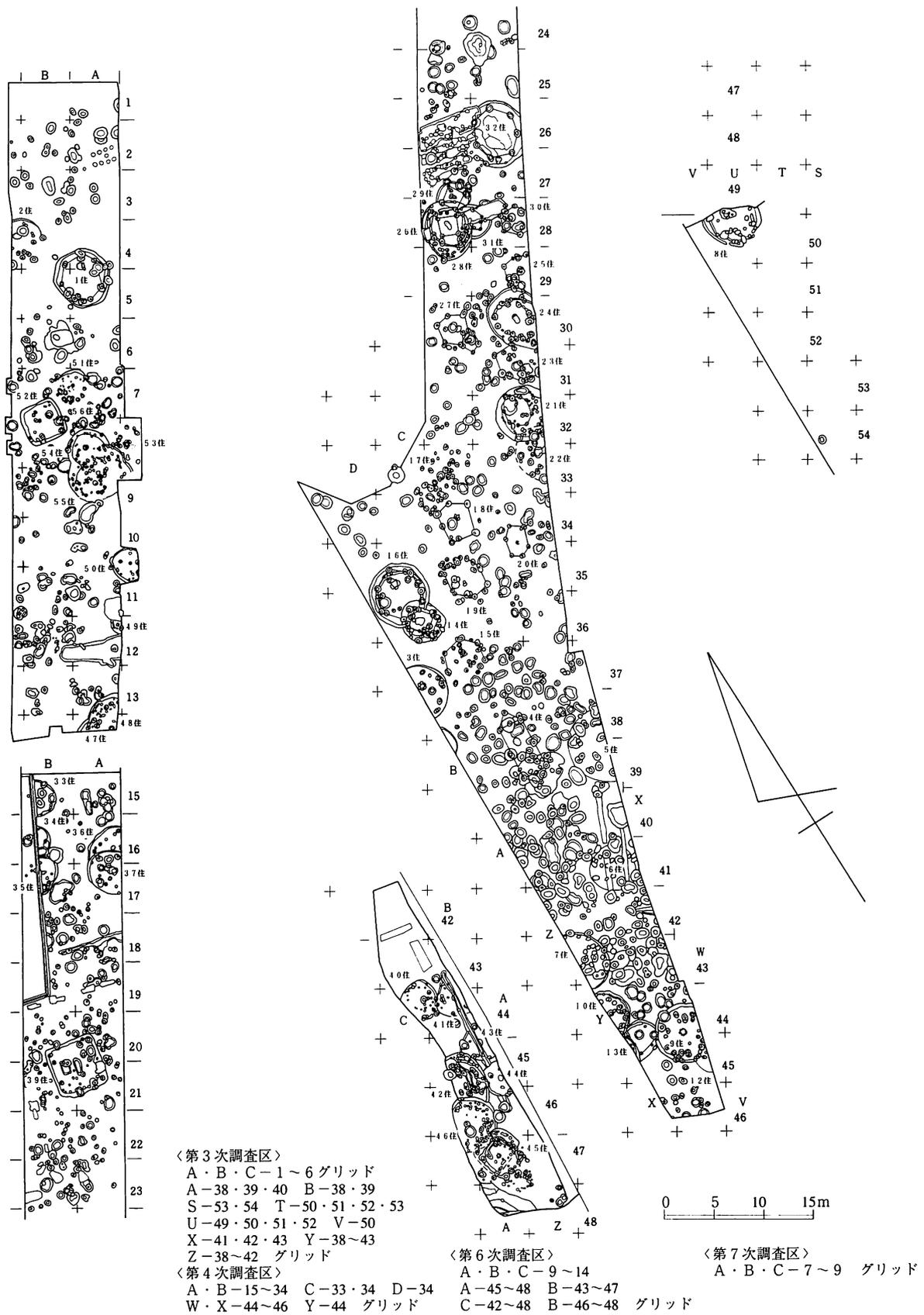




第4図 (左) A区第5次調査区・(右) B区第7次調査区



第5图 B区第2次・3次調査区 (1/500)



第6図 C区全体図

第三章 遺構と遺物

第1節 住居跡

1号住居跡 (第7図)

調査年度	1989年度(第1次調査)
位置	C・D-6.7グリッド
平面形	円形を呈するものと思われる。
規模	炉を中心として5.70m×5.50mを計測する。
周溝	存在しない。
炉	地床炉で、長軸は80cm、短軸も80cmで円形に近い。深さは4cmである。 ローム面は、よく焼かれている。
柱穴	本数は10本か。深さは33cmから70cmを計測する。
埋甕	存在しない。
時期	諸磯b式期。
備考	7号住居より新しい。立ち上がりは、すり鉢状を呈する。

7号住居跡 (第7図)

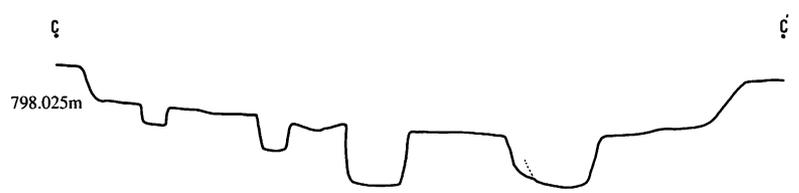
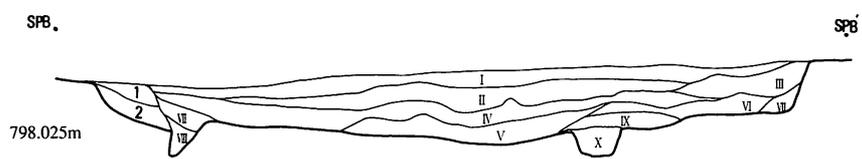
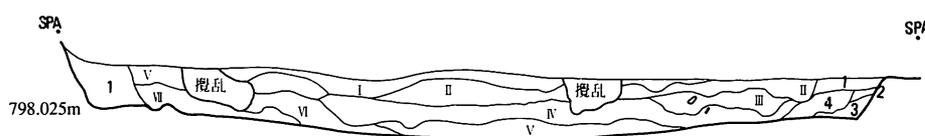
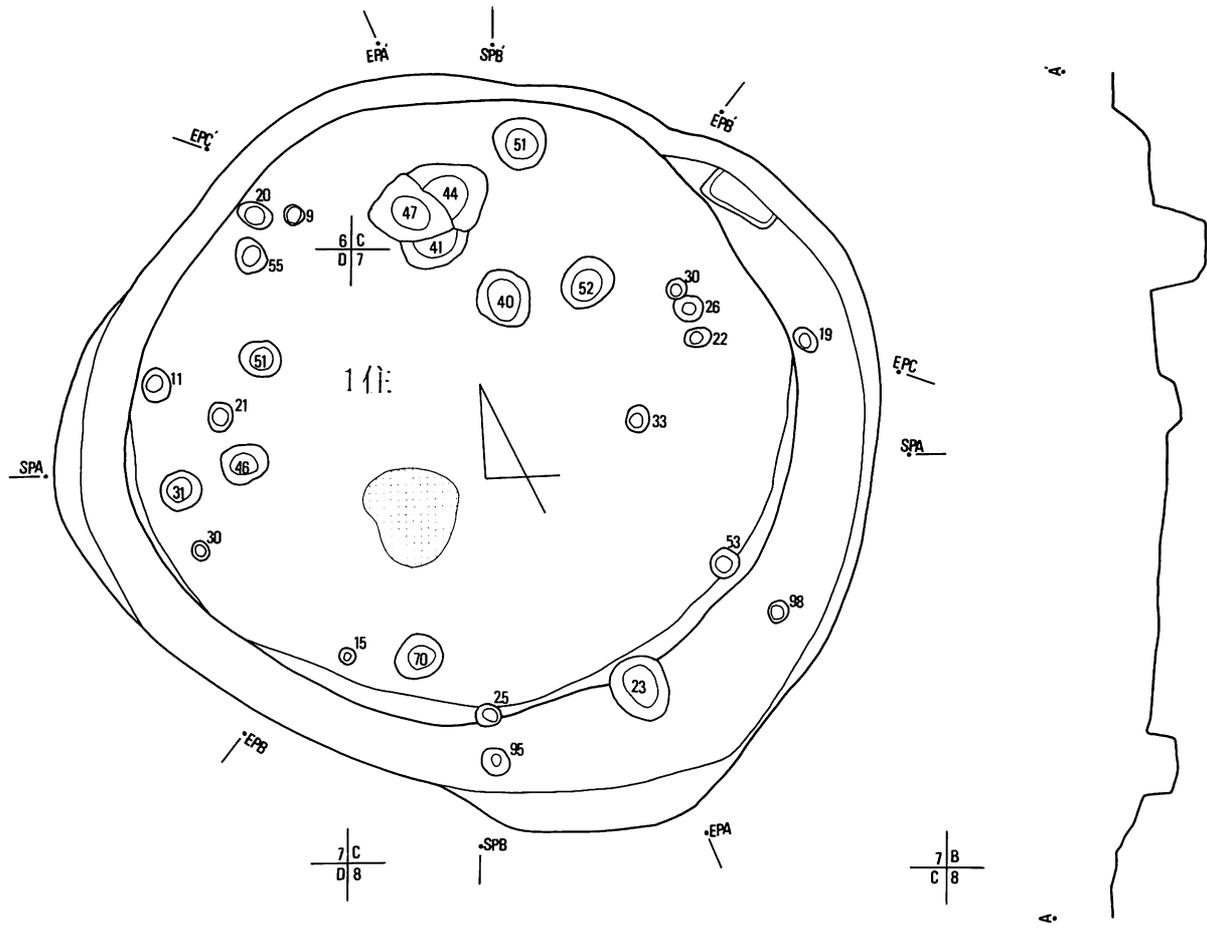
調査年度	1989年度(第1次調査)
位置	C・D-6.7グリッド
平面形	ほぼ円形を呈するものと思われる。
規模	1号住居と重複関係にある。長軸は6.85m、短軸5.5mを測る。深さは西側で40cm、他の箇所については30cmである。
周溝	存在しない。
炉	地床炉と思われる。
柱穴	深さは10cmから90cmを計測する。
埋甕	存在しない。
時期	諸磯b式期。
備考	立ち上がりはすり鉢状を呈し、東壁と北壁はしっかりとしている。

遺物説明(第8図)

1は、有孔土器である。胴部の最大径は49.2cmを計測する。想定される穴の個数は18ケと考えられ、5.5cmから6.0cm間隔で穴が穿たれている。器高は、11cmである。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、緩やかな傾斜を持って張出部に続く。口縁部の径は、32.7cmを計測する。張出部は大きく突出するが、なだらかに下降していく。胴部は膨らみを持ち、段を有する。2は、1と同様の土器である。胴部の最大径は20.7cmを計測する。口縁部は緩やかに立ち上がり、1のように角がなく丸みを帯びる。口縁部の径は、13cmを計測する。口縁部から張出部までは、緩やかに傾斜し大きく突出し下降する。胴部は丸みを帯び膨らみを持たせている。底部は、ほぼ平坦につくられる。

拓本遺物(第9図)

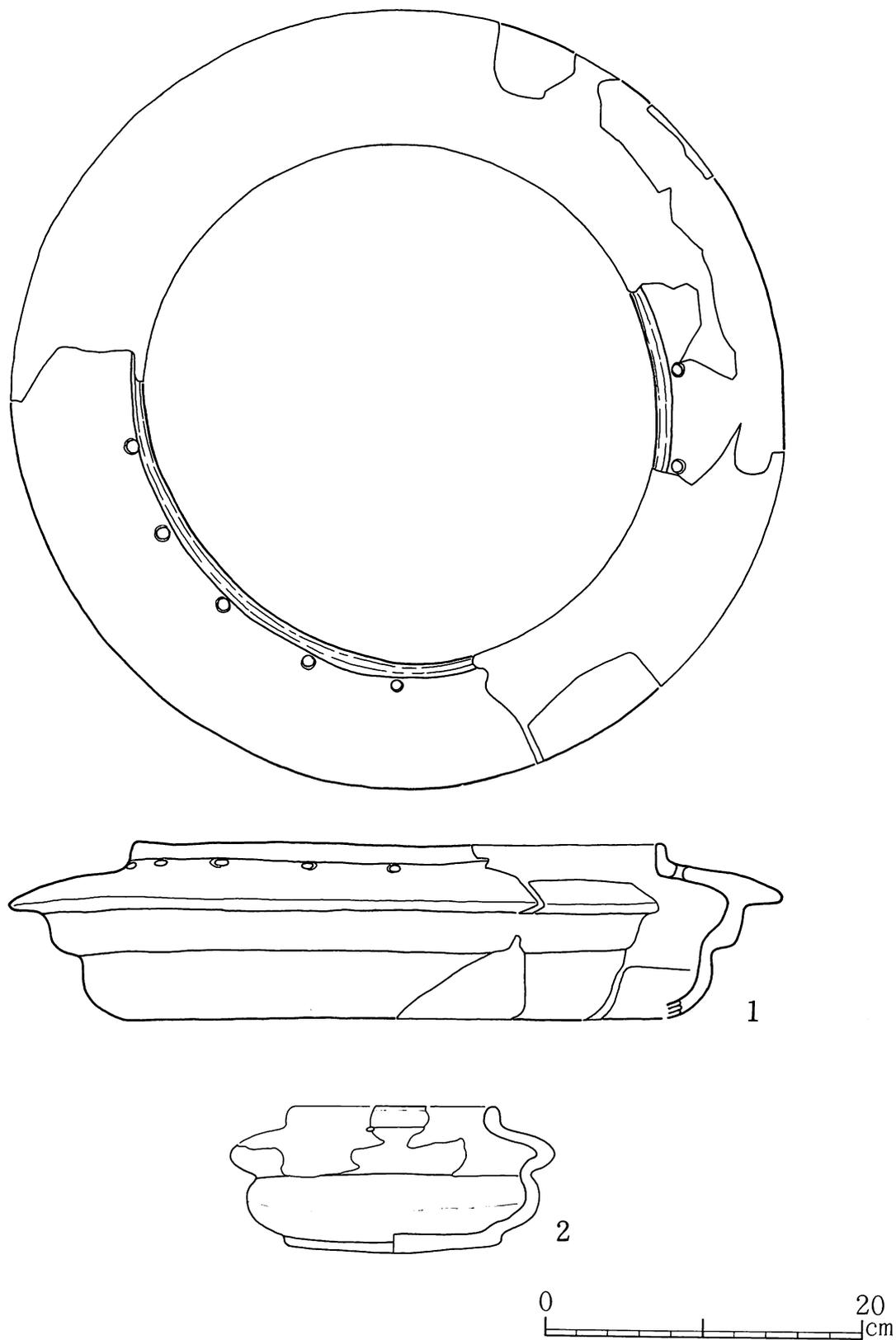
3は、口縁部の破片である。口縁部は波状を呈し、波頂部には平行沈線文が菱形状に施される。口縁部と胴部を区画する箇所では「く」の字状に内弯させられ、胴部には横位に平行沈線文が施される。また、沈線文と沈線文の間は無文帯が巡らされる。4は、波状を呈する口縁部の破片である。口縁部は小さく「く」の字状に



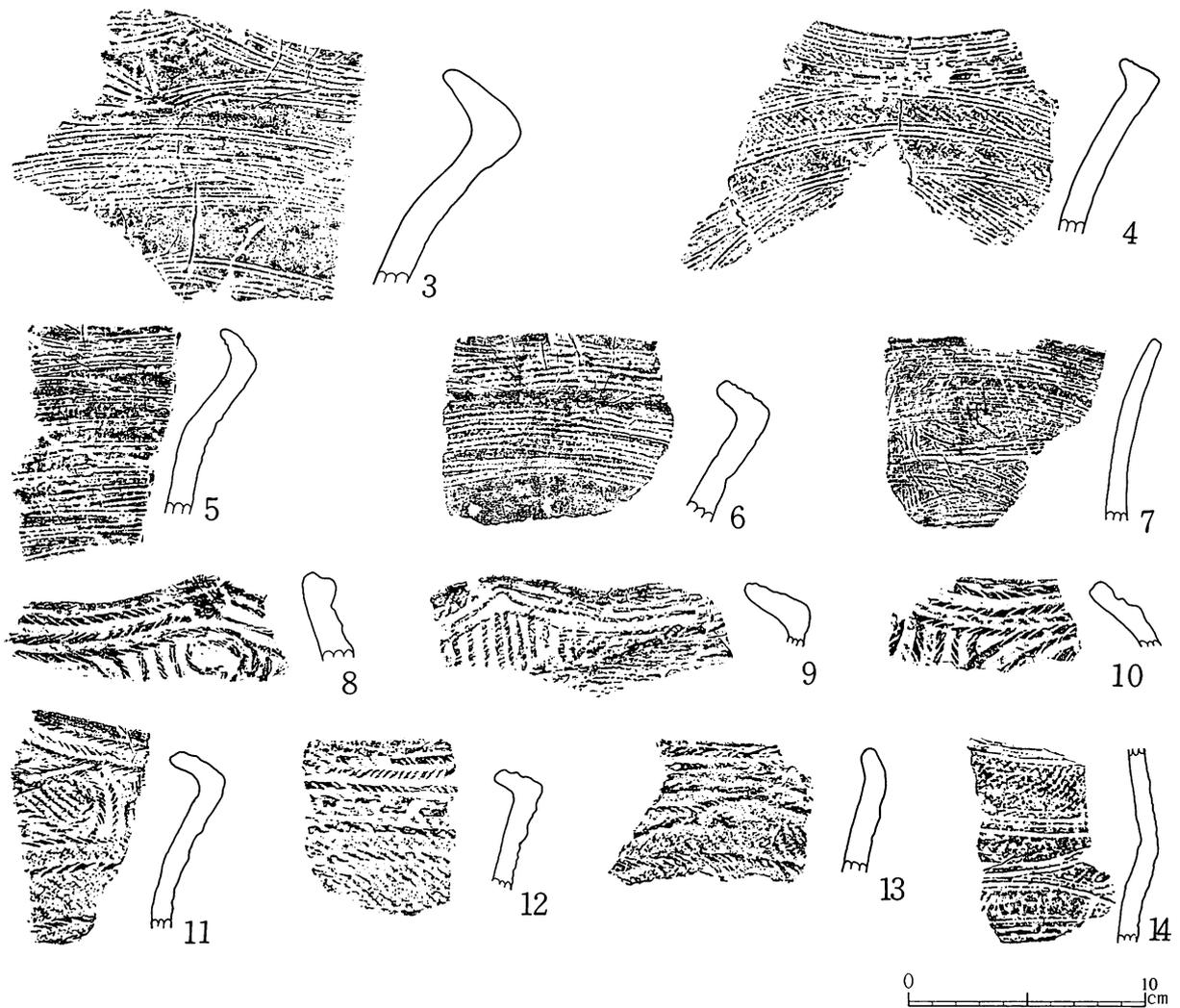
- 1号住居土層説明
- 1 : 褐色土
 - 2 : 暗褐色土
 - 3 : 褐色土
 - 4 : 暗褐色土 (1から4までは7号住居)
 - I : 褐色土
 - II : 暗褐色土
 - III : 暗褐色土 (IIよりしまり有り:
IIよりやや明るい)
 - IV : 暗褐色土 (焼土粒子を含む:
III暗より暗い)
 - V : 褐色土
 - VI : 暗褐色土
 - VII : 褐色土
 - VIII : 褐色土
 - IX : 暗褐色土 (焼土粒子を含む)
 - X : 暗褐色土



第7図 1・7号住居跡 (1/60)



第8図 1・7号住居跡出土遺物実測図(1/4)



第9図 1・7号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

内弯させられ、口縁部には平行沈線文で充填させられ、その後縄文が施される。胴部には3段の平行沈線文が施され、沈線間には縄文が施文される。3段目以下には、斜行する平行沈線文が施され、縄文が施文される。5. 6は、「く」の字状に内弯する口縁部の破片である。口縁部には、平行沈線文が施され、胴部にも平行沈線文が施される。胴部は、緩やかに外反するように曲線を描く。また6は、口縁部から胴上半部まで平行沈線文が施され、以下無文帯が形成される。7は、口縁部が緩やかに外反するものである。口縁部には2段に平行沈線文が施され、以下沈線文による曲線が描かれる。8から13までは、粘土紐の貼り付けに刻みを有するもので、また8から11までは、波状を呈する口縁部の破片である。8は波頂部に瘤状の貼り付けがなされ、直下には粘土紐による渦巻文が施される。9.11.12は、器面に縄文が施文されるものである。特に、9.12は、貼り付けの後縄文が施されるものである。13は、口縁部が内弯するが非常に弱く、わずかに傾斜するだけである。14は、胴部の破片である。「く」の字状を呈する胴部には、縄文が施され平行沈線文が横位に引かれる。

以上、これらは諸磯b式期に属するものである。

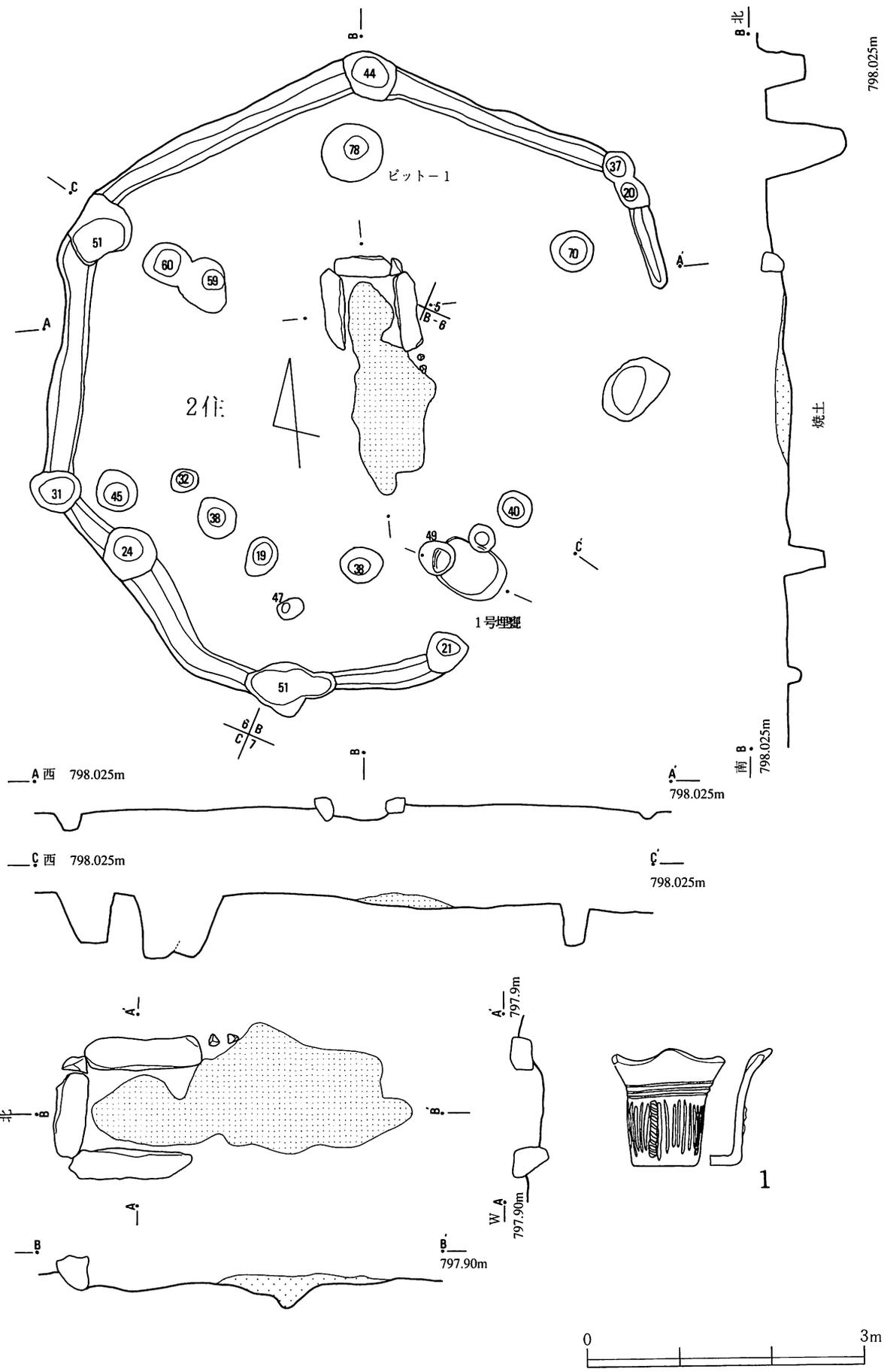
2号住居跡 (第10図)

調査年度 1989年度 (第1次調査)

位置 B・C-5.6グリッド

平面形 多角形を呈するものと思われる。

規模 炉を中心としてほぼ南北で7mを有し、一辺の長さは2.30~3.50mを測る。入口部は、炉および



第10図 2号住居跡 (1/60)・炉 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/4)

焼土から南側と考えられ、入口部の辺は1.80mを計測し、他の辺に比べ短い。主軸方向は南北にある。

- 周溝 一部旧河道により破壊されている他は、存在する。深さは、6～30cmを計測する。それぞれの一辺は、直線的であるためコーナー部が形成される。
- 炉 石囲炉 住居中央より北側に設置され、3枚の大型の長方形を呈する石で構成される。焼土は炉内から南へ長く広がりを持ち、厚い堆積状態を示す。床面は焼成を受け、主軸は南北方向にある。
- 柱穴 北東側コーナー部では2本認められる他は、各コーナー部に1本ずつ設置される。また10.11.12.13は、コーナー部に接してつくられており、各コーナー部より深さを有することから、住居の主柱穴とも考えられる。深さは、20cmから52cmを計測する。20cmから30cmのものは支柱穴と考えられる。
- 埋甕 存在しない。
- 時期 曾利Ⅰ式期。
- 備考 住居北側床面の柱穴（ピットー1）からミニチュア土器が出土。石囲炉から入口部に向かって長く焼土が認められる。また単独埋甕の上に本住居は存在する。

遺物説明（第10図）

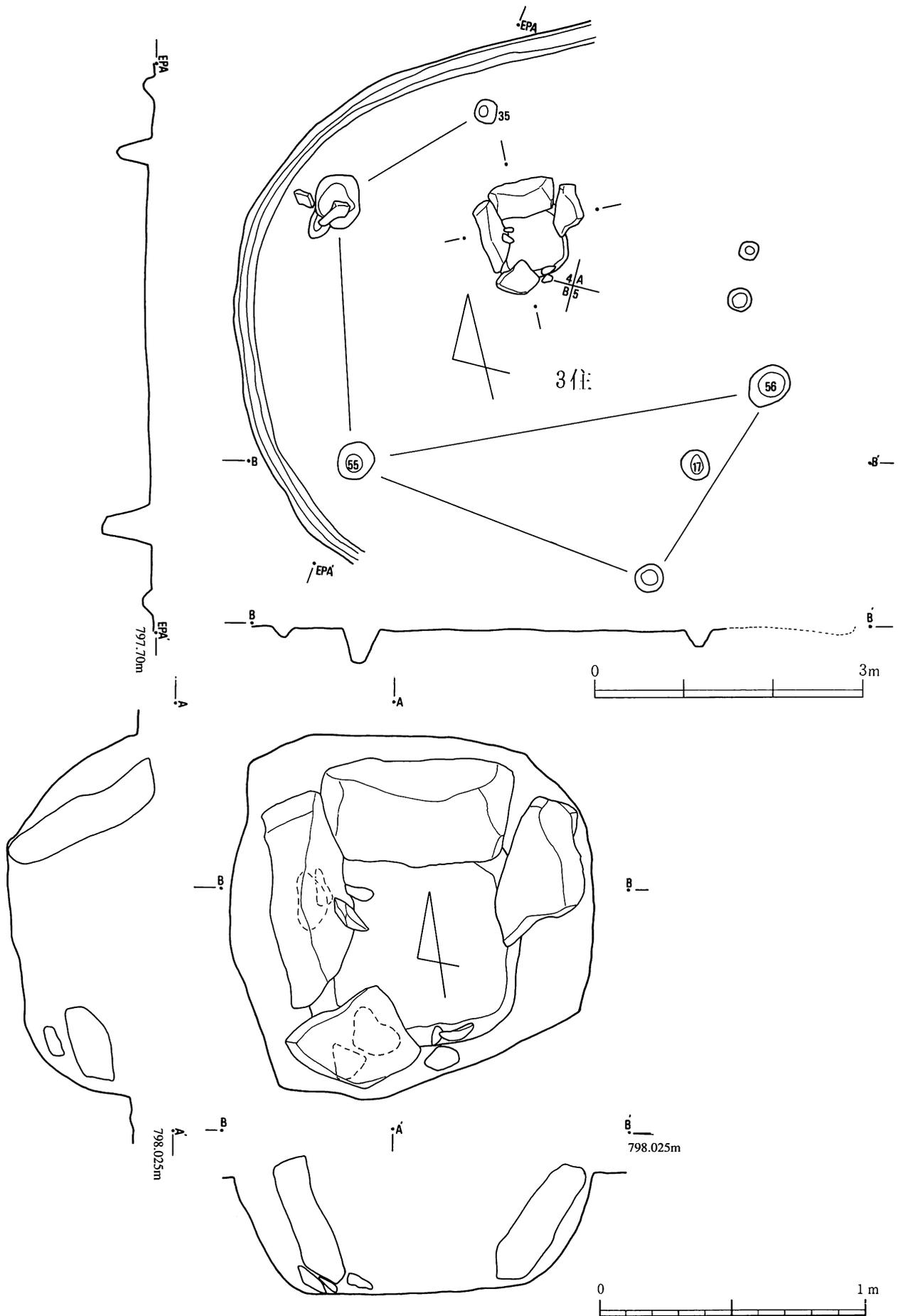
1は、本住居跡のピット1から出土したものである。器高は6.5cmを計測し、口縁部径8cmを有する小型の深鉢形土器である。口縁部は4単位の波状を呈し、頸部には横位に3本の沈線が巡らされる。胴部には縦位の沈線文で充填され、刻みをもった隆帯によって区画される。

3号住居跡（第11図）

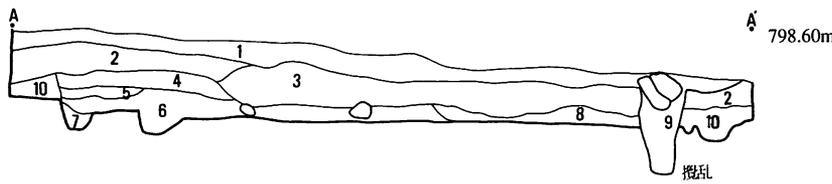
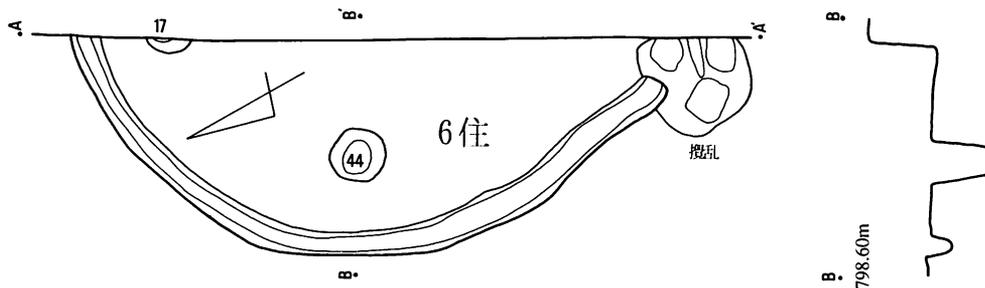
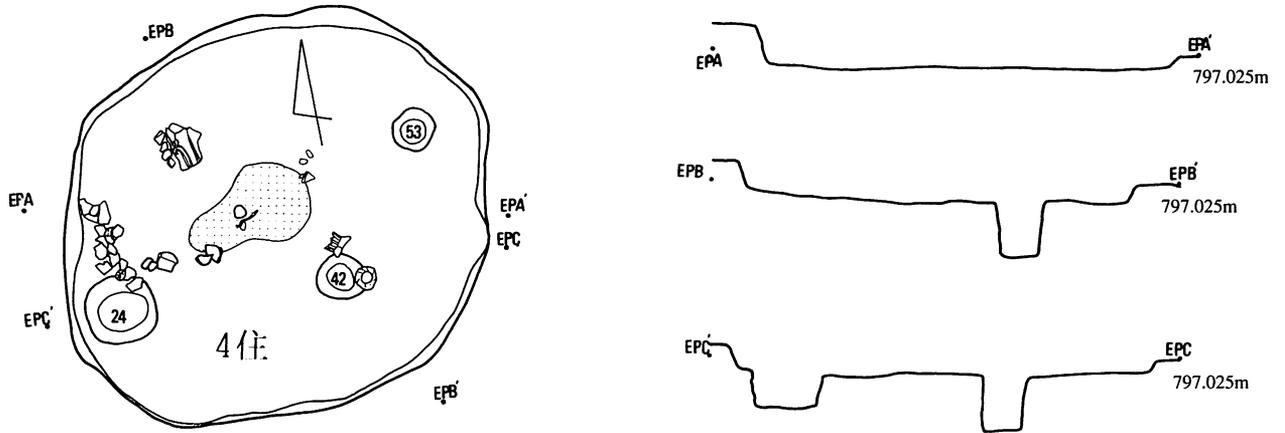
- 調査年度 1989年度（第1次調査）
- 位置 A・B-4.5グリッド
- 平面形 不整円形と思われる。
- 規模 炉を中心とした径は、推定6.70mを測る。旧河道によって住居の約2/3が破壊される。
- 周溝 住居の西側で確認される。
- 炉 石囲炉で、板状の石が4枚で構成される。長軸を南北にとり1.15m、短軸は東西方向で1.20mである。掘り込みの深さは、約50cmである。
- 柱穴 8本存在する。
- 埋甕 存在しない。
- 時期 炉の規模および形態から、曾利Ⅲ式期に属するものと思われる。
- 備考 床面は、東に傾斜する。旧河道によって住居跡の半分以上壊される。

4号住居跡（第12図）

- 調査年度 1989年度（第1次調査）
- 位置 C-8.9グリッド
- 平面形 楕円形を呈するものと思われる。
- 規模 炉を中心として長軸は3.30m、短軸は3.10mを計測する。立ち上がりはあまり明確ではなく、南西隅は木の根による攪乱が著しい。
- 周溝 存在しない。
- 炉 住居のほぼ中央に設置される。この時期は、石囲炉が通常であるが、石は存在していない。

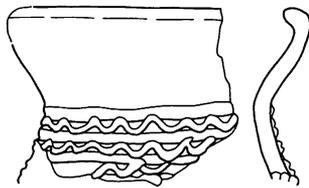


第11図 3号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/20)



6号住居土層説明

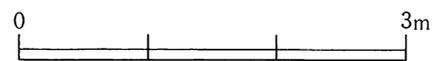
- 1: 表土 2: 暗褐色土 3: 黒褐色土 4: 黄褐色土 5: 黄褐色土 (炭化物少量混入)
 6: 黒褐色土 (ロームブロック混入) 7: 黒色土 (炭化物・焼土粒子混入) 8: 黒褐色土 (ロームブロック多量混入・炭化物・焼土粒子混入) 9: 表土に近い (攪乱)
 10: 暗褐色土 (2より明るい)



1



2



第12図 4・6号住居跡 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)

柱 穴 3本で、深さは23cmから50cmを測る。東のものは50cm、南は40cmと深い。
埋 甕 存在しない。
時 期 曾利Ⅱ式期。
備 考 床面までは浅いが、床直とまではいかない位置で遺物の出土が認められる。
東西方向に長軸を有する。床面は、軟弱である。

遺物説明 (第12図)

1は、口縁部から頸部まで現存する。口径は14cm、現存する器高は9cmをそれぞれ計測する。口縁部は、キヤリパー状を呈し、緩やかに内弯する。また口縁部には、無文帯が形成される。頸部には、3条の波状の隆帯が貼りつけられ、それぞれ横走する隆帯で区画される。

2は、胴部の破片である。胴部には、地文として縄文が施され、縦位に平行沈線文が施される。

6号住居跡 (第12図)

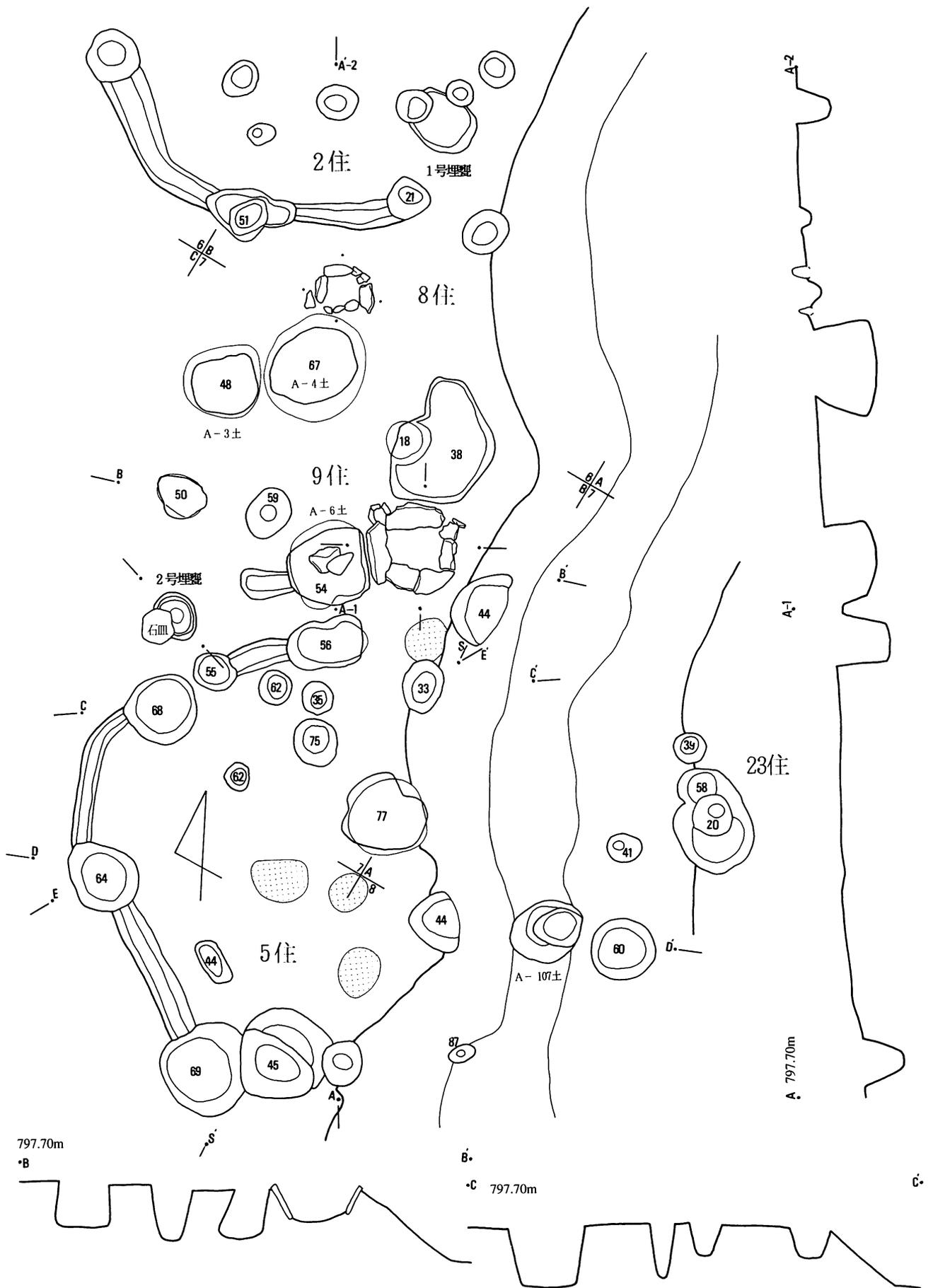
調査年度 1989年度(第1次調査)
位 置 A-3.4グリッド
平 面 形 円形を呈するものと思われる。
規 模 長軸・短軸は、不明である。確認面から床面までの深さは、2cmから9cmである。
周 溝 北側が深く、南は浅い。溝の深さは、45cmを計測する。
炉 不明である。
柱 穴 2本認められる。
埋 甕 調査区内では存在しない。
時 期 中期?
備 考 住居の約2/3が調査区外のため、不明部分が多い。

5号住居跡 (第13図)

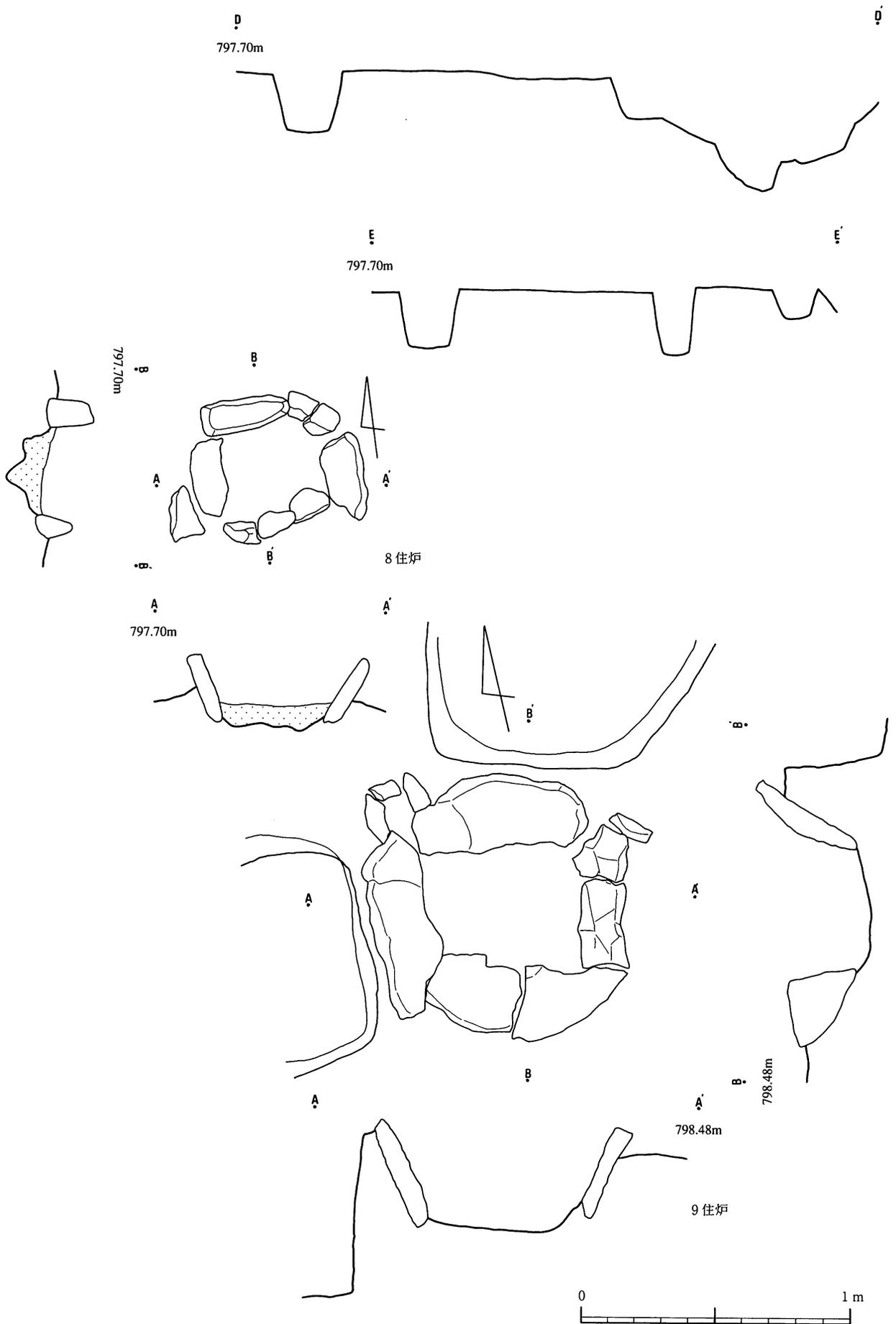
調査年度 1989年度(第1次調査)
位 置 A・B-7.8グリッド
平 面 形 隅丸方形を呈するものと思われる。
規 模 確認面がほぼ床面であったため、東西方向で約4.90mを測る。
周 溝 北東部分については、確認されなかった。深さは、4cmから8cmを計測する。
炉 地床炉と考えられ、長軸は北東から南西で60cm、短軸は45cmを計測する。焼土は3ヶ所に存在する。炉石および掘り込みは存在しない。
柱 穴 周溝上に存在するもののほか、床面にも存在する。主柱穴については、不明である。
埋 甕 存在しない。
時 期 不明である。
備 考 床面は、所々よく踏み固められている。旧河道によって壊される。

8号住居跡 (第13・14図)

調査年度 1989年度(第1次調査)
位 置 A・B・C-6.7グリッド
平 面 形 不明である。
規 模 4.20m前後と思われる。



第13图 5・8・9号住居跡 (1/60)



第14图 8·9号住居迹炉 (1/20)

周溝	存在しない。
炉	東西に長軸をもつ石囲炉で、やや方形を呈する。炉石は板状で、南北の石は東西に比べて厚く丸みを有する。
柱穴	主柱穴は、4本と思われる。
埋甕	存在する。口縁部を欠損し、正位で埋められている。また、掘り込みの上面には、石皿が伏せられたような状態で確認される（蓋として使われたものか）。器高43cm、径39cm、掘り込みの深さは53cmを計測し、西側の確認面は東より高い。形態は不整円形を呈する。埋甕は、坑底よりやや上に位置する。
時期	井戸尻式期。
備考	本住居の確認面がほぼ床面であったため、壁は確認されない。

9号住居跡（第13・14図）

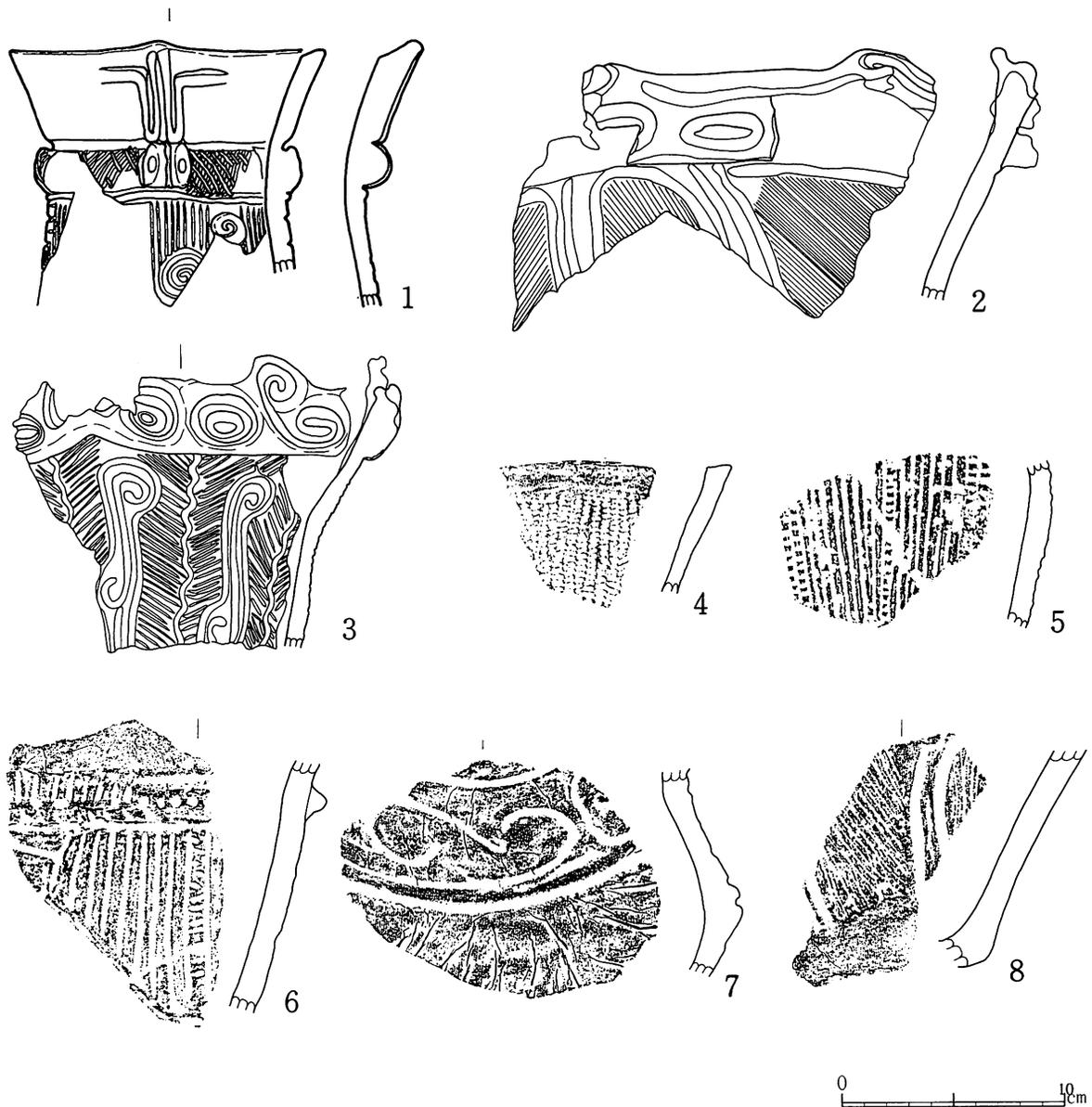
調査年度	1989年度（第1次調査）
位置	A・B-6.7グリッド
平面形	不明である。
規模	5.00m前後と思われる。
周溝	存在しない。
炉	方形を呈する石囲炉で長軸は97cm、短軸は96cm、掘り込みの深さは40cmをそれぞれ計測する。8号住居の炉より大型の礫を使用している。南側の炉石は三角形の断面を有し、他の3枚とは異なり低い。この事から入口部は、南に位置するものと思われる。また北西コーナー部にコの字状の施設が付随している。用途は不明であるが、群馬県「矢瀬遺跡」で類例が認められる。
柱穴	旧河道によって住居が壊されている関係で、東の主柱穴は不明である。
埋甕	存在しない。
時期	曾利Ⅲ式期。
備考	主軸は、南北方向にある。炉の規模から、かなり大型の住居と考えられる。

遺物説明（第15図）

1は、5号住居跡の出土遺物である。口縁部から胴部まで残存しており、現存する器高は16cmを計測する。口縁部径は19cmである。口縁部には、隆帯によって「W」字状に貼りつけられ、口唇部は小突起が形成される。頸部には、籠目状に貼り付けが施され、口縁部の隆帯の直下には眼鏡状の突起が付せられる。胴部には縦位に沈線文が施され、端部には渦巻文で施文される。井戸尻式期に属するものである。

2から8までは、9号住居跡の出土遺物である。2は、口縁部から胴下半部まで残存しており、現存する器高は17.5cmを計測する。口縁部径は、20cmを計測し、最大幅は23cmである。ベルト状に盛り上がった口縁部には、渦巻文や「S」字状文が施される。胴部には綾杉状文が施され、蛇行懸垂文と「S」字状文が縦位に巡らされている。3は、ベルト状に盛り上がった口縁部には渦巻文が施され、文様が剥がれている箇所も存在する。胴部には斜行する沈線文が施され、楕円形状の沈線文によって区画される。4は、口縁部の破片で、口唇部は無文帯が形成される。以下、縄文が施される。5は、胴部に沈線文が充填される。7は、胴部は「く」の字状に内弯し、胴上半部には沈線文による「S」字状文が施され、横位の沈線文によって区画される。8は、蛇行する隆帯と縦位による沈線文によって文様が構成される。9は、頸部に隆帯が横位に貼り付けがなされ、その後刻みが施される。直下には縦位による沈線文で充填される。

2, 3, 8は、曾利Ⅲ式期に属するものである。他は、井戸尻式期に属する。



第15図 5・9号住居跡出土遺物実測図(1/4)及び拓本(1/3)

10号住居跡 (第16図)

調査年度 1990年度(第2次調査)

位置 A・B-9.10グリッド

平面形 ほぼ円形と思われる。

規模 炉を中心として、北東から南西に長軸を持つ。長軸は7.06m、短軸は6.20mである。

周溝 存在しない。

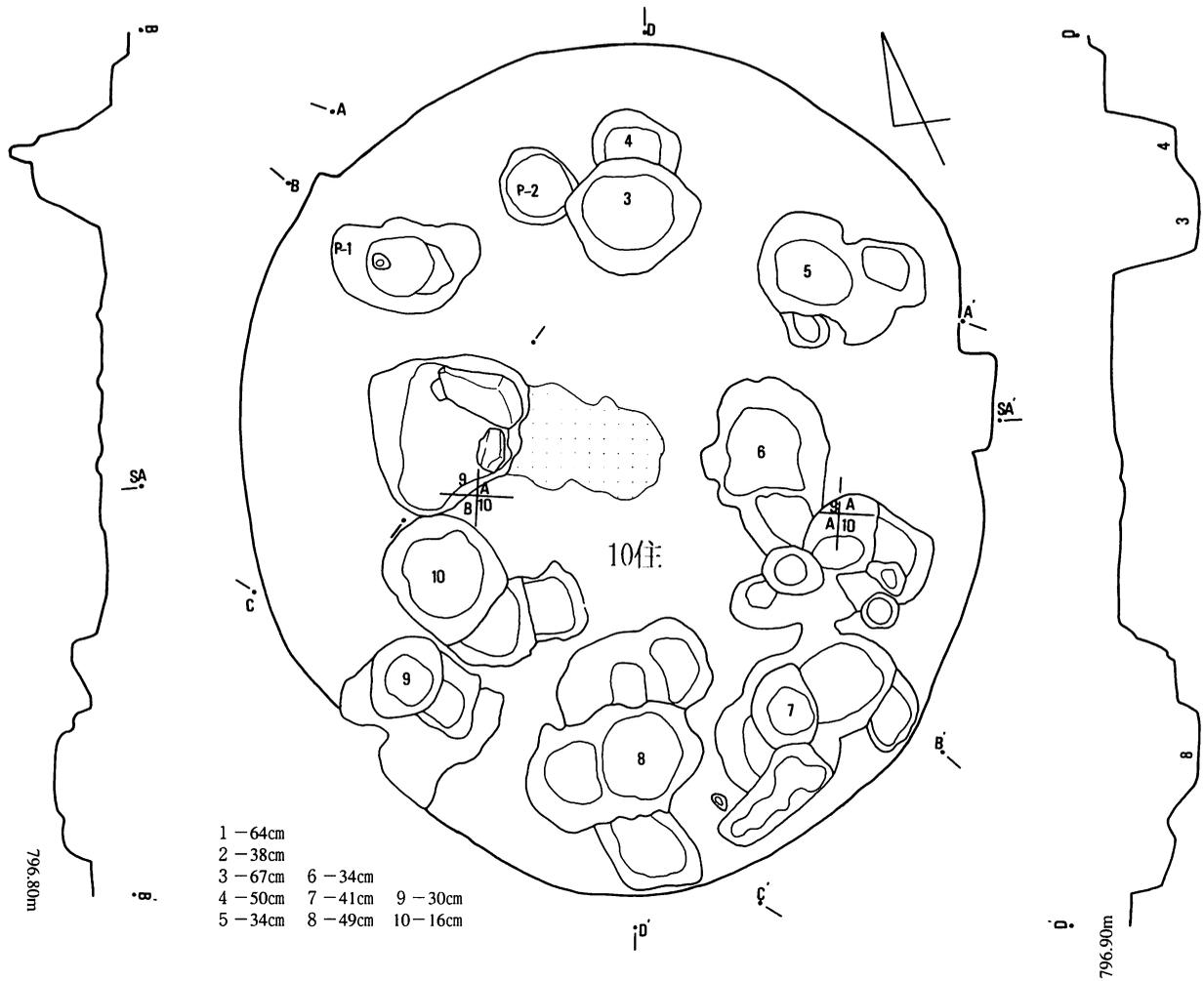
炉 住居のほぼ中央に位置する。長軸は東西にとるが土坑によって壊されてはいるものの、現存で120cm、短軸は約75cmである。長期間使用されたものと思われ、よく焼かれている。

柱穴 主柱穴は、6本と考えられる。

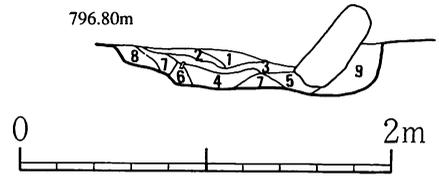
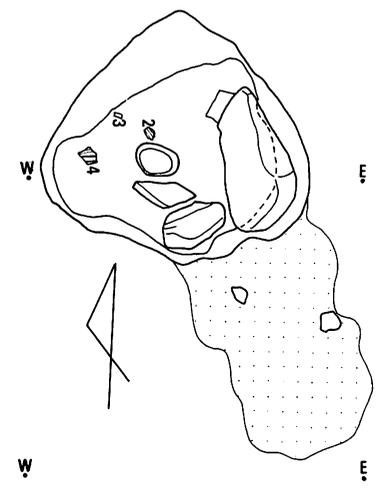
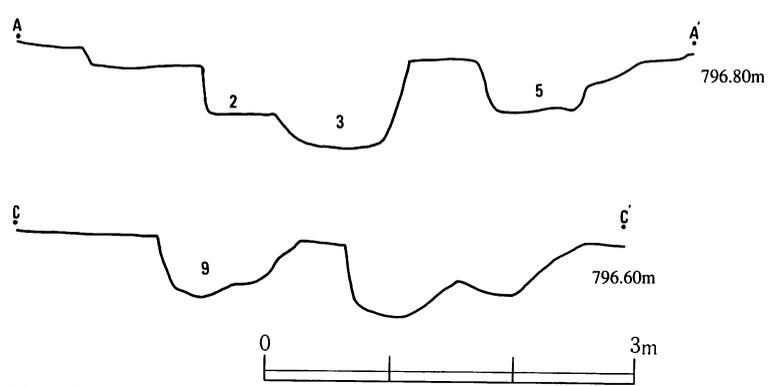
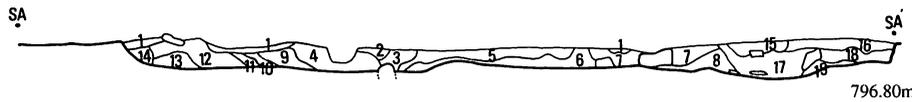
埋甕 存在しない。

時期 井戸尻式期終末から曾利I式期。

備考 床面は軟弱であり凹凸が認められ、1.2号掘立柱建物跡に壊される。



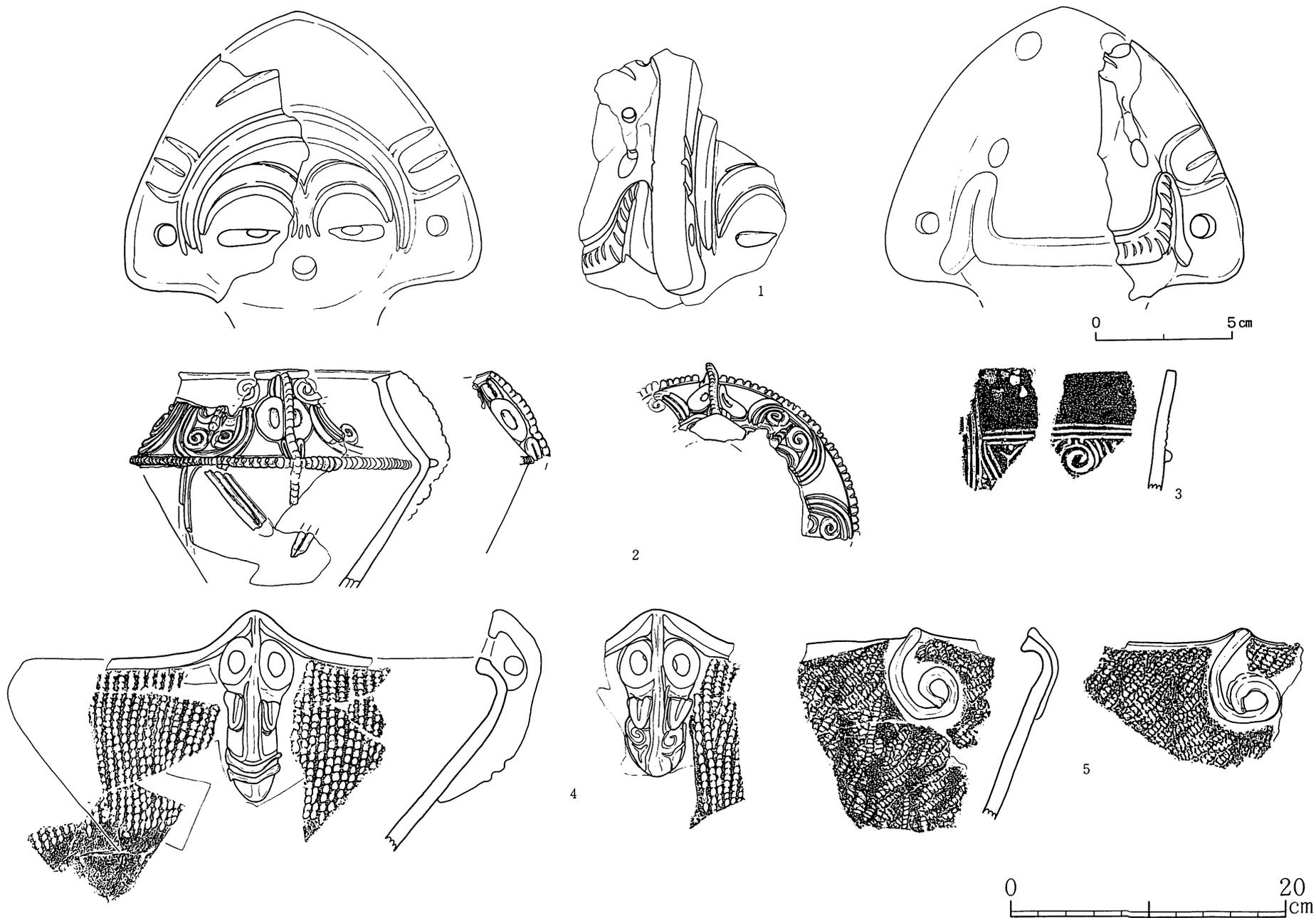
- | | |
|----------|-----------|
| 1 - 64cm | 6 - 34cm |
| 2 - 38cm | 7 - 41cm |
| 3 - 67cm | 9 - 30cm |
| 4 - 50cm | 8 - 49cm |
| 5 - 34cm | 10 - 16cm |



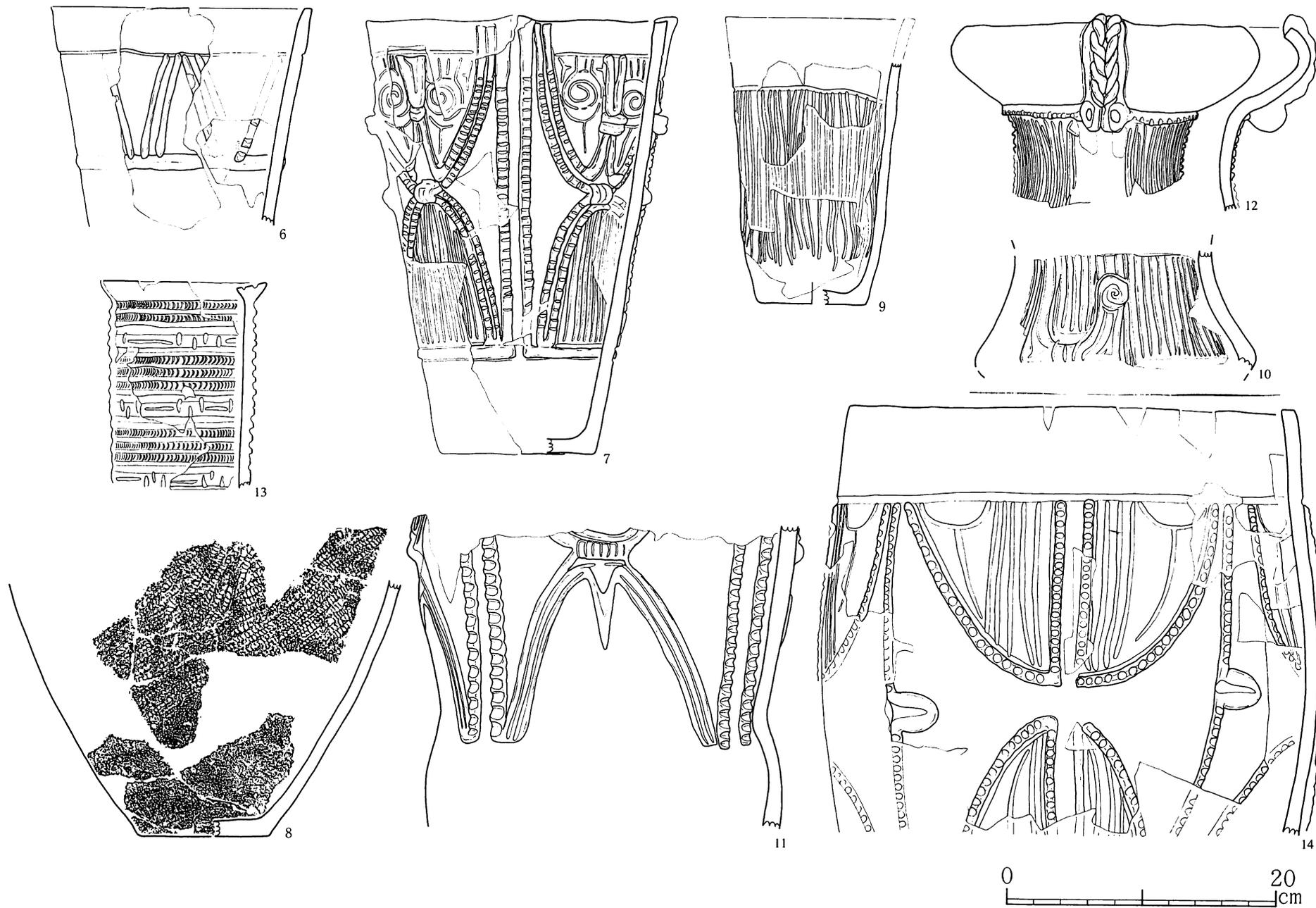
10号住居土層説明
 炉 1：暗褐色土（焼土粒子および炭化物少量混入） 2：暗褐色土（1、3よりやや明るい・焼土粒子若干） 3：暗褐色土（1と同じ色調・焼土粒子および炭化物少量混入） 4：褐色土（ローム粒子多量混入） 5：暗褐色土（ローム粒子および炭化物多量混入・焼土粒子少量） 6：暗褐色土（ローム粒子および炭化物多量混入） 7：暗黄褐色土（褐色土混じり・ロームブロック多量混入） 8：暗黄褐色土（炭化物若干） 9：黒褐色土（焼土粒子および炭化物多量混入）

10号住居土層説明
 1：黒褐色土（ローム粒子少量） 2：褐色土（ローム粒子多量） 3：褐色土（ローム粒子・炭化物および焼土粒子少量） 4：暗褐色土（ローム粒子炭化物若干） 5：暗褐色土（ローム粒子・焼土粒子少量） 6：黒褐色土（ローム粒子多量） 7：暗褐色土（ローム粒子・炭化物少量） 8：暗褐色土（7より明るい・ローム粒子多量） 9：暗褐色土（4より明るい・ローム粒子・炭化物少量） 10：明褐色土（ローム粒子多量・焼土粒子若干） 11：褐色土（ローム粒子多量・炭化物若干） 12：褐色土（11より明るい・ローム粒子多量） 13：褐色土（12より暗い・ローム粒子若干） 14：暗黄褐色土（ローム粒子多量） 15：褐色土（黒褐色土ブロック混入） 16：明褐色土（ロームブロック混入） 17：褐色土（ローム粒子多量） 18：暗黄褐色土（ローム粒子多量） 19：褐色土（ローム粒子多量）

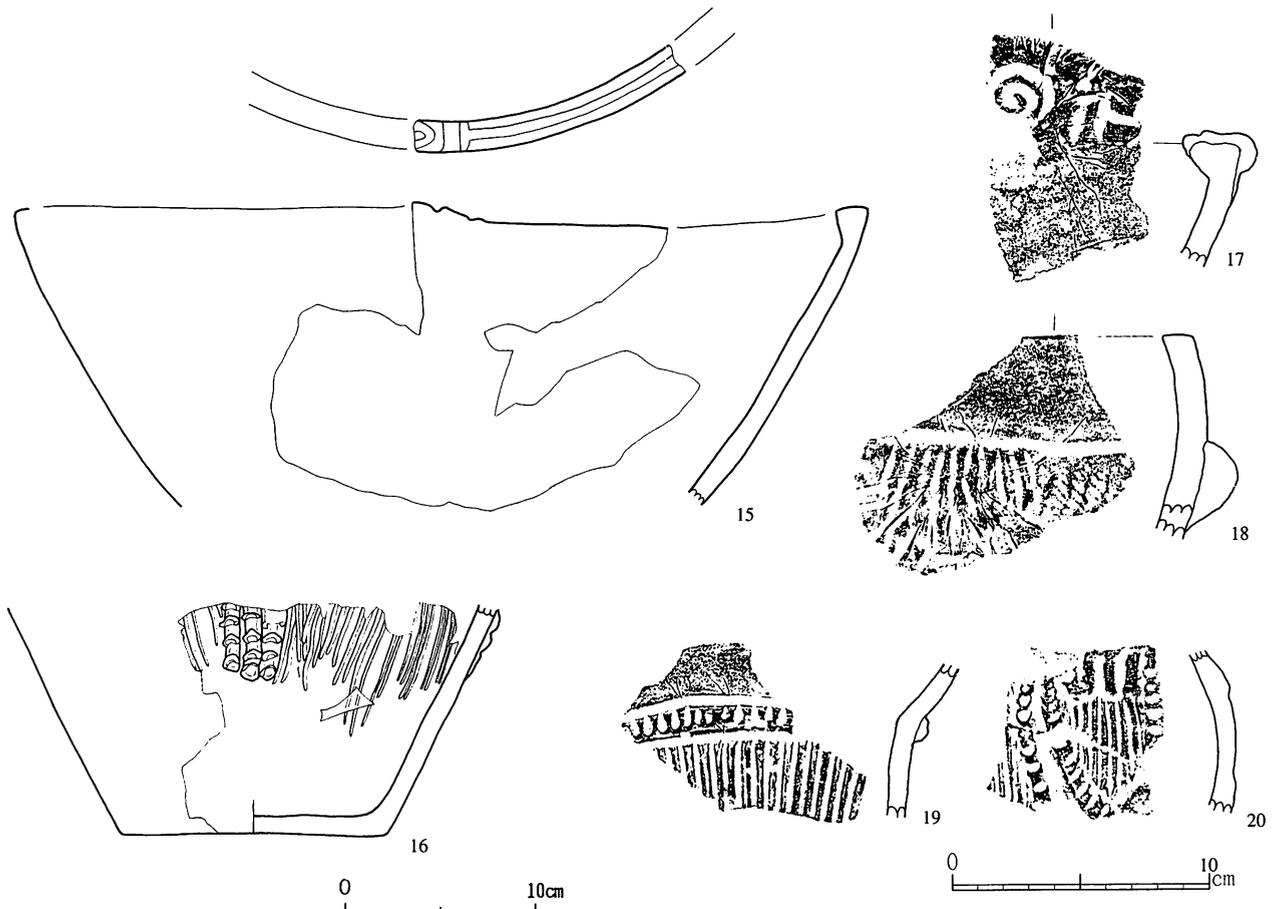
第16図 10号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/40)



第17图 10号住居跡出土遺物実測図 (1/2) · (1/4)



第18图 10号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第19図 10号住居跡出土遺物実測図（1/4）及び拓本（1/3）

遺物説明 （第17・18・19図）

ほとんどが覆土中より出土したもので、井戸尻式土器と曾利Ⅰ式土器が混在している。

1は土偶の頭部で、半分以上欠損している。全体は推定で30cmを越えるものと思われ、かなりの大形である。頭部は三角形に近く、中空につくられている。後頭部と右後頭部、耳の部分に貫通孔がみられる。山梨県一の沢西遺跡に同様の類例がみられるが、顔面把手の可能性もある。

井戸尻式土器は、2～8にみられるように屈折する器形のものや渦巻き、三叉文などを組み合わせたもの、動物意匠を持つものなどがみられる。

2の土器の口縁部の文様は、「U」字形の隆帯と渦巻きを組み合わせたもので、7の胴部上半のモチーフに類似する。

4の口縁部には、丸みを帯びた三角形の連続押圧文が縦位に充填される。

7は、「U」字形のモチーフを組み合わせた文様で、11,14の曾利式土器に連続していくものである。上半部は、渦巻文と三叉文によって表現され、下半部は篋状工具による沈線で充填される。下端は、横位の隆線で区画され、いまだ井戸尻式土器の色彩が強い。

11の土器の「U」字形のモチーフは、幅広の隆帯の上に沈線を2本ひいて3本のようにみせている。

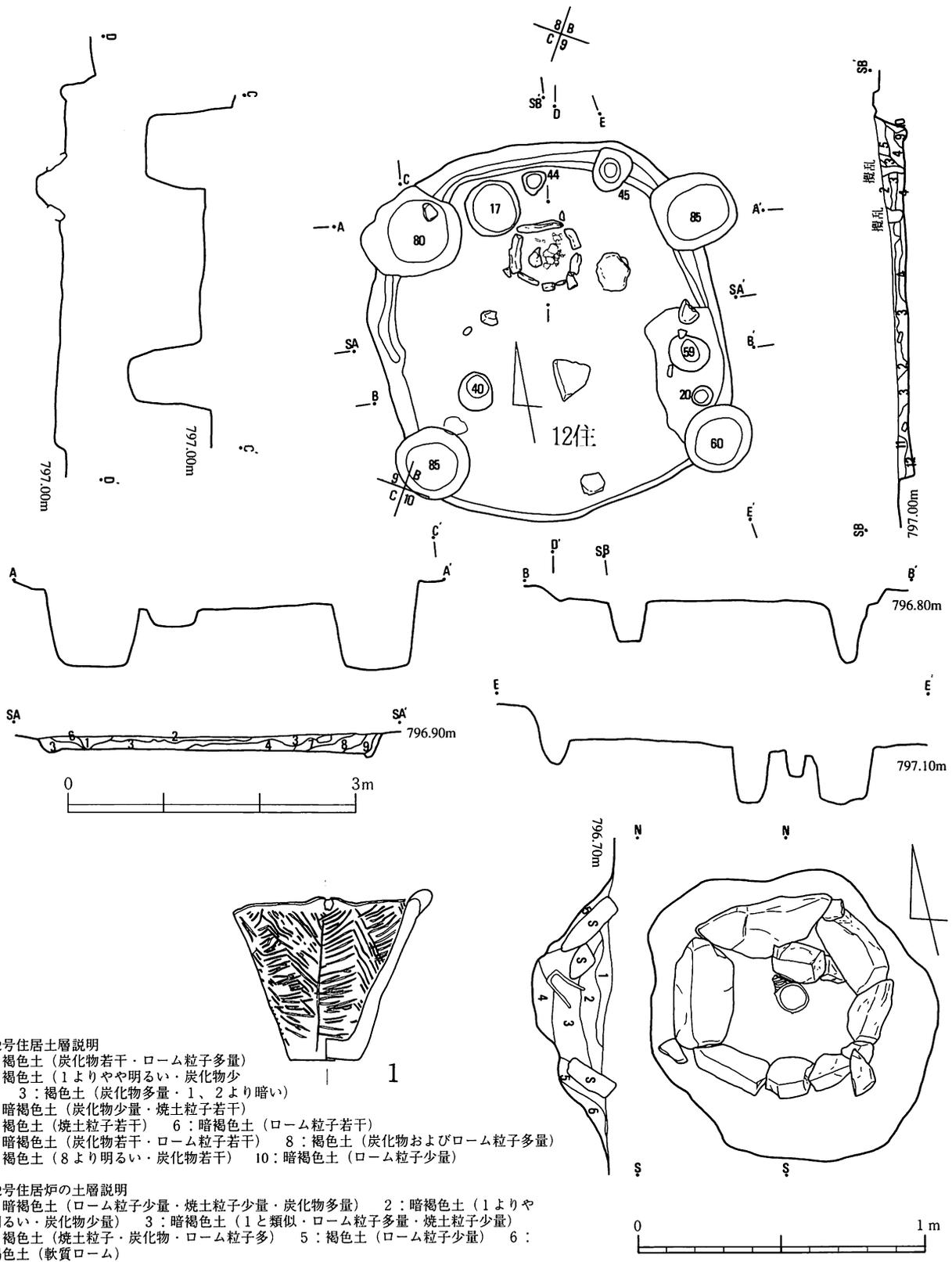
14は、「U」字形のモチーフが中央で縦の隆線とつながり、内部に三叉文がみられ、古い様相を示している。16も同じ系統の土器と思われる。

曾利式土器は条線が目立ち、9,12,14の条線は篋状工具によるものである。

10は屈折底となるもので、幅広の隆帯による懸垂文と半截竹管状工具による条線がみられる。

16の土器も半截竹管状工具によるものである。

11は横位に半截竹管状工具の背面を使って沈線を巡らせ、連続爪形文と交互刺突によって文様が構成されている。いずれも井戸尻式終末から曾利Ⅰ式の古い段階に比定される。



第20図 12号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)

11号住居跡 (第3図)

調査年度 1990年度 (第2次調査)

位置 A・B-8.9グリッド

平面形 楕円形と思われる。

規模 不明である。

周溝	認められない。
炉	不明である。
柱穴	不明である。
埋甕	存在しない。
時期	諸磯b式期と思われる。
備考	10号住居と重複し、また掘立柱建物跡とも重複する。

12号住居跡 (第20図)

調査年度	1990年度 (第2次調査)
位置	B・C-9グリッド
平面形	円形を呈するものと思われる。
規模	主軸を南北にとり、炉を中心として3.88m、東西3.60mを計測する。
周溝	北側で半周する。地山が北から南へ傾斜を持っているためか、北側部分でしか認められない。
炉	石囲炉で、8ヶの礫で構成される。ほぼ円形に近い。住居の中央から北側の奥壁よりに構築される。炉内中央部近くで完形の小型鉢が出土する。炉の状態は良好である。
柱穴	住居の北西は、掘立柱建物跡によって壊され存在しないが、主柱穴は、4本と思われる。
埋甕	存在しない。
時期	曾利Ⅲ式期。
備考	床面はほぼ平坦で、炉の周辺および南側ではよく踏みしめられている。炉の位置より、入口部は南側と考えられ、住居の東壁近くで半欠けの石皿が床直で出土している。

遺物説明 (第20.21図)

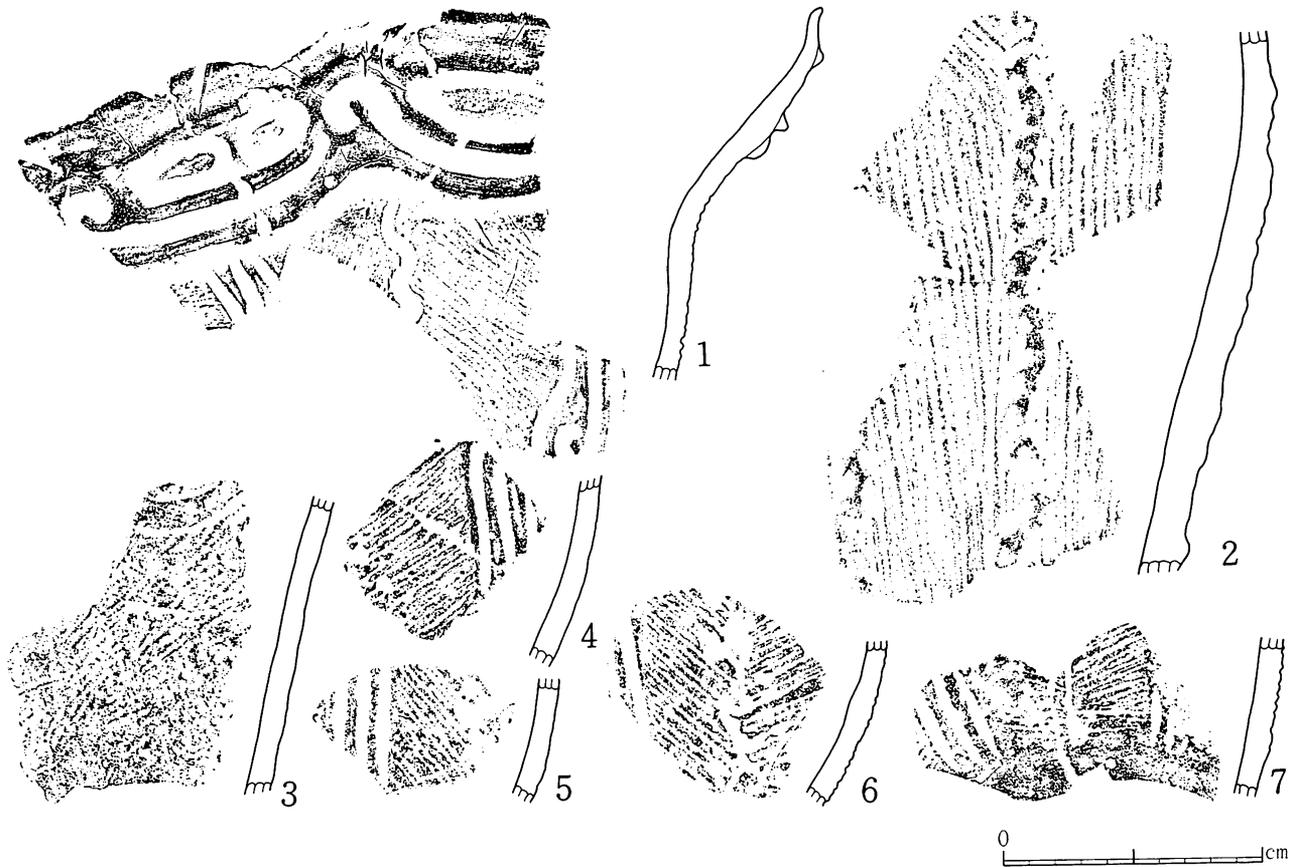
実測図1は、炉の内部からほぼ完形で出土した土器である。器面全体に綾杉状文で充填させ、縦位に1条の沈線文で区画される。口径は14cm、器高11.4cmである。

拓本1は、口縁部に楕円形文および「S」字状文が施される。胴部には、綾杉状文と蛇行沈線文を1単位として縦位に施された沈線文によって区画される。また、4、5、6、7も同様な施文方法である。2は、胴部の破片で縦位による沈線文で充填され、刻みを持った隆帯によって区画される。3は、地文を縄文として、胴上半部に弧状の沈線文が施される。

2を除いた1から7までは、曾利Ⅲ式期に属する。

13号住居跡 (第22図)

調査年度	1990年度 (第2次調査)
位置	B・C-10グリッド
平面形	円形を呈すると思われる。
規模	重複が著しく、南北方向で確認されている規模は、5.55mである。
周溝	認められない。
炉	住居中央より北側の奥壁寄りに、石囲炉が設置される。ほぼ方形を呈し、西側は6ヶの礫で、他は1~2ヶの礫で構成される。南の礫は、平坦面を上に向け、他は斜位である。
柱穴	主柱穴は、6本である。深さは42~60cmである。
埋甕	存在しない。
時期	曾利Ⅱ式期。
備考	床面はほぼ平坦である。15号住居の覆土を踏み固めて床面がつくられる。また炉より古い22号土坑が存在する。



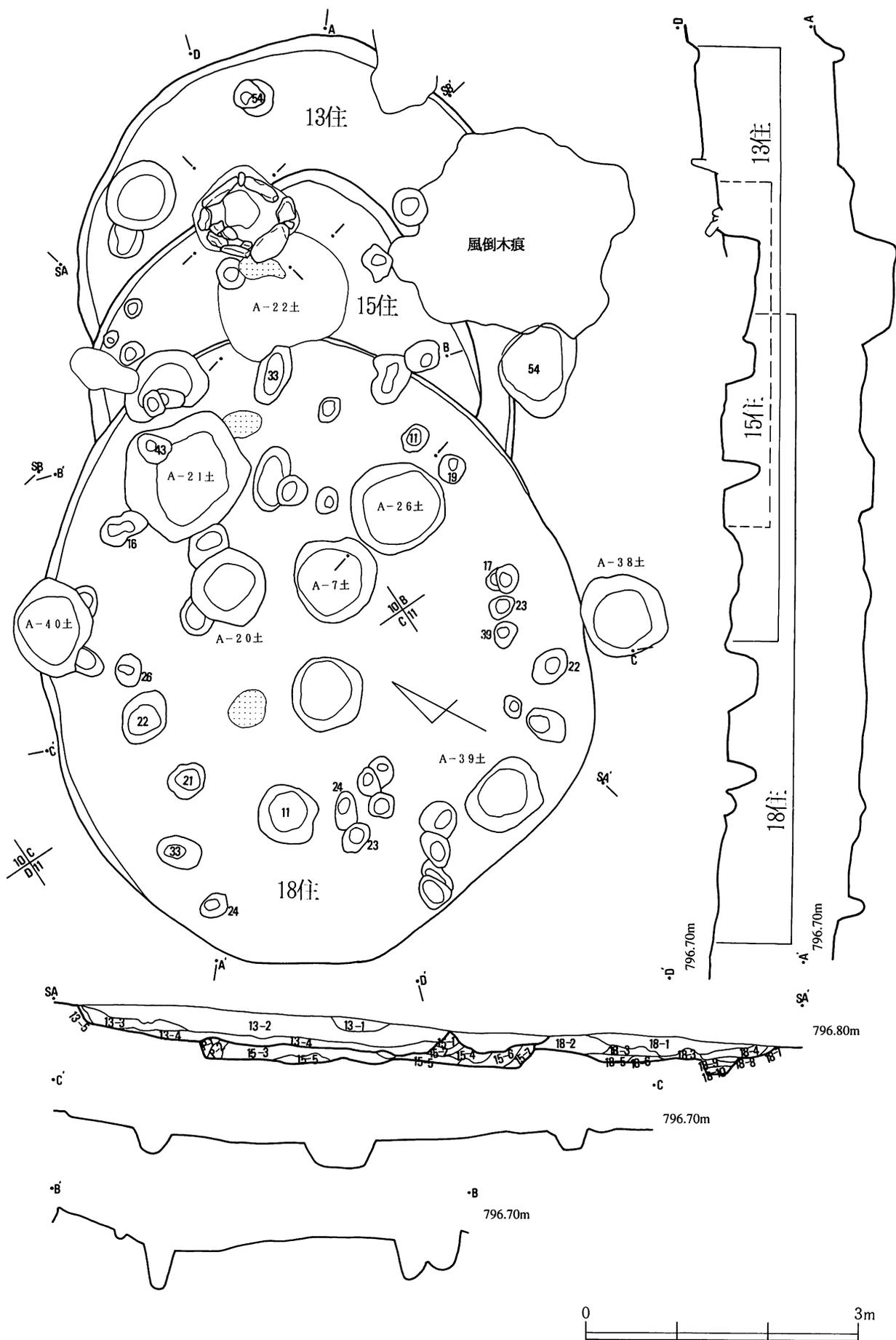
第21図 12号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

15号住居跡 (第22図)

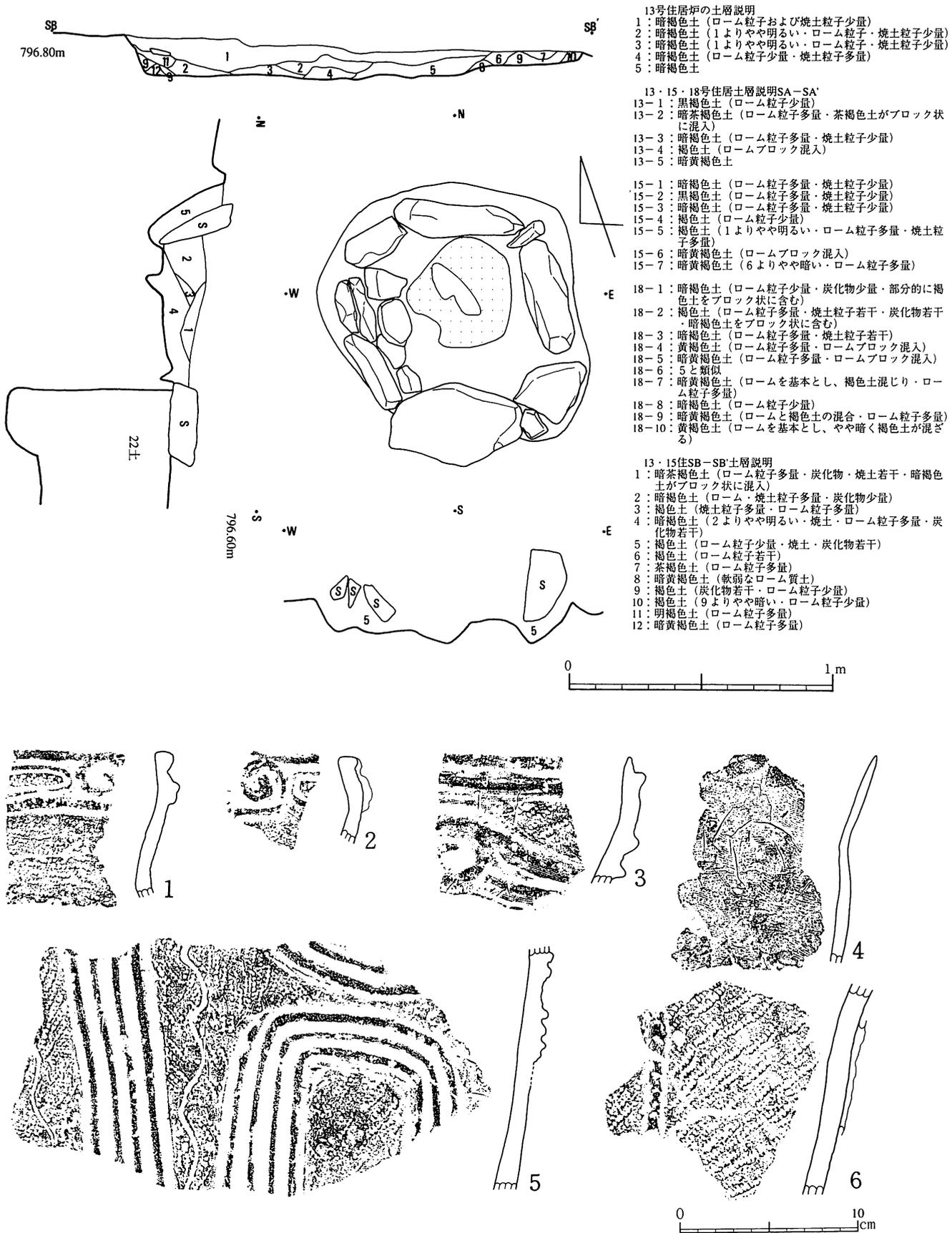
調査年度 1990年度 (第2次調査)
 位置 B・C-10グリッド
 平面形 方形を呈するものと思われる。
 規模 3.80m前後と思われる。
 周溝 存在しない
 炉 住居の中央より西側に地床炉が設置される。
 柱穴 主柱穴は5本である。深さは、43~46cmを計測する。
 埋甕 存在しない。
 時期 諸磯b式期。
 備考

18号住居跡 (第22図)

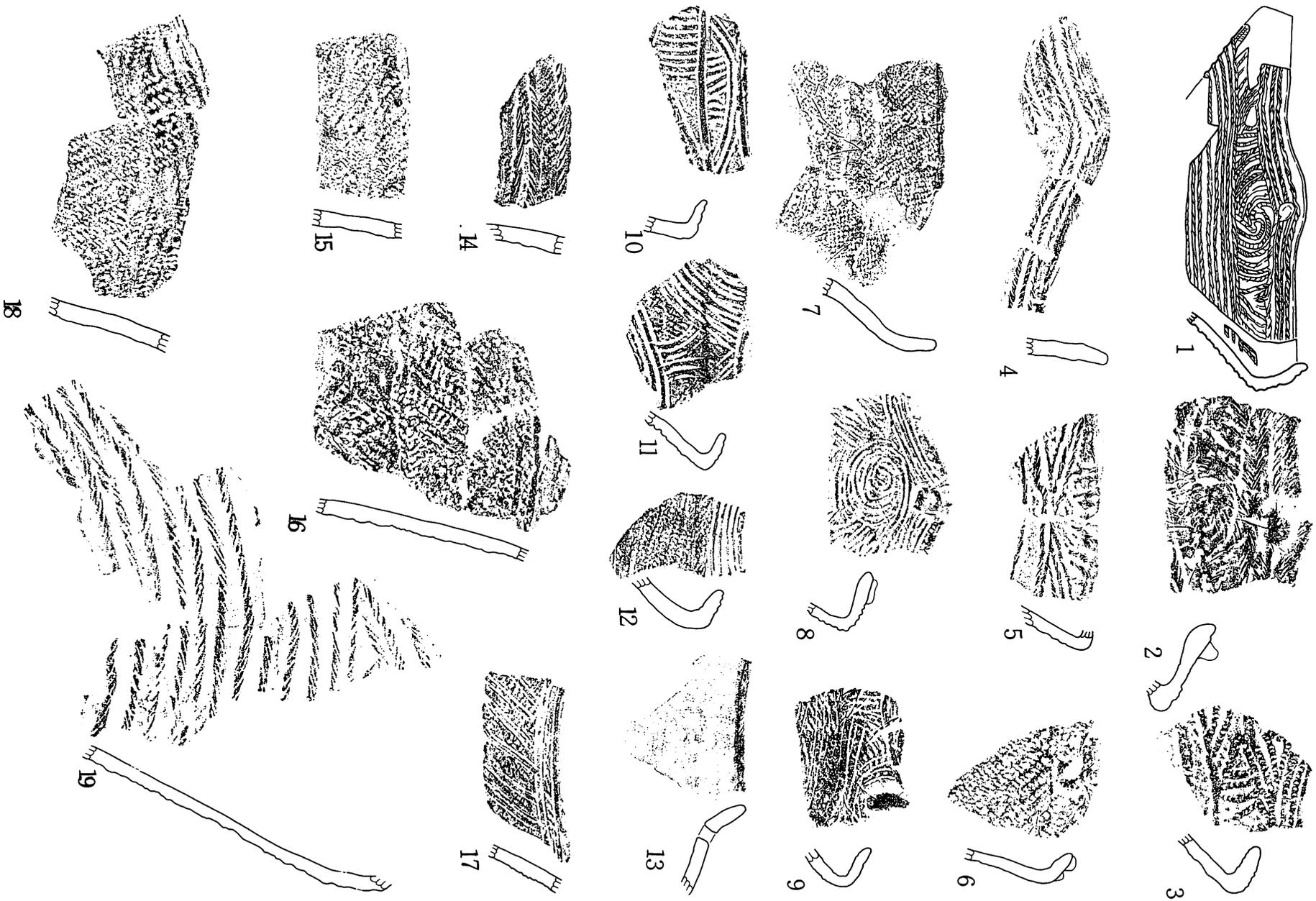
調査年度 1990年度 (第2次調査)
 位置 B・C-10.11グリッド
 平面形 楕円形を呈するものと思われる。
 規模 長軸6.80m、短軸6.25mを計測する。
 周溝 存在しない。
 炉 住居の中央より西寄りに地床炉が設置される。
 埋甕 存在しない。



第22図 13・15・18号住居跡 (1/60)



第23図 13号住居跡炉 (1/20) 及び出土遺物拓本 (1/3)



第24图 18号住居跡出土遺物実測図(1/4) 及び拓本(1/3)

柱 穴 多数存在する。
時 期 諸磯b式期。
備 考 床面はほぼ平坦で、中央は比較的しまりがよい。

遺物説明（第23・24図）

1から6までは、13号住居跡出土遺物である。

1, 2, 3は口縁部に渦巻文が施されるもので、楕円区画内には縄文が施文される。4の口縁部は、「く」の字状に緩やかに外反させられる。5, 6の器面には縄文が施され、5は縦位と「U」字状の幅広の沈線文で区画される。6は、縄文が施された後、隆帯によって区画される。

第24図は、18号住居出土遺物である。

1は、口径約26cmで、現存する器高は9cmを計測する。口唇部は波状を呈し、波頂部直下には瘤状の貼り付けがなされる。口縁部には平行する貼り付けと刻みが施され、直下には渦巻き状に貼り付けがなされ、下端には平行する8本の貼り付けと刻みが施される。2から5までは、波状口縁を有するものである。6および7は、地文を縄文として器面に施される。8, 9, 10, 11は、沈線文と波頂部に貼り付けがなされるものである。12は、口縁部に沿って平行沈線文が施されるものである。13は、有孔土器である。

これら1～19の土器は、諸磯b式期に属するものである。

17号住居跡（第25図）

調査年度 1990年度（第2次調査）

位 置 D-9.10グリッド

平 面 形 円形を呈するものと思われる。

規 模 長軸は、5.42mを計測する。

周 溝 存在しない。

炉 焼土は、住居の南側で確認されるが、形態は不明である。

埋 甕 存在しない。

柱 穴 主柱穴は、4本と思われる。

時 期 井戸尻式期と思われる。

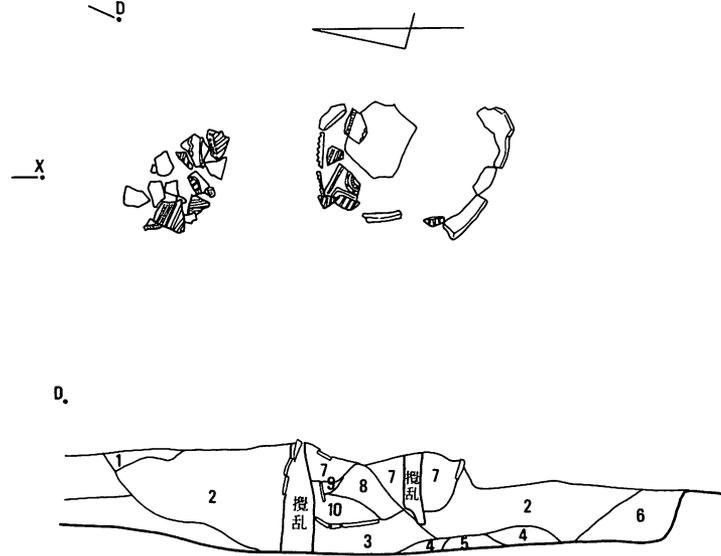
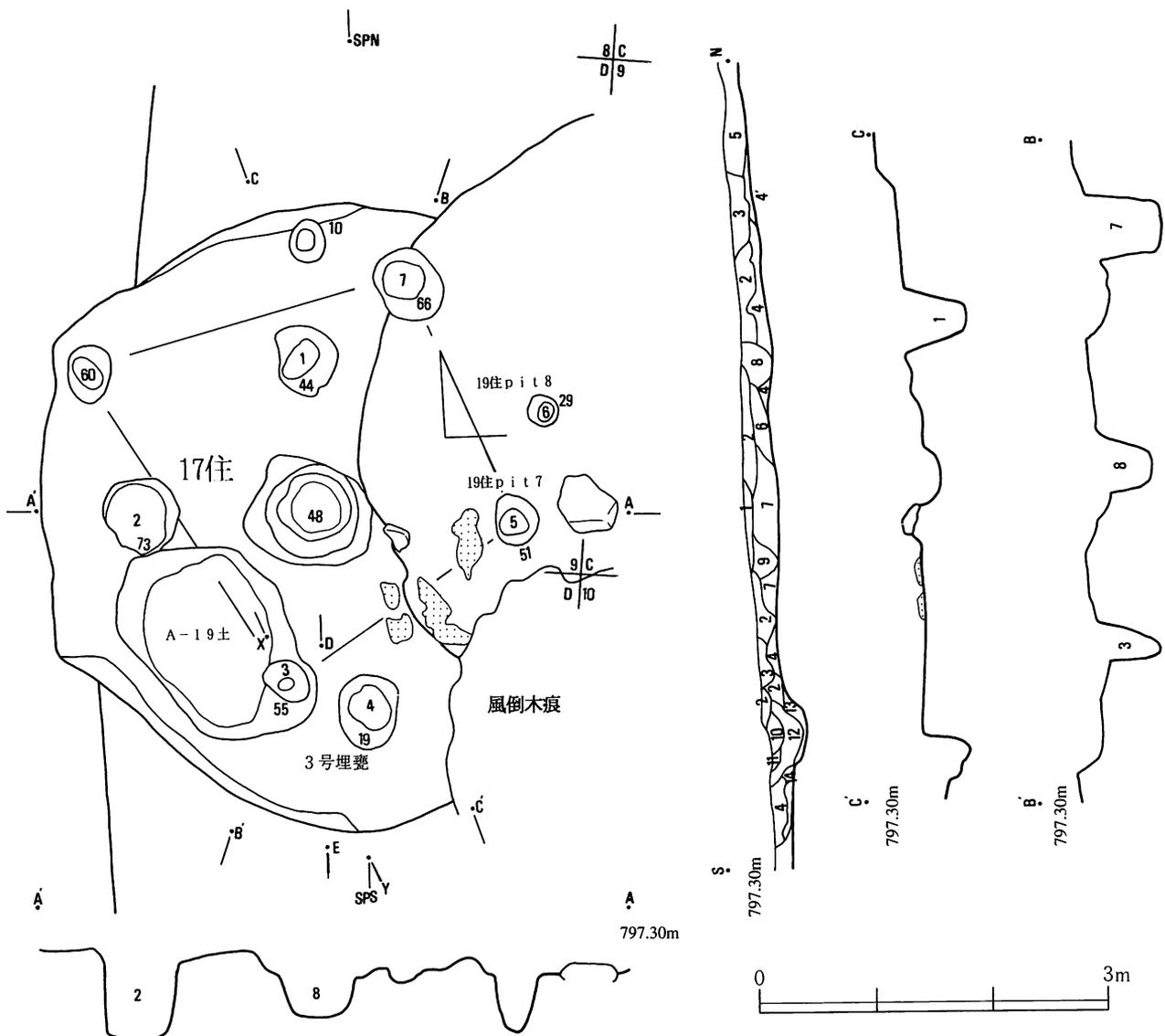
備 考 本住居跡より新しい埋甕（曾利I式期）が存在する。この埋甕は、本住居跡の覆土中で認められる。

遺物説明（第26・27図）

本住居跡に伴うと思われる遺物は1で、復元が可能であった。器高は23cmを計測し、口径は18cmである。口縁部文様帯は無文帯を形成し、頸部には横走する隆帯が巡らされ、直下には蛇行する隆帯が施される。また胴上半部から底部にかけて、縄文が施される。

2は、17号住居跡の調査中に覆土中より出土した土器である。正位に置かれた土器で、埋甕ではないかと判断した。口縁部から胴上半部までを欠損するが、表土から重機による排土作業のため破壊した可能性がある。埋甕の両端には、根による攪乱が入り、このため土器は破片となっている。胴上半部には隆帯による「U」字状の貼り付けがなされ、刻みが施される。胴部中位には隆帯が横走り、クランク状に垂下させられ区画帯をなす。区画内には、縦位の平行沈線文で充填させられる。胴下半部から底部までは、無文である。この土器は曾利I式期に属するものである。

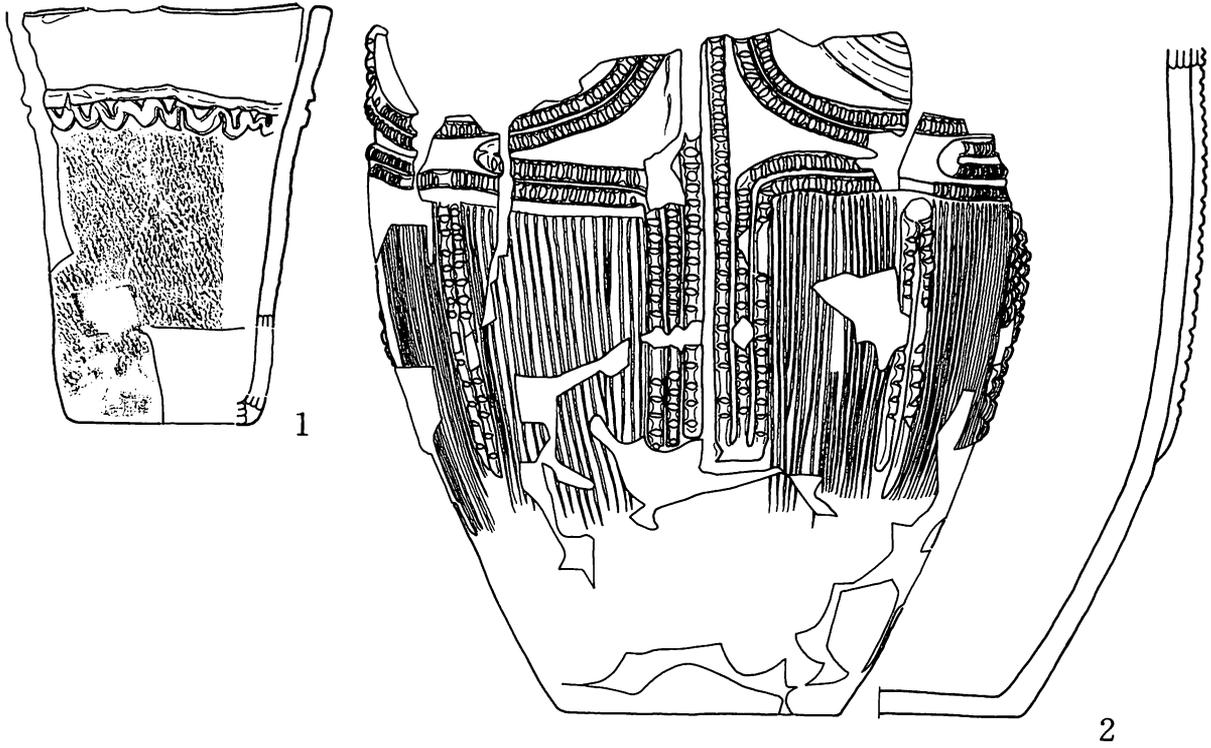
第27図は、拓本遺物である。本住居跡から出土したもので、諸磯b式期から曾利式期まで出土している。本住居跡より新しい3号埋甕の存在から時期的には中期中葉の住居跡と考えられ、1, 6, 9から井戸尻式期に属する住居跡と考えられる。



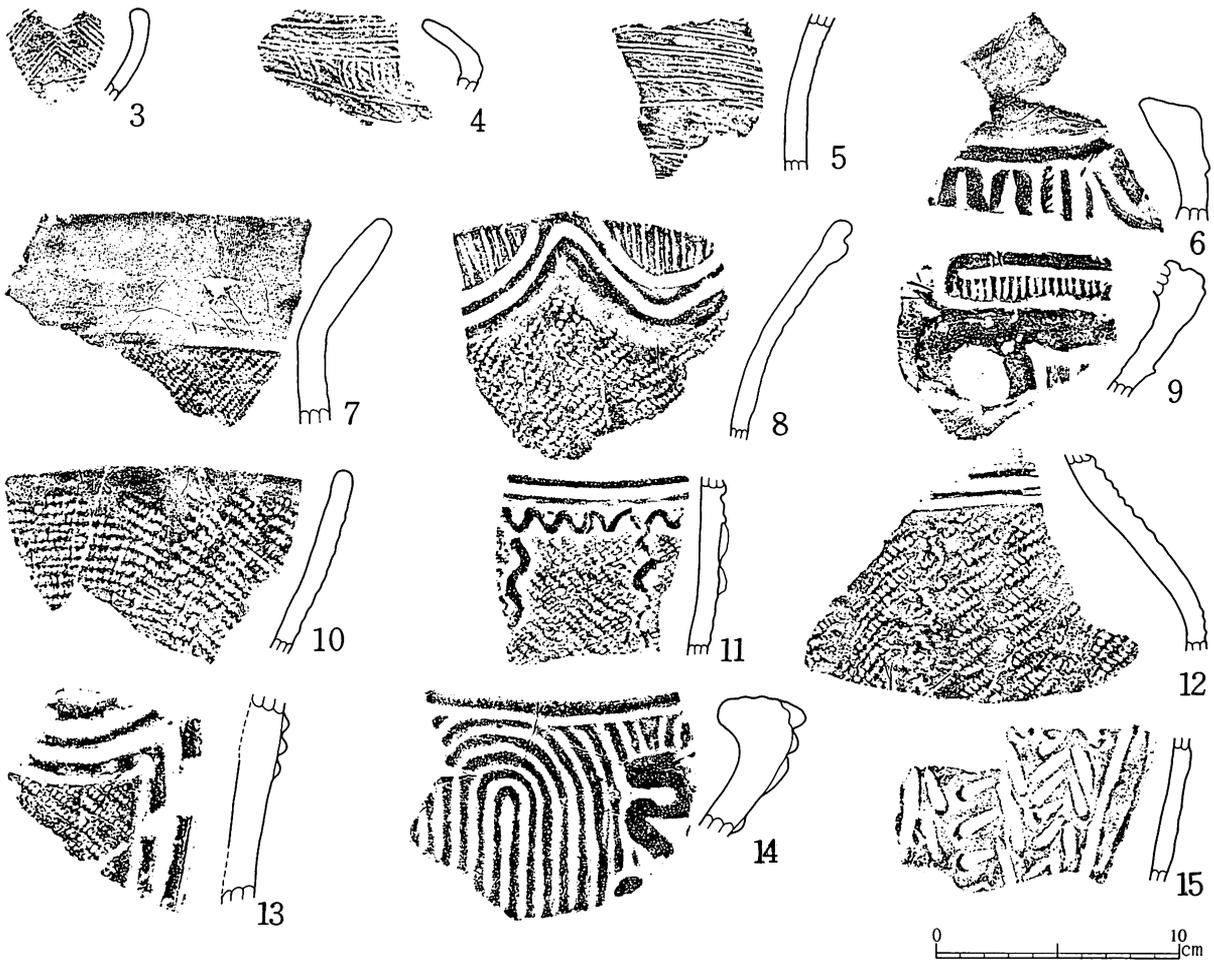
- 17号住居土層説明
- 1: 黒褐色土
 - 2: 黒褐色土 (褐色土粒子混入)
 - 3: 暗褐色土
 - 4: 暗褐色土 (ローム粒子混入)
 - 4: 暗褐色土 (4より明るい)
 - 5: 暗褐色土 (4より暗い)
 - 6: 黒褐色土 (2よりやや暗い)
 - 7: 暗褐色土 (褐色土粒子混入)
 - 8: 暗褐色土 (4より暗い)
 - 9: 暗褐色土 (黒褐色土粒子混入)
 - 10: 黒褐色土 (褐色土粒子混入)
 - 11: 黒褐色土 (10より暗い・1より明るい)
 - 12: 暗褐色土 (黒褐色土粒子混入)
 - 13: 暗褐色土 (ローム小ブロックおよび褐色土粒子混入)

- 17号住居より新しい3号埋葬
- 1: 黒褐色土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 暗褐色土 (ローム粒子混入)
 - 4: 暗褐色土 (2より暗い)
 - 5: 暗褐色土 (ローム粒子およびローム小ブロック混入)
 - 6: 暗黄褐色土埋葬内部の土層
 - 7: 黒褐色土 (暗褐色土の粒子混入・1より明るい)
 - 8: 暗褐色土
 - 9: 黒褐色土 (8よりやや暗い)
 - 10: 暗褐色土 (9より暗い)

第25図 17号住居跡 (1/60) 及び17号住居跡より新しい3号埋葬 (1/20)



第26图 17号住居跡出土遺物実測図 (1/4) 及び3号埋甕 (1/4)



第27图 17号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

14号住居跡（第3図）

調査年度	1990年度（第2次調査）
位置	C・D-10グリッド
平面形	不明である。
規模	不明である。
周溝	認められない。
炉	不明である。
柱穴	不明である。
埋甕	不明である。
時期	不明である。
備考	遺構の重複が著しく、また風倒木痕により攪乱されていることから不明な部分が多いが、住居跡の存在が考えられるものである。

19号住居跡（第28・29図）

調査年度	1990年度（第2次調査）
位置	C・D-9グリッド
平面形	円形を呈するものと思われる。
規模	新旧ともに、5.00m前後と思われる。
周溝	全周する。
炉	石囲炉と思われ、炉石が残存する。
埋甕	存在する。本埋甕は、調査の段階では土坑と考えられ掘り下げたところ、土坑中位から坑底にかけて口縁部を欠損する甕が出土し、本住居の出土地点から埋甕として調査を行った。また、埋設されている掘り方の一部は、礫をともなう新しい土坑によって破壊される。
柱穴	主柱穴は5本確認されるが、攪乱（風倒木痕）によって不明な部分も存在する。
時期	曾利Ⅰ式期。
備考	重複する住居が存在する。本住居跡は、古い住居跡を壊してつくられるが、拡張された住居であるとは考えがたい。風倒木によって、住居の南部分は壊される。

遺物説明（第30・31図）

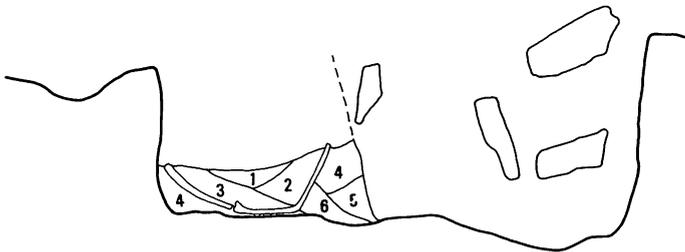
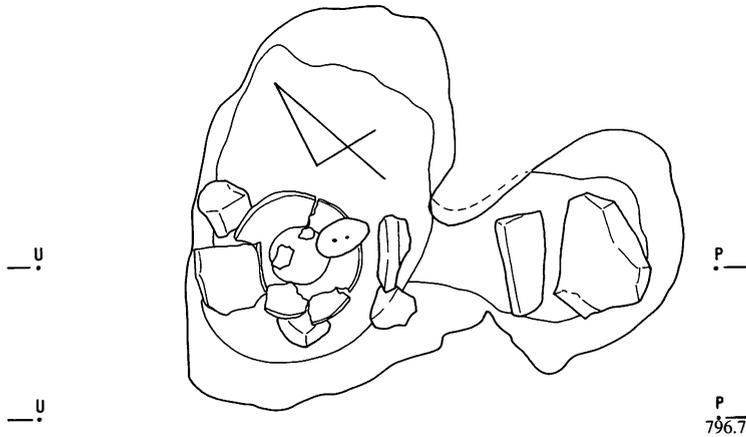
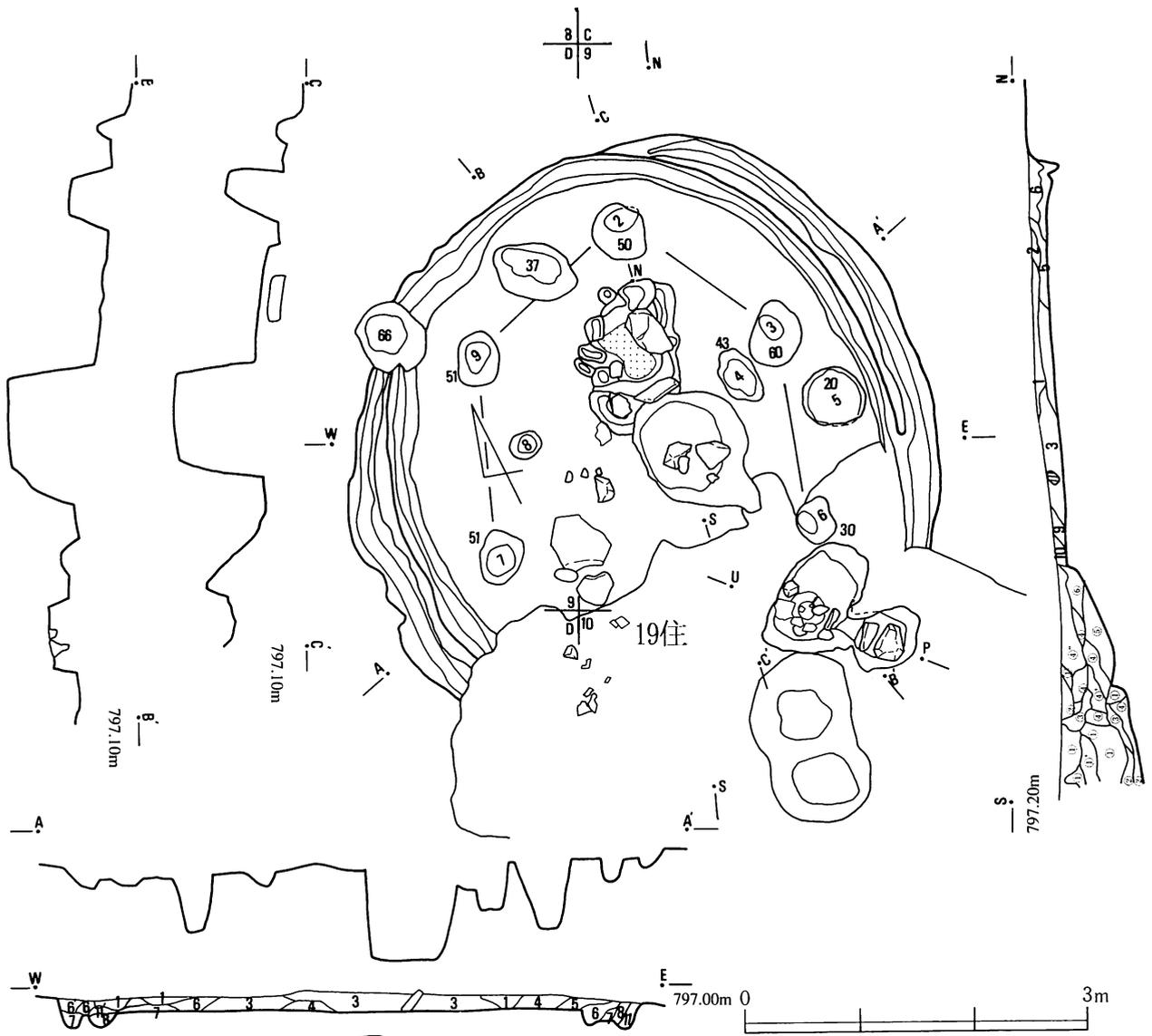
第30図の1は、口縁部の一部と底部を欠損する。現存する器高は20.8cm、口径は14.6cmをそれぞれ計測する。口縁部は無文帯をなし、キャリパー状を呈することなく直立しながら開く。頸部には横位に2条の沈線文が引かれる。以下胴部から底部までは、縦位の沈線文で充填される。2は、口縁部に把手が付され、「S」字状の沈線文が施される。頸部には2条の平行沈線文と連弧文が施文される。

本住居跡から出土した遺物は、諸磯b式期から曾利Ⅱ～Ⅲ式期まで出土している。

第31図の1は、本住居跡で発見された埋甕である。口縁部から胴部中位にかけて欠損し、縄文を地文として器面全体に施される。そののち半截竹管状工具によって3本の沈線文で器面を区画させる。底部には、網代状の圧痕が明瞭に認められる。

20号住居跡（第32図）

調査年度	1990年度（第2次調査）
位置	C・D-10.11グリッド
平面形	円形ないし楕円形を呈するものと思われる。



19号住居土層説明

- 1: 暗褐色土 (黒褐色土粒子混入) 2: 暗褐色土
- 3: 暗褐色土 (褐色土粒子・ロームブロック混入)
- 4: 暗褐色土 (3よりやや暗い)
- 5: 暗褐色土 (ローム粒子混入・2より明るい)
- 6: 暗褐色土 (ローム粒子多量混入)
- 7: 褐色土 8: 暗褐色土 (黒褐色土粒子ローム粒子混入)
- 9: 暗褐色土 (ローム小ブロックおよびローム粒子混入)
- 10: 黒褐色土 (焼土粒子混入・ローム小ブロック混入)
- 11: 黒褐色土 11': 暗黄褐色土 (ロームブロック混入)

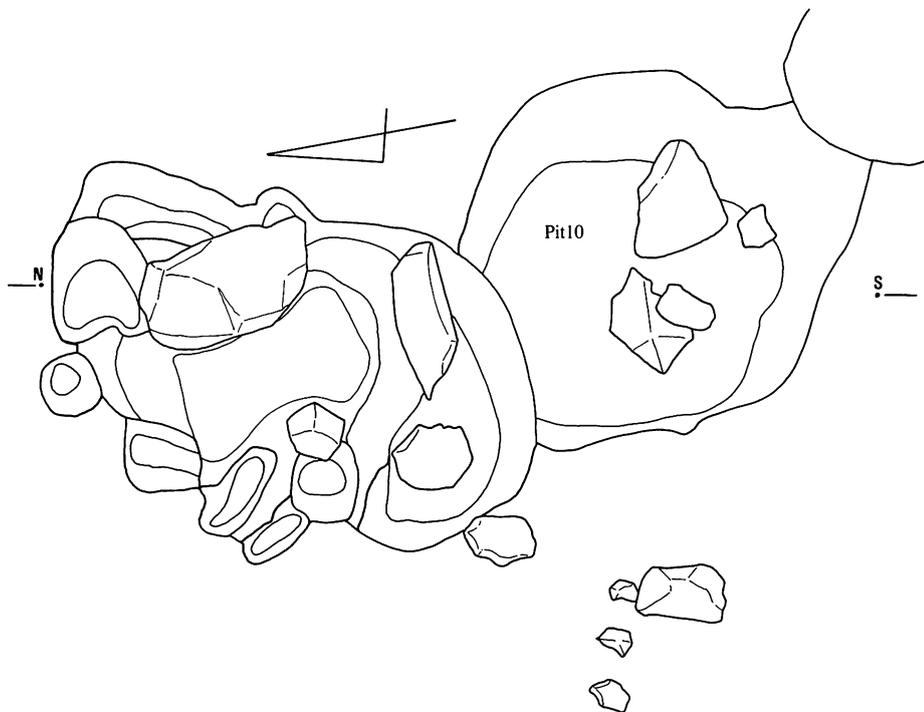
19号住居風倒木痕土層説明

- ①: ロームブロック ①': ロームブロック ②: 黒褐色土
- ③: 褐色土 ④: 暗黄褐色土 (褐色土粒子混入)
- ④': 暗褐色土 (ローム小ブロック混入)
- ④'': 暗褐色土 (ロームブロック等を含まない)
- ⑤: 暗褐色土 (焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック混入)
- ⑥: 暗褐色土 (④より暗い)

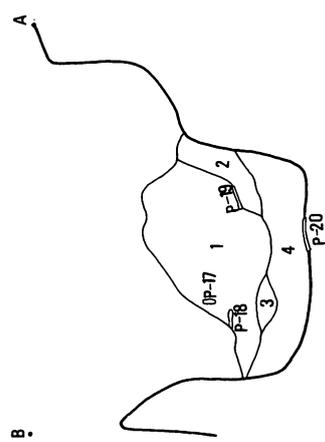
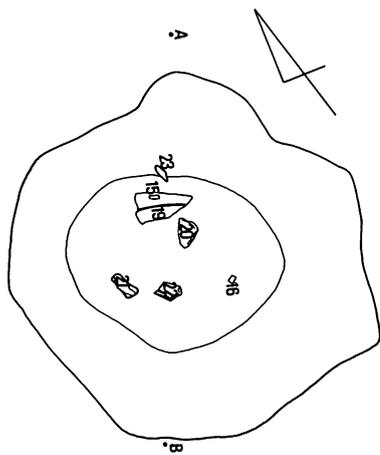
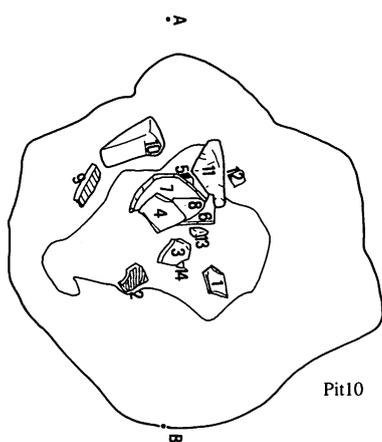
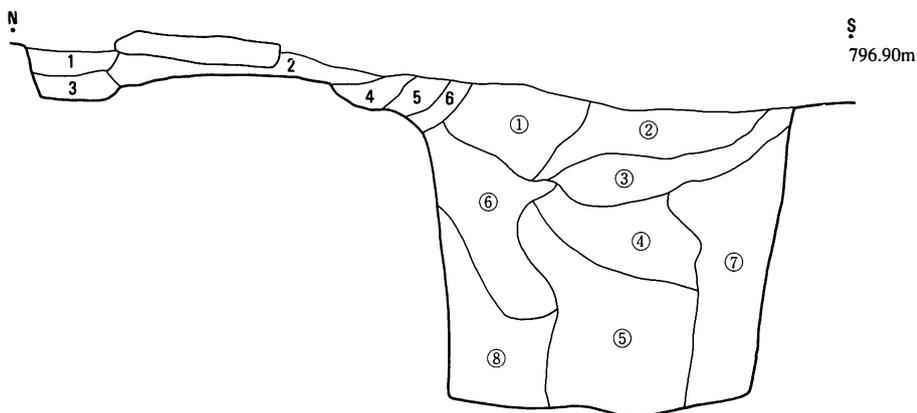
19号埋壙の土層説明

- 1: 暗褐色土 (ローム粒子多量・焼土・炭化物若干混入)
- 2: 暗褐色土 (ローム粒子多量混入)
- 3: 暗褐色土 (ローム粒子多量・1よりやや多い)
- 4: 暗褐色土 (ローム粒子少量・炭化物若干)
- 5: 暗褐色土 (ローム粒子少量・4よりやや暗い)
- 6: 黄褐色土 (ロームと褐色土の混合)

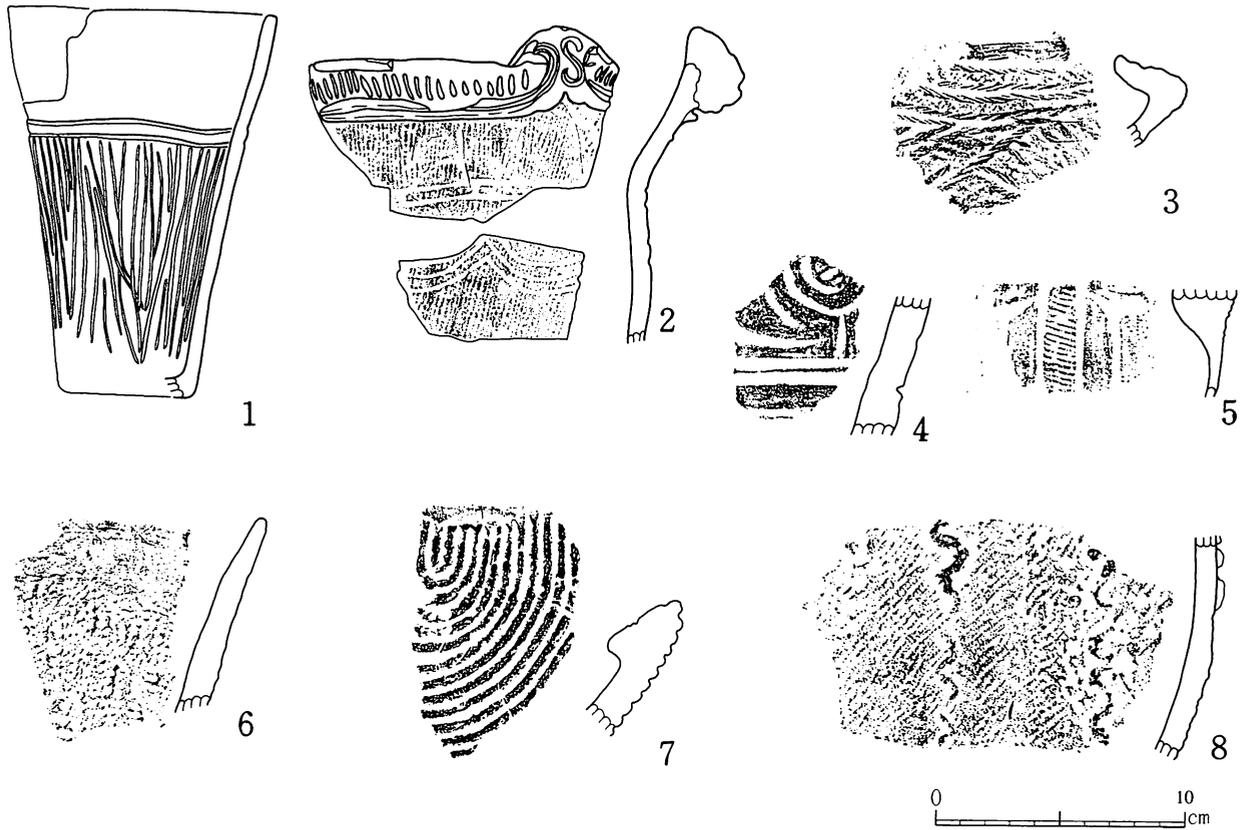
第28図 19号住居跡 (1/60) 及び埋壙 (1/20)



- 19号炉とPit10
- 1：暗褐色土（ローム粒子若干）
 - 2：暗褐色土（1より暗い・ローム粒子少量・焼土粒子若干）
 - 3：褐色土（ローム粒子少量）
 - 4：黄褐色土（ローム粒子多量）
 - 5：暗褐色土（ローム粒子若干）
 - 6：黄褐色土（ローム土・しまり弱い）
 - ①：暗褐色土（ローム粒子多量・ロームブロック混入）
 - ②：暗褐色土（①より暗い・ローム粒子多量）
 - ③：暗褐色土（②より明るい・ローム粒子少量・炭化物若干）
 - ④：暗褐色土（③よりやや暗い・ローム粒子少量・炭化物少量）
 - ⑤：暗褐色土（④よりやや暗い・ローム粒子多量）
 - ⑥：黄褐色土（ローム粒子多量・ロームブロック混入・炭化物少量）
 - ⑦：暗褐色土（やや明るい・ローム粒子少量・炭化物少量）
 - ⑧：暗褐色土（ローム粒子少量・炭化物少量）

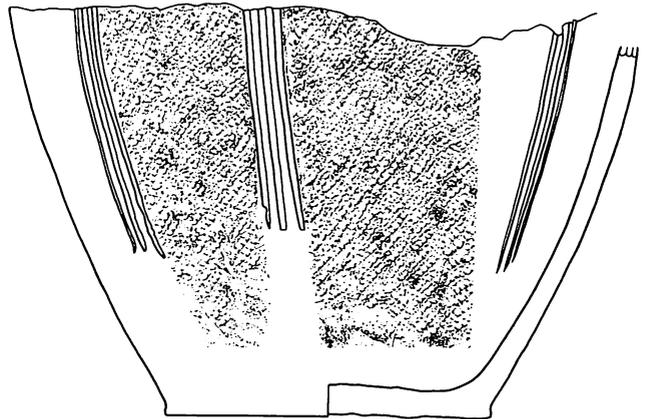


第29図 19号住居跡炉とPit10 (1/20)



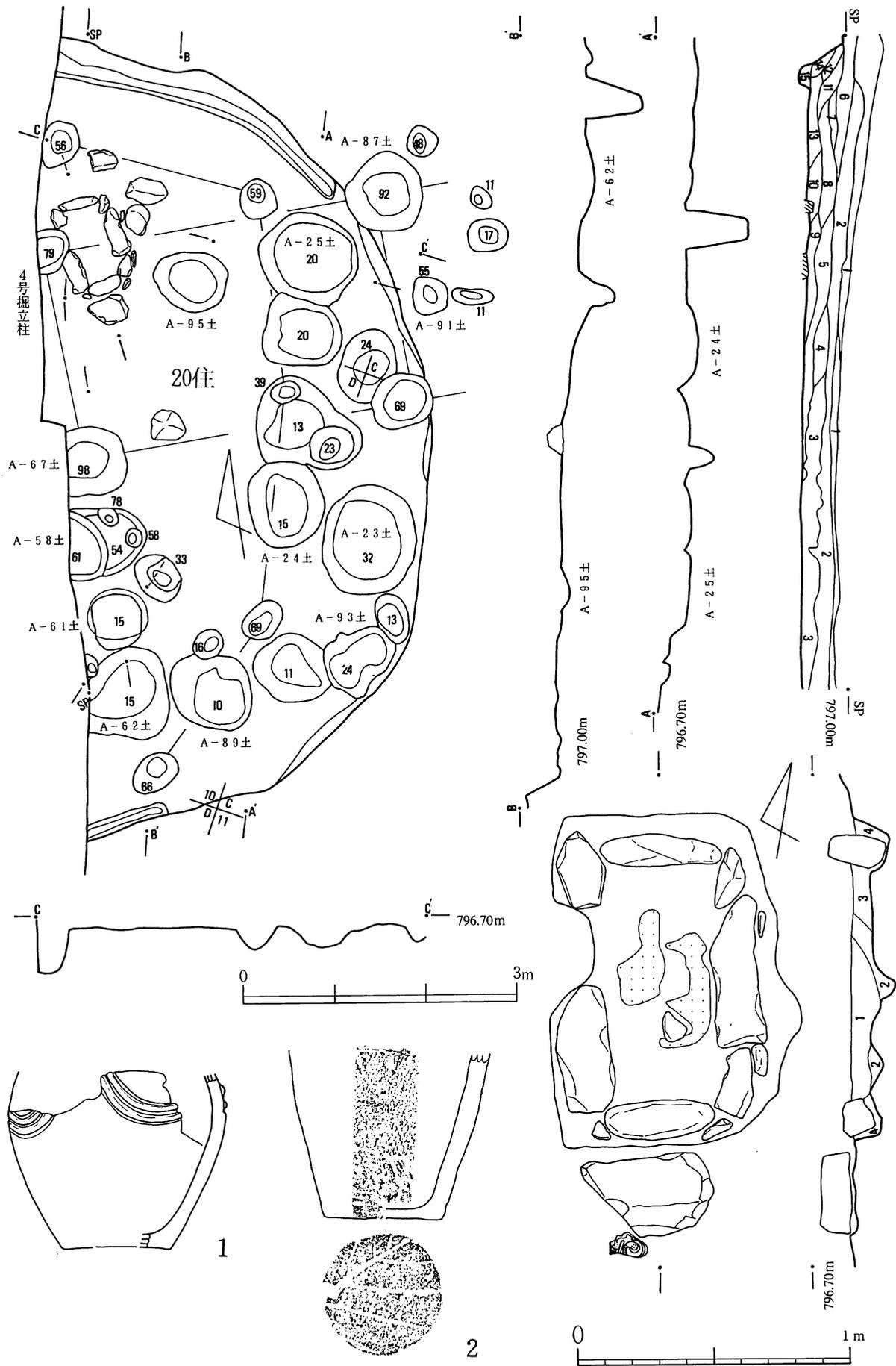
第30図 19号住居跡出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)

- 規模 現存で8.76mを計測し、炉を中心とした規模は、8.50mである。
- 周溝 奥壁側と入口部と思われる南側に認められる。
- 炉 住居の中央部より奥壁側へ長方形の石囲炉が設置される。西側の炉石の1ヶは、掘立柱建物跡によって抜き取られたものと思われる。
- 柱穴 支柱穴は5本で、南側に16~17cmのピットが2本対となっている。これは入口部を構成する柱と考えられる。
- 埋甕 存在しない。
- 時期 石囲炉の形態から曾利I式期と考えられる。
- 備考 本住居跡の炉は、住居の規模と比較するとかなり小さく感じられる。

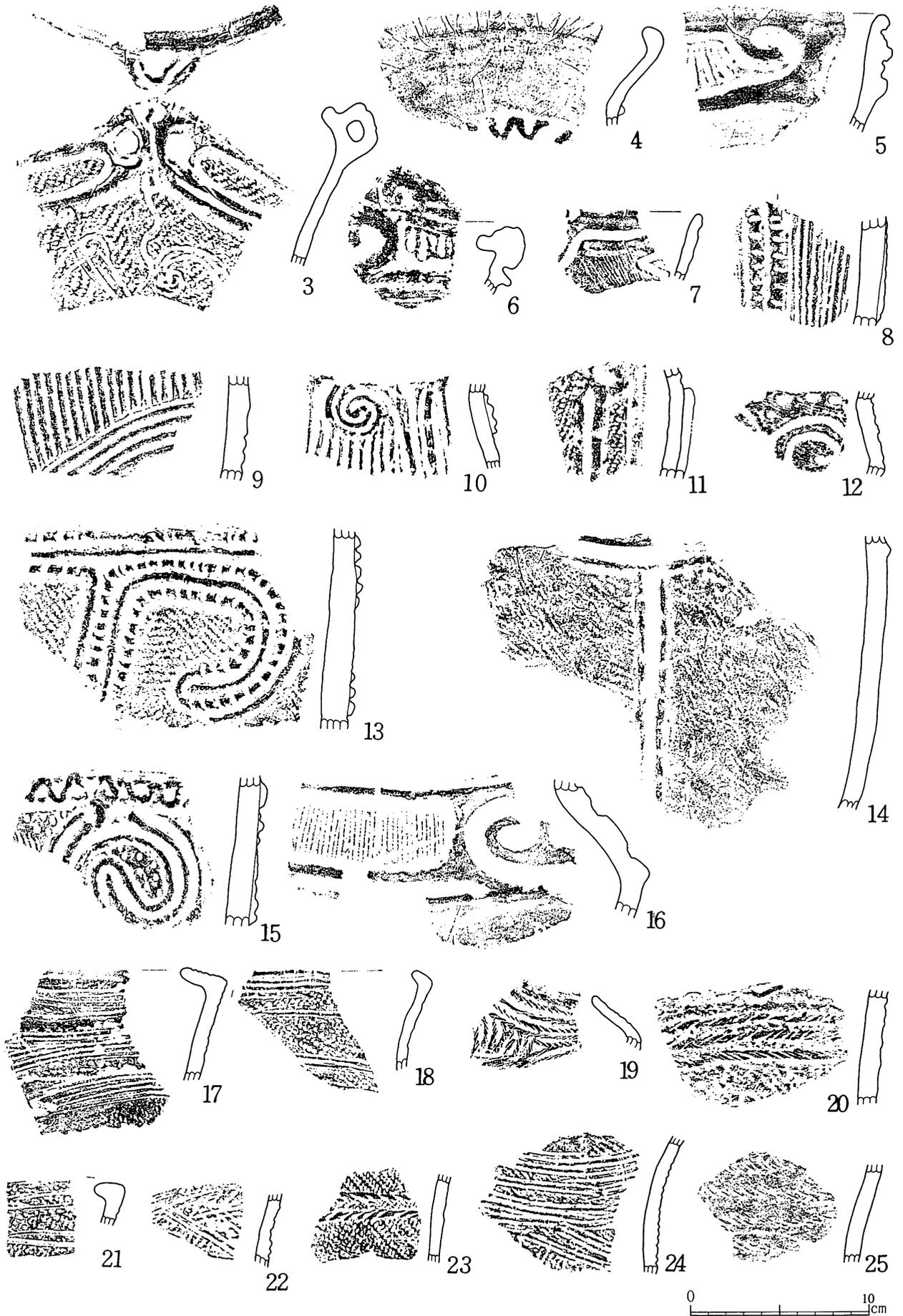


第31図 19号住居跡埋甕実測図 (1/4)

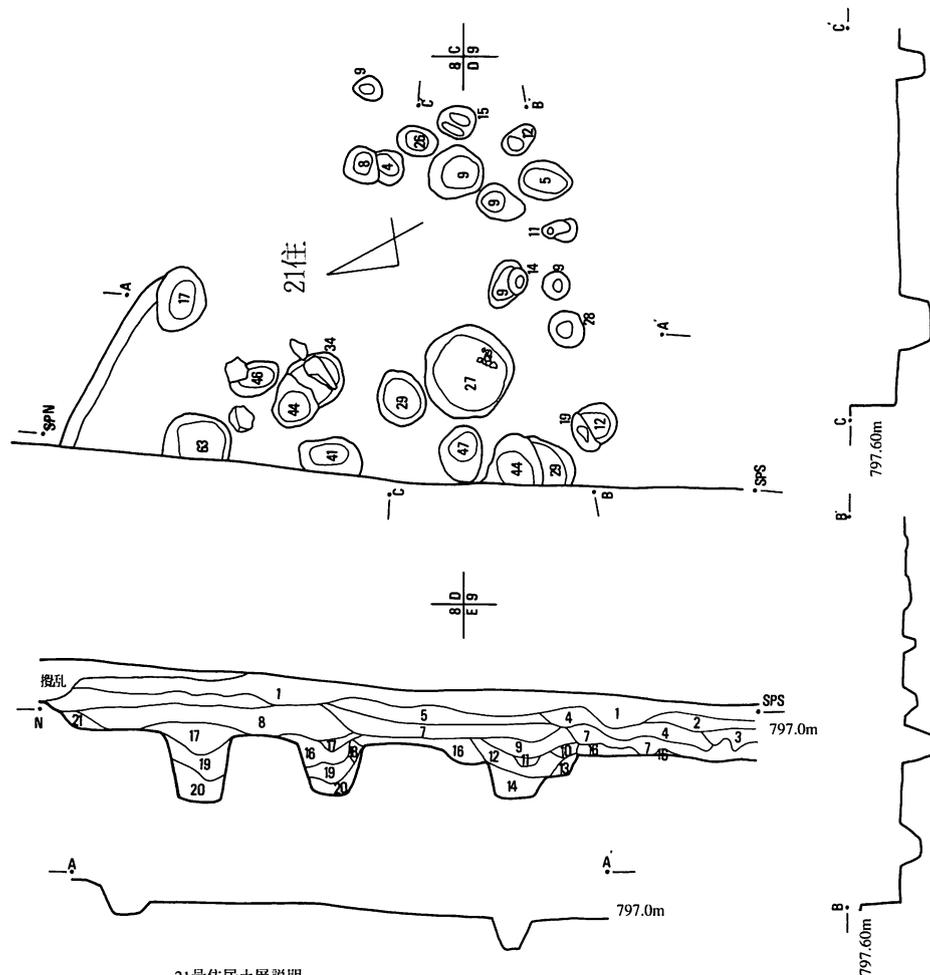
土層説明 1：表土 2：黒褐色土 (暗褐色土粒子混入) 3：暗褐色土 4：暗褐色土 (3より明るい) 5：暗褐色土 (4より明るい) 6：暗茶褐色土 7：暗褐色土 (黒褐色土粒子混入) 8：暗褐色土 (5より明るい) 9：暗褐色土 (褐色土粒子混入) 10：暗褐色土 (ロームブロック混入) 11：褐色土 12：褐色土 (11より明るい) 13:暗褐色土 (ローム小ブロック・炭化物少量混入) 14:暗褐色土 (しまりなし) 15:暗褐色土 (14に類似)



第32図 20号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第33图 20号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



- 21号住居土層説明
- 1：表土 2：黒褐色土 3：暗茶褐色土 4：褐色土 5：暗褐色土 6：暗黄褐色土
 - 7：褐色土（4より明るい） 8：暗茶褐色土（ローム小ブロック少量混入）
 - 9：暗茶褐色土（7より明るい） 10：暗褐色土 11：根による攪乱 12：褐色土
 - 13：暗黄褐色土 14：暗褐色土 15：根による攪乱 16：暗黄褐色土 17：暗褐色土
 - 18：暗黄褐色土（ブロック） 19：暗褐色土（ロームブロック混入）
 - 20：暗黄褐色土（ローム小ブロック少量混入） 21：暗褐色土（ローム小ブロック混入）

第34図 21号住居跡（1/60）

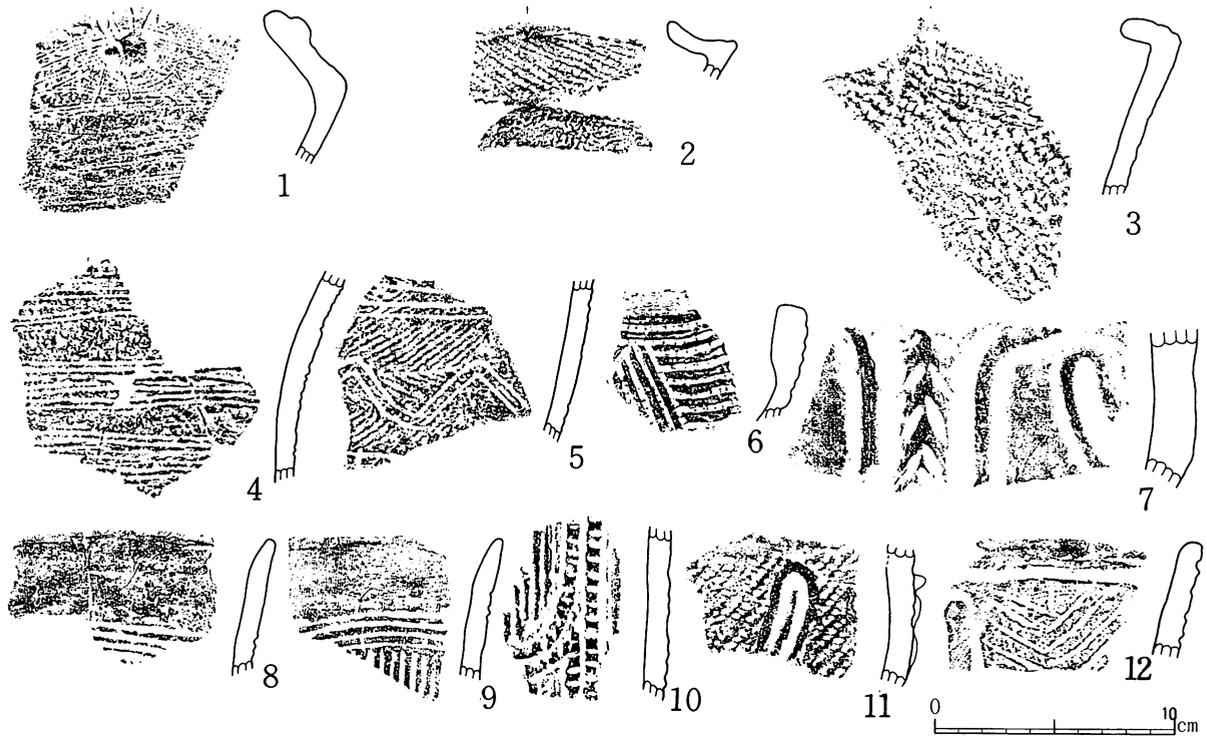
炉の土層説明 1：暗褐色土（ローム粒子少量・焼土粒子少量・炭化物若干） 2：褐色土（ローム粒子少量・焼土粒子少量） 3：暗褐色土（ローム粒子少量・炭化物若干） 4：暗褐色土（ローム粒子少量・小砂利少量）

遺物説明（第32・33図）

ほとんどの遺物は、諸磯b式期（17～25）と曾利II式期である。若干ではあるが曾利I式期（4，8，9）も存在している。10は、底部付近のもので、井戸尻式期～曾利I式期に属するものと思われる。

21号住居跡（第34図）

- 調査年度 1990年度（第2次調査）
- 位置 D-8.9グリッド
- 平面形 不明である。
- 規模 5.00m前後と思われる。
- 周溝 存在しない。
- 炉 不明である。
- 柱穴 多数存在する。



第35図 21号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

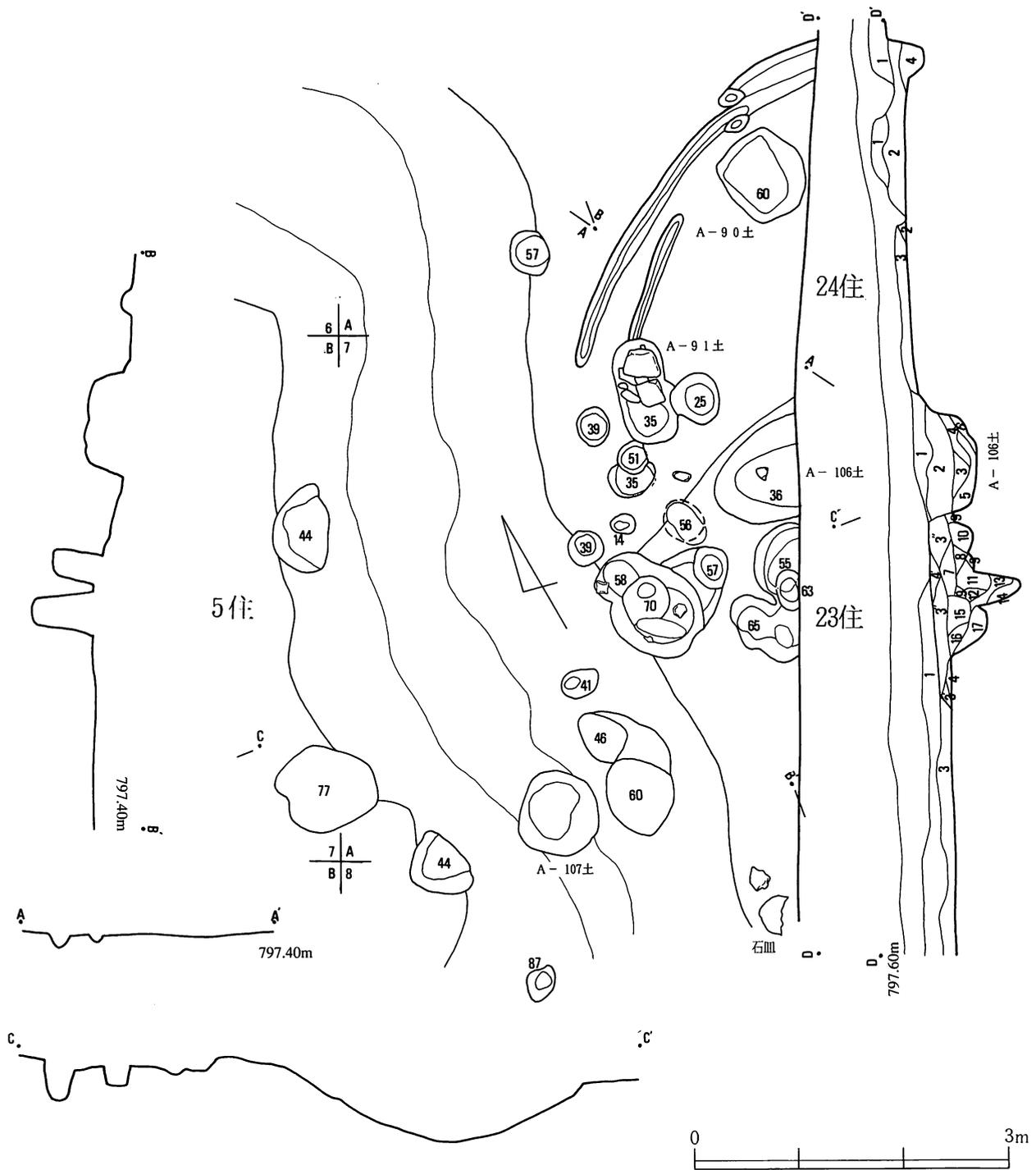
- 埋 甕 存在しない。
 時 期 不明である。
 備 考 住居跡としたが、住居の形態・柱穴の配置および出土遺物からでは、帰属する時期は不明であり、住居以外の遺構の可能性もある。

遺物説明 (第35図)

1から5までは諸磯b式期で、1.2.3の口縁部は「く」の字状に内弯させ地文を縄文で施される。また5は、羽状に縄文が施され、その後半截竹管状工具による平行沈線文が横位に施文される。6の口唇部はやや肥厚させ、内面は緩やかに凹ませる。外面には連続する角押文で横位と斜位に施される。7は井戸尻式期に属するもので、8から12までは、曾利式期である。

23号住居跡 (第36図)

- 調査年度 1990年度 (第2次調査)
 位 置 A-7グリッド
 平 面 形 旧河道に壊され、住居の約半分以上は調査区外に存在する。
 規 模 不明である。
 周 溝 存在しない。
 炉 不明である。
 柱 穴 旧河道の壁で認められている穴は、本住居に伴う柱穴と思われる。
 埋 甕 存在しない。
 時 期 不明である。
 備 考 24号住居と旧河道によって壊される。石皿が出土している。



第36図 23・24号住居跡 (1/60)

遺物説明 (第37図)

1 から 7 までは諸磯 b 式期で、縄文を地文とするものである。3 と 5 は粘土紐の貼り付けののち、縄文が施されるものである。

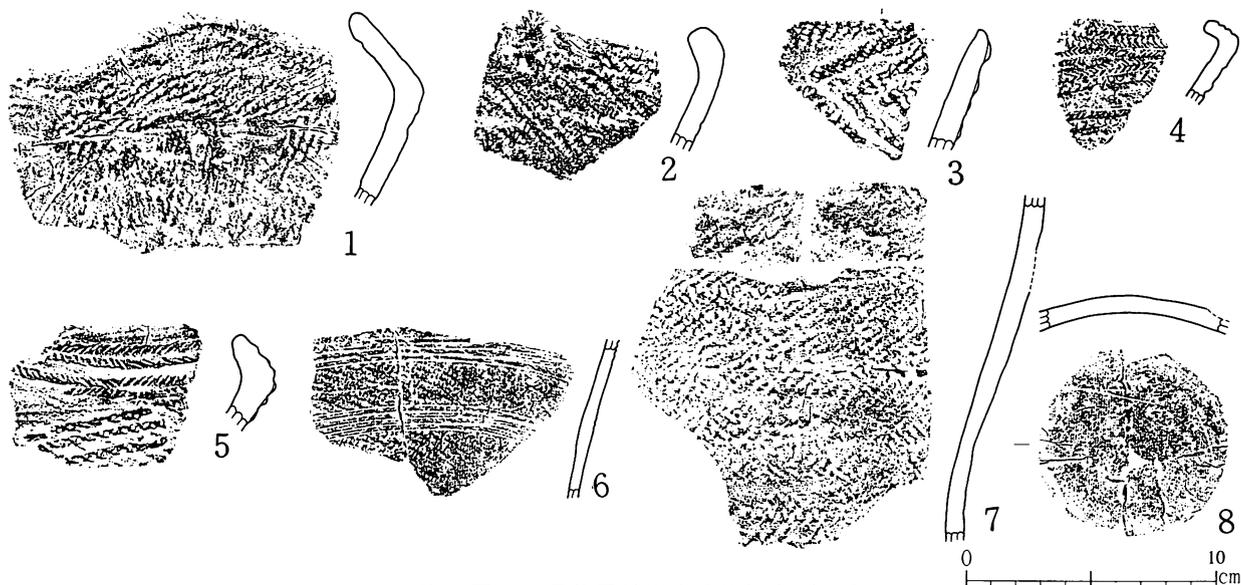
24号住居跡 (第36図)

調査年度 1990年度 (第2次調査)

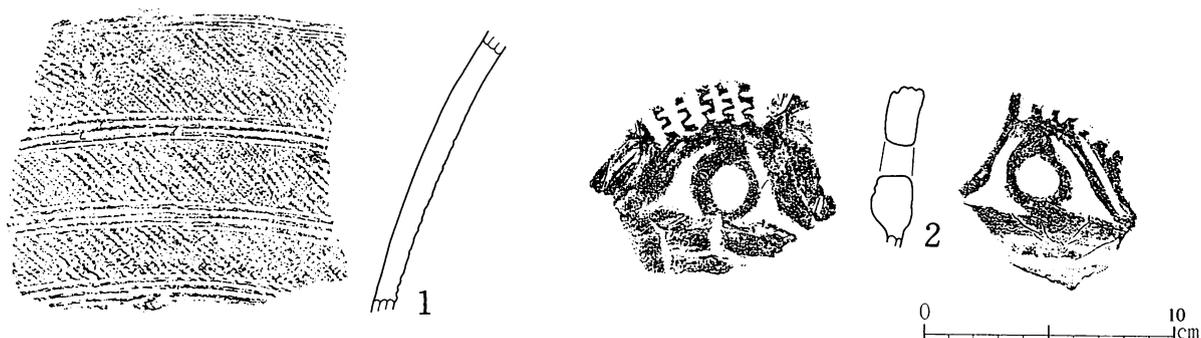
位置 A-6.7グリッド

平面形 円形を呈するものと思われる。

規模 推定で、6.30m前後と思われる。



第37図 23号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第38図 24号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

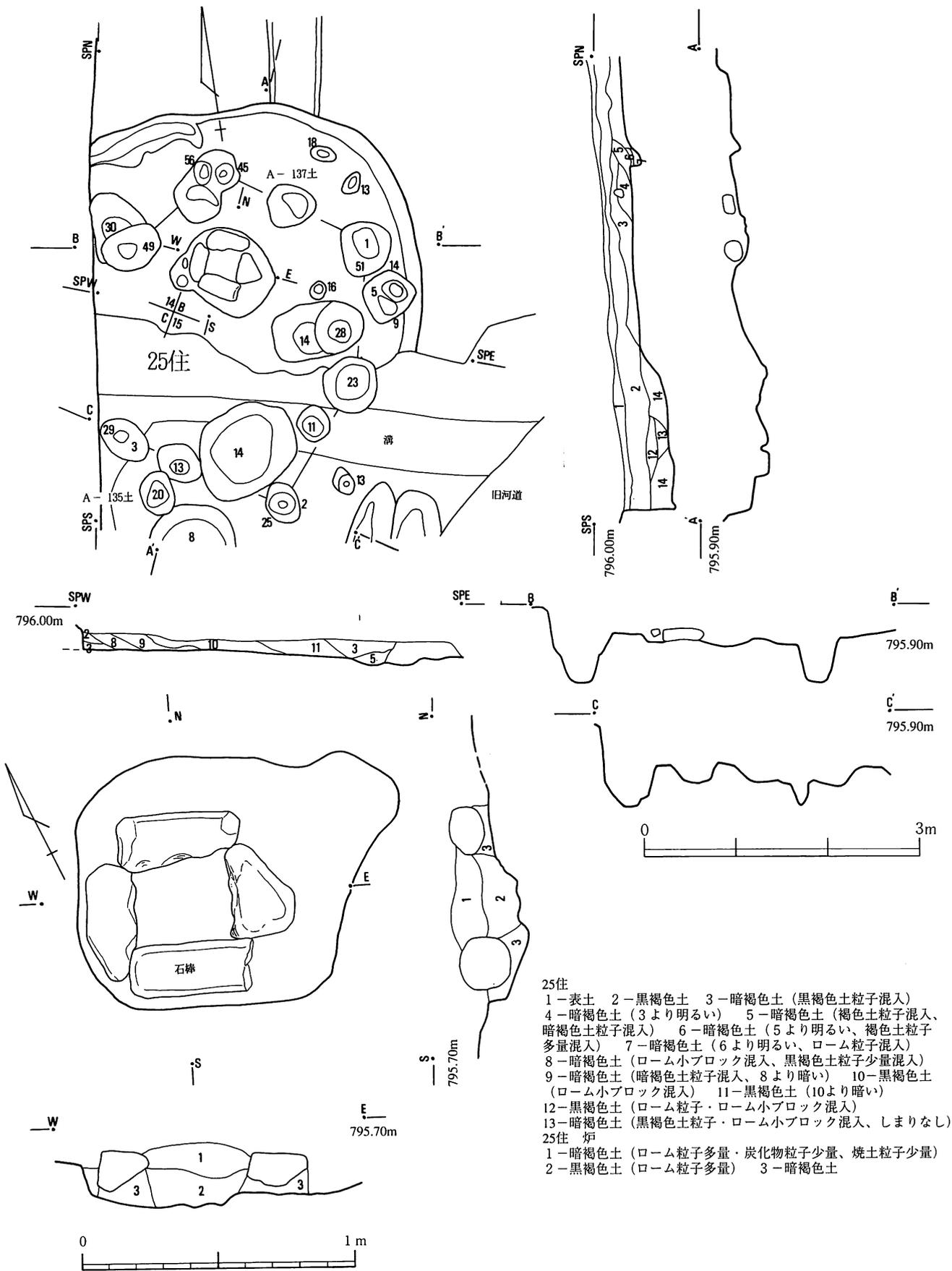
- | | |
|----|--|
| 周溝 | 住居の北側で認められるが、全周するものかどうかは不明である。 |
| 炉 | 調査区外に存在するものと思われる。 |
| 柱穴 | 住居の西側で多数認められる。 |
| 埋甕 | 調査区内では存在しない。 |
| 時期 | 中期中葉と考えられる。 |
| 備考 | 23号住居跡の上に存在する。また周溝が2本存在することから、2軒の重複が考えられる。 |

遺物説明 (第38図)

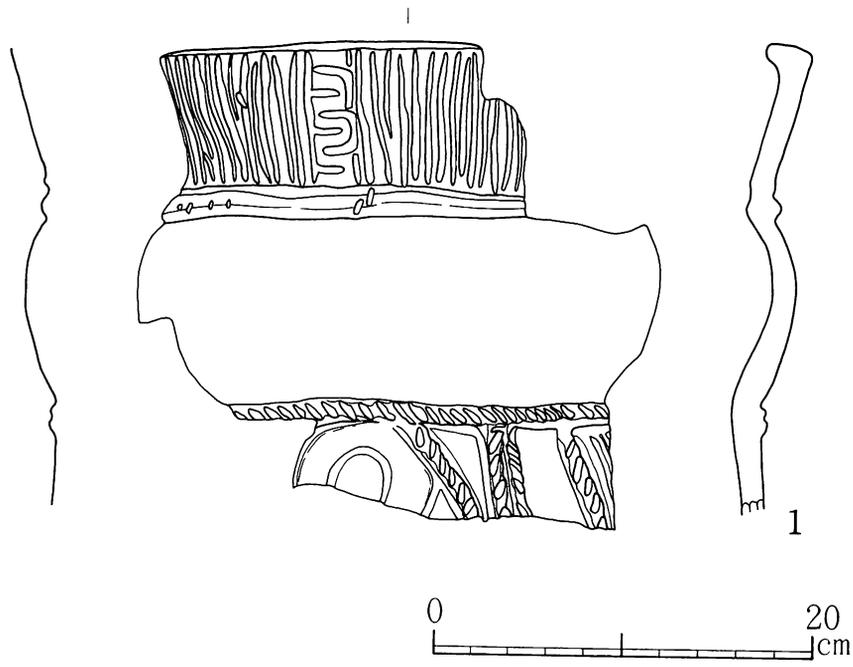
1は縄文を地文とし、横位の平行沈線文で区画される。2は口縁部の把手の部分で、円形の貫通孔が認められ三叉文で区画される。口唇部には、交互の刻みが施される。1は諸磯b式期で、2は藤内から井戸尻式期に属するものである。

25号住居跡 (第39図)

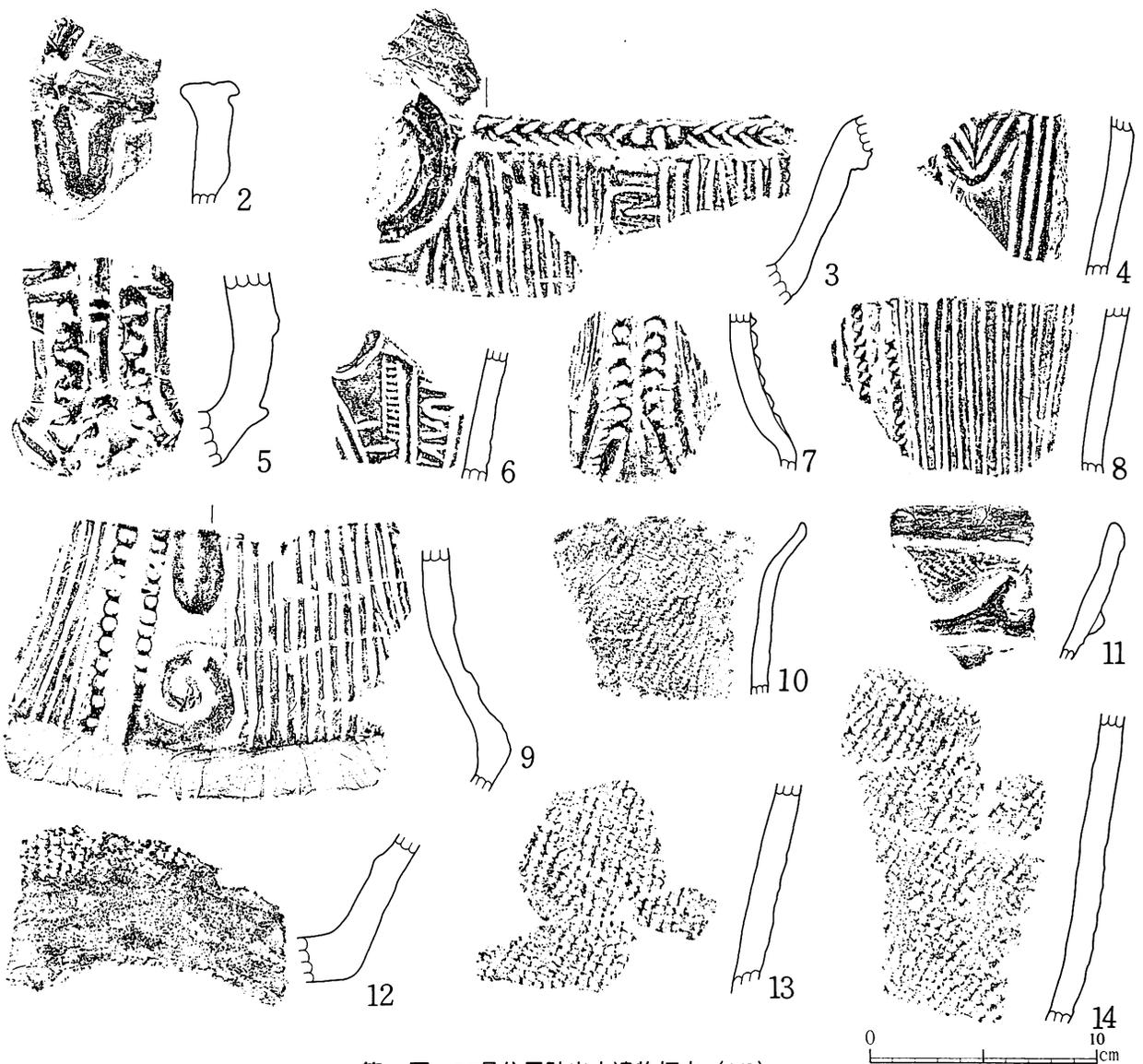
- | | |
|------|---------------------------------------|
| 調査年度 | 1991年度 (第3次調査) |
| 位置 | B・C-14.15グリッド |
| 平面形 | 円形を呈するものと思われる。 |
| 規模 | 推定で、4.50m前後と思われる。 |
| 周溝 | 一部北壁側で認められる。 |
| 炉 | 石囲炉で、石棒が炉石として使用される。炉石は4ヶで構成され、方形を呈する。 |



第39図 25号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/20)



第40图 25号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第41图 25号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

柱 穴	6本ないし7本と思われる。
埋 甕	存在しない。
時 期	井戸尻式期。
備 考	旧河道によって壊される。炉石の状態から、入口部は東側に設置されたものと思われる。

遺物説明 (第40・41図)

1は口縁部から胴上半部までの破片である。現存する器高は25cmで、推定の口径は40cmを計測する。口唇部は「く」の字状に折れ曲げられ内弯する。口縁部は沈線文で充填され、交互刻みによる半隆帯で区画される。頸部は膨らみをもたせ無文帯を形成する。胴上半部には横位に隆帯が貼りつけられるとともに垂下させられる。隆帯には、刻みが施される。また円形の半隆起帯の延長線には、口縁部の文様を区画する半隆帯が存在する。3, 7, 8, 9は、縦位の沈線文で充填されるもので、3, 9は、半隆起帯によって文様を区画する。また、7, 8, 9は、垂下する隆帯に刻みが施される。9は底部付近のもので、屈折底を呈する。10, 12, 13, 14は、縄文を地文とするものである。11を除いた全てのものは、井戸尻式期に属する。

26号住居跡 (第42図)

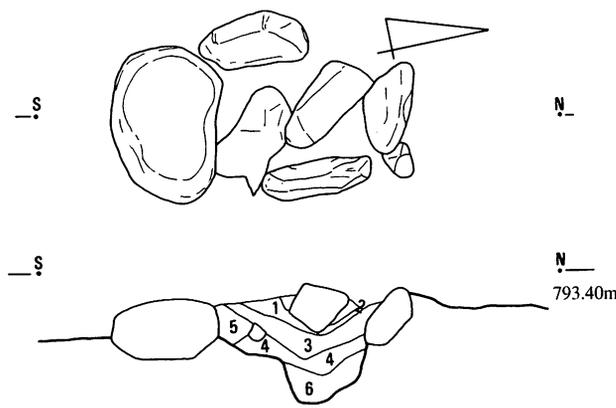
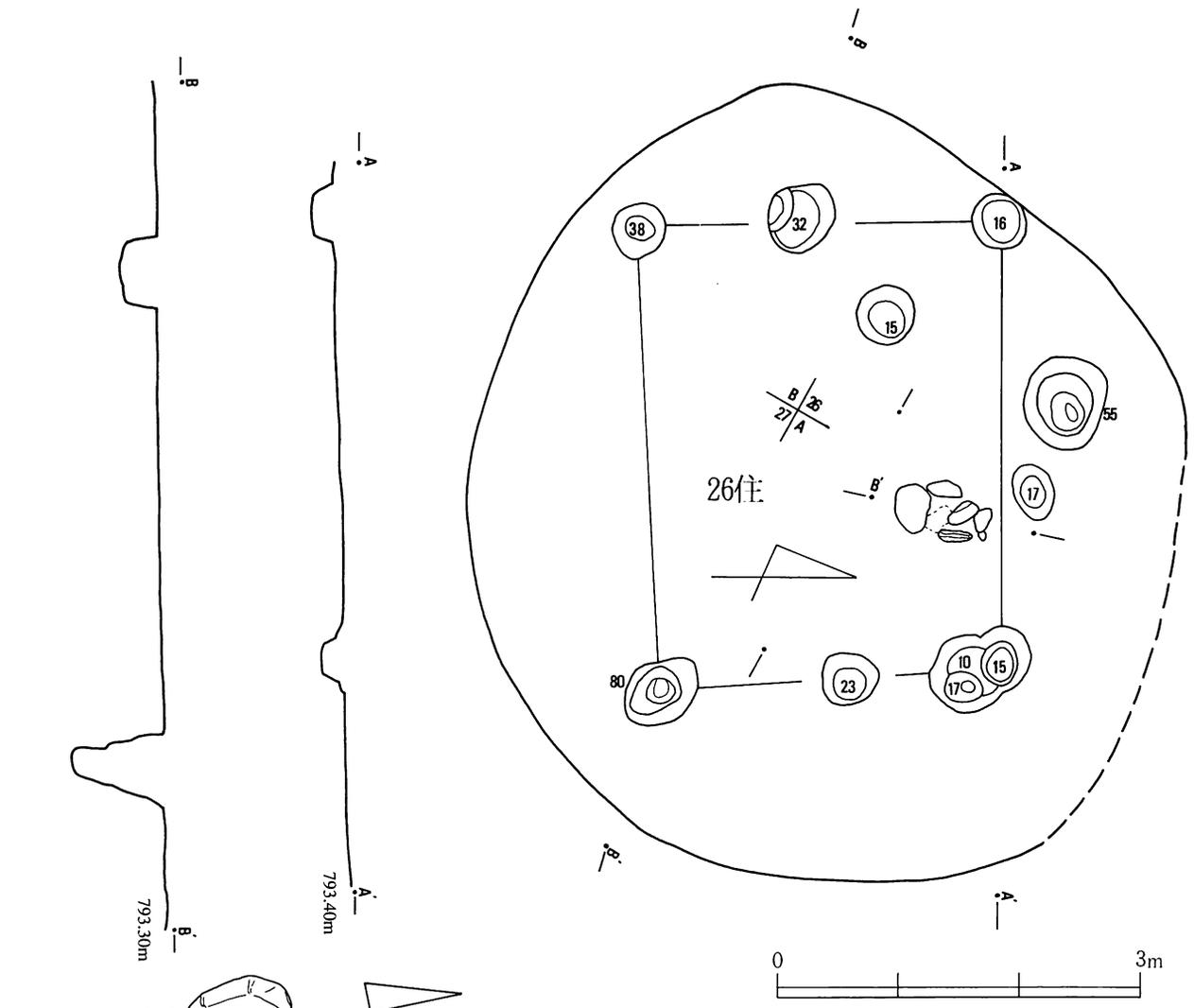
調査年度	1991年度(第3次調査)
位 置	A・B-26.27グリッド
平 面 形	円形を呈するものと思われるが、疑問を要する。
規 模	推定で、6.60m前後と思われる。
周 溝	存在しない。
炉	石囲炉である。
柱 穴	主柱穴は、6本と思われる。
埋 甕	存在しない。
時 期	出土遺物からでは、時期を決定することはできないが、炉の形態より中期中葉と考えられる。
備 考	炉の位置は北壁側に設置され、入口部は南側に存在するものと思われ、柱穴は南北に延びる6本柱と考えられる。柱穴の位置から、本住居跡は長方形を呈する可能性も考えられる。 床面まで非常に浅いため、出土遺物も少ない。

遺物説明 (第42図)

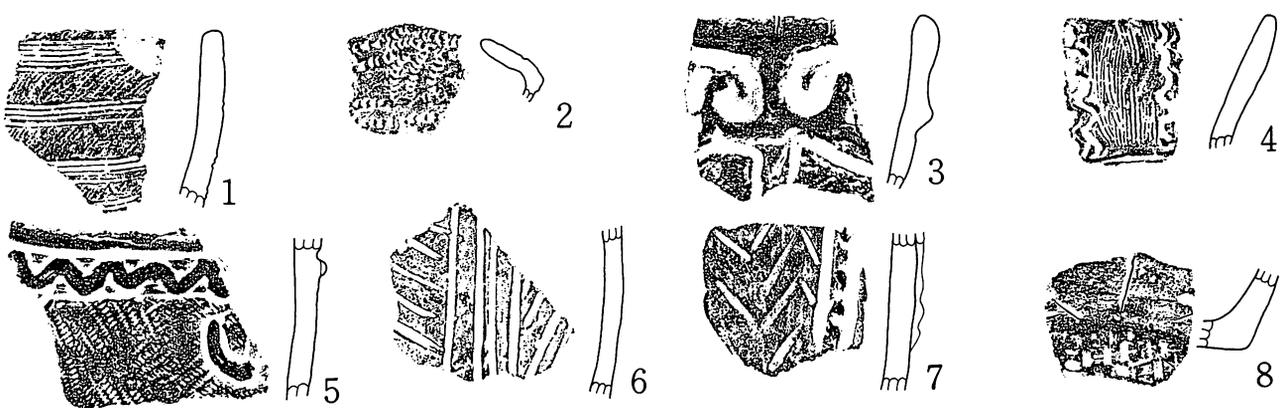
1, 2は諸磯b式期で、3から6は曾利Ⅱ～Ⅲ式期に属するものと思われる。4は口縁部の破片で、櫛歯状の工具による沈線文が施され、その後棒状工具による蛇行沈線文が施文される。6は幅広の沈線文で胴部に施されるもので、縦位に施された後に斜方向に施文される。7は垂下する隆帯の脇に幅広の沈線文が施され、その後「ハ」の字状文が施文される。8は底部の破片で、底には網代状の圧痕が残される。

27号住居跡 (第43・44図)

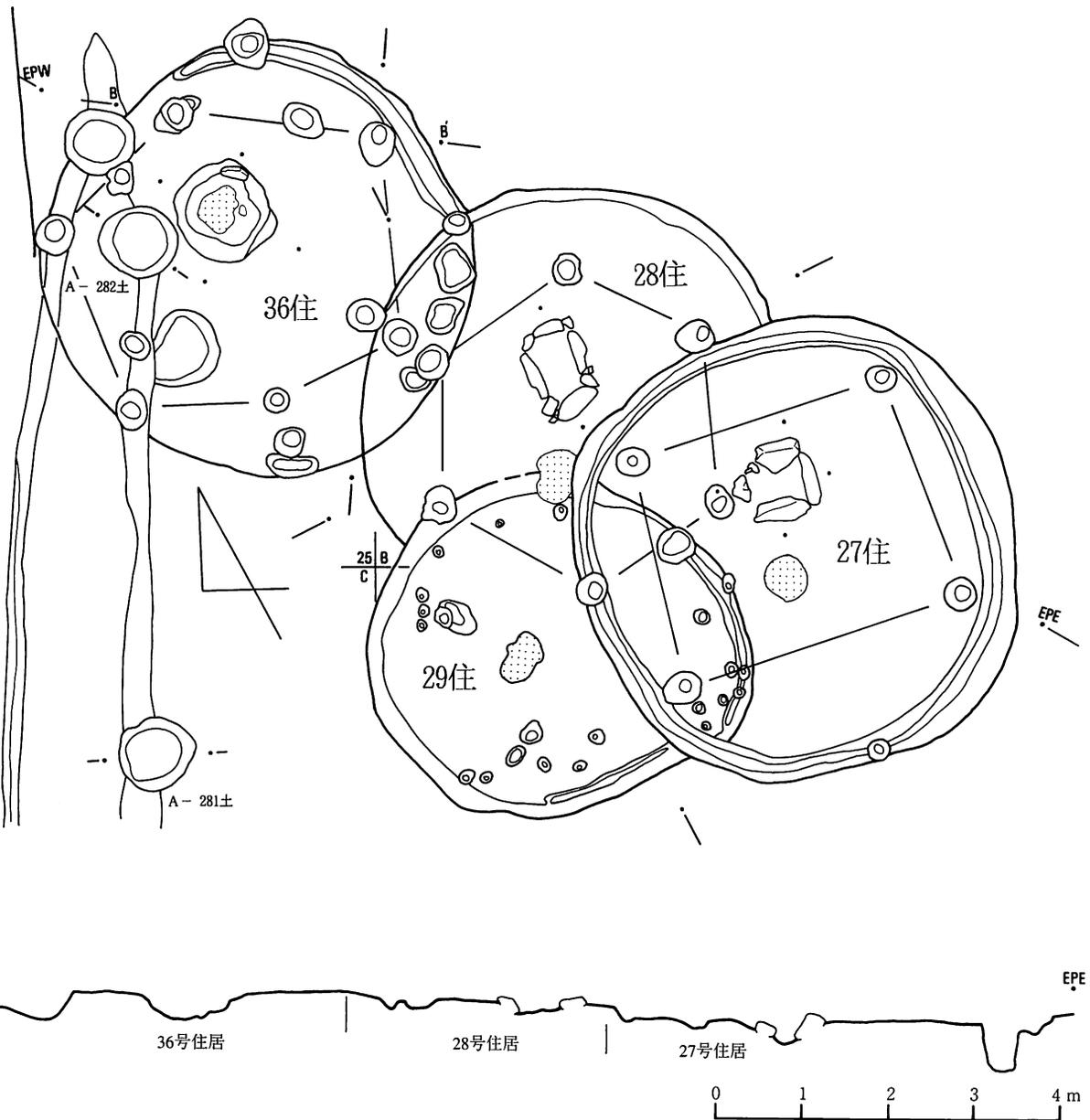
調査年度	1991年度(第3次調査)
位 置	A・B-25.26グリッド
平 面 形	円形を呈する。
規 模	4.90m～5.51mを計測する。
周 溝	全周する。
炉	石囲炉で方形を呈し、西側の炉石は他の炉石と比較して小さいが、設置された炉石の状況から本来の姿のままであると考えられる。



- 26住 炉
- 1-暗褐色土 (ローム粒子少量含む)
 - 2-暗褐色土 (ローム粒子少量、1と類似)
 - 3-褐色土 (ローム粒子多量)
 - 4-黒褐色土 (ローム粒子少量、焼土粒子多量)
 - 5-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土粒子少量)
 - 6-明黄褐色土 (焼土粒子少量)



第42図 26号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び出土遺物拓本 (1/3)

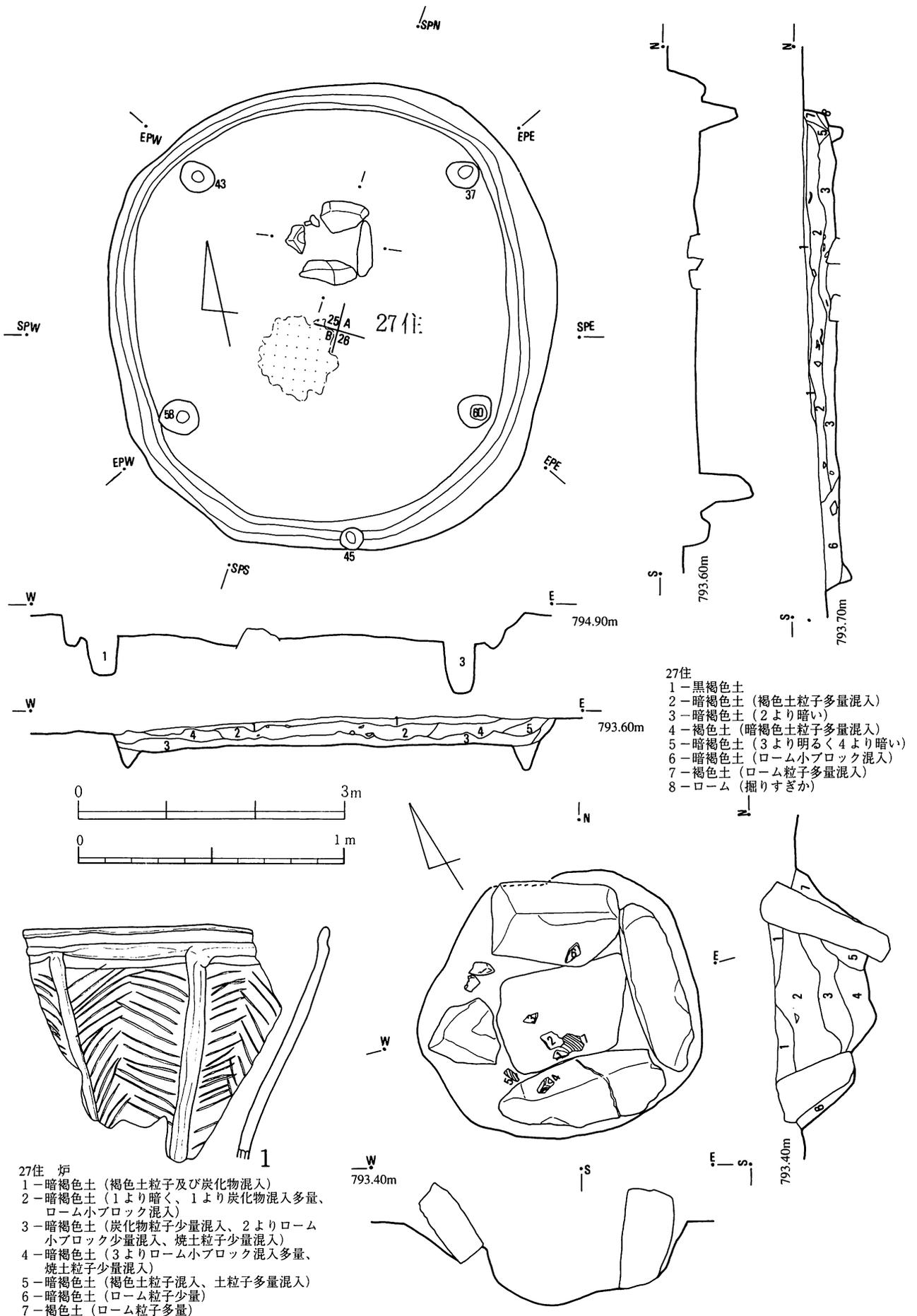


第43図 27・28・29・36号住居跡位置図 (1/80) 及び断面図 (1/80)

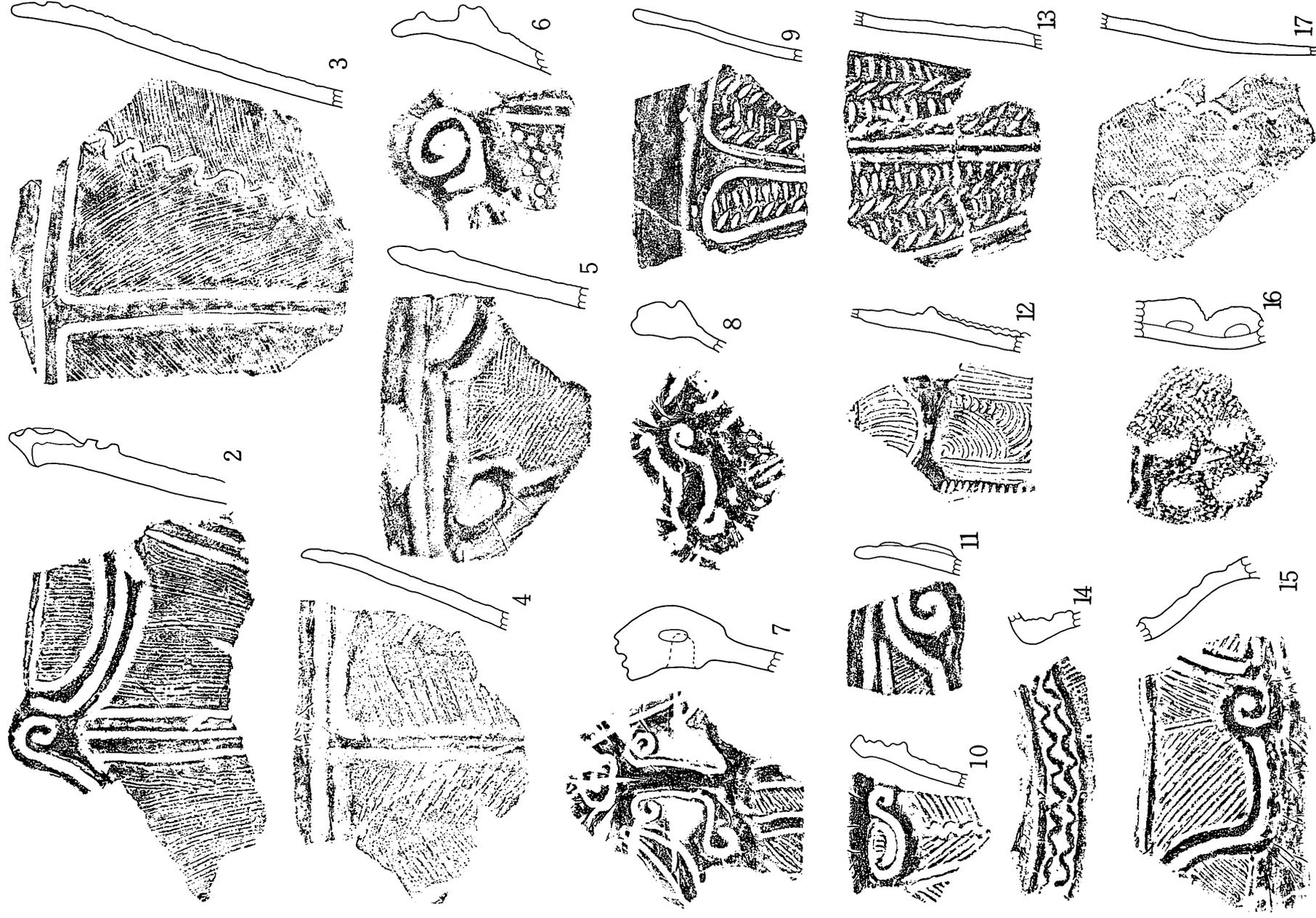
- | | | |
|---|---|---|
| 柱 | 穴 | 4本であるが、入口部と考えられる南の周溝内部に小穴が存在し、床面より45cmの深さを計測する。 |
| 埋 | 甕 | 存在しない。 |
| 時 | 期 | 曾利Ⅲ式期。 |
| 備 | 考 | 本住居跡の炉の南西側に、地床炉が存在する。またこの地床炉は、炉と入口部を結ぶ線上から西にずれて認められる。1軒の住居に石囲炉と地床炉の2基の炉が存在する住居は、A区では2号住居跡と28号・35号住居跡で発見されている。 |

遺物説明 (第44・45図)

1は口縁部から胴下半部まで現存する。現存する器高は17.5cm、口径22.7cmをそれぞれ計測する。口唇部には横位に浅く幅の広い沈線が巡らされる。垂下する隆線は、「コ」の字状に綾杉状文を区画する。2は口縁部の破片で、半円状の隆帯が横位に施され、端部は渦巻き状に丸められ、小突起が形成される。3は口縁部から胴下半部まで現存し、細く浅い綾杉状文が施され、蛇行沈線文によって左右に区画される。6は口縁部に渦巻文



第44図 27号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第45图 27号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

が施され、直下には平行沈線文が縦位に施される。地文は、棒状工具による刺突文である。7は把手の脇に「S」字状の沈線文が両脇に施される。把手の頂部には、渦巻文が巡らされ、胴上半部には平行沈線文が垂下させられる。9と13は同一個体であるが、接合されない。口縁部は無文帯を形成し、胴上半部には逆「U」字状の沈線文で区画され、区画内には「ハ」の字状文が施される。16は「8」の字状に把手が付され、器面全体にRLの縄文が地文として施される。以上の土器は曾利Ⅲ式期及び曾利ⅢからⅣ式期に属するものと思われる。

28号住居跡 (第46.47図)

調査年度 1991年度(第3次調査)

位置 B-25グリッド

平面形 円形を呈する。

規模 4.93m～5.31mを計測する。

周溝 存在しない。

炉 石囲炉で、長方形を呈する。また炉は、住居のほぼ中央に設置される。

柱穴 6本である。

埋甕 存在しない。

時期 曾利Ⅰ式期。

備考 炉の形状から、入口部は南に存在するものと思われる。また炉と入口部の線上から西に地床炉が存在する。炉の北東に156号土坑が存在し、貼り床が認められなかったことから、住居より新しいか、または住居に伴う土坑とも考えられる。

遺物説明 (第48図)

1は口縁部に付けられた瘤状の隆帯に、渦巻き状の沈線文が施され、胴上半部には縦位の沈線文と垂下する隆帯に刻みが施されるものである。2は把手の部分である。3は、条線を地文として渦巻文・蛇行文が貼り付けられる。

29号住居跡 (第49図)

調査年度 1991年度(第3次調査)

位置 B-25.26グリッド

平面形 ほぼ円形を呈する。

規模 4.50m×4.10mを計測する。

周溝 住居の東から南にかけて存在する。

炉 地床炉である。

柱穴 多数存在する。

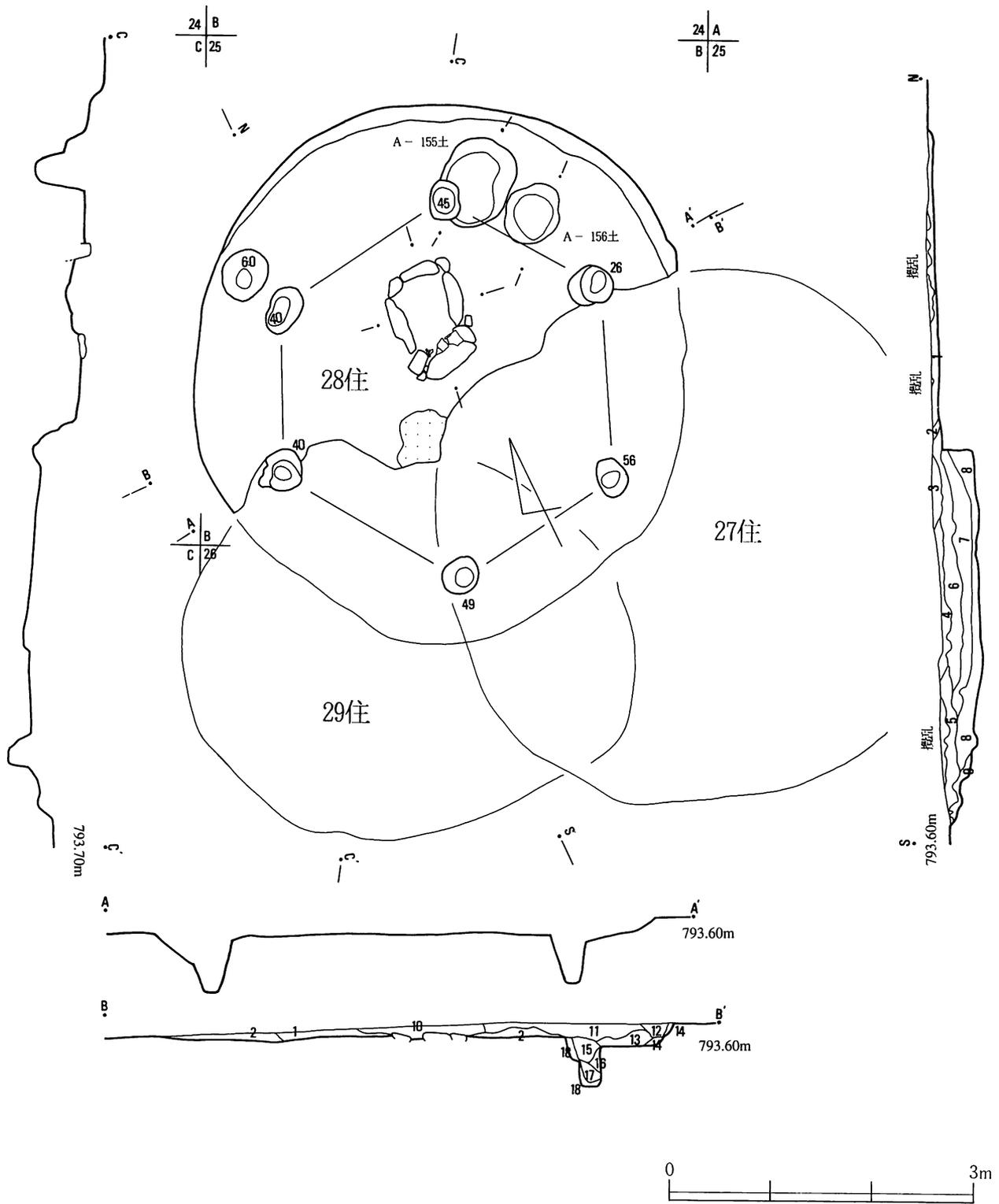
埋甕 存在しない。

時期 諸磯b式期。

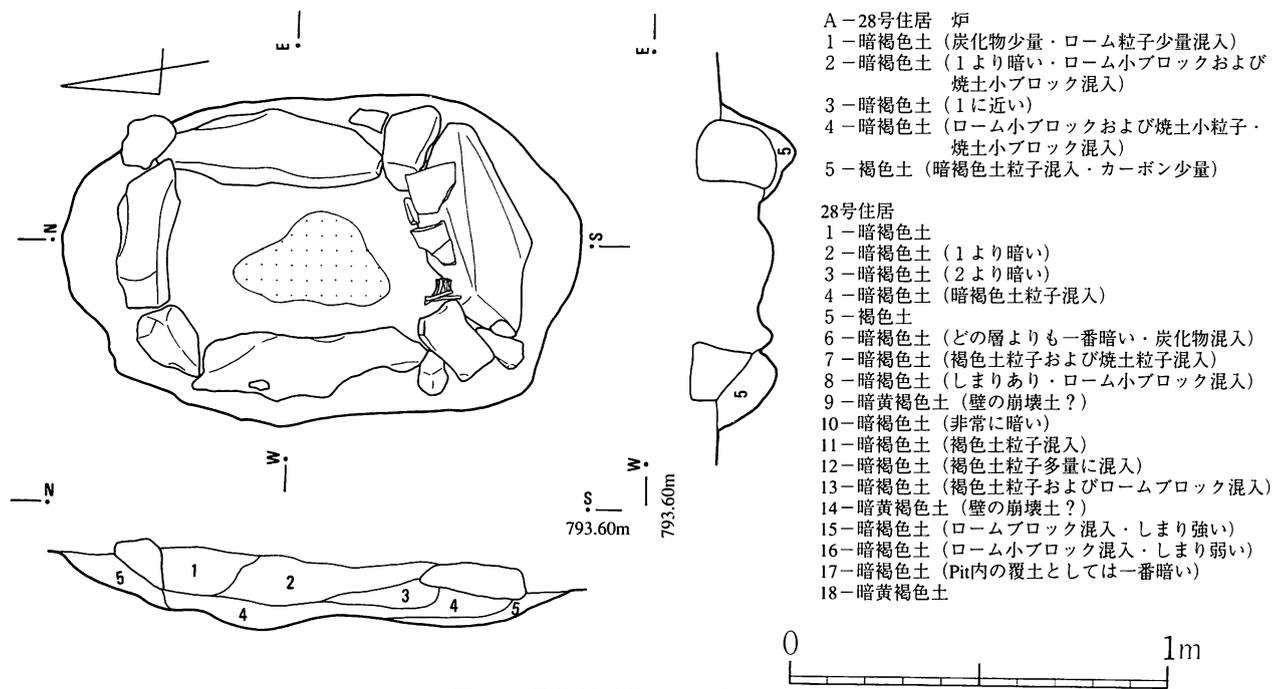
備考 27. 28号住居と重複する。

遺物説明 (第49・50・51図)

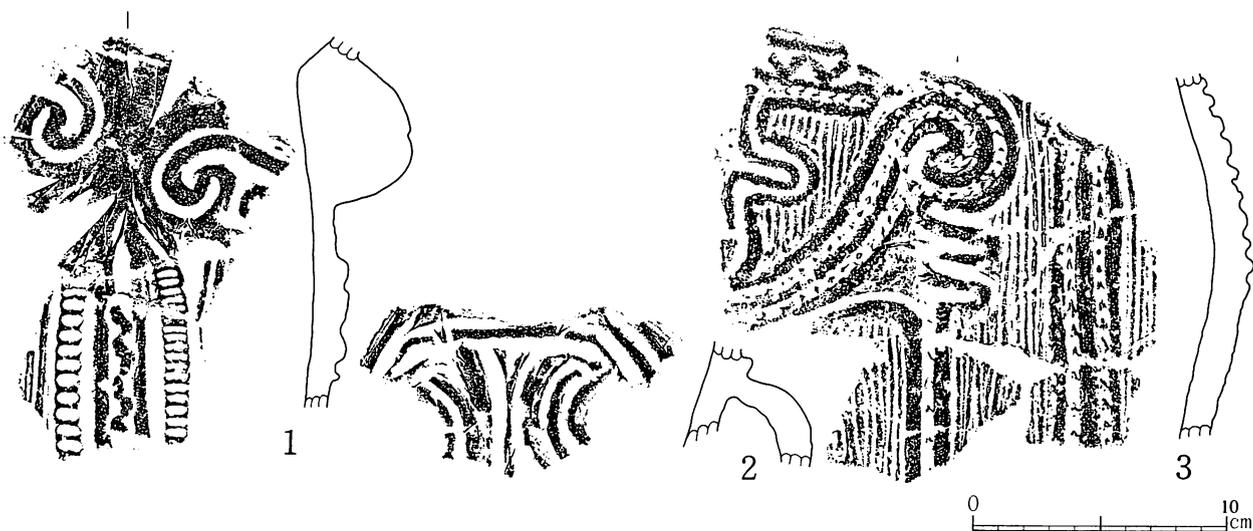
1は胴上半部から底部付近まで現存し、縄文を地文として器面に施される。また、本遺物は横位の平行沈線文を主体とするもので、胴部中位には渦巻き状に沈線文が施される。2は27号住居跡の出土遺物と思われる。胴部中位には綾杉状の沈線文が施され、垂下する沈線文によって区画される。3は胴下半部から底部までのもので、縄文を地文とする。遺物のほとんどのものは、縄文を地文とするものである。4は波状口縁を呈するも



第46图 28号住居跡 (1/60)



第47図 28号住居跡炉 (1/20)

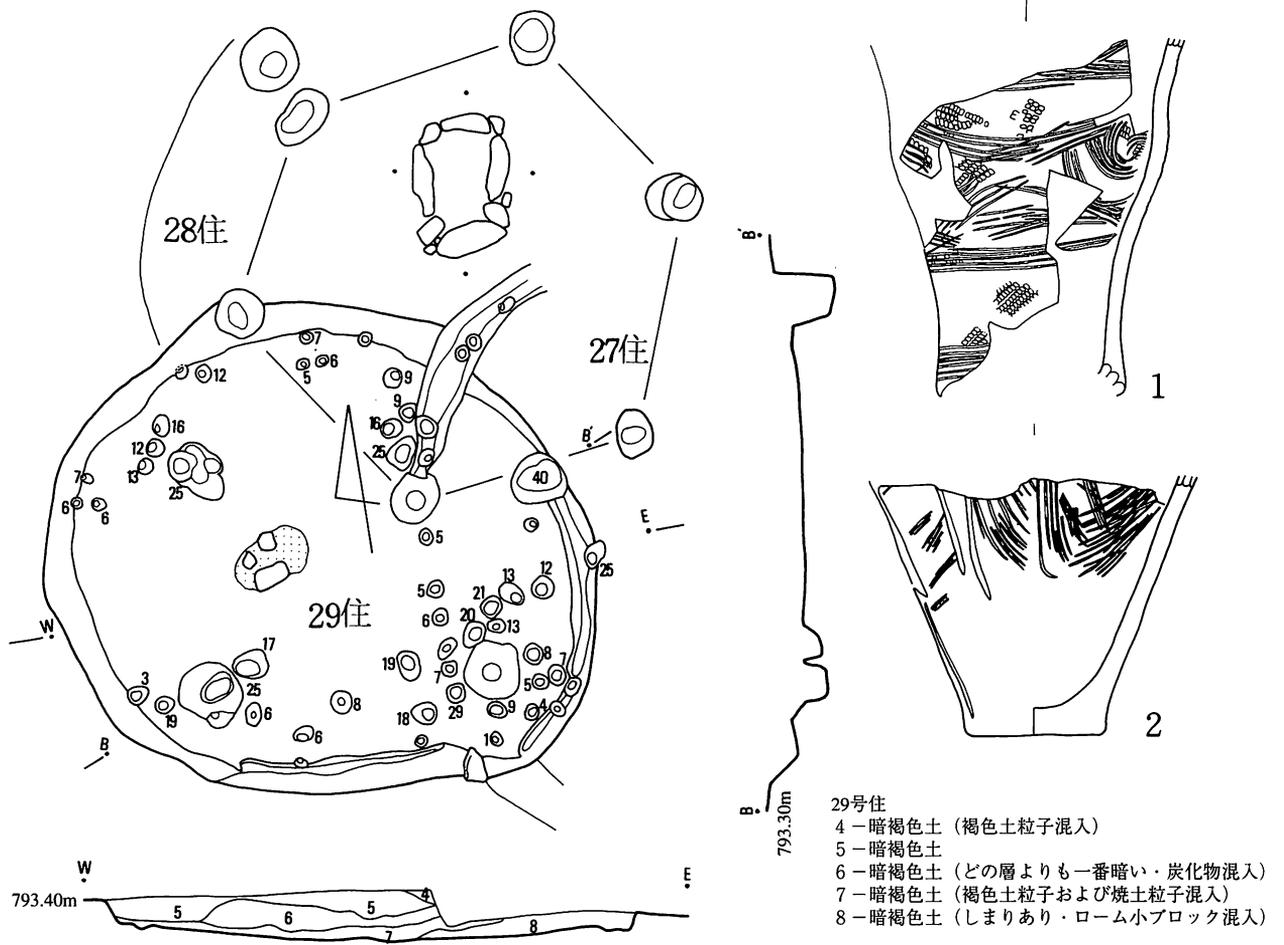


第48図 28号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

ので、波頂部には縦位に平行沈線文が5条引かれる。また、口唇部は「く」字状に屈折させられ、以下平行沈線文で地文の縄文を区画させる。5は胴部中位に木の葉状に沈線文が施される。6は口縁部が波状を呈するもので、緩やかに内弯させられる。波頂部には木の葉状に沈線文が施され、10、11も同一の手法で施される。7は口縁部に渦巻き状の沈線文が施文される。9は地文を縄文とするもので、現存する破片には沈線文は施されていない。12から24までは、横位に平行沈線文が施され、区画帯が形成される。

30号住居跡 (第52図)

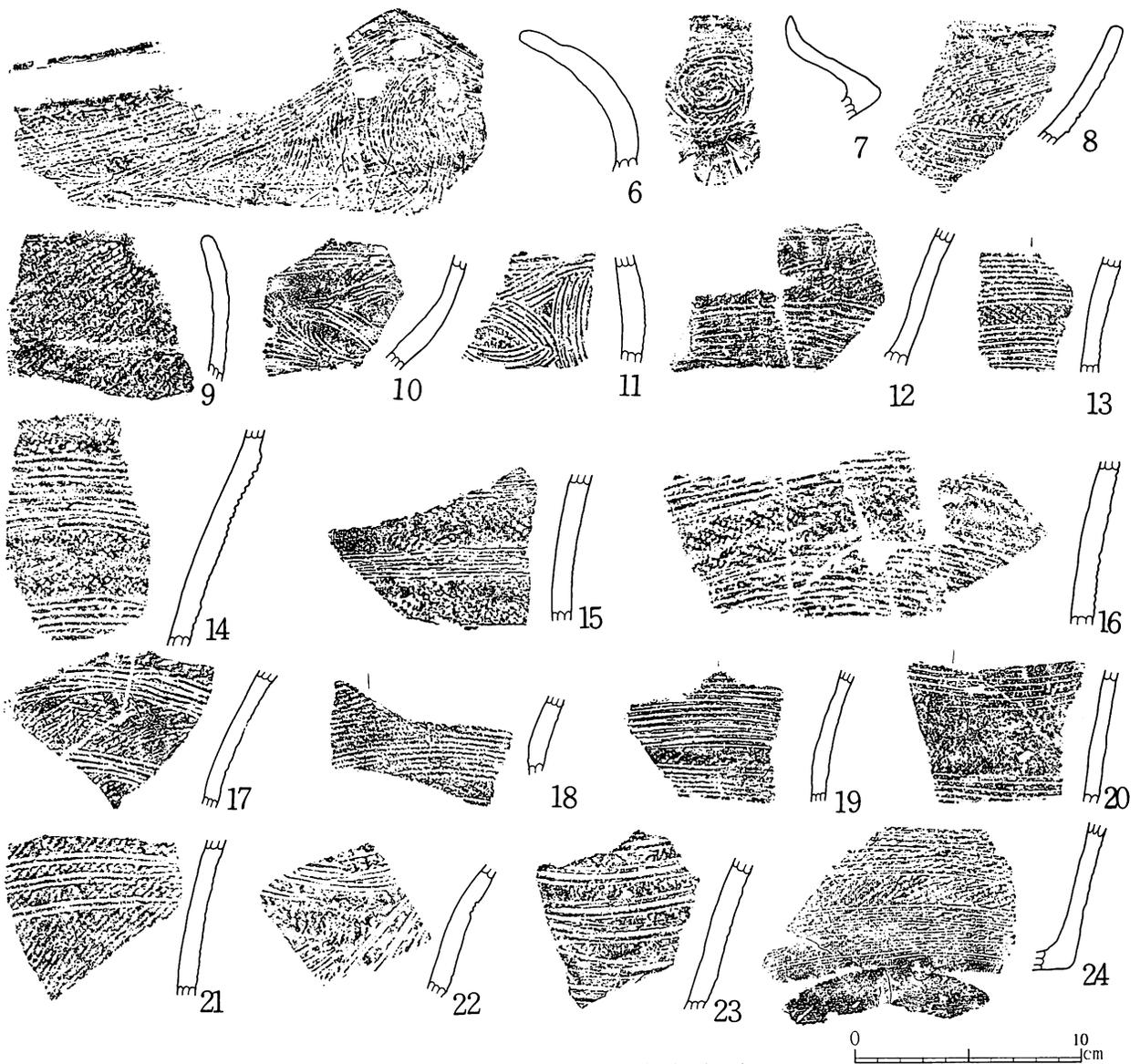
- 調査年度 1991年度 (第3次調査)
- 位置 A-22グリッド
- 平面形 円形を呈するものと思われる。
- 規模 炉を中心とした長軸は、4.20mを計測する。
- 周溝 ほぼ全周するものと思われる。
- 炉 石囲炉であるが、壊される。



第49図 29号住居跡 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第50図 29号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第51図 29号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

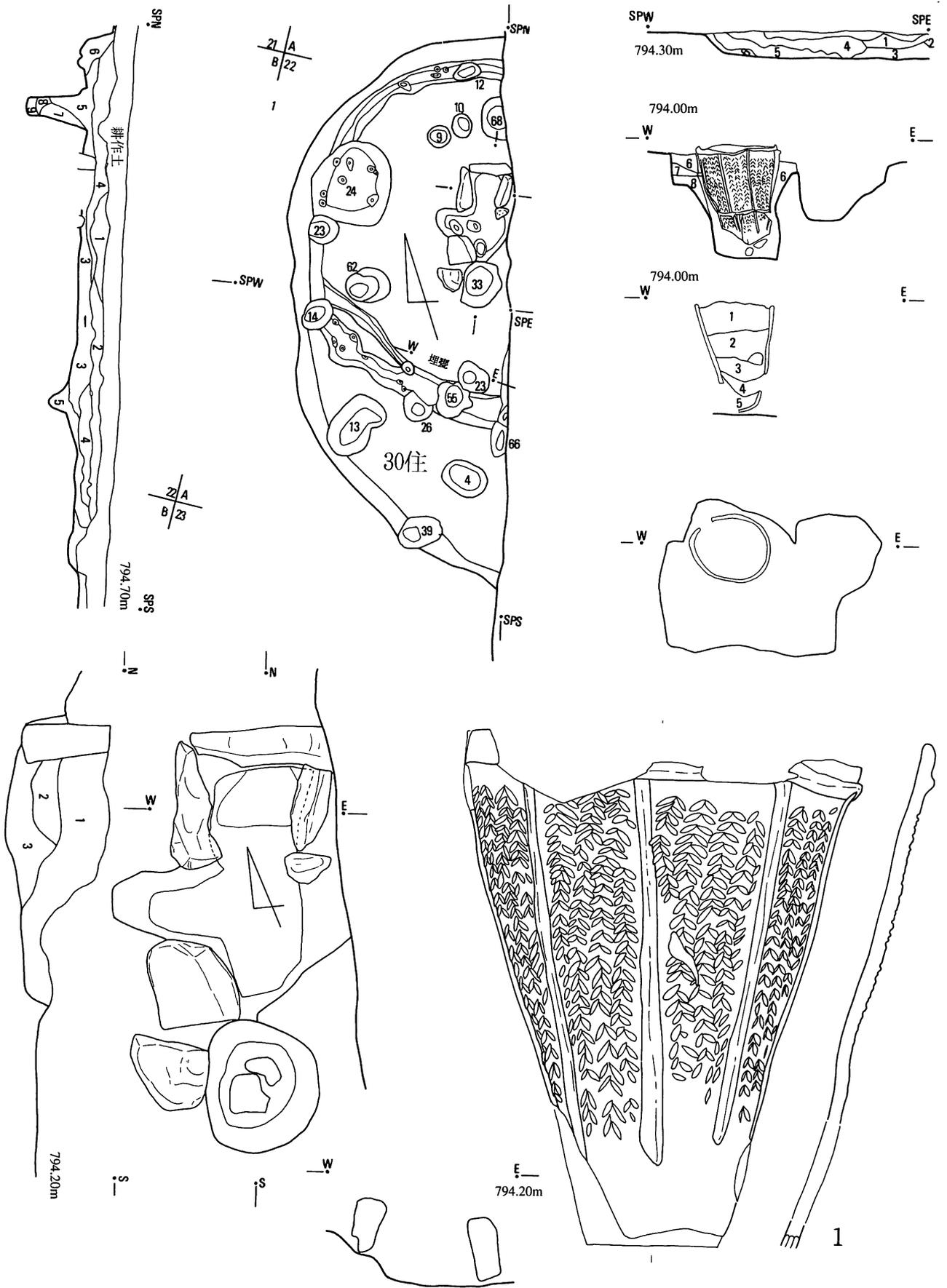
- | | | |
|---|---|-------------------|
| 柱 | 穴 | 主柱穴は、3本が確認される。 |
| 埋 | 甕 | 炉の長軸方向に存在する。 |
| 時 | 期 | 埋甕の存在より曾利V式期に属する。 |
| 備 | 考 | 古い住居跡と重複する。 |

遺物説明 (第52・53図)

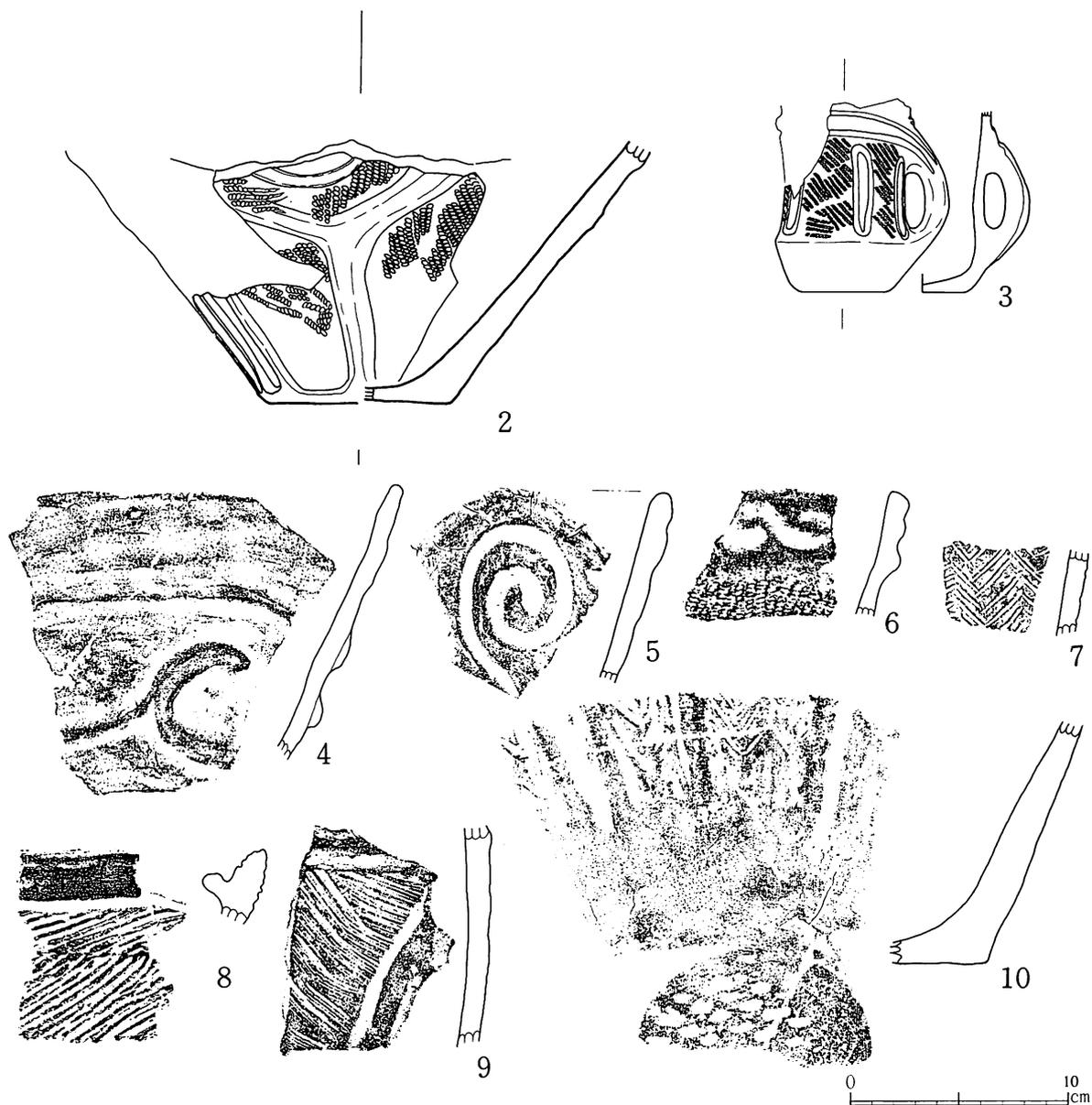
1は、本住居に埋設された埋甕である。口唇部の一部と底部を欠損させるもので、口唇部は無文帯が形成される。横走る隆帯から垂下させられた隆帯は、器面を8区画に分割し、その後区画内には「ハ」の字状文で充填させられる。2は胴部中位から下半部にかけて半隆起帯による区画がなされ、区画内には縄文が施される。3はジョッキ形の器形で胴部に把手が付けられ、器面には縄文が充填される。また楕円形状の沈線文で胴部は区画される。胴下半部の屈折された箇所から底部にかけては文様は施されない。4から10までは、曾利式期に属するものである。

30号住居 (SPE-SPW. SPN-SPS) 土層説明

- 1-黒褐色土 2-暗褐色土 (褐色土粒子混入) 3-暗褐色土 (2より暗い) 4-暗褐色土 (炭化物少)



第52図 30号住居跡 (1/60)・炉 (1/20)・埋甕 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第53図 30号住居跡出土遺物実測図(1/4)及び拓本(1/3)

量混入、2より暗く3より明るい) 5-褐色土(ローム粒子多量混入) 6-褐色土(ローム粒子、ロームブロック混入)

30号住居炉土層説明

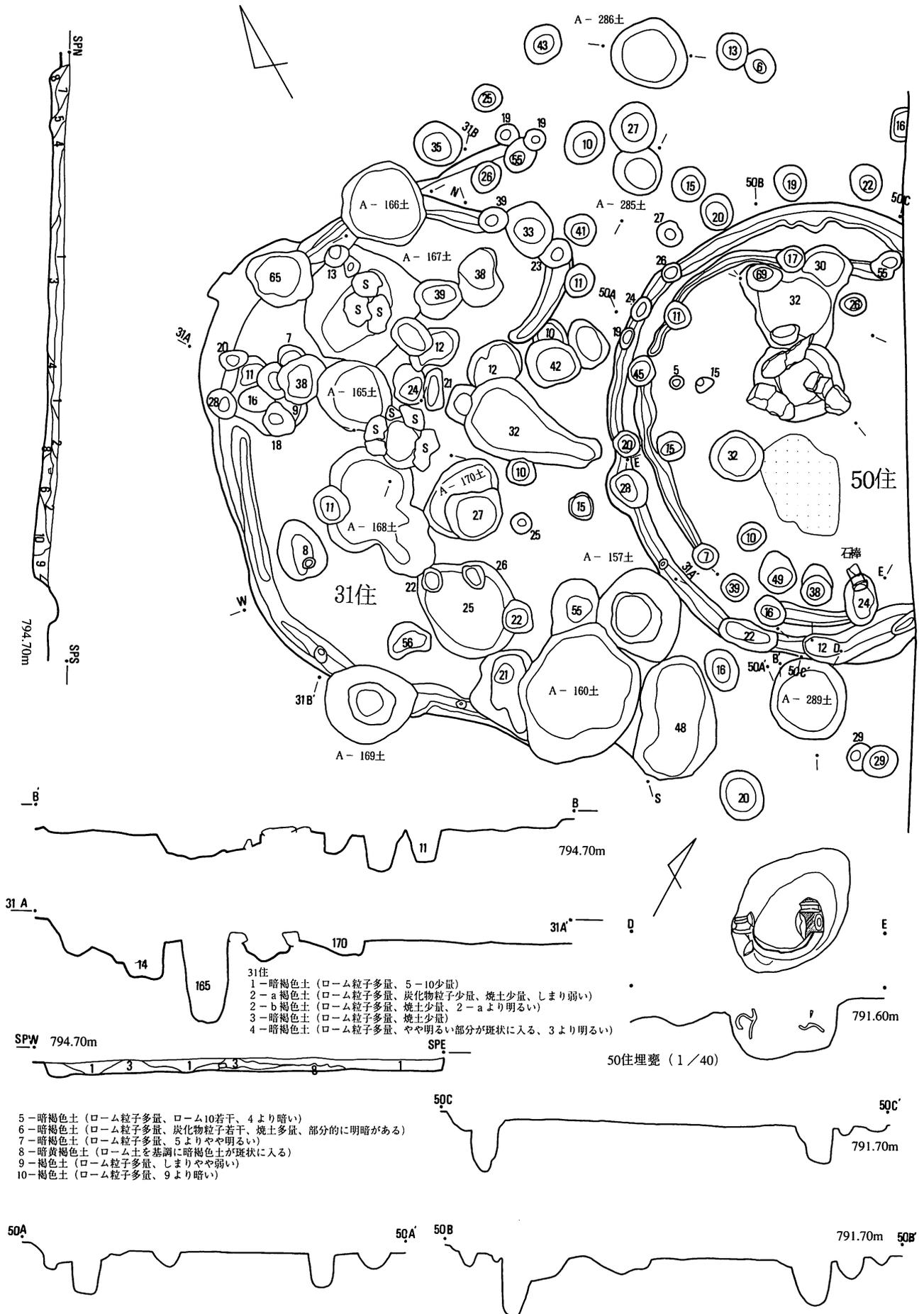
1-暗褐色土(ローム粒子多量:炭化物少量:焼土若干混入) 2-暗褐色土(ローム粒子多量:焼土若干混入) 3-暗褐色土(ローム粒子多量:焼土多量:部分的にローム混入:1, 2より明るい)

30号住居埋甕

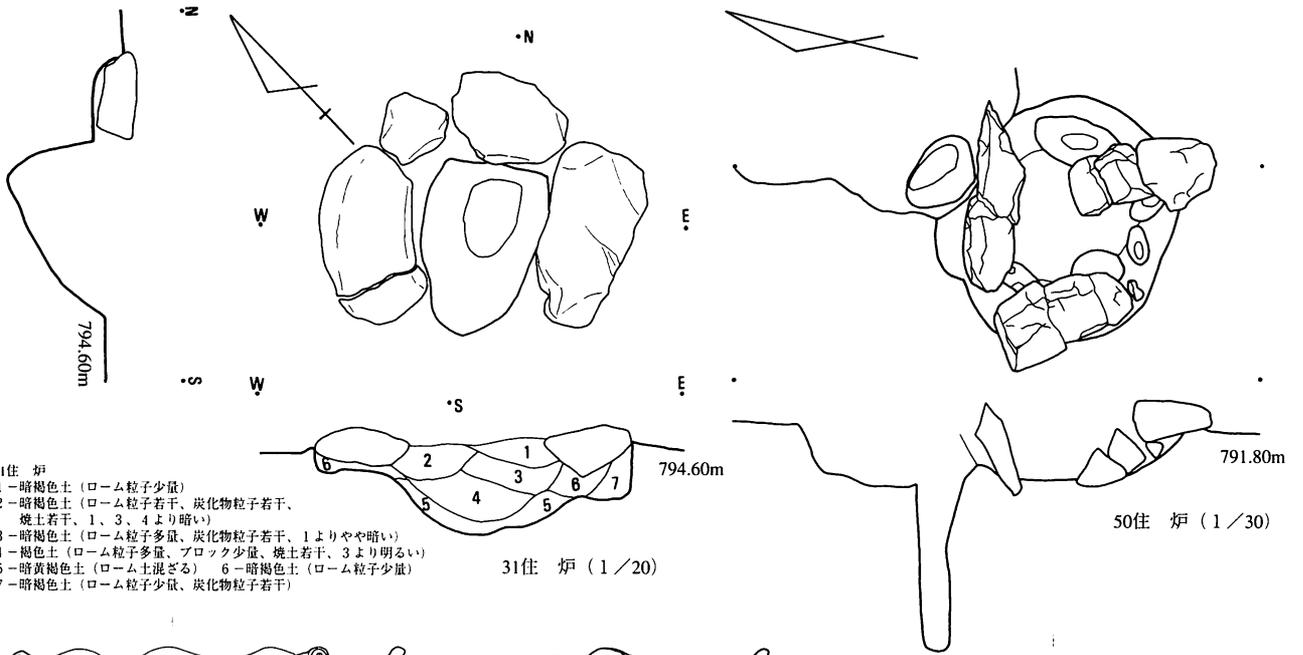
1-暗褐色土(ロームブロック少量:炭化物少量:しまり強い) 2-暗褐色土(ローム粒子混入) 3-暗褐色土(2より暗い:しまり強い) 4-暗褐色土(3よりローム粒子多量) 5-暗褐色土(ローム粒子混入:4より明るい)

31号住居跡 (第54・55図)

調査年度 1991年度(第3次調査)



第54図 31・50号住居跡 (1/60) 及び埋壙 (1/40)



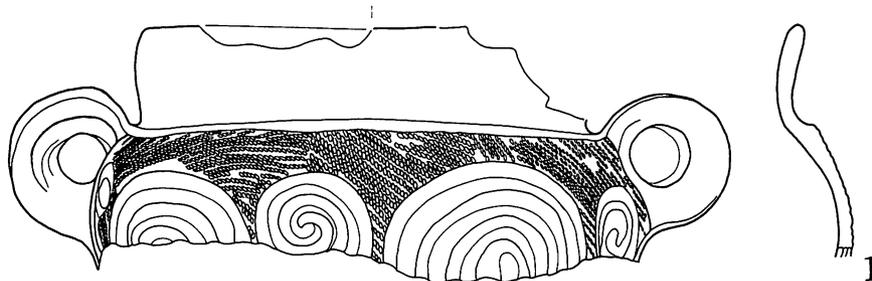
- 31住 炉
 1-暗褐色土 (ローム粒子少量)
 2-暗褐色土 (ローム粒子若干、炭化物粒子若干、
 焼土若干、1、3、4より暗い)
 3-暗褐色土 (ローム粒子多量、炭化物粒子若干、1よりやや暗い)
 4-褐色土 (ローム粒子多量、ブロック少量、焼土若干、3より明るい)
 5-暗黄褐色土 (ローム土混ざる) 6-暗褐色土 (ローム粒子少量)
 7-暗褐色土 (ローム粒子少量、炭化物粒子若干)

31住 炉 (1/20)

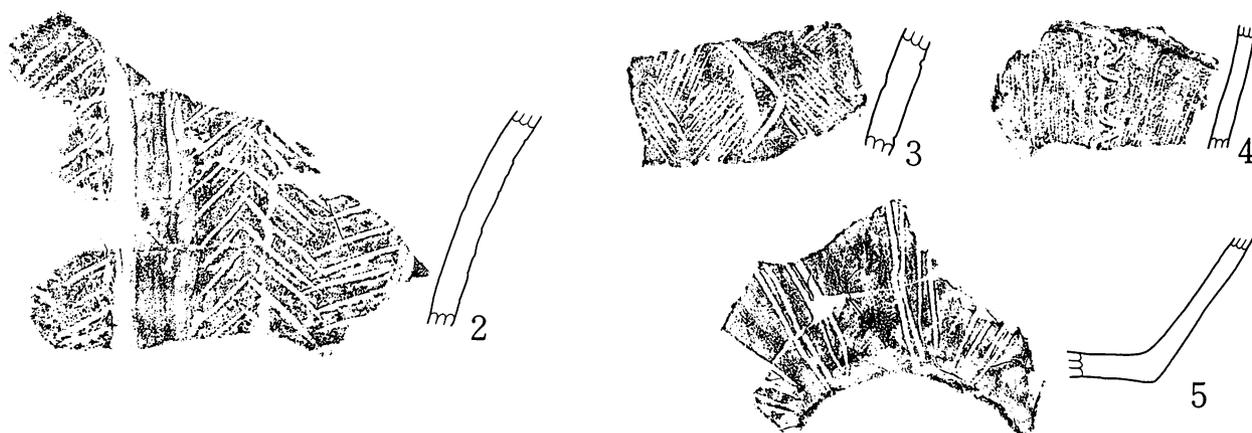
50住 炉 (1/30)



第55図 31・50号住居跡炉 (1/20)、(1/30)・出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)



第56図 50号住居跡埋甕実測図 (1/4)



第57図 50号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

位 置	B-20グリッド
平 面 形	円形を呈するものと思われる。
規 模	長軸は、6.50mを計測する。
周 溝	ほぼ全周するものと思われる。
炉	石囲炉で、一部炉石が認められない。
柱 穴	柱穴は多数確認されていることから、複数軒の存在が考えられる。
埋 甕	存在しない。
時 期	井戸尻式期（炉の形態から）と考えられる。
備 考	炉石の下に、掘立柱建物跡の柱穴（165土）が、また住居の南東の157土は掘立柱建物跡の柱穴が存在する。また柱穴は多数存在し、周溝の存在とも考え合わせると、重複した住居と考えられる。本住居と重複する50号住居跡が存在するとともに、1～3の遺物は31号住居跡の覆土中に存在しているものである。年度の調査区の関係で、重複する住居を確認することはできなかった。

50号住居跡 (第54.55図)

調査年度	1997年度（第7次調査）
位 置	A-20グリッド
平 面 形	円形を呈するものと思われる。
規 模	現存で5.10mを計測する。
周 溝	同心円状に二重に巡らされていることから、拡張された住居と考えられる。
炉	石囲炉であるが、一部壊される。また、石囲炉のすぐ脇の入口部方向に、地床炉が存在する。この地床炉は長期間にわたって使用されたものと思われ、焼土は厚く堆積している。
柱 穴	主柱穴は、旧周溝上に存在しているものと思われる。

埋 甕 本住居の入口部に埋設される。
時 期 曾利Ⅲ式期
備 考 本住居の東側半分は、調査区外に存在する。また、埋甕が埋設された箇所直ぐ脇で、石棒が頭を南に向けて床直で検出される。埋甕の形態は両耳壺で、本遺跡で発見されたものは、この土器1点だけであり、甲ッ原遺跡周辺およびこの地区での出土は、珍しいものである。

遺物説明 (第55図)

31号住居の出土遺物である。1, 2の口縁部には、半円状の区画する隆帯が巡らされ、渦巻文で連結される。区画内には縦位に沈線文が施される。胴部には、浅く荒い沈線文で充填され、口縁部の渦巻文から蛇行沈線文が垂下する。3は地文を縄文として器面に施され、平行沈線文と蛇行沈線文が施文される。胴上半部には、半円状の隆帯が巡らされるものと思われ、曾利Ⅲ式期に属するものである。4は胴部中位に沈線文によって十字状に区画され、交差する箇所には渦巻文が配される。また区画内には綾杉文が施され、蛇行沈線文で更に左右に分けられる。5から8までは、井戸尻式期に属するもので、8は無頸壺で、口縁部は無文帯を形成しやや肥厚する。RLの縄文を地文として器面に施され、「U」字状の沈線は縄文を区画する。区画外の器面は、擦り消される。これらの遺物の中には、50号住居と重複している関係で混ざっているものが多数認められる。

遺物説明 (第56・57図)

1は50号住居の埋甕である。口縁部は無文で直立し、段をもたせて胴部と結合させる。胴部には縄文を地文として器面に施される。その後指頭による渦巻文が両耳の間に施され、小渦巻きと大渦巻きが交互に配列される。また本土器の口縁部は約半分残存し、球形をなす胴部は胴下半部から底部までを欠損する。2, 3は炉から出土した土器片で、綾杉状文が器面に施される。

32号住居跡 (第58図)

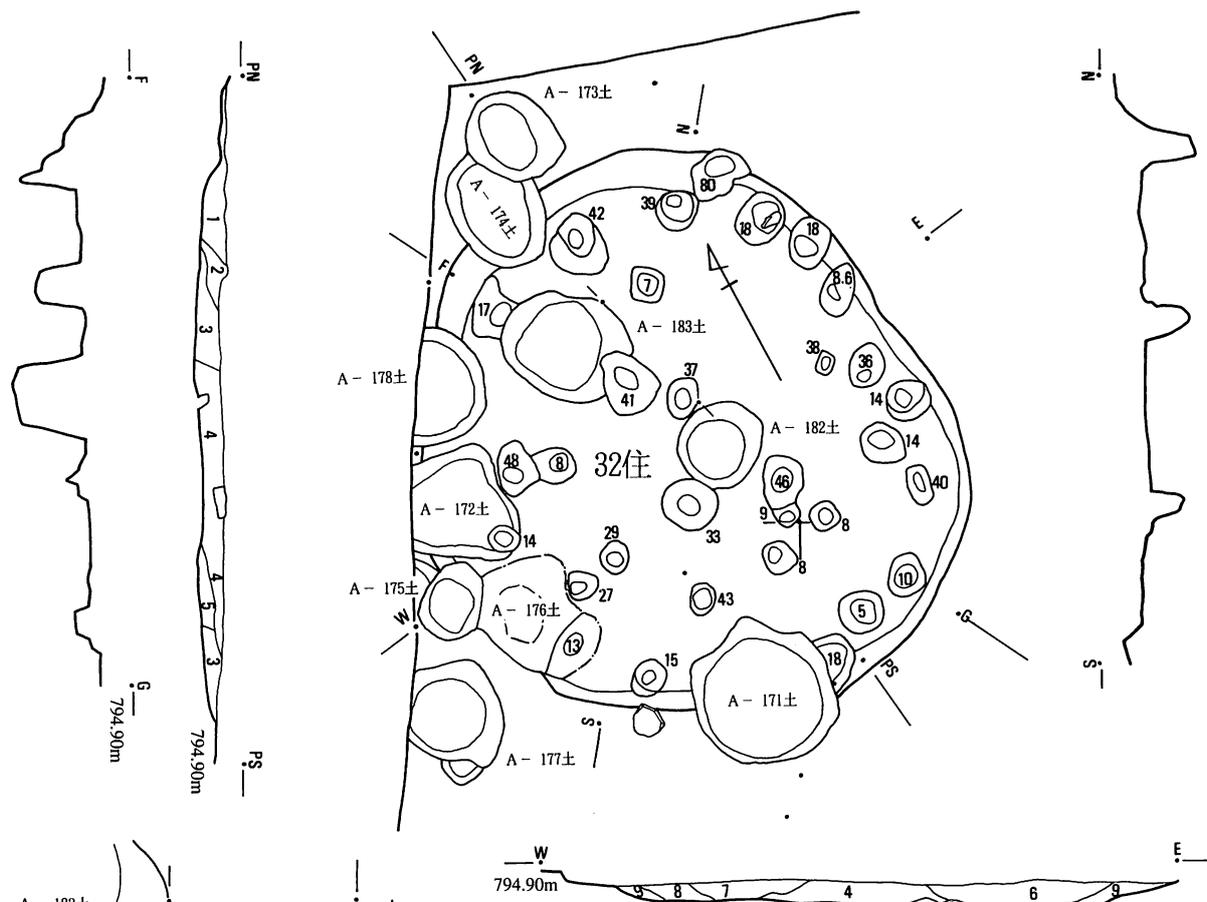
調査年度 1991年(第3次調査)
位 置 B・C-18・19グリッド
平 面 形 ほぼ円形を呈する。
規 模 4.40m～4.50mを計測する。
周 溝 存在しない。
炉 埋甕炉である。
柱 穴 壁際に沿って認められるが、主柱穴は不明である。
埋 甕 存在しない。
時 期 炉体土器より五領ケ台式期。
備 考 住居の西側では土坑との重複が著しく、壁が明確でない。土坑は住居より新しいものである。

遺物説明 (第59図)

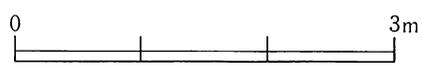
1は炉体土器である。口縁部及び胴部中位から底部までを欠損する。頸部と思われる箇所には、横位に半截竹管状工具による平行沈線文が施され、その後に縦位にも施される。2は胴部中位から底部まで現存する。この時期の特徴として、底部は平たく内面中央では盛り上がりを見せる。胴部から底部まで縦位に沈線文が施され、中央の沈線間には交互刺突によってジグザグ文が形成される。3の胴部には弱い縄文が施され、口唇部は平坦で、推定される口径は15cm、器高は約21.5cmを計測する。

33号住居跡 (第60・61図)

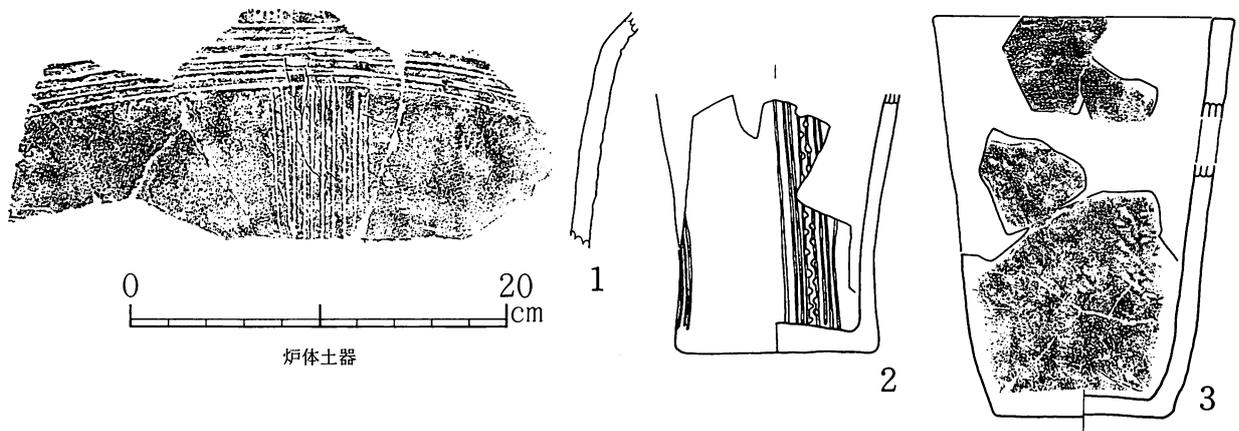
調査年度 1991年(第3次調査)



- 32住
- 1-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土少量、褐色土斑状に入る)
 - 2-暗褐色土 (ローム粒子少量、褐色土斑状に入る、1より明るい)
 - 3-褐色土 (ローム粒子多量、しまりやや弱い)
 - 4-暗褐色土 (ローム粒子少量、しまりやや弱い)
 - 5-暗褐色土 (ローム粒子少量、5-10少量)
 - 6-暗褐色土 (ローム粒子少量、10若干)
 - 7-暗褐色土 (ローム粒子少量、10若干)
 - 8-暗褐色土 (ローム粒子少量、7より明るい)
 - 9-褐色土 (ロームブロック多く含む)



第58図 32号住居跡 (1/60) 及び埋壺炉 (1/20)



第59図 32号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

位置	B・C-21.22グリッド
平面形	多角形を呈する。
規模	炉を中心としてほぼ南北に主軸をとり、9.10mを計測する。
周溝	全周し、深さは10cmから12cm、幅は20cmから40cmで、壁の高さは、ほぼ30cmである。
炉	2度にわたって構築される。炉石は、抜き取られている。
柱穴	本住居の内側にもう1本の溝および柱穴が確認され、それぞれの壁のコーナーに設けられている。
埋甕	炉の長軸の南端に存在する。
時期	曾利Ⅲ式期。
備考	本調査区において、最大規模の住居跡である。調査当時、2軒の住居跡を想定していたが、結果として1軒の住居跡であることが判明した。また、本住居跡は貼り床されており、溝が同心円状に広がっていることから、拡張住居と考えられる。

土層説明（住居） 1-黒褐色土 2-暗褐色土 3-暗褐色土（2よりやや暗い） 4-暗褐色土（3より暗い） 5-褐色土 6-暗褐色土（4より暗い） 7-褐色土 8-黒褐色土 9-褐色土 10-暗褐色土 11-暗褐色土 12-褐色土 13-暗褐色土 14-暗褐色土

（炉） 1-暗褐色土（ローム粒子少量混入） 2-暗褐色土（ローム粒子多量混入） 3-暗褐色土（2より暗い） 4-暗褐色土（焼土若干：1，2よりやや暗い） 5-暗褐色土（ローム粒子若干：4より暗い） 6-褐色土（ローム粒子多量、焼土多量混入） 7-暗褐色土（ローム粒子少量、炭化物若干） 8-暗褐色土（炭化物、焼土若干） 9-褐色土（炭化物少量：焼土多量） 10-暗褐色土（ローム粒子多量：焼土若干）

（埋甕内土層） 1-暗褐色土（ローム粒子少量） 2-暗褐色土（炭化物若干：3より明るい） 3-暗褐色土（ローム粒子、ロームブロック若干） 4-褐色土（ローム粒子多量：しまり弱い） 5-暗褐色土（4に類似） 6-暗褐色土（ローム粒子若干：5に類似） 7-褐色土（ローム粒子若干）

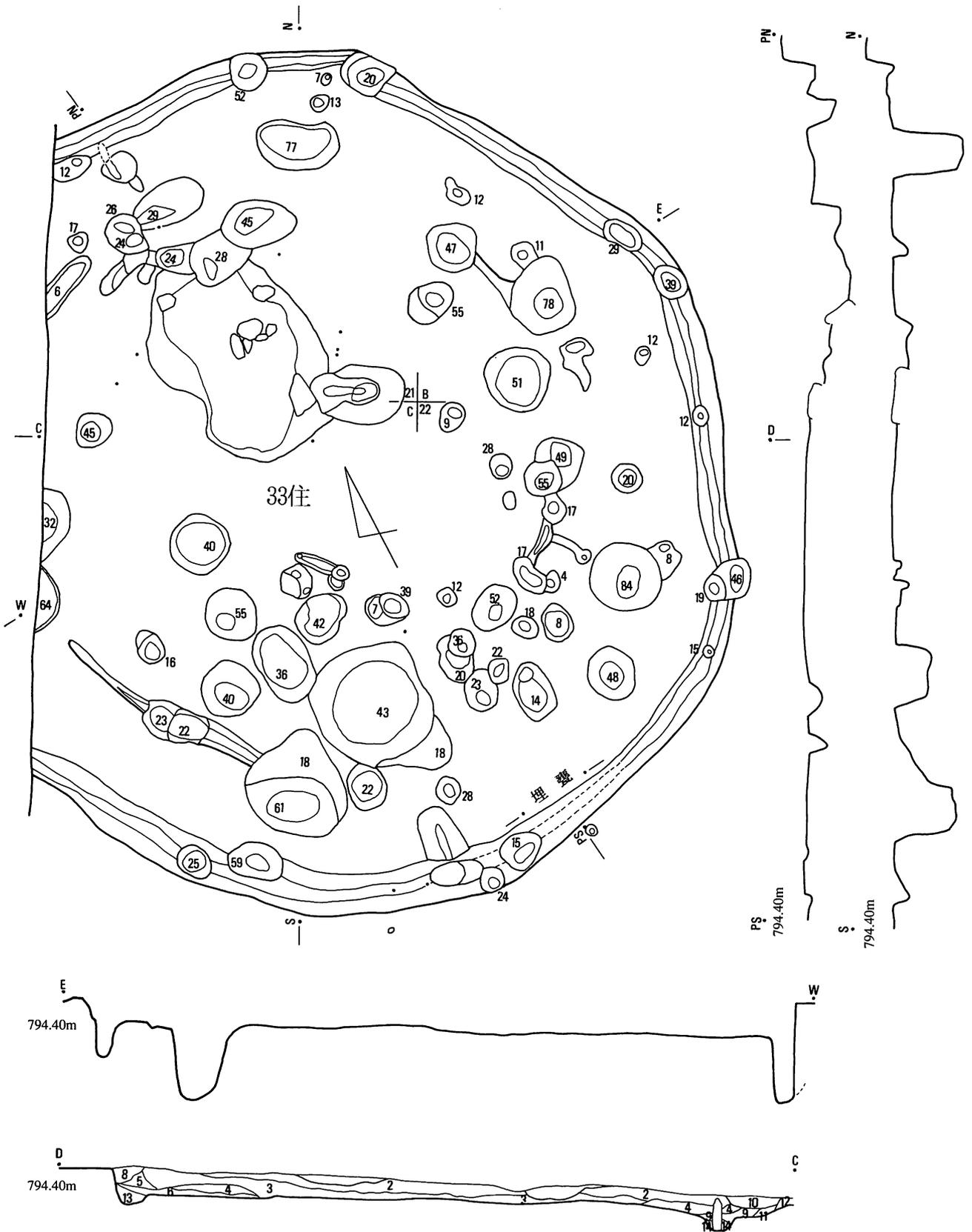
（埋甕外土層） 1-暗黄褐色土（ローム土多量に含む） 2-暗褐色土（ローム粒子少量：炭化物若干） 3-褐色土（ローム粒子多量混入） 4-褐色土（ローム粒子若干） 5-黄褐色土（ローム土を多量に含む） 6-暗褐色土（しまり強い）

遺物説明（第62・63・64図）

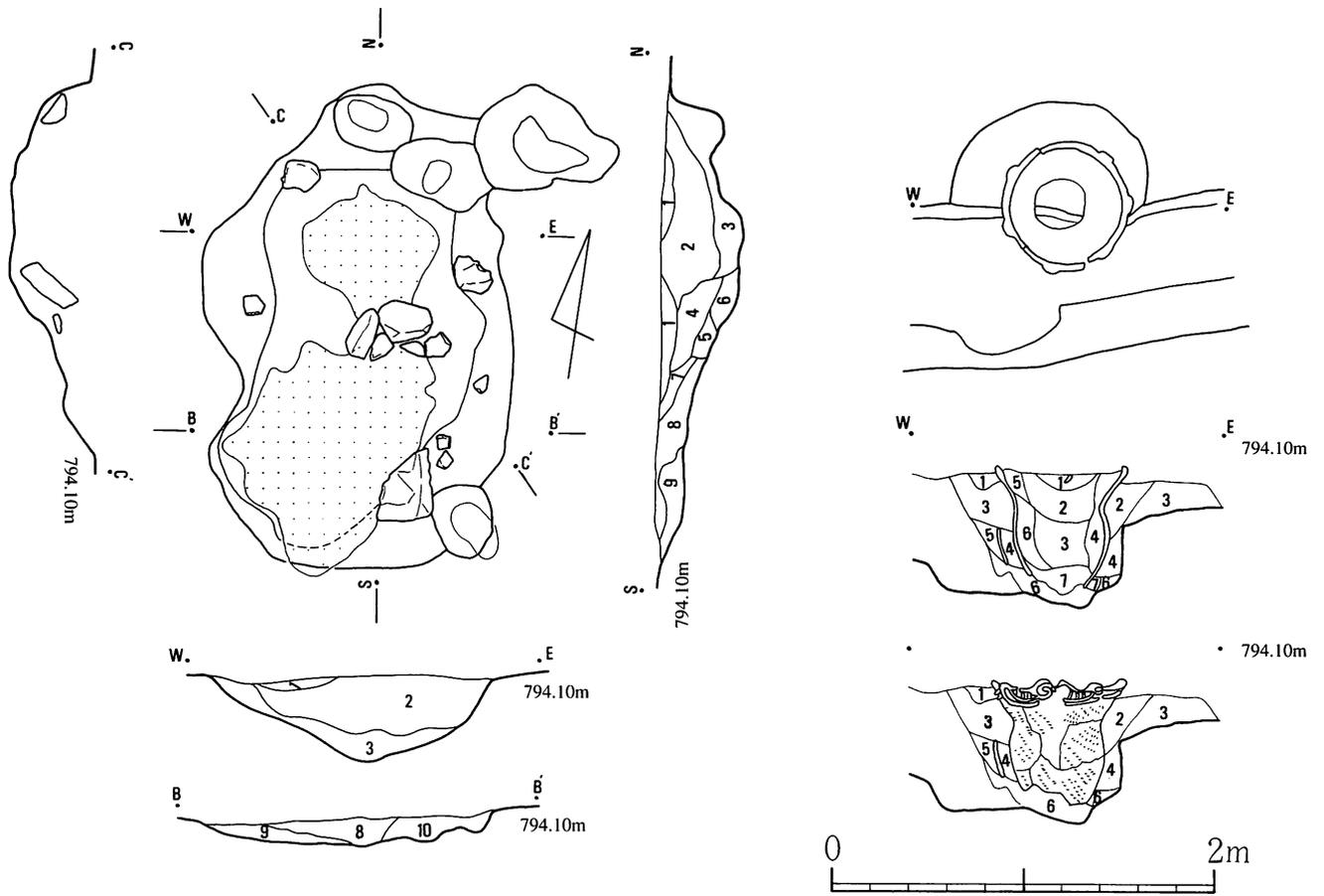
1は埋甕で、住居跡の南側の周溝にかかる部分より検出され、住居跡の入り口部分に埋設されたものである。掘り方は住居の周溝に半分ほどかかり、土器は正位に埋設されていた。土器の底部は粘土帯で欠損し、口縁部も一部欠損している。口径は32cmを計測する。土器の口縁部には連続する渦巻文が7単位で配され、二本一組の隆線で表現している。また渦巻きの間は、棒状工具によって縦位の沈線で充填され、半円形に区画される。胴部はLRの単節縄文で縦位に回転施文している。外面の下半部は二次焼成を受け、また上半部から口縁部にかけて煤が付着し、煮炊きに使用された痕跡が明瞭に残されている。曾利Ⅲ式期に比定される。2は口縁部が一部残存し、底部を欠損する。推定される口径は14cmで、残存する器高は15cmを計測する。口縁部はベルト状に隆帯が巡らされ、楕円形状の凹みで文様が構成される。頸部は無文帯で、胴部には斜行する沈線文と渦巻き状の「S」字状文が施される。3は底部と口縁部の突起部を欠損するもので、突起部には円形の貫通孔が認められる。口縁部は半円形状の隆線が巡らされ、円形状の沈線文で連結される。口径は13.5cm、器高は15cmを計測する。胴部の文様は突起部直下から2条の沈線が垂下し、斜行する沈線文を左右に区画する。4の胴部には、条線と蛇行沈線文で構成される。口径は39cm、器高は39cmである。底部には、網代痕が残される。第63図の32の底部には、木葉痕が明瞭に残される。11,29は、曾利Ⅰ式期に属するものと思われる。

34号住居跡（第65図）

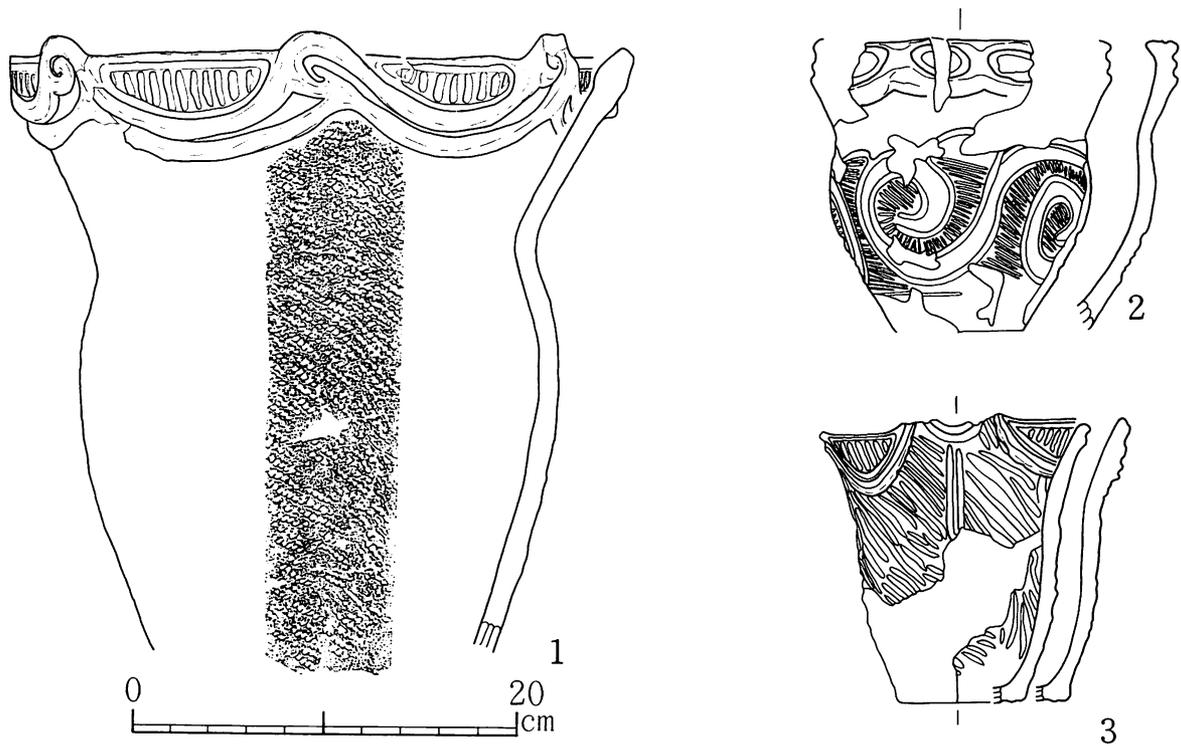
調査年度 1991年（第3次調査）



第60图 33号住居跡 (1/60)



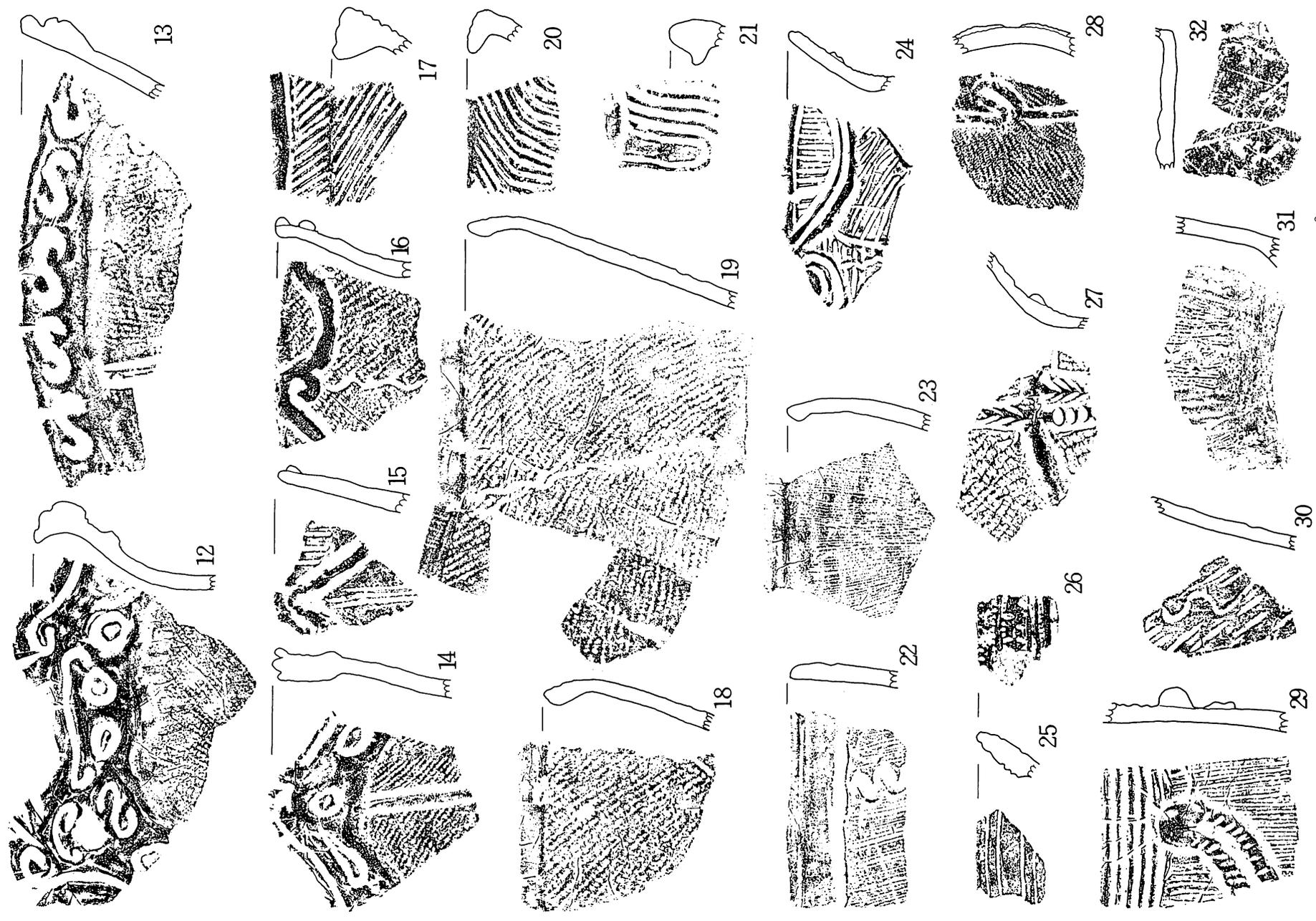
第61図 33号住居跡炉 (1/40) 及び埋甕 (1/20)



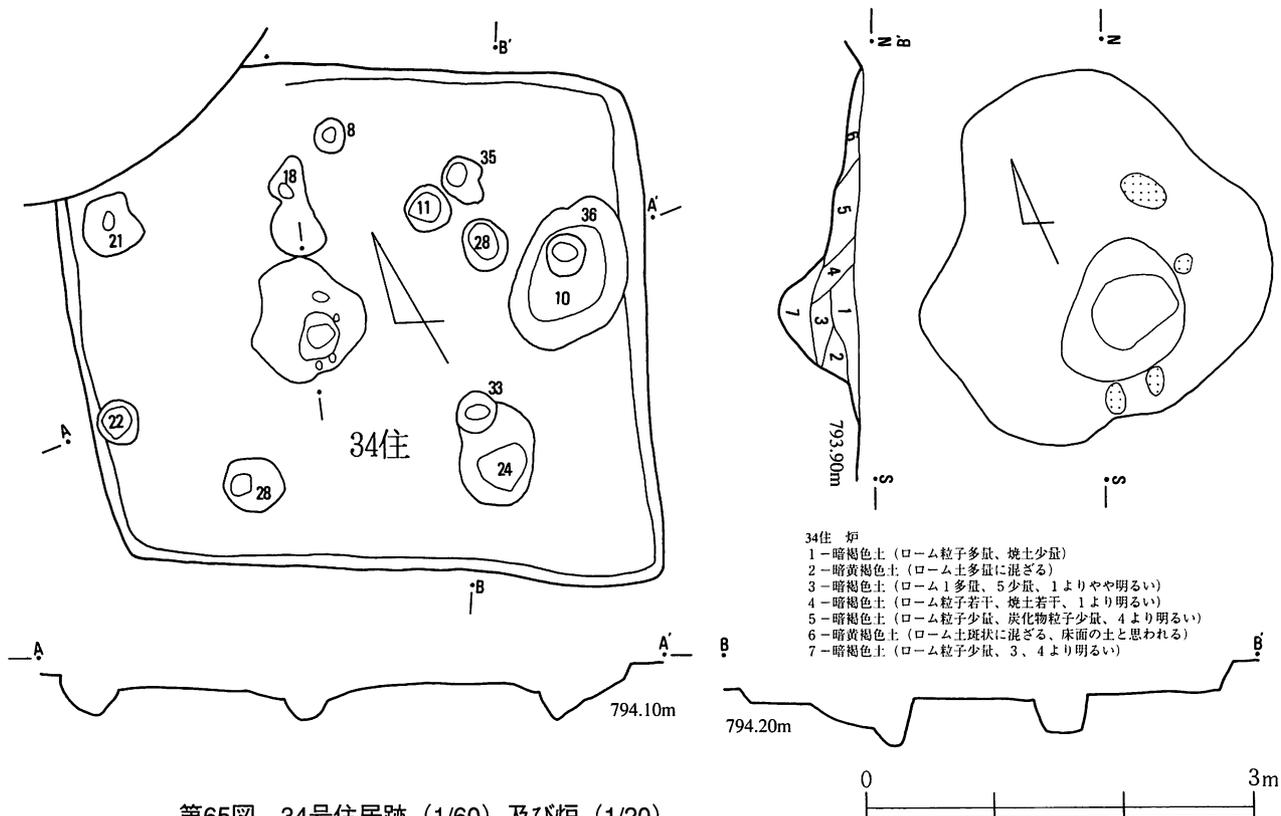
第62図 33号住居跡埋甕 (1/4) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第63图 33号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第64图 33号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第65図 34号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/20)

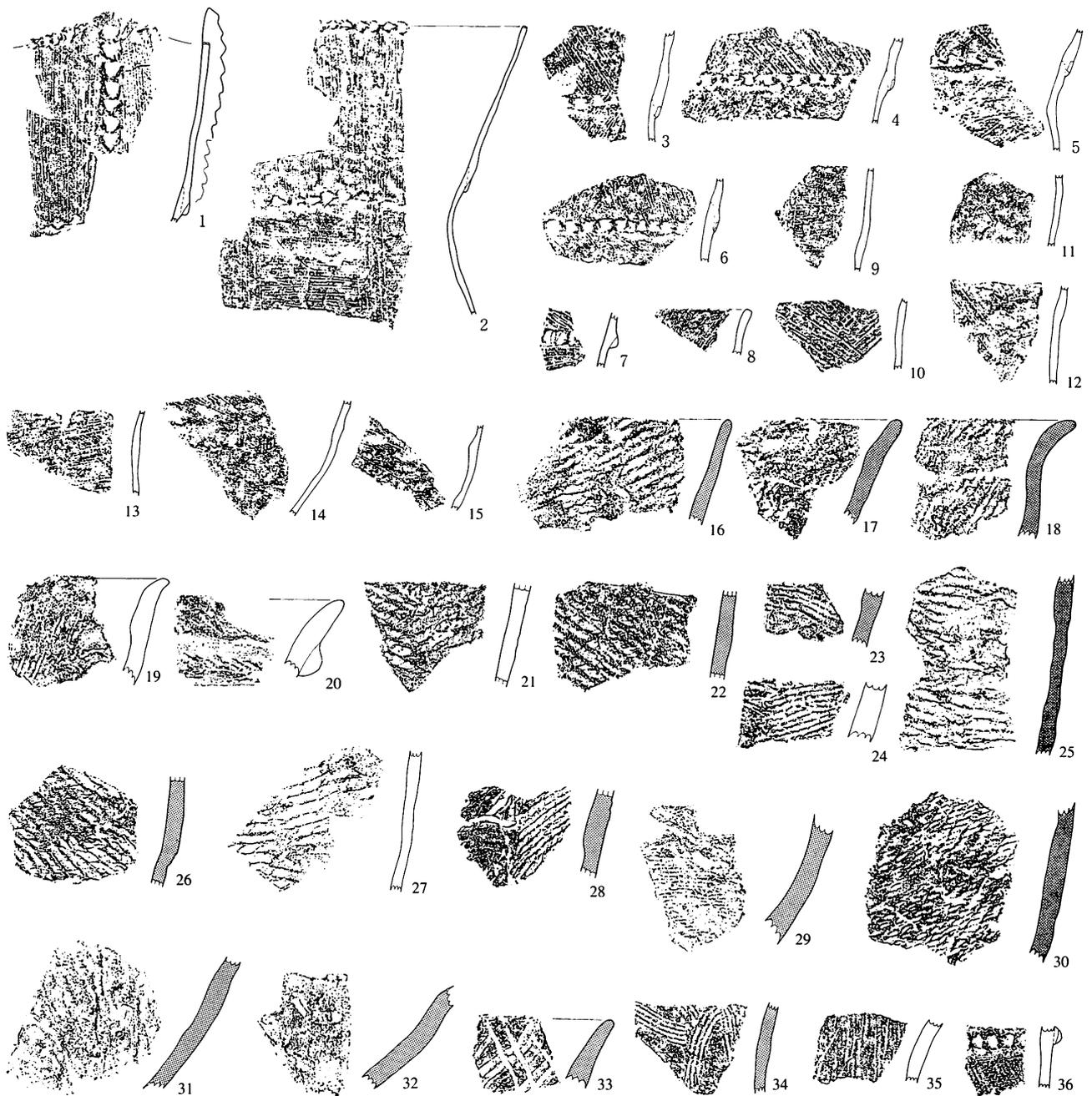
位置	B-23グリッド
平面形	長方形と思われる。
規模	東西に長軸を有し、炉を中心として長軸は4.52m、短軸3.94mを計測する。
周溝	存在しない。
炉	住居の中央からやや西方向に不整形につくられた地床炉である。焼土は、部分的に残存している。
柱穴	主柱穴は、4本と思われ、各コーナー近くに設置される。
埋甕	存在しない。
時期	前期初頭。
備考	確認面から床面までの高さは、12cmから15cmを測る。

遺物説明 (第66図)

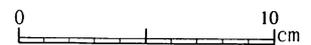
前期初頭に位置付けられる一群で、東海系の薄手土器 (第66図 1~15) と、繊維を多く含む縄文の施文された土器 (同図16~30) が混在している。

薄手土器は、口縁部と胴部の間に段をつくり、刻みを施している。この刻みは篋状工具 (1, 2) や多截竹管状工具による連続押圧によるもの (3~6) や指によってつまみだしているもの (7) がみられる。また口唇部に篋状工具によって刻みが施されるもの (1, 2) もある。口縁帯には半截竹管状工具によって縦位、斜位あるいは矢羽状の細線が施される。胴部も同様に斜位、斜格子、矢羽状の細線がみられる。この細線は全体的に乱れて雑な感を受け、またひじょうに浅く施されている。器壁は3~4mmほどで、全体に指頭圧痕が顕著である。

繊維を含む土器は、多く無節の斜縄文が目立つ。無節の斜縄文は条の幅約4mmほどのもの (16~26) が多く、中には幅約1mmほどのもの (29) もある。回転方向は横位である。また少数ながら二段の縄 (30) や結節縄文 (28) などが存在する。その他篋状工具による斜格子の条線が施されるもの (33) や貝殻条痕によるもの (34)



第66図 34号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



がみられる。器形において、口縁部が直立するものと外反するものがみられる他、口縁部直下に隆線が巡るものがある。底部は明確でないが丸底あるいは丸底に近い形になると思われる。内面調整は雑で指頭圧痕が残ることがある。

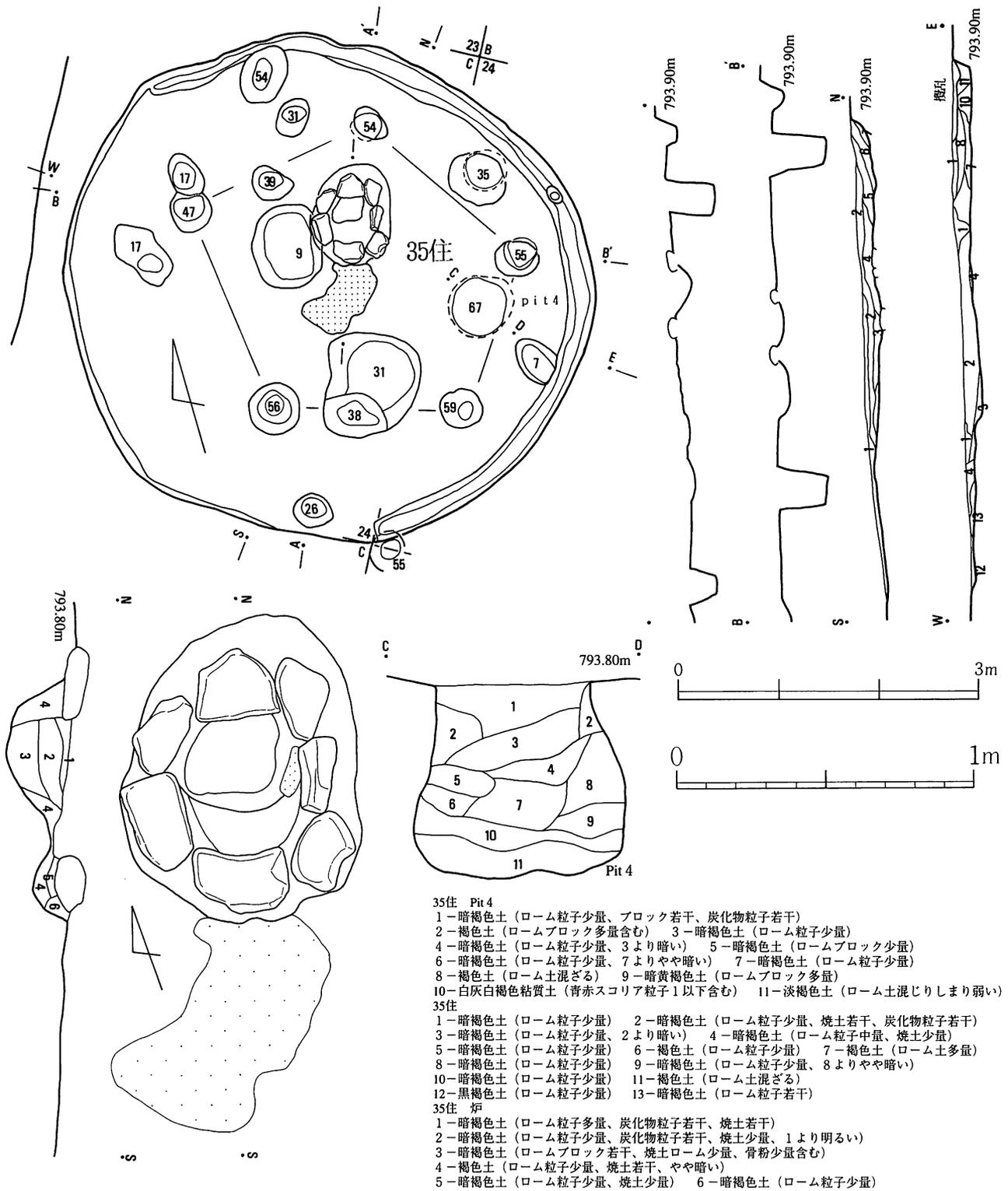
これらの他、僅かではあるが、東海系の薄手土器に類似するものがみられる (35.36)。薄手土器に比べやや厚いが、半截竹管状工具による細線が施されている。

以上これらの土器は、木島式土器のⅧ段階あるいは清水ノ上Ⅰ式に相当する時期である。

35号住居跡 (第67図)

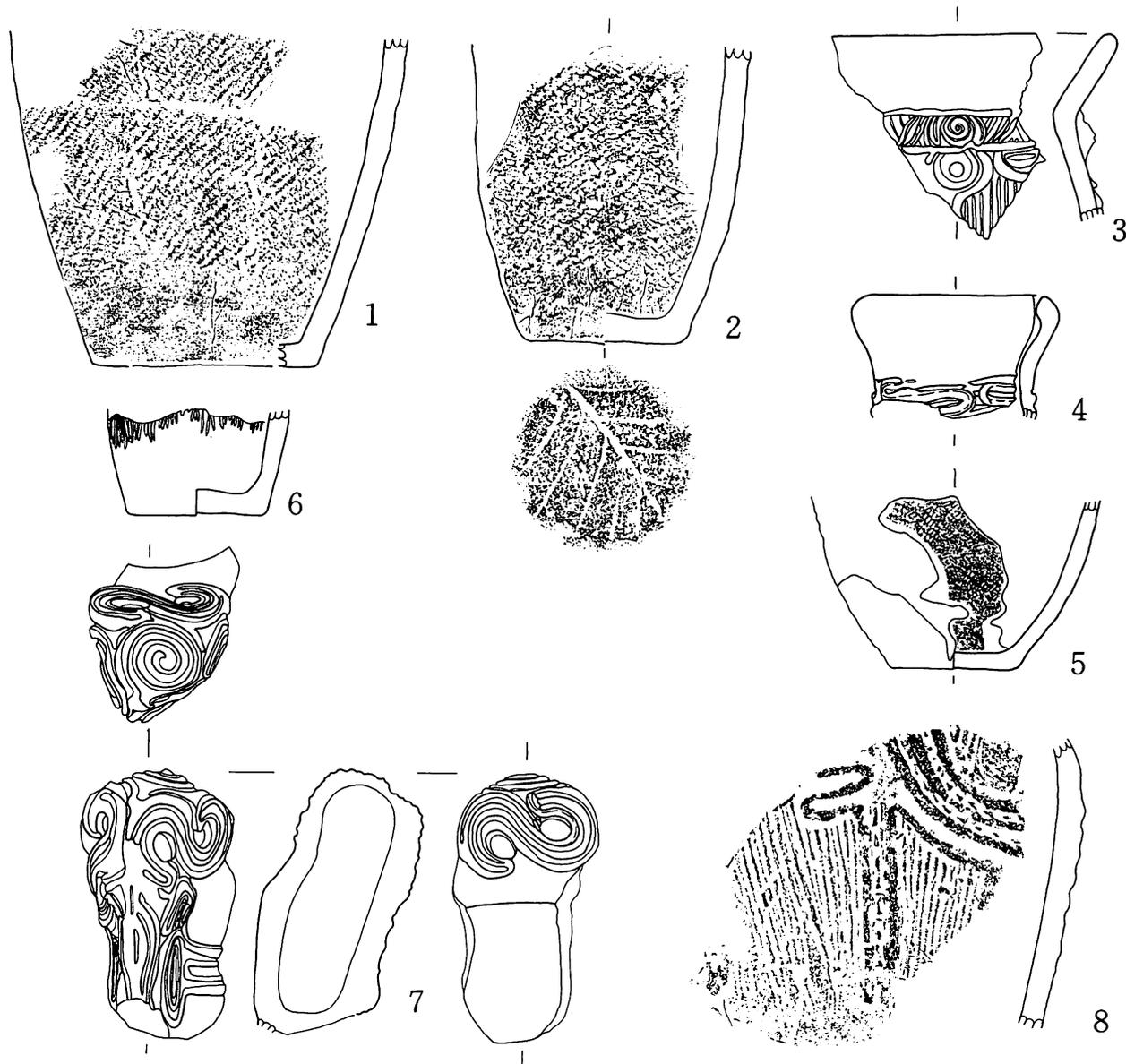
調査年度 1991年 (第3次調査)

位置 B・C-24グリッド



第67図 35号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及びピット4 (1/20)

- 平面形 円形を呈する。
- 規模 5.40m×5.00mを計測する。
- 周溝 住居の北から東・南で認められ、ほぼ半周する。
- 炉 石囲炉で、炉石は全て残存する。炉は、住居の中央より奥壁側に設置される。また、炉に接して地床炉が存在し、炉の長軸と入口部を結ぶ線上で認められる。
- 柱穴 主柱穴は、5本である。



第68図 35号住居跡出土遺物実測図（1/4）及び拓本（1/3）

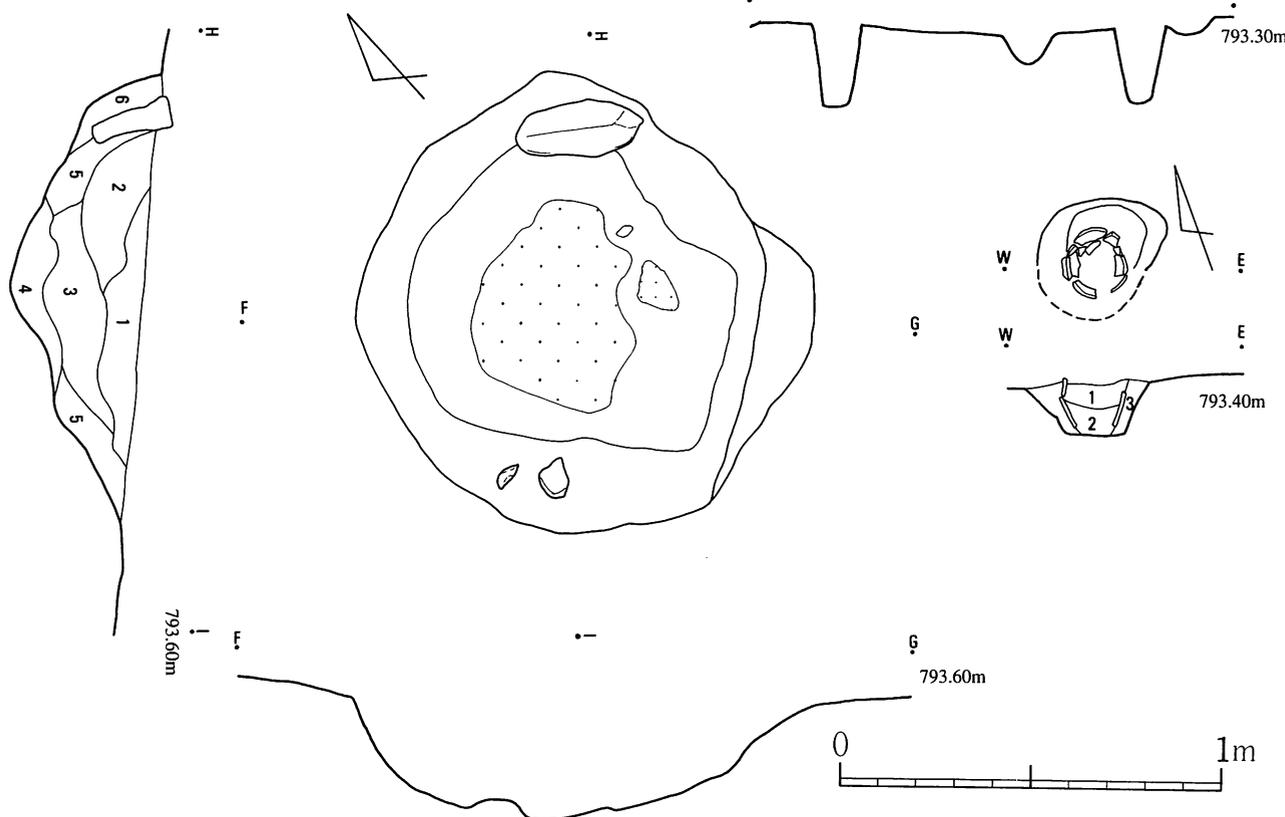
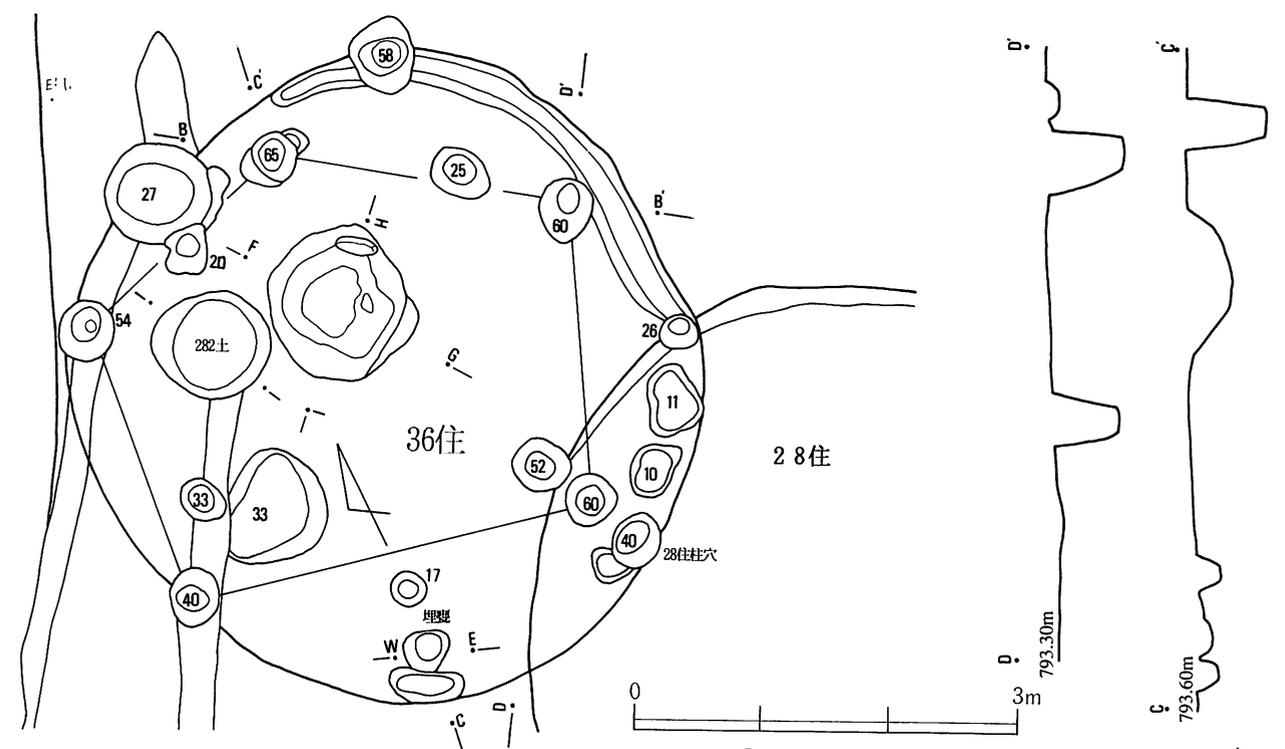
埋 甕 存在しない。
 時 期 曾利Ⅱ式期。
 備 考 36号住居および40号住居と重複する。

遺物説明 （第68図）

1. 2. 5は、縄文を地文として器面に施されるもので、1は結節のS字縄文が胴部に施される。
 2の底部には、木葉痕が明瞭に残される。8は、器面に条線が縦位に施され、粘土紐の貼り付けがなされる。

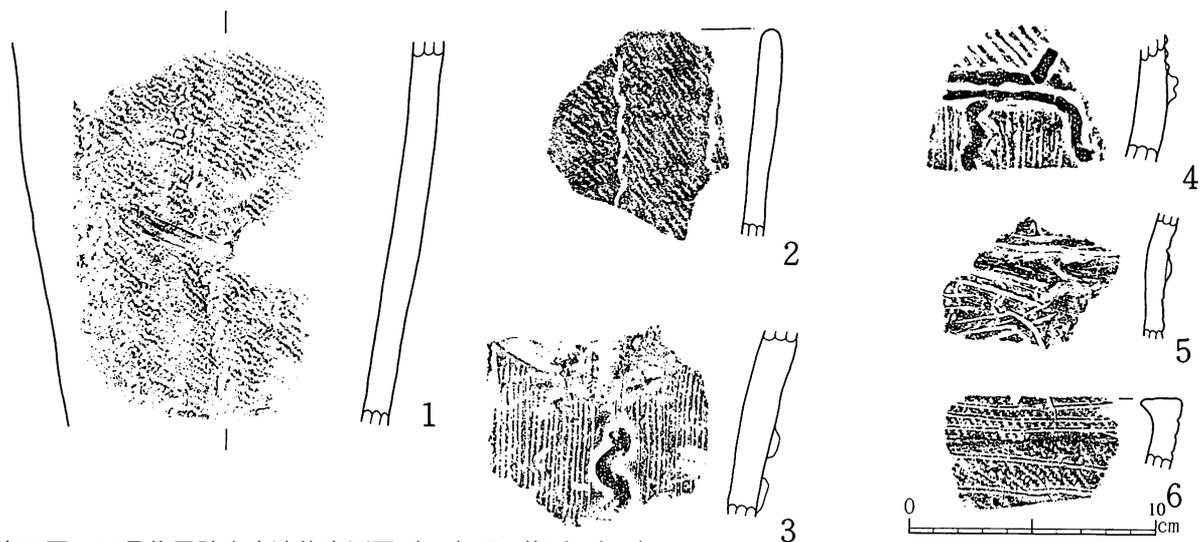
36号住居跡 （第69図）

調査年度 1991年（第3次調査）
 位 置 B・C-24.25グリッド
 平 面 形 円形を呈するものと思われる。
 規 模 5.10m×4.80mを計測する。
 周 溝 北から東にかけて認められる。



- 36住 炉
 1-黒褐色土 (ローム粒子少量) 2-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土若干、1よりやや明るい)
 3-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土若干、炭化物粒子若干)
 4-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土若干、3よりやや明るい)
 5-暗褐色土 (ローム粒子多量、焼土若干) 6-褐色土 (ローム粒子多量、炭化物粒子若干、焼土若干)
- 36住 埋壙
 1-暗褐色土 (ローム粒子少量) 2-暗褐色土 (ローム粒子少量、1より明るい)
 3-褐色土 (ローム粒子少量、ローム土混ざる)

第69図 36号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び埋壙 (1/20)



第70図 36号住居跡出土遺物実測図（1/4）及び拓本（1/3）

- 炉 石囲炉と思われ、炉石は1ケのみ存在する。住居の中央より奥壁側に設置される。入口部は、炉の位置から、南側に存在するものと思われる。
- 柱 穴 支柱穴は、5本である。
- 埋 甕 住居の南側壁際に存在する。
- 時 期 曾利Ⅲ式期。
- 備 考 炉と埋甕を結ぶ線上には、深さ17cmの小穴が認められる。

遺物説明（第70図）

1は埋甕で、正位に埋設されたもので、口縁部と底部を欠損させるものである。器面には結節S字縄文が施される。2は口縁部の破片で、1と同様の施文がなされる。3、4は器面に施された条線に、粘土紐が貼り付けされたものである。

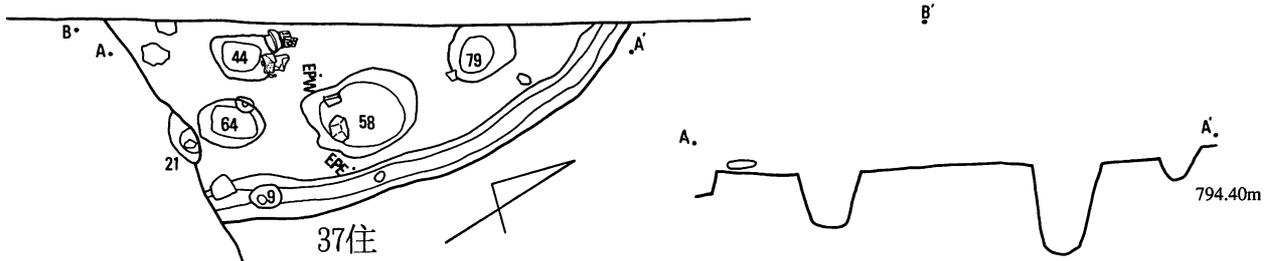
37号住居跡（第71図）

- 調査年度 1991年（第3次調査）
- 位 置 C-20.21グリッド
- 平 面 形 不明である。
- 規 模 住居のほとんどは調査区外に存在し、33号住居跡に壊されている関係上不明である。
- 周 溝 認められない。
- 炉 認められない。
- 柱 穴 壁際で認められ、33号住居内に存在する柱穴が考えられる。
- 埋 甕 認められない。
- 時 期 曾利Ⅱ式期。
- 備 考

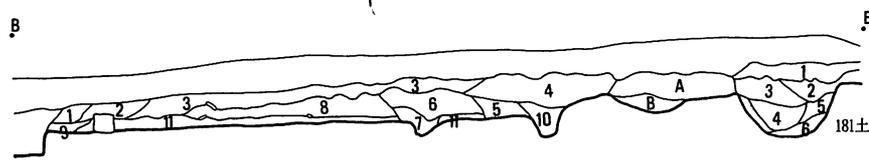
遺物説明（第72図）

1は胴下半部から底部を欠損するもので、口縁部は緩やかに外反し、無文帯を形成する。胴部には、縄文が施される。2は口縁部を欠損し、胴部には2条の隆帯が沈線文を左右に区画させる。

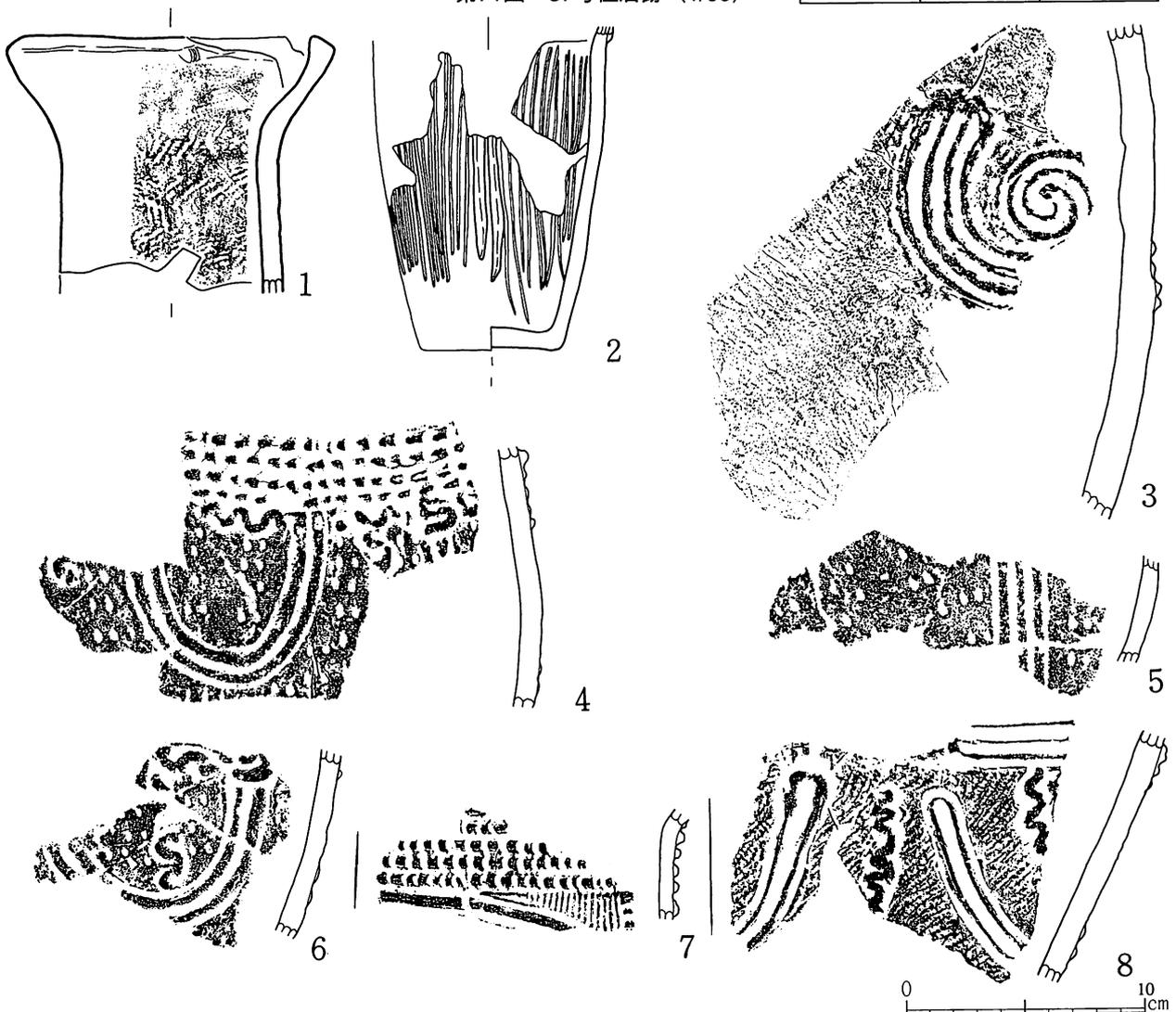
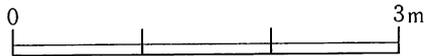
4、5、6は同一個体である。頸部には、「U」字状の隆帯と横走る波状の隆帯が貼り付けられる。



- 37住
- 1-暗褐色土 (ローム若干、部分的に黒褐色土混ざる) 2-暗茶褐色土 (ローム若干、焼土若干)
 - 3-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土若干、土器片少量)
 - 4-暗褐色土 (ローム粒子少量、焼土若干、3よりやや暗い)
 - 5-暗褐色土 (ローム粒子少量、炭化物若干、4より明るい)
 - 6-暗褐色土 (ローム粒子多量、炭化物少量、焼土少量、5より暗い)
 - 7-暗褐色土 (ローム粒子少量、しまりやや弱い、6よりやや暗い)
 - 8-黒褐色土 (ローム粒子若干、焼土・炭化物粒子若干)
 - 9-褐色土 (ローム粒子若干、ローム土が斑状に混ざる)
 - 10-褐色土 (ローム粒子若干) 11-暗褐色土 (ローム粒子多量、炭化物粒子少量)
 - A-暗褐色土 (ローム粒子少量、2-3若干、炭化物粒子少量)
 - B-褐色土 (ローム粒子少量、1より明るい)



第71図 37号住居跡 (1/60)



第72図 37号住居跡出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)

39号住居跡 (第73図)

調査年度	1991年度 (第3次調査)
位 置	C-22.23グリッド
平 面 形	円形を呈するものと思われる。
規 模	長軸は4.90mを計測する。
周 溝	存在しない。
炉	住居の中央より北側で焼土が認められるものの、形態は不明である。
柱 穴	主柱穴が4本現状で確認される。
埋 甕	存在しない。
時 期	井戸尻式期
備 考	33号、40号住居と重複する。

遺物説明 (第74・75図)

1は無頸壺と思われ、口縁部は内弯させられる。推定される内径は、20cmを計測する。器面全体に沈線文による装飾が施され、円形文・渦巻文・平行沈線文・三叉文で充填される。2は、口縁部の突起部に隆帯によって施されたものである。第75図の3、5、6、7は同一個体のものと思われるが、接合はされない。3は口縁部に眼鏡状の把手が付され、口唇部には連続する刺突が施される。また口縁部には楕円形状を呈する文様が付され、キャタピラ文が施される。5は、3の下部に位置するものと思われ、頸部には隆帯が巡らされ、交互の刻みが施される。4の器面には、縄文を地文として施される。1から12までは、井戸尻式期に属するものである。

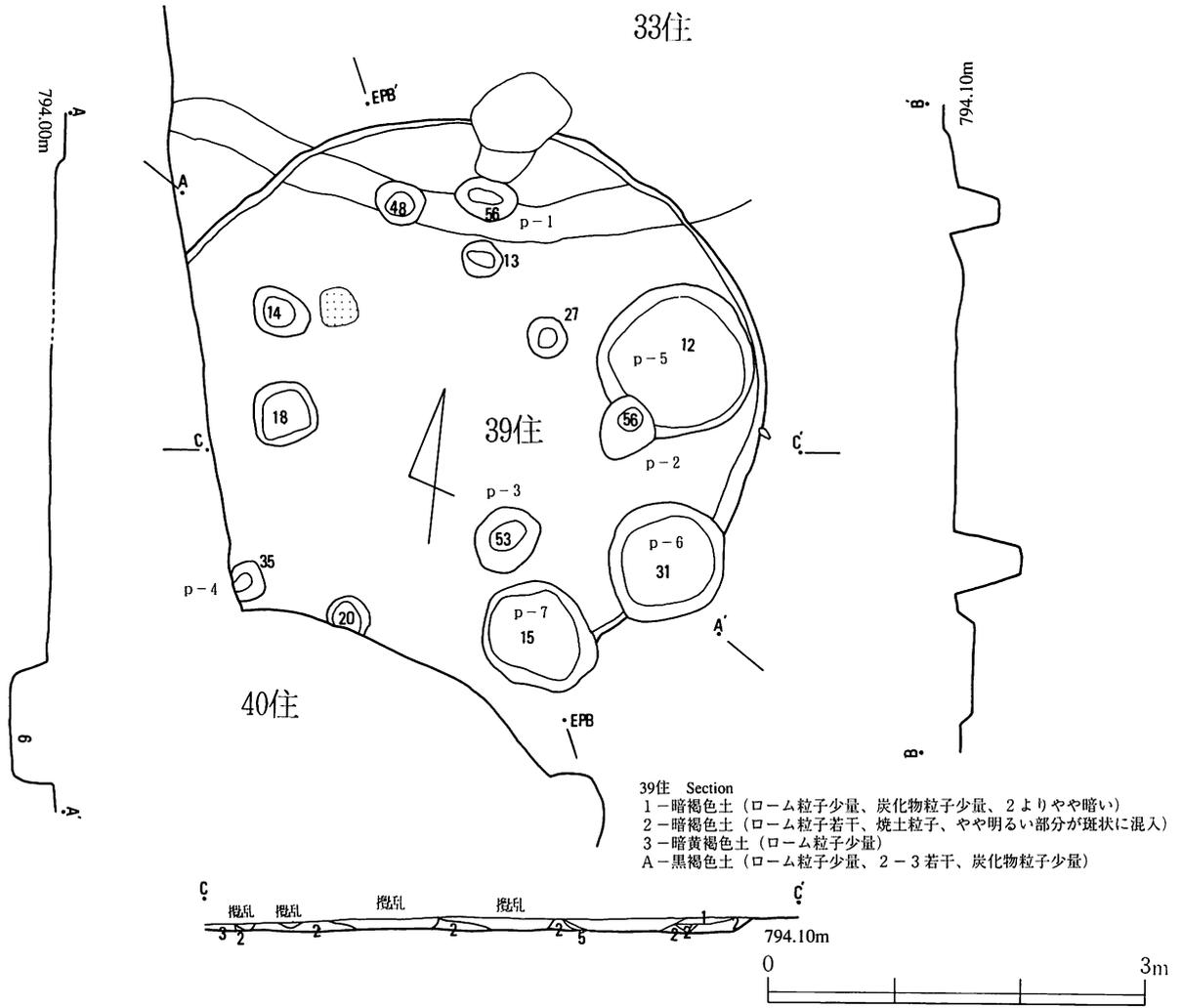
40号住居跡 (第76図)

調査年度	1991年度 (第3次調査)
位 置	C-23.24グリッド
平 面 形	円形を呈するものと思われるが、多角形の住居の可能性もある。
規 模	現存で6.06mを計測する。
周 溝	ほぼ全周するものと思われる。
炉	炉は、調査区外に存在しているものと思われる。
柱 穴	主柱穴は3本が確認され、住居中央から南東の壁際に2本の柱穴が認められ、主柱穴のほぼ脇に存在していることから、入口部を想定することができる。
埋 甕	存在しない。
時 期	井戸尻式期
備 考	本住居の主軸は、北西から南東方向にあるものと考えられる。また住居の形態は、南の壁と東の壁および南東の壁の状況から、周溝が直線的であることにより、多角形を呈する住居の可能性が ある。多角形を呈する住居の特徴として、各コーナーにあたる箇所主柱穴が存在することである。

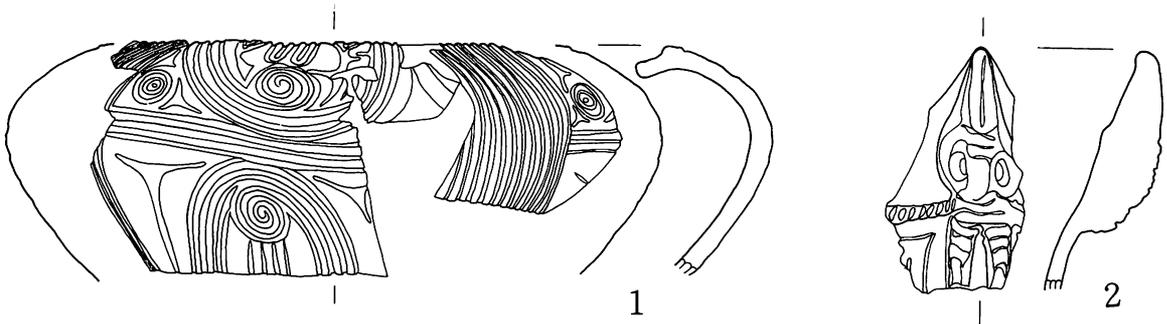
遺物説明 (第76図)

1、2は、沈線文によって文様が施されるものである。1は棒状の工具によって口縁部に横走る沈線と半円形状の沈線が施される。2は半截竹管状工具によって、半円形状に施される。

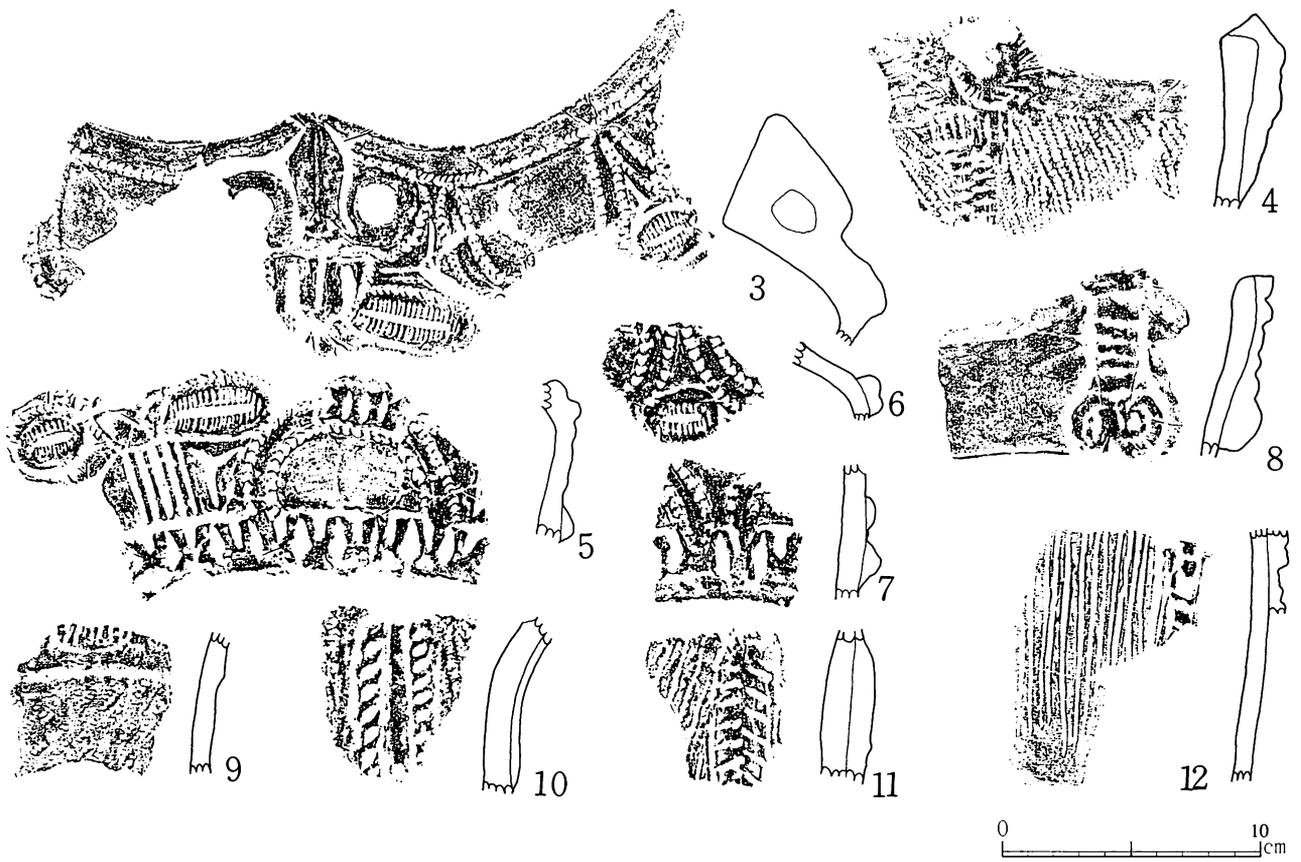
【41号住居跡から49号住居跡までは、『甲ッ原遺跡Ⅰ』(1994)で報告されている。調査年度は1993年度(第5次調査)で、その位置はA・B・C-27から38およびC-25・26・27グリッドである(第4図参照)。】



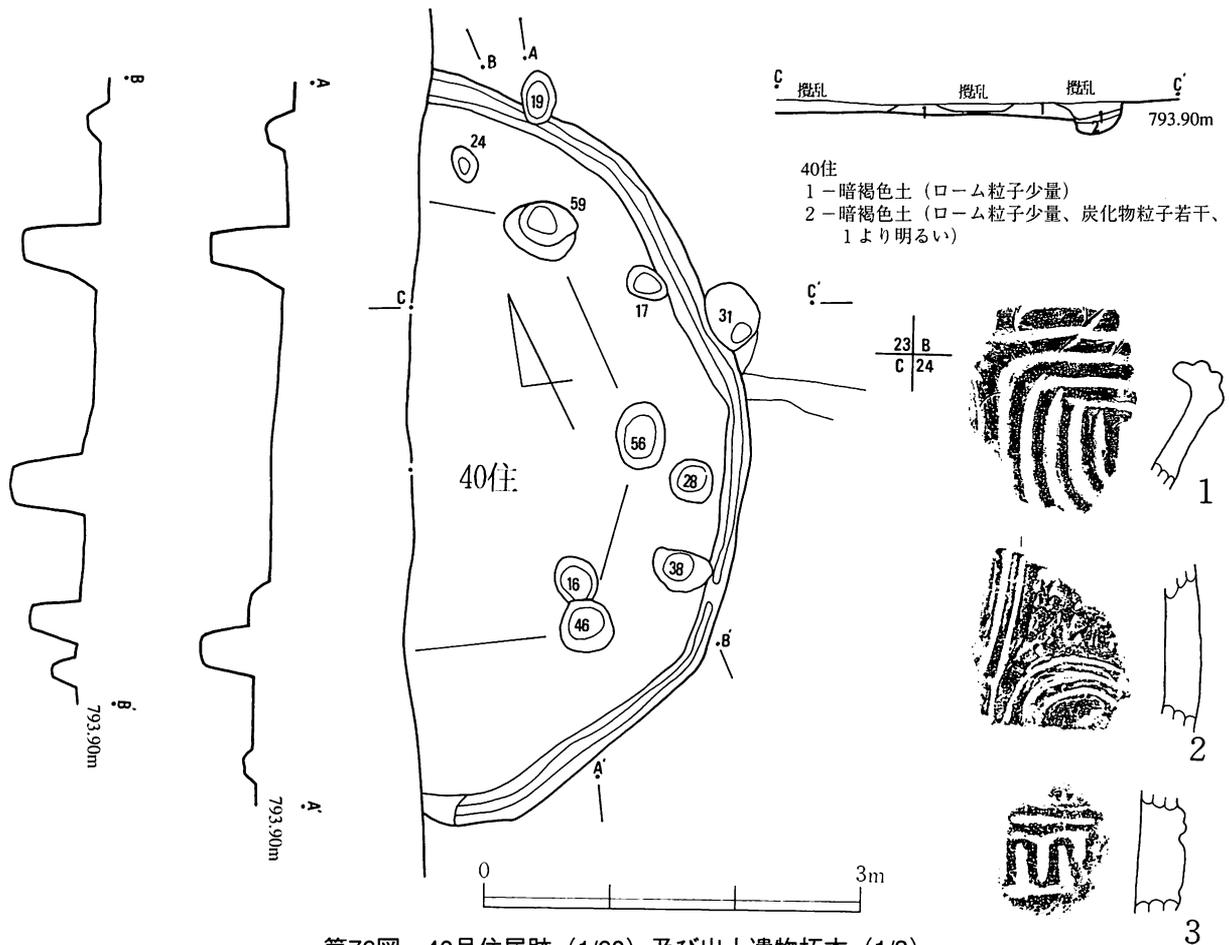
第73図 39号住居跡 (1/60)



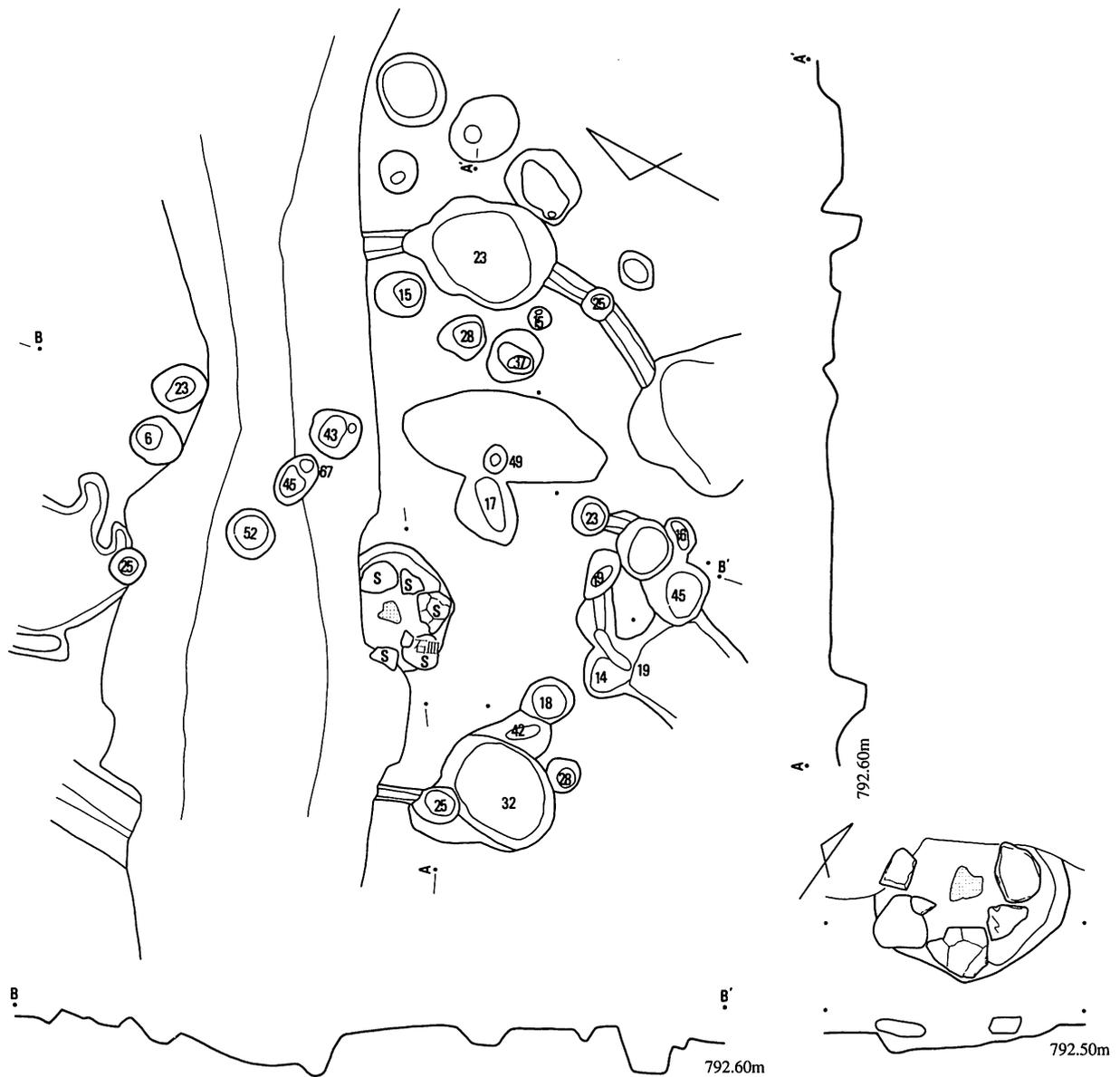
第74図 39号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第75図 39号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第76図 40号住居跡 (1/60) 及び出土遺物拓本 (1/3)



第77図 52号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/30)

52号住居跡 (第77図)

調査年度 1997年度 (第7次調査)

位置 B-15.16グリッド

平面形 円形と思われる。

規模 推定で5.00mと思われる。

周溝 部分的に認められる。

炉 石囲炉で平坦面が上に向けられ、炉石に石皿が使用される。

柱穴 柱穴は多数認められるが、支柱穴は不明である。

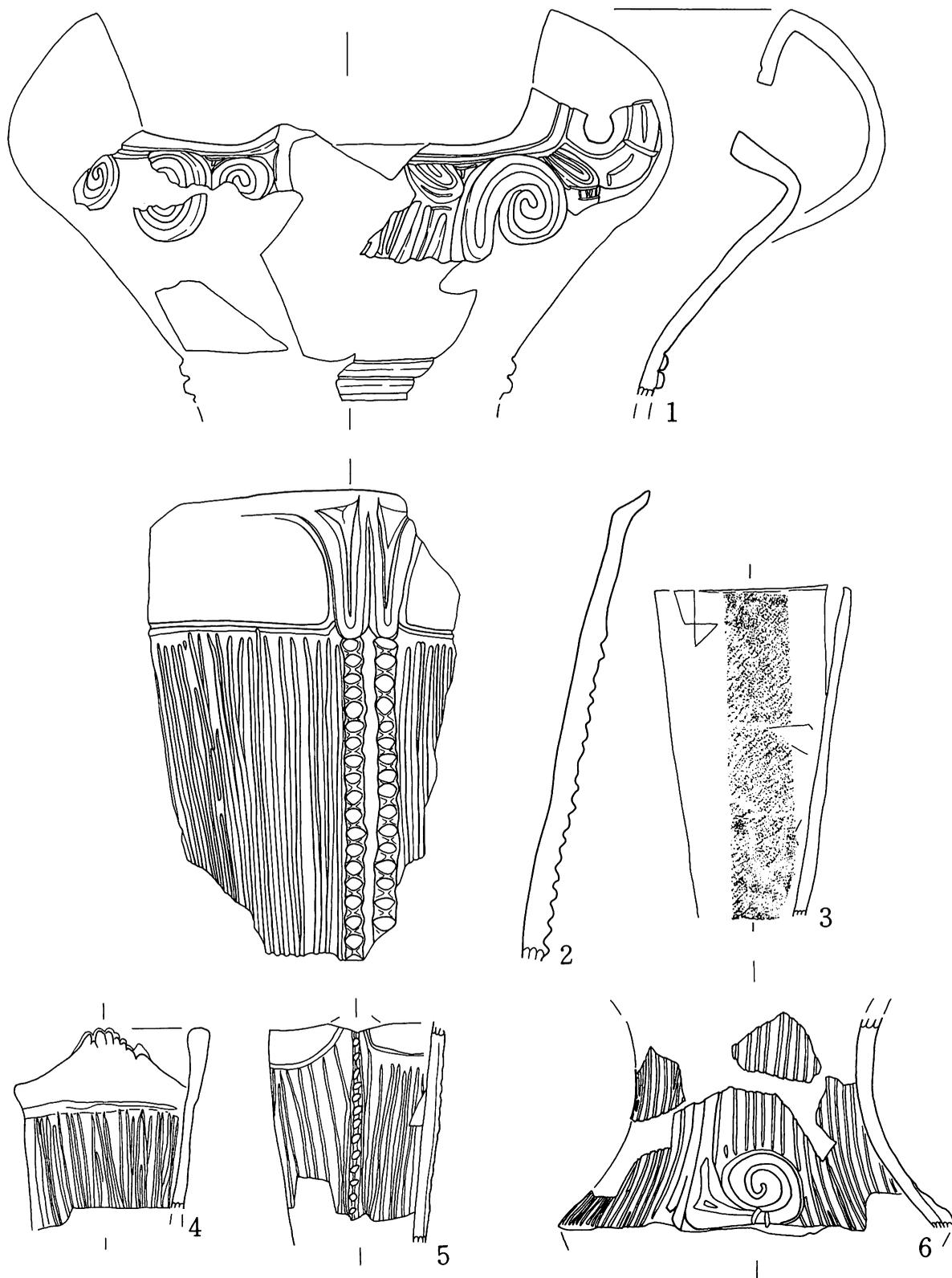
埋甕 存在しない。

時期 井戸尻式期

備考 旧河道によって、炉・床および壁は削られる。

遺物説明 (第78図)

1は2対の中空の把手が付けられるもので、3箇所は剥がれ落ちている。かろうじて1箇所に、把手の一部



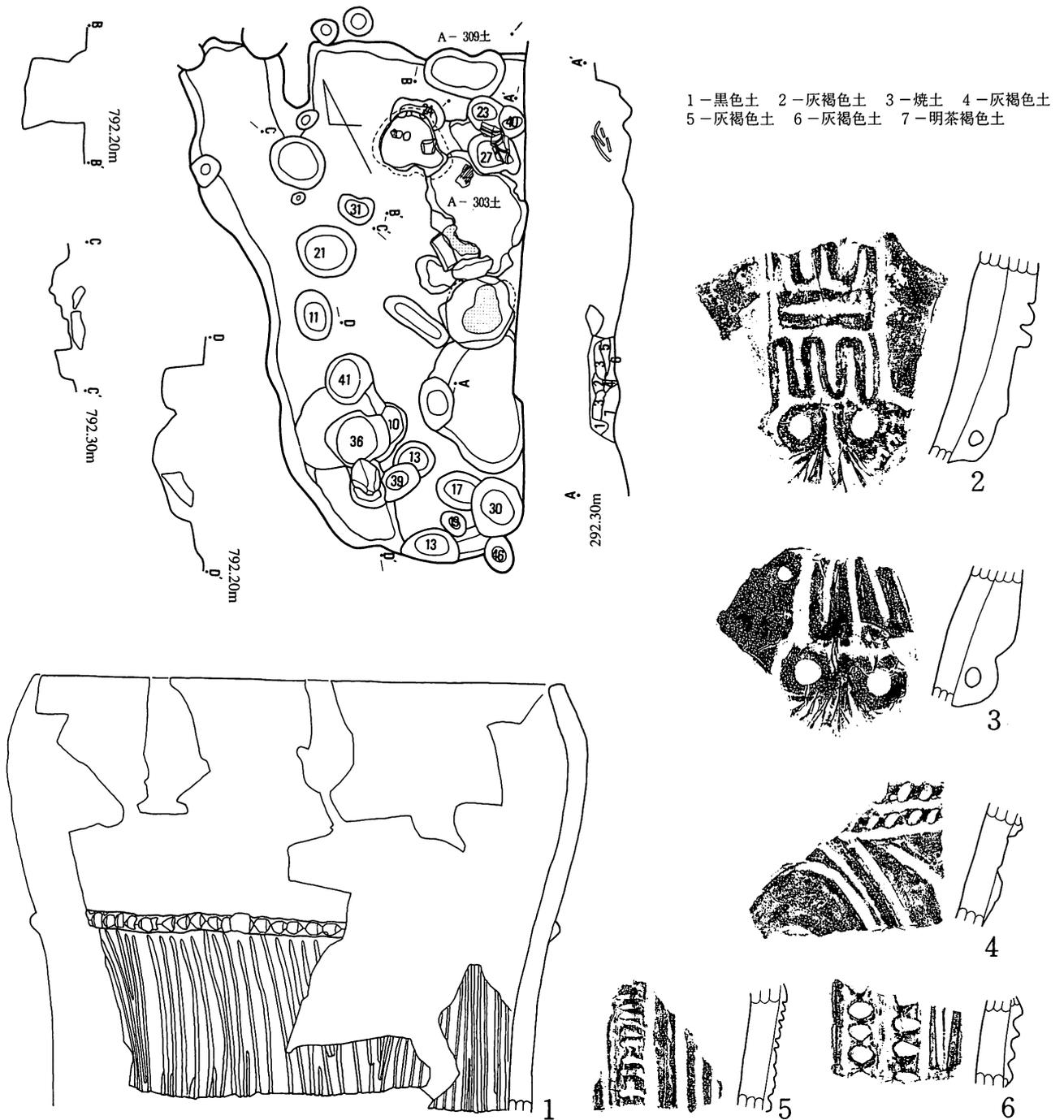
第78図 52号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

が残存する。口縁部には渦巻文を配し、頸部は無文帯を形成する。

2の口縁部には、半隆起させられた「W」字状の文様が施され、直下から刻みが施文された隆帯が垂下させられ、縦位に施された条線を左右に分かつ。

3は、地文を縄文として器面に施される。

4、5は縦位に施す条線を地文として器面に施されるもので、4は口縁部に小突起が付けられる。この小突



第79図 53号住居跡 (1/60)・出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)

起は、1対のものである。5は口縁部に半円形状に沈線文が引かれ、小突起が付けられたと思われる箇所から隆帯が垂下せられる。小突起部は欠損し、1対のものであるか1単位のものであるのかは不明である。

6は胴部下半部のみ現存し、底部は屈折底を呈するものである。条線を地文とし、半隆起の渦巻文が施されるものである。

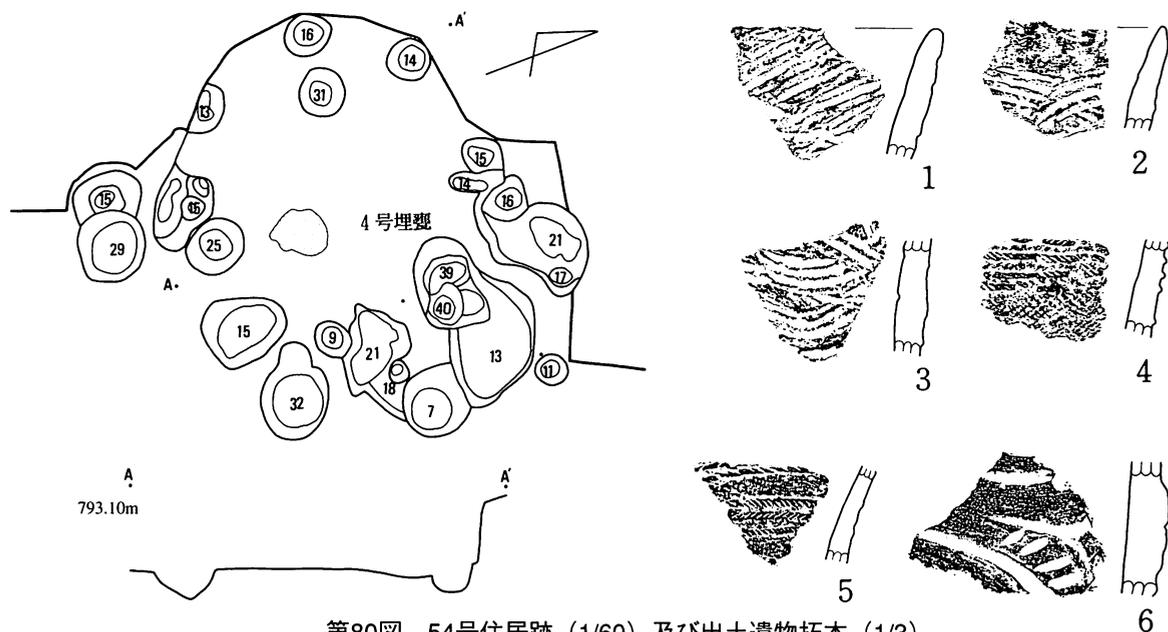
53号住居跡 (第79図)

調査年度 1997年度 (第7次調査)

位置 A-16グリッド

平面形 不明である。住居の範囲は、柱穴が巡らされた付近と考えられる。

規模 約半分は、調査区外に存在する。



第80図 54号住居跡 (1/60) 及び出土遺物拓本 (1/3)

- 周溝 一部認められる。
- 炉 石囲炉で、炉は壊される。また本炉の脇の南側に地床炉が存在する。
- 柱穴 主柱穴は不明である。
- 埋壙 存在しない。
- 時期 井戸尻式期
- 備考 本住居より新しい土坑 (303)が存在し、時期は曾利I式期である。住居の北側の壁寄りに袋状土坑が存在し、本住居に伴うものと考えられる。

遺物説明 (第79図)

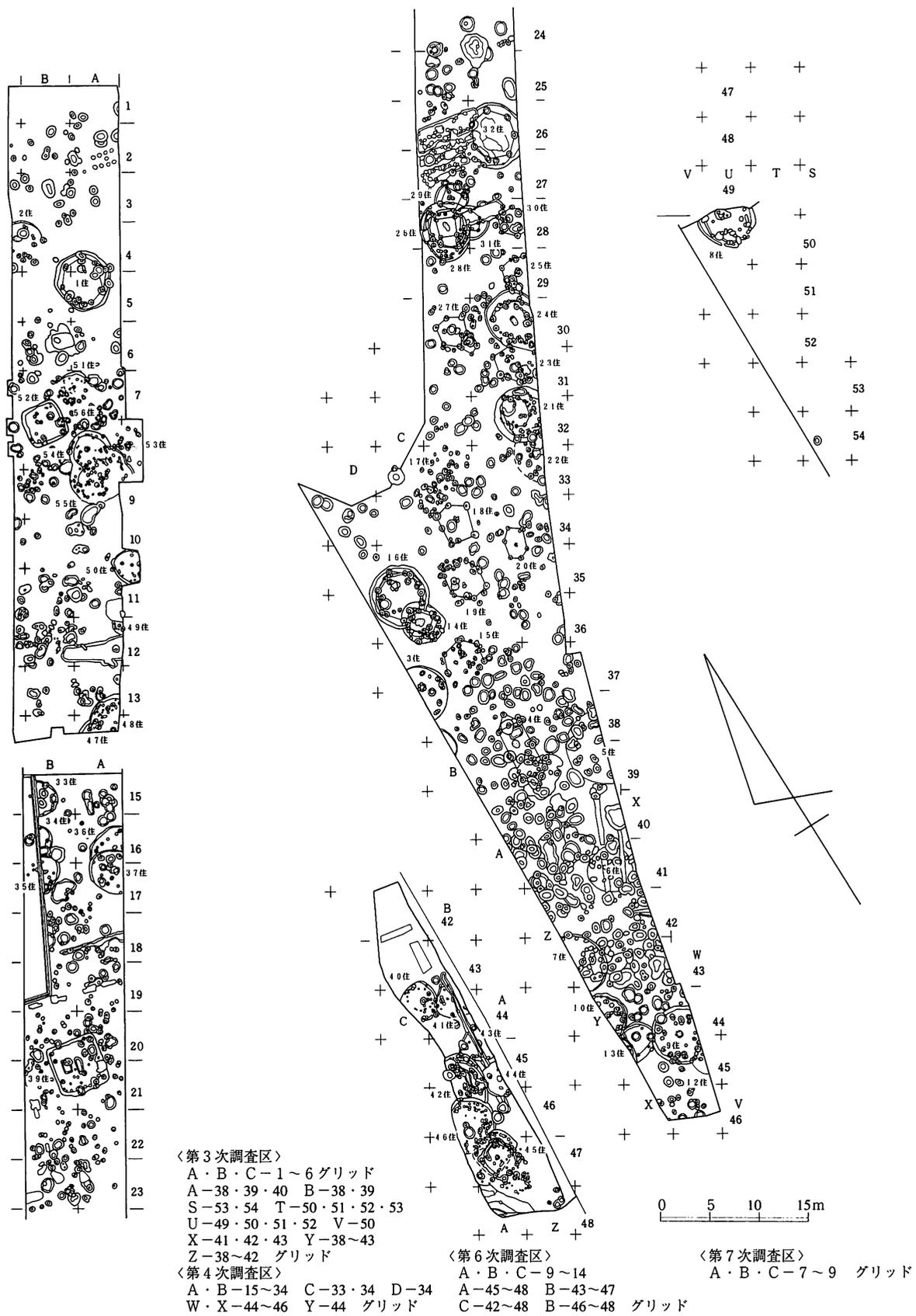
1は胴部中位から底部までを欠損するもので、口縁部は緩やかに湾曲し文様は施されない。頸部には刻みを持った隆帯が巡らされる。以下胴部には、縦位の条線で充填される。
2から6までは、拓本遺物である。

54号住居跡 (第80図)

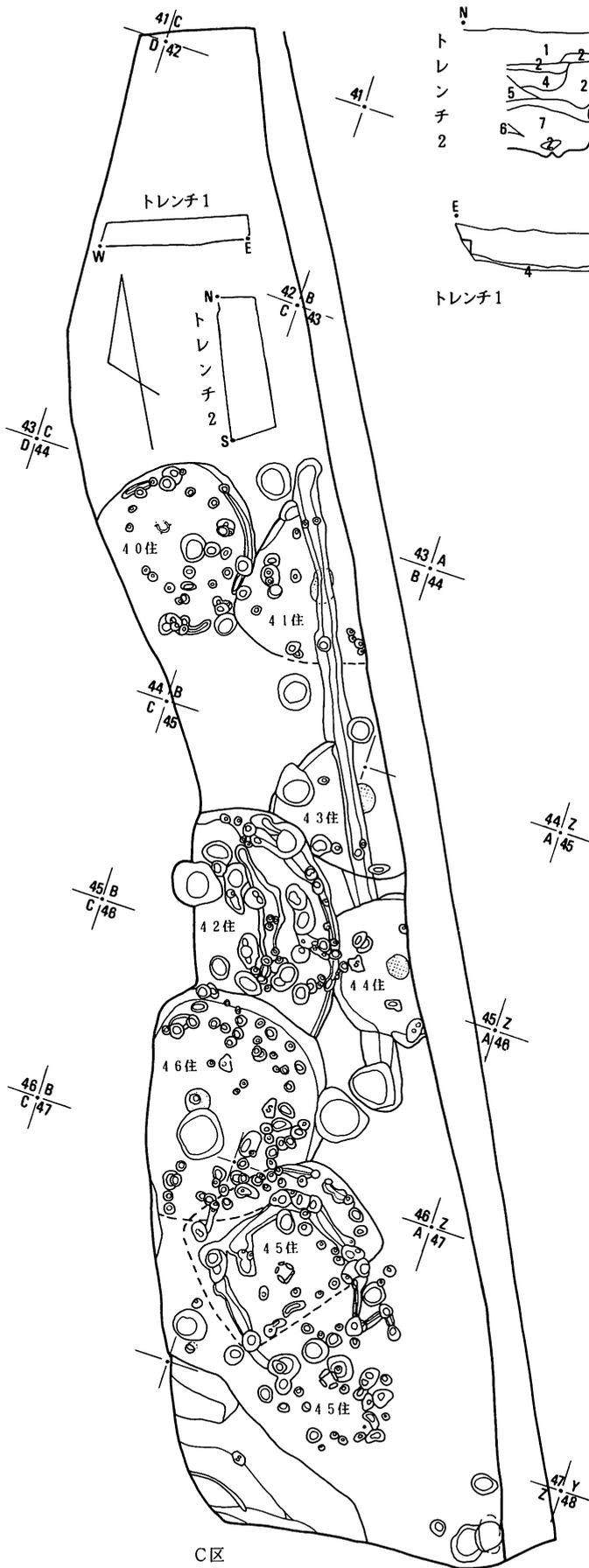
- 調査年度 1997年度 (第7次調査)
- 位置 C-16グリッド
- 平面形 不明であるが、円形を呈するものと思われる。
- 規模 推定で3.30mと思われる。
- 周溝 存在しない。
- 炉 炉石は認められず、焼土の存在から地床炉と思われる。
- 柱穴 7本から8本と思われる。
- 埋壙 本住居に伴うものではないが、本住居を壊して認められる。
- 時期 不明
- 備考 埋壙は、井戸尻式期の末頃であることから、本住居は埋壙より古い時期のものと考えられる。

遺物説明 (第80図)

1から3は条痕文系土器で、胎土に繊維を含むものである。4、5は諸磯b式期で、6は井戸尻式期に属するものである。



第81図 C区全体図 (1/600)



- 1-暗茶褐色土 2-黒褐色土
- 3-茶褐色土 4-暗黄褐色土
- 5-暗黄褐色土 (ロームブロック混入)
- 6-暗褐色土
- 7-暗黄褐色土 (黒褐色土粒子およびロームブロック多量混入)

第6次調査 (1996年度) の概要

本調査はC区の一部で、2ヶ所の調査を行った。

調査面積は、820 m²と狭い範囲でありながら、縄文時代の住居が12軒発見された。

特に、第82図の調査区ではC区の道路を挟んだ西側の狭い場所でありながら、しかも現道によって削平や畑の耕作等により、攪乱されていたにもかかわらず、遺物の出土は極めて豊富であった。

住居の残存状況は必ずしも良好とは言えないまでも、縄文時代前期の諸磯期の住居は、A区・C区をとわず確認面から床面まで深いことが幸いし、炉跡が残存していた。しかし遺物の出土は、攪乱を受けていたためにその量は少ない。

また、中期の住居も確認されたが、残存状態は良好とは言えない。

調査区の西側は、圃場整備事業によって田が広がり、水路が引かれた際に遺構が削られた状況を示している。それは、住居が半分削られていたりしたことによるものである。また、調査区の北側では埋没谷が認められている。45号住居の出土遺物は、攪乱等を受けながら、しかも壁の確認がほとんどできなかったにもかかわらず、出土遺物は豊富であった。

もう一箇所では、50号住居が調査区外に広がっており、この住居の残存状況は良好であった。住居の壁も高く、出土遺物は非常に豊富であった。遺物のほとんどのものは、外から投げ捨てられたものと考えられ、覆土中のものが大勢をしめている。

第82図 第6次調査区 (1/160)

40号住居跡 (第83図)

調査年度	1996年度 (第6次調査)
位置	B・C-44グリッド
平面形	楕円形を呈するものと思われる。
規模	長軸は3.98mを計測する。
周溝	部分的に存在する。
炉	埋甕炉で、住居の中央より北側に設置される。
柱穴	壁に沿って柱穴が認められる。西側は、柱穴によって住居の範囲がおおよそではあるが認めることができる。
埋甕	存在しない。
時期	貉沢式期から新道式期。
備考	現道より一段低い位置に存在し、耕作等によりかなり攪乱を受けていることと思われるが、このように住居跡が発見されたのは幸いである。残存状態は良好であるとは言いがたい。

遺物説明 (第84・85図)

1は炉体土器で、胴部中位から底部までを欠損する。口唇部には4単位の小突起が付され、垂下する隆帯は刻みを持って頸部を形成する。角押文によって区画された頸部には、ペン先状工具による連続押圧文が施される。頸部以下胴上半部には、隆帯によるクランク状の貼り付けがなされる。

2は口唇部をやや肥厚させる口縁部の破片で、口縁部は、緩やかに内弯する。また口唇部には、小突起が付される。

3は復元が可能な深鉢土器で、口唇部には4単位の小突起が付される。また突起の直下から垂下する隆帯には刻みが施され、頸部を形成する。隆帯によって区画された中には、ペン先状工具による縦位の連続押圧文で充填される。

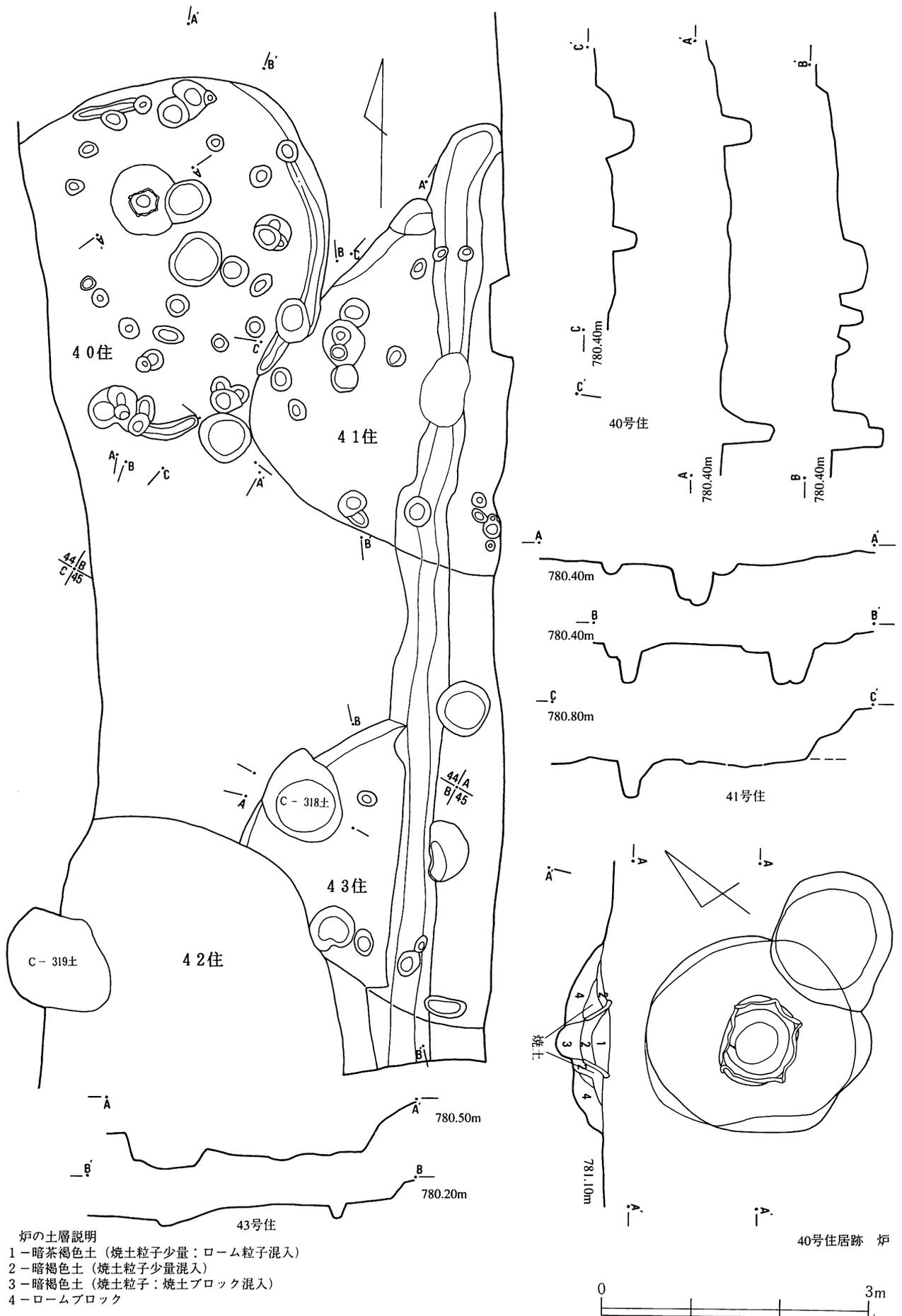
4は口縁部から胴上半部までの破片で、口唇部には渦巻き状の突起が付される。また口縁部以下は、隆帯による区画文で構成される。区画された中には、角押文によるジグザグ文が施される。

5は底部付近の破片で、胴下半部には、縦位の沈線文が施される。

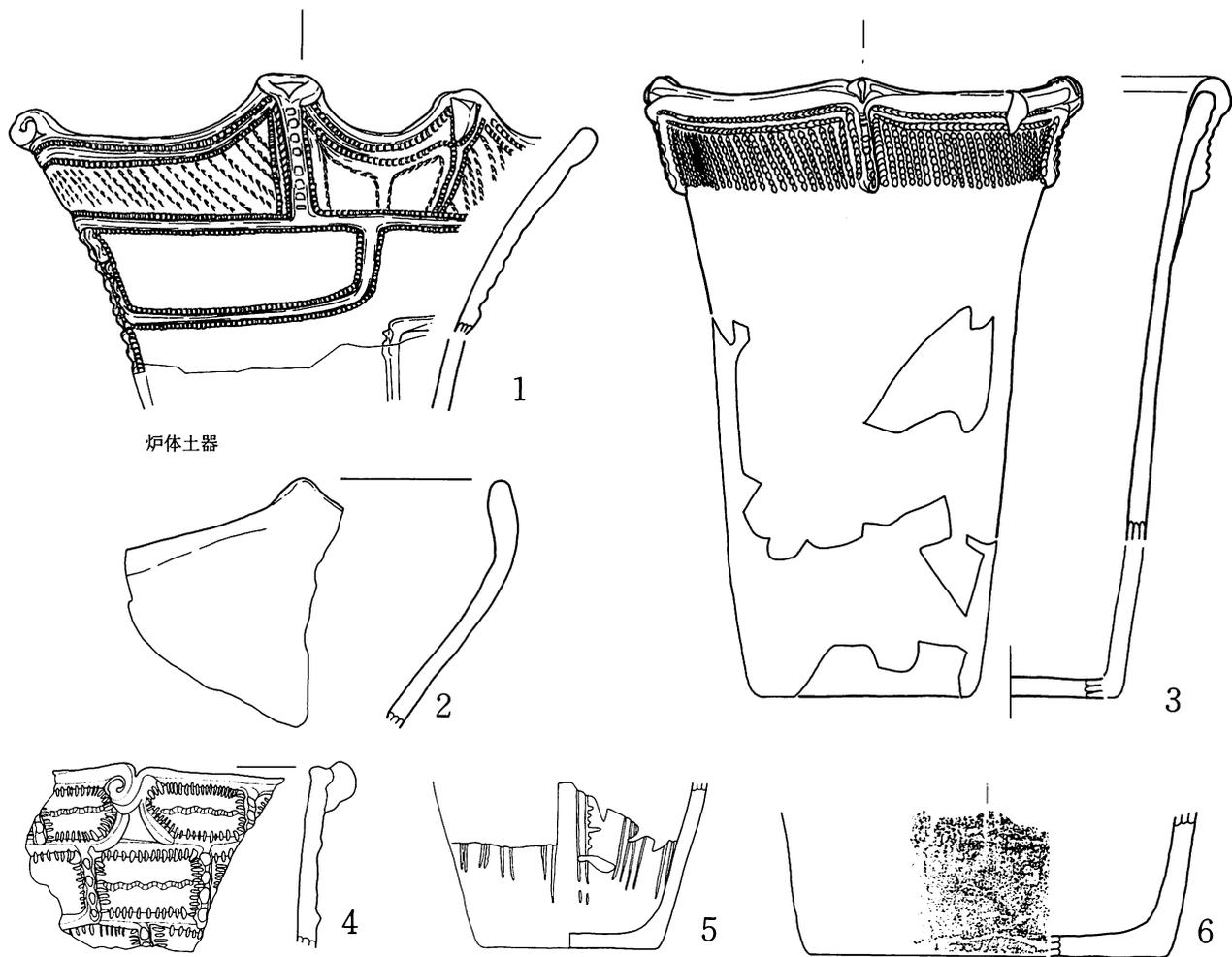
8は、p i t 4の出土遺物である。10, 11は、5と同一個体で接合されない。17は胴上半部の破片で、縄文が施されたのち、横位に沈線文が施され区画する。区画は、「X」字状に平行沈線文が施され、中央から縦位に沈線文が施される。19は浅鉢の口縁部で、角押文とジグザグ文で構成される。

41号住居跡 (第83図)

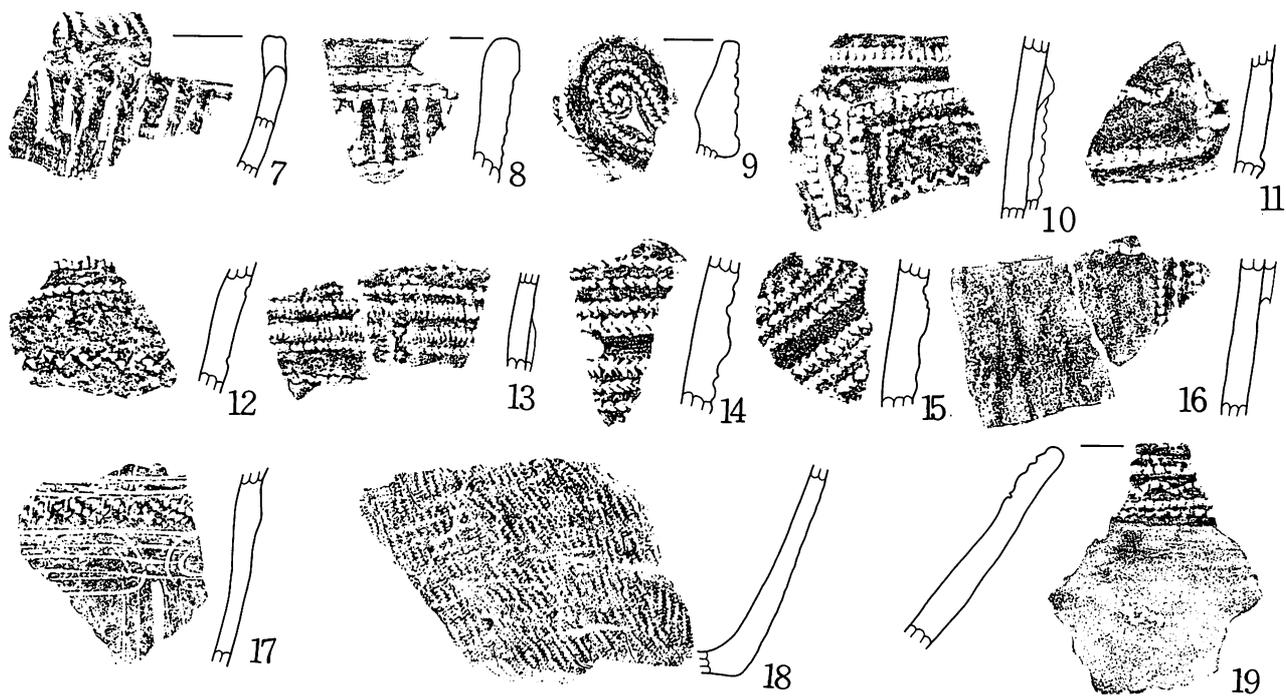
調査年度	1996年度 (第6次調査)
位置	B-44グリッド
平面形	楕円形を呈するものと思われる。
規模	推定で、3.60m前後と思われる。
周溝	存在しない。
炉	地床炉である。また炉は、現道路および溝によって壊される。
柱穴	壁に沿って小穴が巡らされている。
埋甕	存在しない。
時期	諸磯式期と思われる。
備考	諸磯式期の住居跡であったことにより、深い攪乱を受けながらも住居跡が確認され、また地床炉も残存していた。



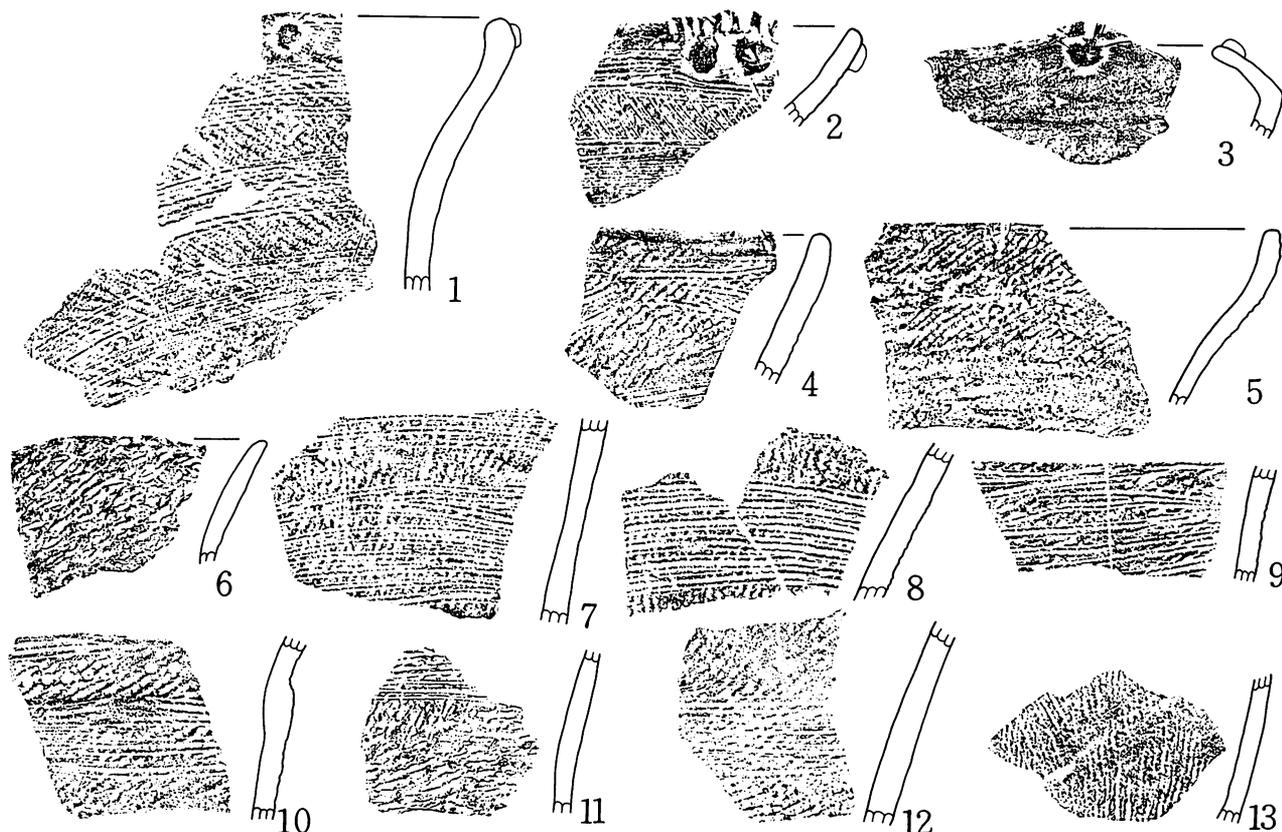
第83図 40・41・43号住居跡 (1/60) 及び40号住居埋壺炉 (1/20)



第84图 40号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第85图 40号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第86図 43号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

43号住居跡 (第83図)

調査年度 1996年度 (第6次調査)

位置 A・B-44.45グリッド

平面形 楕円形を呈するものと思われる。

規模 推定で、3.50m前後と思われる。

周溝 存在しない。

炉 地床炉である。また炉は、溝によって壊される。

柱穴 壁に沿って認められる。

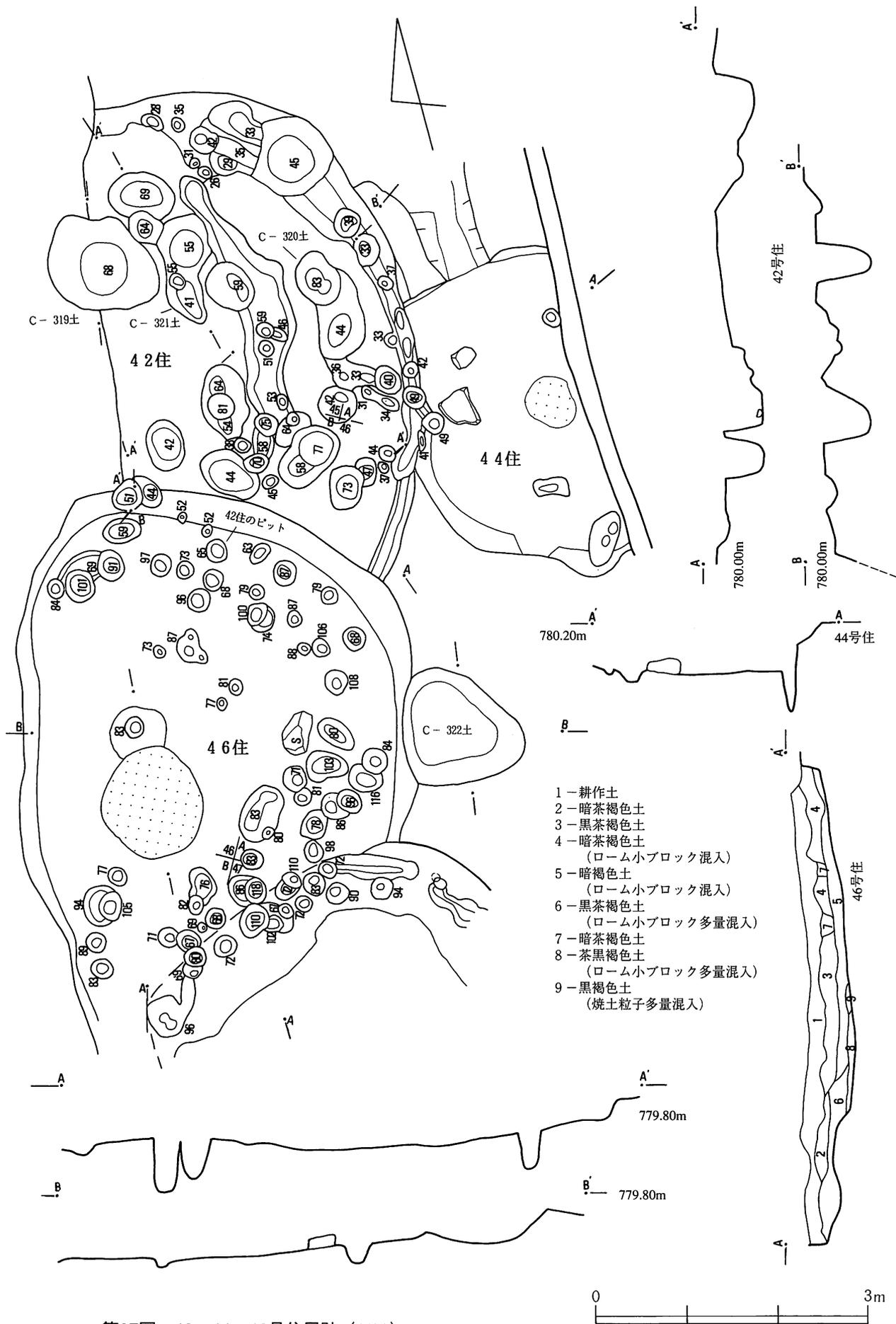
埋甕 存在しない。

時期 諸磯b式期

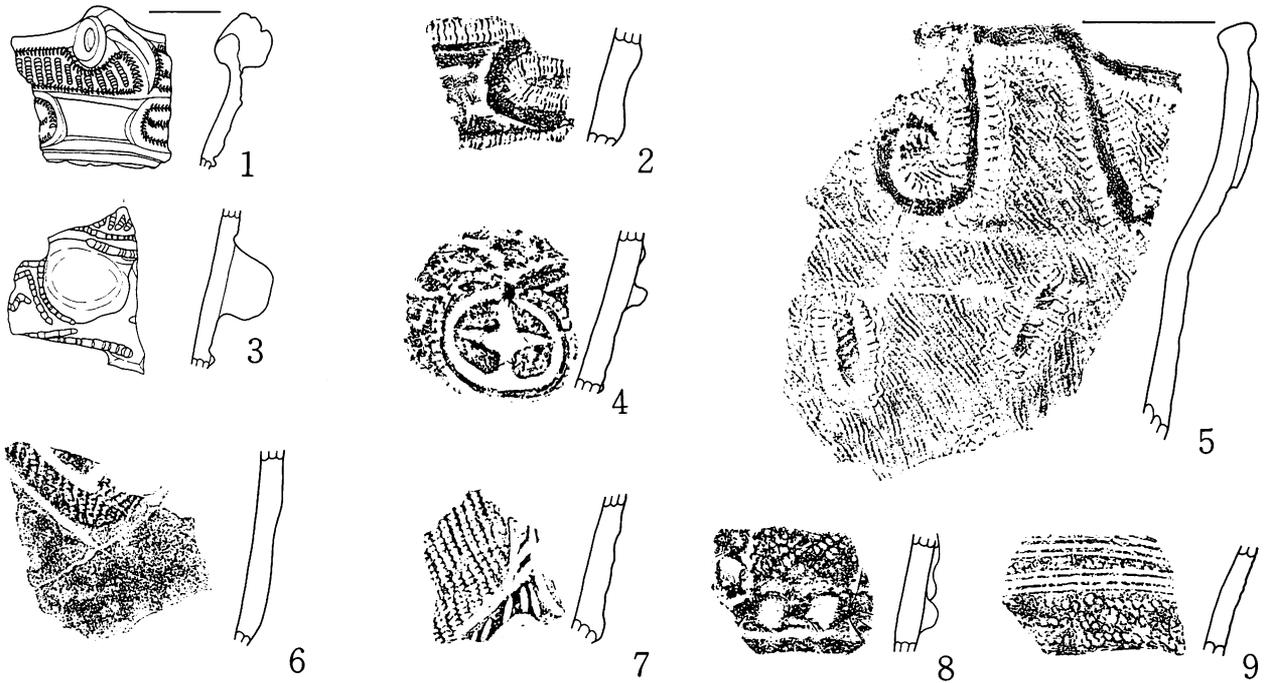
備考 C区では、第3、4次調査でこの時期の住居跡は認められなかったが、今回の調査によってこの時期の住居跡が存在していたことが明らかとなった。

遺物説明 (第86図)

1から3は、口唇部にボタン状の貼り付けが施されるもので、どの遺物も縄文を地文とするものである。遺物のほとんどのものは平行沈線文を伴うもので、中には2のように斜行するものも存在する。また、10のような沈線文によって区画された中に、円形の刺突文が横位に施される遺物も存在する。



第87図 42・44・46号住居跡 (1/60)



第88図 42号住居跡出土遺物実測図（1/4）及び拓本（1/3）

42号住居跡 （第87図）

調査年度 1996年度（第6次調査）

位置 A・B-45.46グリッド

平面形 ほぼ円形を呈するものと思われる。

規模 残存している箇所、6.10mを計測する。また内側に周溝が存在していることから、拡張住居と考えられる。

周溝 新旧ともに認められる。

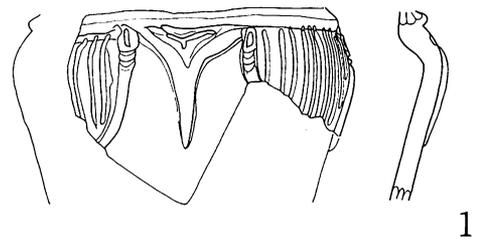
炉 確認されない。

柱穴 多数認められる。

埋甕 存在しない。

時期 井戸尻式期。

備考 本住居跡の西側は、圃場整備された田が広がり、住居のすぐ脇には水路が掘られているため掘削されている。



第89図 46号住居跡出土遺物実測図（1/4）

遺物説明 （第88図）

藤内式期から井戸尻式期まで遺物は出土しており、第89図の46号住居跡出土遺物は、本住居跡と重複関係にあり、42号住居跡の覆土の遺物と考えられる。この土器から、本住居跡の時期を決めたわけであるが、周溝の存在から本住居跡より古い住居跡の存在が想定されるとともに、周辺に藤内式期の住居が構築されていたことが考えられる。特に5は、藤内式期でも古い段階に位置づけられるものと思われる。

44号住居跡 （第87図）

調査年度 1996年度（第6次調査）

位置 A-45.46グリッド

平面形 ほぼ円形を呈するものと思われる。

規 模 炉を中心として、3.50mを計測する。
 周 溝 存在しない。
 炉 ほぼ住居の中央に設置される。
 柱 穴 3本が確認されている。
 埋 甕 存在しない。
 時 期 諸磯式期と思われる。
 備 考

46号住居跡 (第87図)

調査年度 1996年度 (第6次調査)
 位 置 A・B-46.47グリッド
 平 面 形 楕円形を呈するものと思われる。
 規 模 推定で、5.50m前後と思われる。
 周 溝 存在しない。
 炉 地床炉である。
 柱 穴 壁に沿って多数存在する。
 埋 甕 存在しない。
 時 期 諸磯c式期。
 備 考 322土に壊される。地床炉より古い落ち込みが存在する。柱穴は二重に巡らされているように感じられ、1軒なのかそれとも2軒(拡張)なのかは不明である。

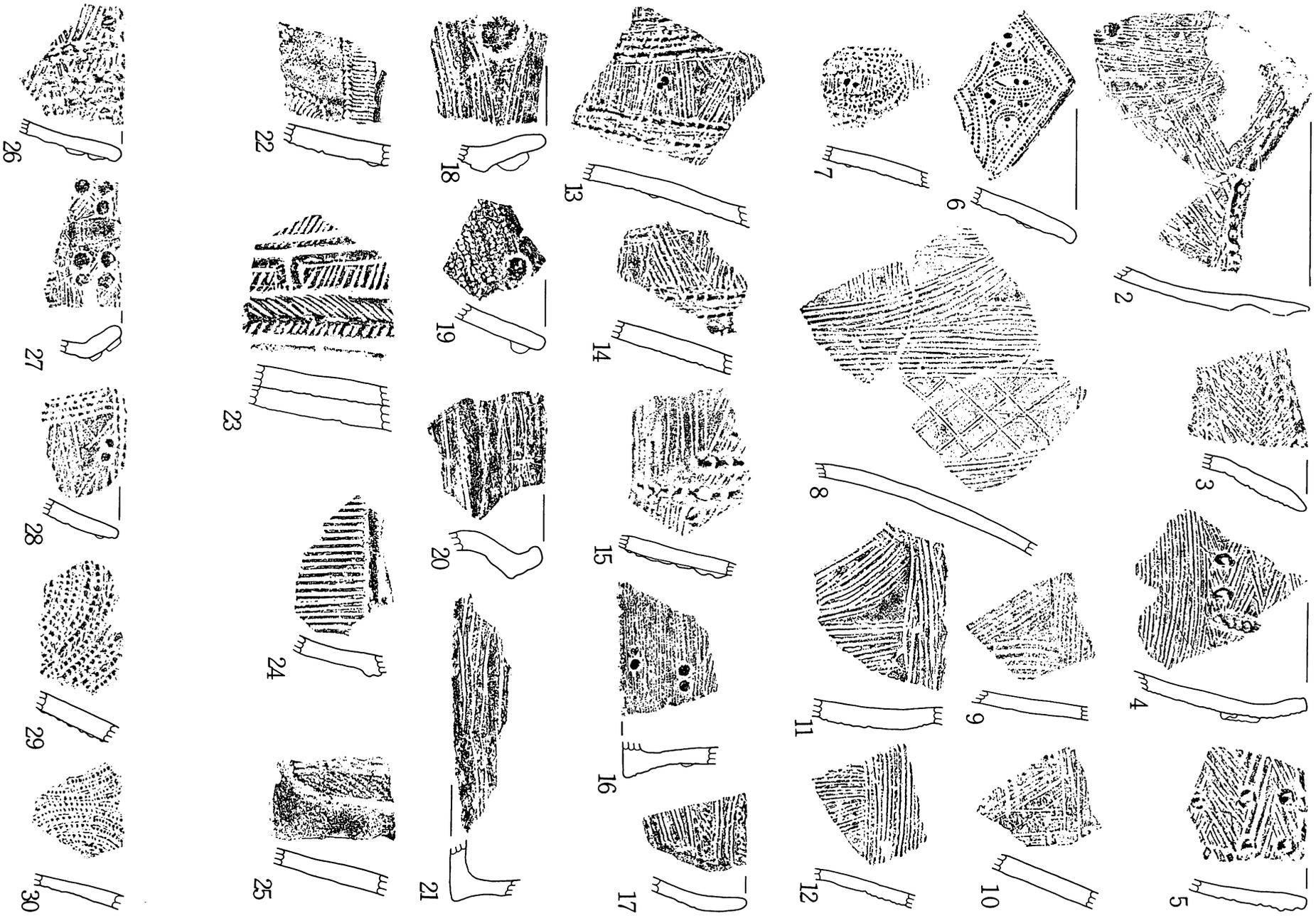
遺物説明 (第89・90図)

1は口縁部と胴下半部を欠損するもので、頸部には横位に隆帯が巡らされ、以下膨らみを持ちながら内傾するものである。半円状に区画された区画内には縦位の沈線文で充填される。また、半円状に区画された隆帯の間には、三叉文風に隆帯が貼り付けされる。この土器は、42号住居の遺物と考えられる。

2から16までは、諸磯c式期に属するもので、17から21までは、諸磯b式期に属するものである。そのうち5はp i t 3、8はp i t 1からの出土遺物で、20は本住居の炉と重複する土坑からの出土である。23、24、25は井戸尻式期に属するものと思われ、42号住居の遺物と考えられる。26から30までの遺物は、45号住居の出土遺物で、重複している関係上入り込んだものと考えられる。

45-A号住居跡 (第91・92図)

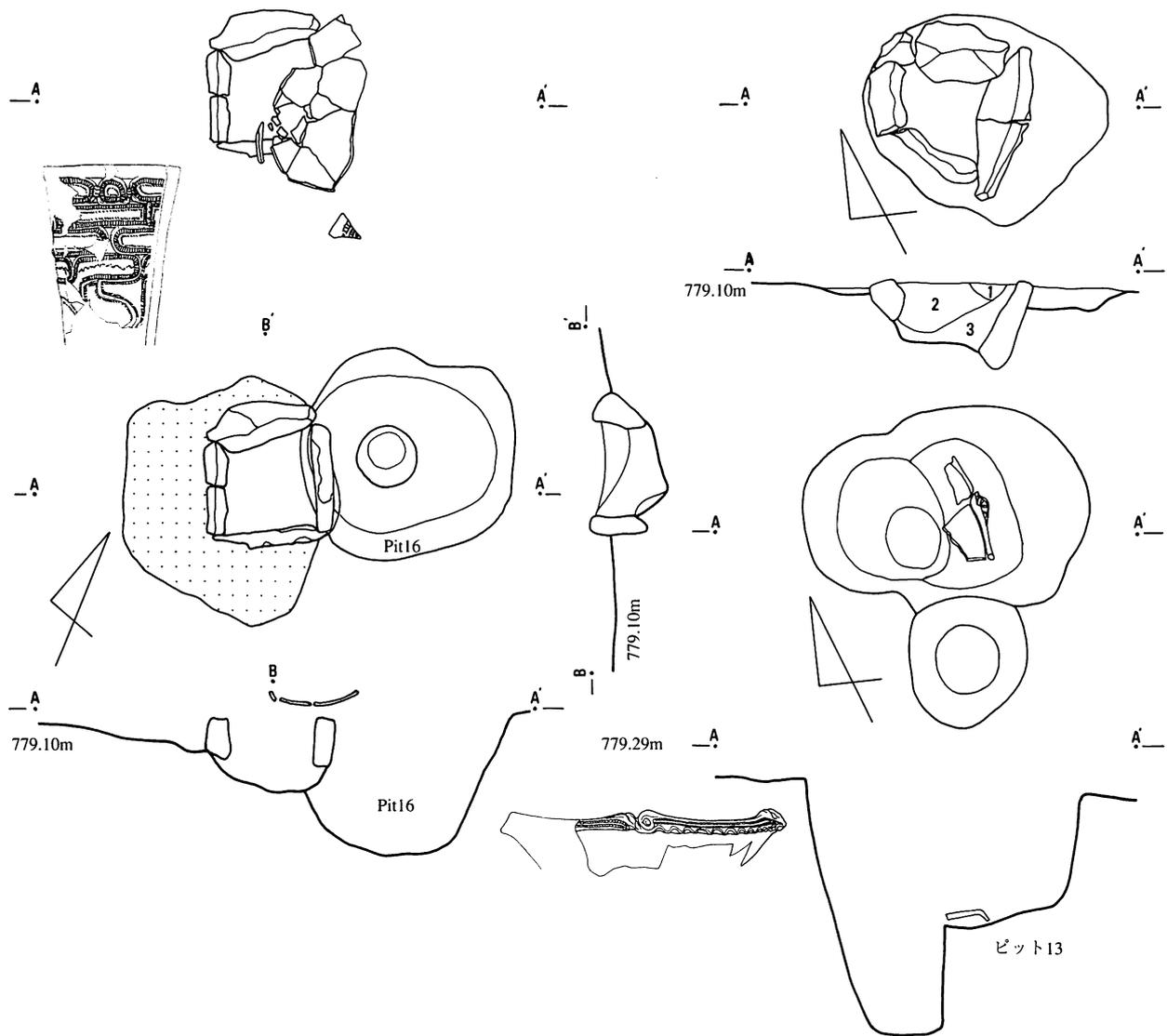
調査年度 1996年度 (第6次調査)
 位 置 A-47グリッド
 平 面 形 確認面から床面まで非常に浅いため、形態は不明である。
 規 模 推定で、3.10m前後と思われる。
 周 溝 存在しない。
 炉 石囲炉で、ほぼ方形を呈する。4枚の平坦な石で構築され、ほぼ住居の中央に設置される。また炉石の南西には床面が焼けており、古い住居跡が存在しているものと思われる。炉の上に第94図1の土器が、炉の直上から検出されている。
 柱 穴 主柱穴は、4本と思われる。
 埋 甕 存在しない。
 時 期 新道式期。



第90图 46号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



第91图 45-A·B号住居跡 (1/60)



第92図 45-A・B号住居跡炉 (1/20) 及びピット13 (1/20)

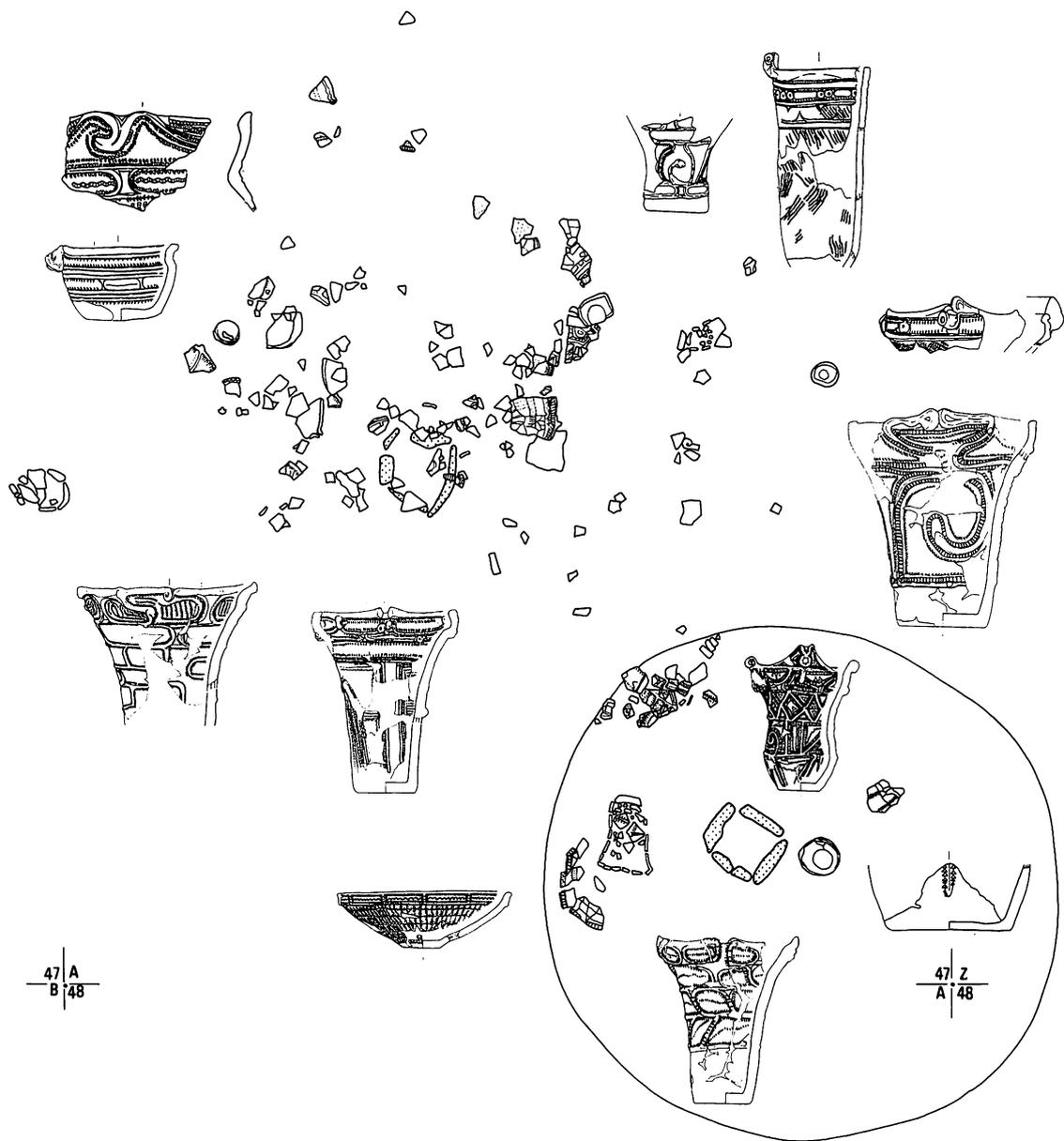
備考 柱穴の本数および床面の焼土から、古い住居跡の存在が考えられる。本住居跡の炉の形態は、この時期としては非常に珍しく、整った石囲炉である。住居の確認時に、本住居のほうが新しいことが判明している。また攪乱が激しかったわりには、遺物の遺存状態はかなり良好であった。

遺物説明 (第93・94・95・96図)

1は底部を欠損し、口縁部から胴下半部の約半分が現存する。第1文様帯の口唇部には無文帯が形成され、直下の第2文様帯には楕円形状の区画文が施される。楕円形と楕円形の間には円形状の隆帯で区画がなされ、区画内の脇にはカタピラ文が巡らされる。第3文様帯には長方形の区画帯が横位に施され、縦位の隆帯によって区画される。第4文様帯は楕円状区画帯が展開する。第2文様帯から第4文様帯まで文様構成を同様に行い、第5文様帯では、一部開く楕円形状の区画が施され、クランク状を呈しながら垂下させられる。区画内の中央にはペン先状工具によるジグザグ文が施される。

2の第1文様帯は隆帯による楕円形状区画が口縁部で形成され、直下の第2文様帯と第3文様帯は同様な手法によって構成される。第4文様帯は、隆帯を菱形に貼り付けがなされ、以下無文帯を形成する。第2文様帯から第4文様帯まで区画内の中央には、ペン先状工具による連続刺突がジグザグ状に施文される。

3は浅鉢である。残存する部分は、口縁部の約半分である。口縁部の外面には、現存する長方形の区画帯が



第93図 45-A・B号住居跡遺物出土状況

横位に6区画が展開し、推定される区画は10区画と考えられる。また隆帯の脇と区画の中央には、ペン先状工具による刺突文がジグザグに施される。区画帯直下には、指頭圧痕が明瞭に残される。

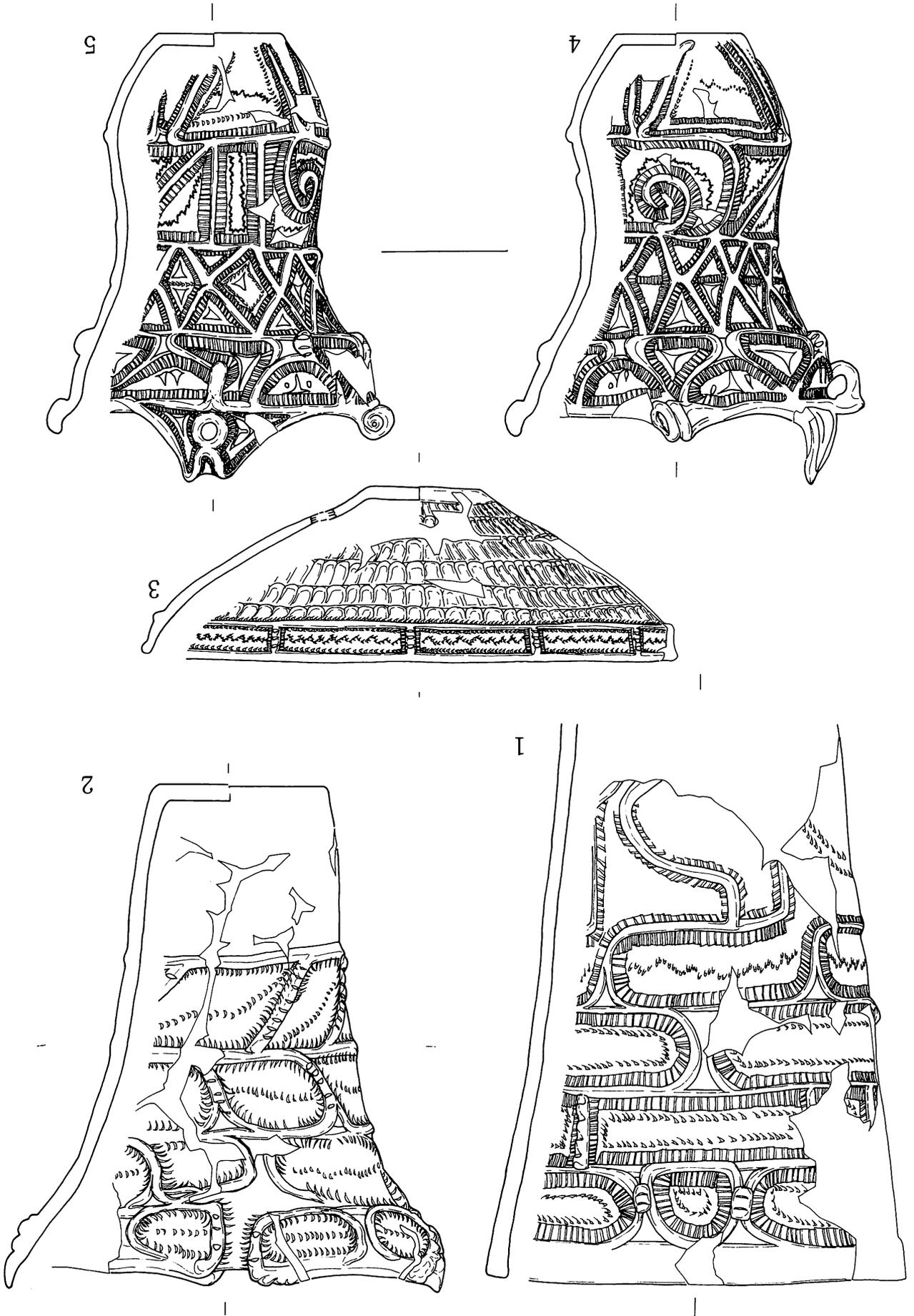
4は口縁部に渦巻き状の小突起が3ヶ所に付されるとともに、大突起が1ヶ所耳状把手の直ぐ上に付けられるものである。第1文様帯である口縁部文様帯は、半円状の区画とタマネギ状の区画が施される。区画内には三叉文が区画の中央に施文される。第2文様帯は細く括れた頸部にあり、三角形区画が2段に施され、網目状を呈する。第3文様帯は、渦巻文、長方形区画と三角形区画文が施される。5は4を90°ずらした図で、渦巻文が施文された上部の口唇部には、渦巻き状の小突起が、長方形区画の上部にある口唇部にはおお突起がそれぞれ付されている。第4文様帯は三角形を呈する区画で、横位に展開する。ペン先状工具による連続刺突文は、第2文様帯の一部（耳状把手を挟んだ菱形状区画内）と第3・4文様帯の区画内に施される。

45-B号住居跡 (第91・92図)

調査年度 1996年度(第6次調査)

位置 A-46.47グリッド

第94图 45-A号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



平面形	円形ないし長方形と考えられる。本住居跡は、周溝を有しきれいに巡る住居と、長軸を東西に有する長方形の住居と重複する。
規模	周溝が巡る住居は、推定で3.60m前後で、また長方形の住居は、推定4.30mと思われる。
周溝	ほぼ全周する。長方形の住居は、部分的に認められる。
炉	石囲炉で、ほぼ五角形を呈する。また炉は、ほぼ住居の中央に設置される。
柱穴	主柱穴は、4本と思われる。
埋甕	存在しない。
時期	新道式期
備考	壁が確認された住居は長方形を呈する住居で、東壁の高い部分のみだけである。現在の道路より一段低い箇所であるにもかかわらず、また壁が確認されなかったものの出土遺物は多量であった。この時期も諸磯期と同様、住居はかなり深く掘り込まれていたものと思われる。

遺物説明 (第93・94・95・96図)

6は、第93図のように炉の周辺の出土遺物である。胴下半部から底部を欠損するもので、口縁部には渦巻き状の小突起が付される。第1文様帯は崩れた楕円形状区画が横帯し、区画内にはペン先状工具による刺突が隆帯に沿って施文される。第2文様帯は楕円形区画文が、第3文様帯は長方形を呈する区画が施される。直下は、空白の多い区画帯が展開し、更に直下にはクランク状を呈する隆帯が施文される。それぞれが区画される隆帯の脇には、ペン先状工具による刺突が施文される。

7の口唇部には、隆帯によって眼鏡状の把手を形成する。直下には第1文様帯として、半円形状区画と三角形区画が交互に横帯させられ、三角形区画の間には、短い隆帯が刻みをもって貼り付けされる。第2文様帯は、逆「の」字状に隆帯が貼り付けられる。各隆帯の脇には角押文が連続させられ、さらにその脇にはペン先状工具による連続刺突が施される。

8は口縁部を欠損するもので、文様構成は7に類似するが、逆「の」字状文の直下には楕円形区画文が横帯させられ、ペン先状工具による区画は施されない。

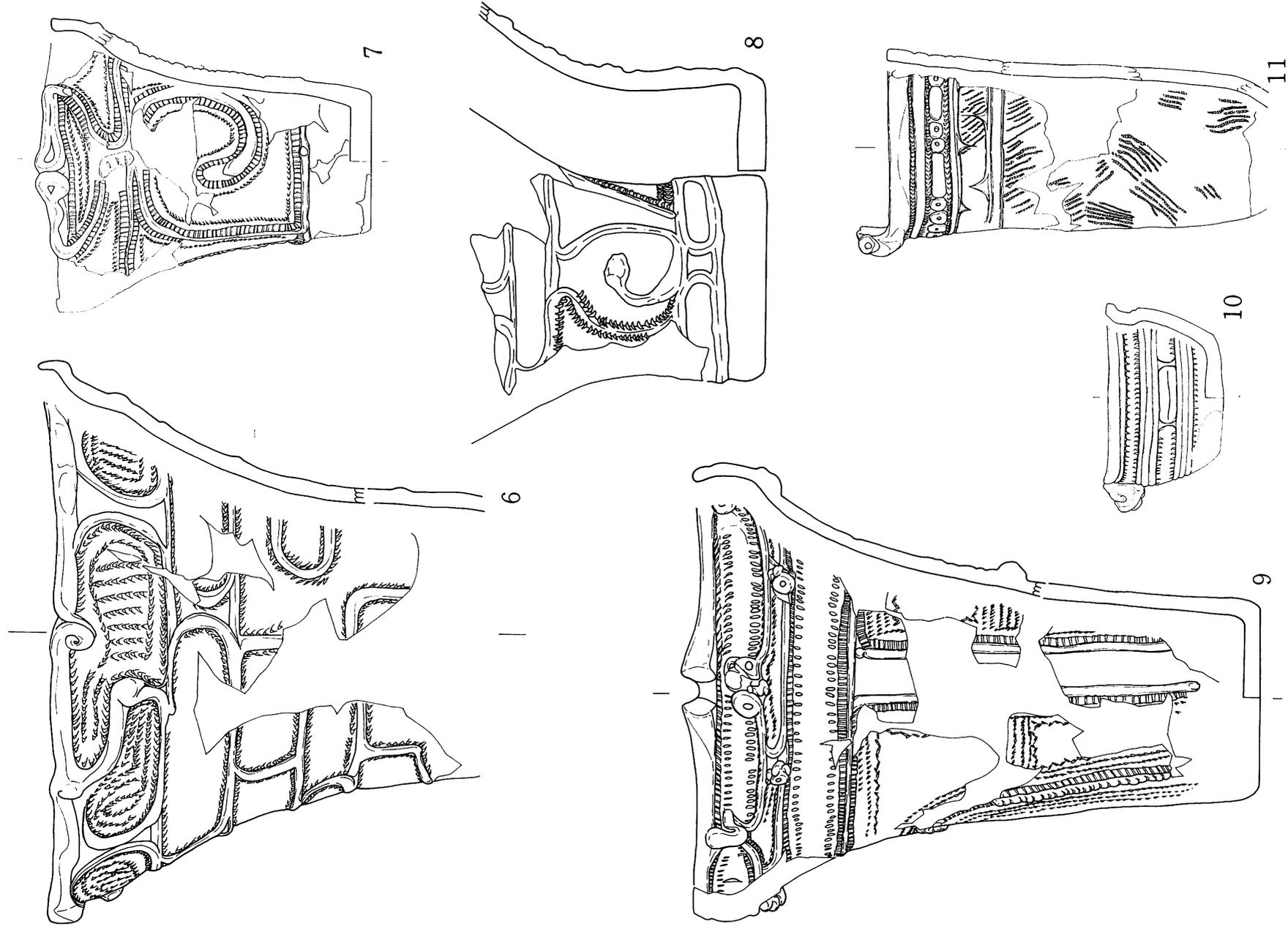
9の口唇部は、「U」字状に途切れており、直下の第1文様帯には眼鏡状の小突起が付される。また区画される箇所にも小突起が付される。第2文様帯は、横位に角押文と刺突文が連続させられる。第3文様帯は縦割り区画と逆「U」字状文が施され、各隆帯の脇には角押文とペン先状工具による刺突が施文される。

10は小型の鉢で、口縁部のほとんどが欠損する。口縁部の括れ部には渦巻き状の把手が付され、対応する箇所は欠損する。第1文様帯の括れ部には横位に刺突文が施され、上部のものは半截竹管状工具によるもので、下部のものは半截竹管状工具を縦にして施文を行っている。残存している箇所では、途切れることなく巡らされている。また胴部中位には、第1文様帯と同様な手法で文様が施されるとともに、直ぐ脇には空白を持つ楕円形状区画が、次に刺突が施された楕円形状区画が巡らされる。対をなし欠損する把手の箇所には、縦位に連続する半截竹管状工具による刺突が施され、横位に展開する区画帯を分かち。

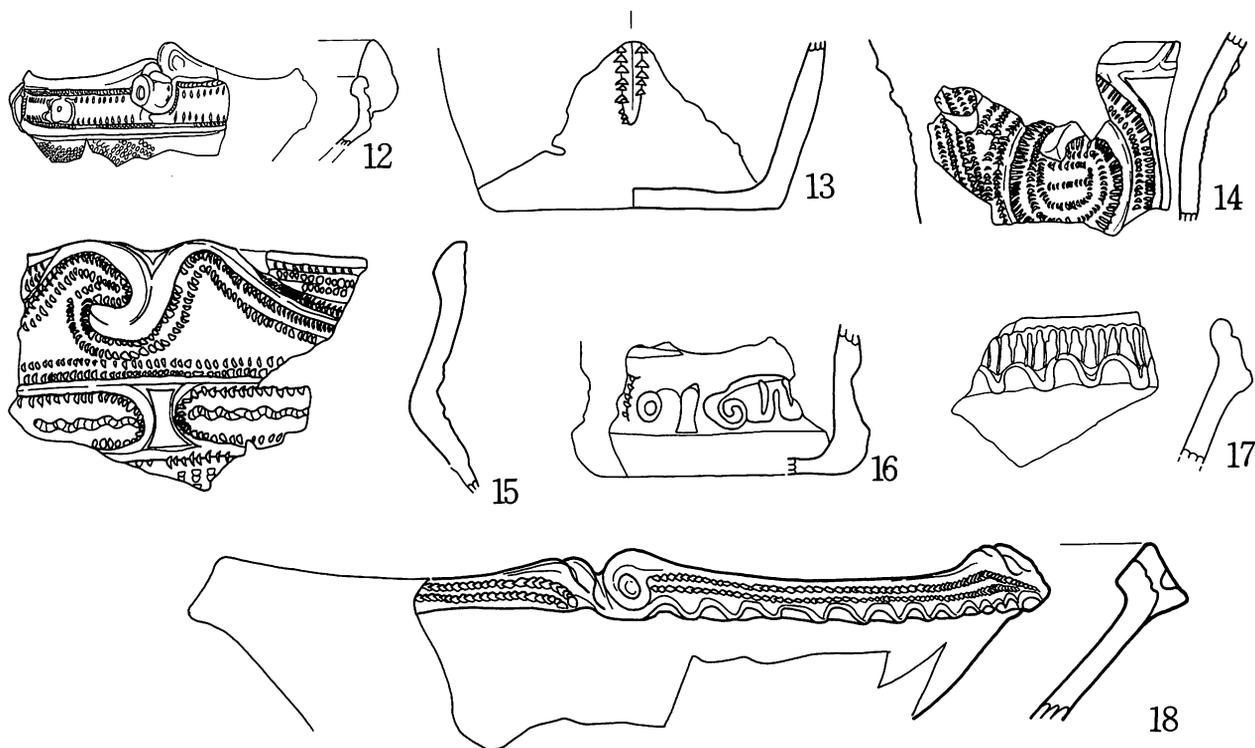
11は底部を欠損するもので、縄文を地文とするものである。口唇部には1ヶ所、動物を形作ったと思われる突起が付される。目を表す円形の貼り付けがなされ、口を思わせる沈線が施される。頭と思われる箇所から第1文様帯を形成する円形の文様帯に把手が付された痕跡が認められる。第2文様帯は、円形文が3ヶ並び次に空白部、次に2ヶの円形文、次に空白部と並び、突起の対面には3ヶの円形文と続く、更に空白部が構成され、再度3ヶの円形文が続き、空白部、そして3ヶの円形文と並び、把手が付されたと思われる箇所まで交互に施文される。第2文様帯は、上下交互に三角形の抉りが施される。また突起が施された箇所の第1文様帯下部から縦位に沈線文が4条引かれ、横走る沈線文を分断させる。

12の文様構成は9と類似するものの、頸部には縄文が施されるものである。

13は45-A号住居の遺物である。底部付近の遺物で、隆帯の脇には刺突文が施される。



第95图 45-B号住居跡出土遺物実測図(1/4)

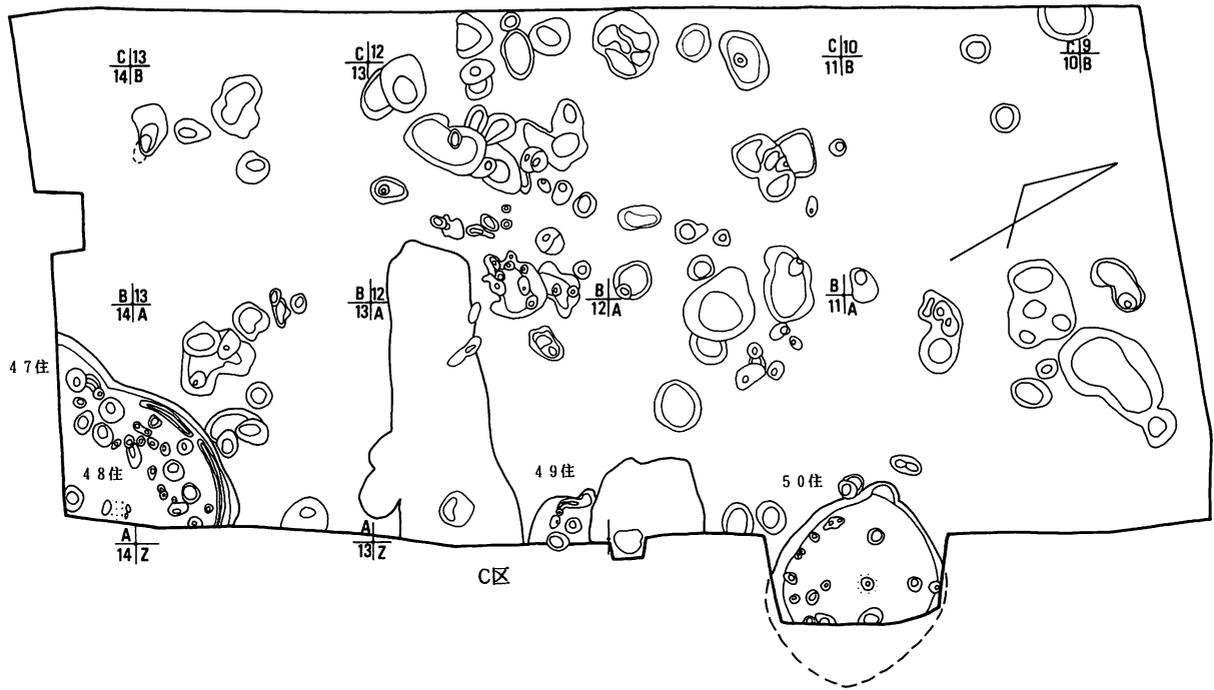


第96図 45-A・B号住居跡出土遺物実測図(1/4)

14は胴部中位に、逆「の」字状に隆帯の脇に刺突が施されるもので、7、8に類似する。

15は45-B号住居の遺物で、胴部に膨らみをもち頸部で括れ、口縁部が開く器形を呈するものである。口縁部文様帯は、隆帯による波状の貼り付けと脇に刺突文が施されるものである。第2文様帯は頸部にあり、楕円形区画がなされ、区画内には連続するジグザグの角押文が施される。

18はp i t 13の出土遺物である。深いp i tの方が新しく、遺物は新しく掘られた段階で壊されたものと思われる。本遺物は浅鉢の口縁部で、渦巻き状の突起が口唇部に付される。文様構成は、ペン先状工具による連続刺突文が横位に施される。



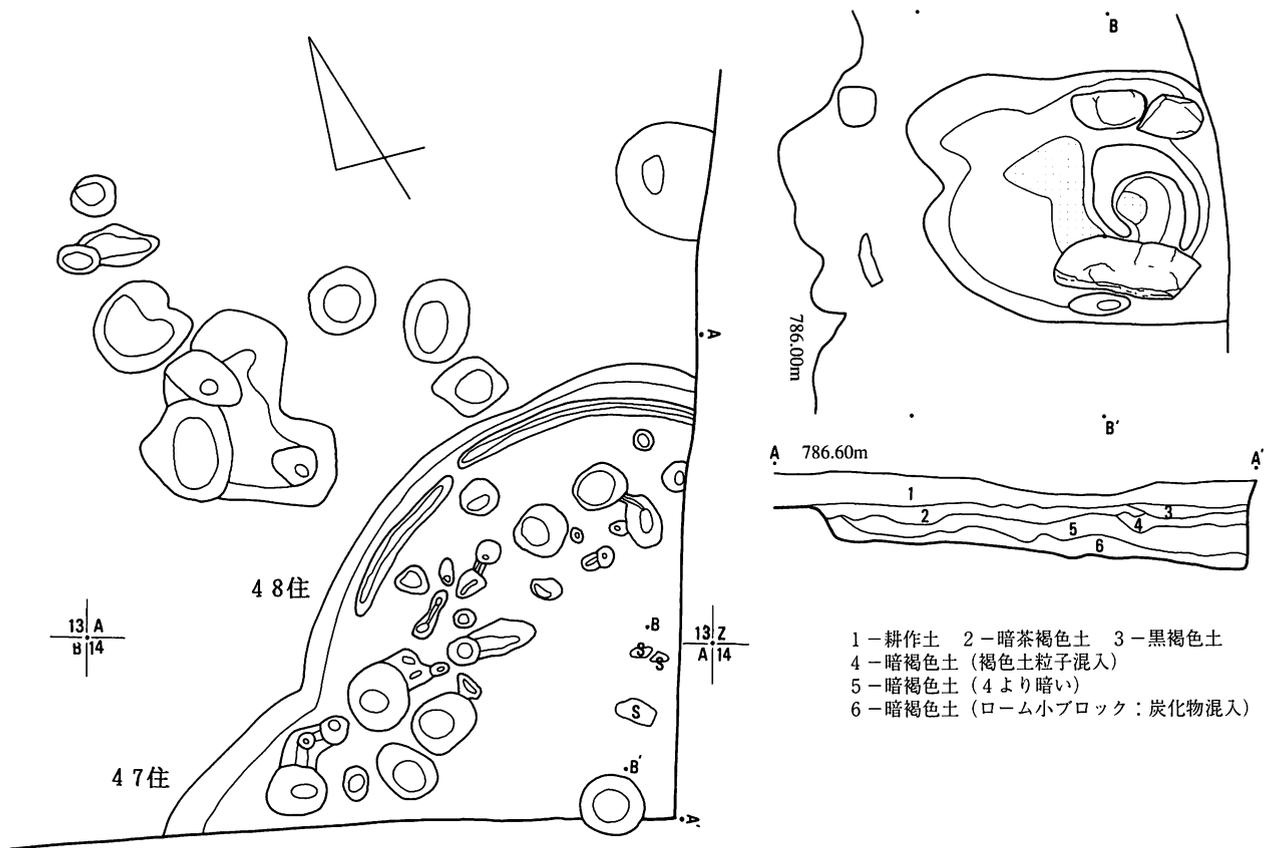
第97図 第6次調査区 (1/60)

47号住居跡 (第98図)

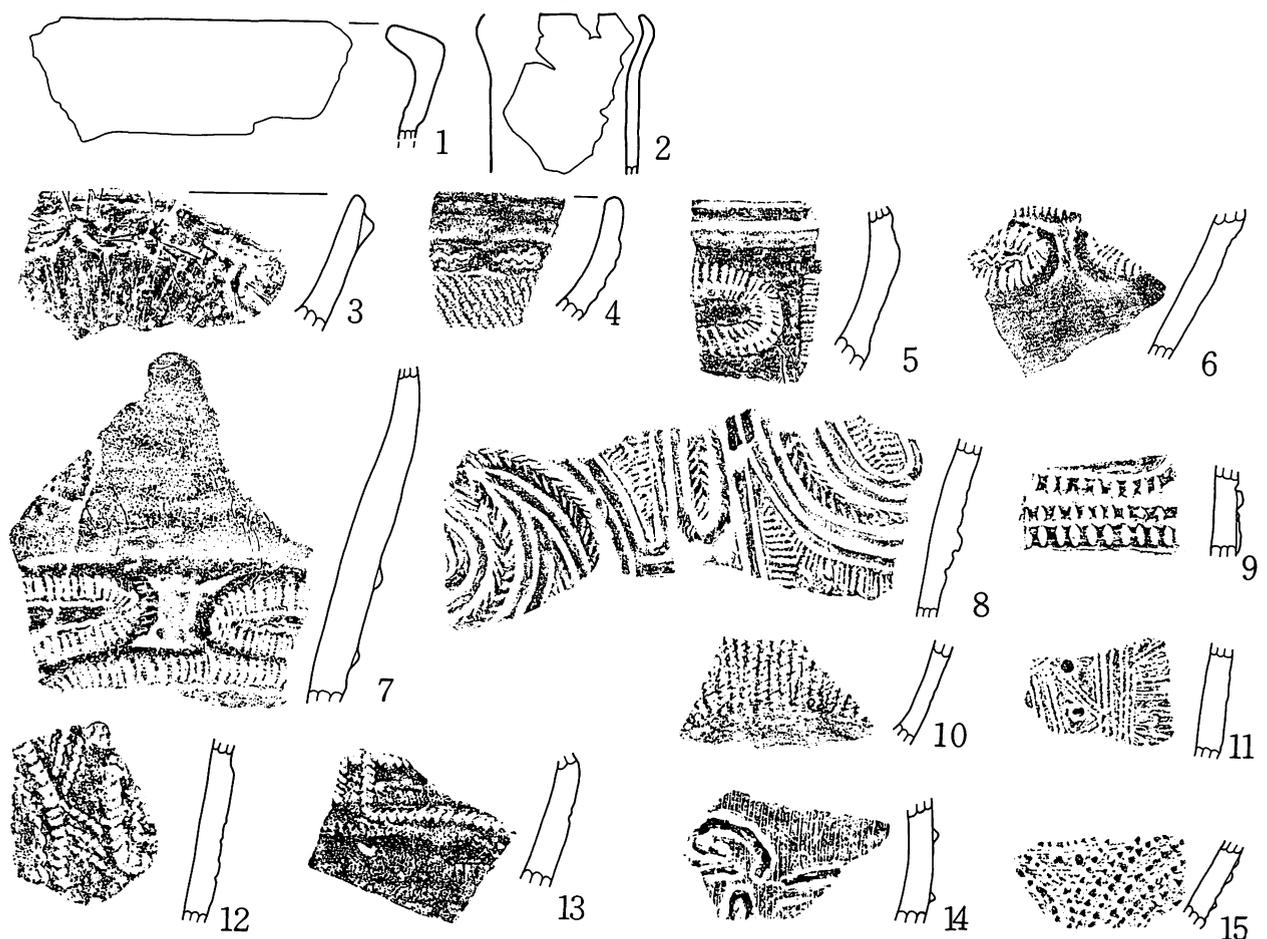
- 調査年度 1996年度 (第6次調査)
- 位置 A-14グリッド
- 平面形 不明である。
- 規模 不明である。
- 周溝 部分的に存在する。
- 炉 不明である。
- 柱穴 周溝上に並ぶものが該当する。
- 埋甕 存在しない。
- 時期 不明である。
- 備考 48号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。

48号住居跡 (第98図)

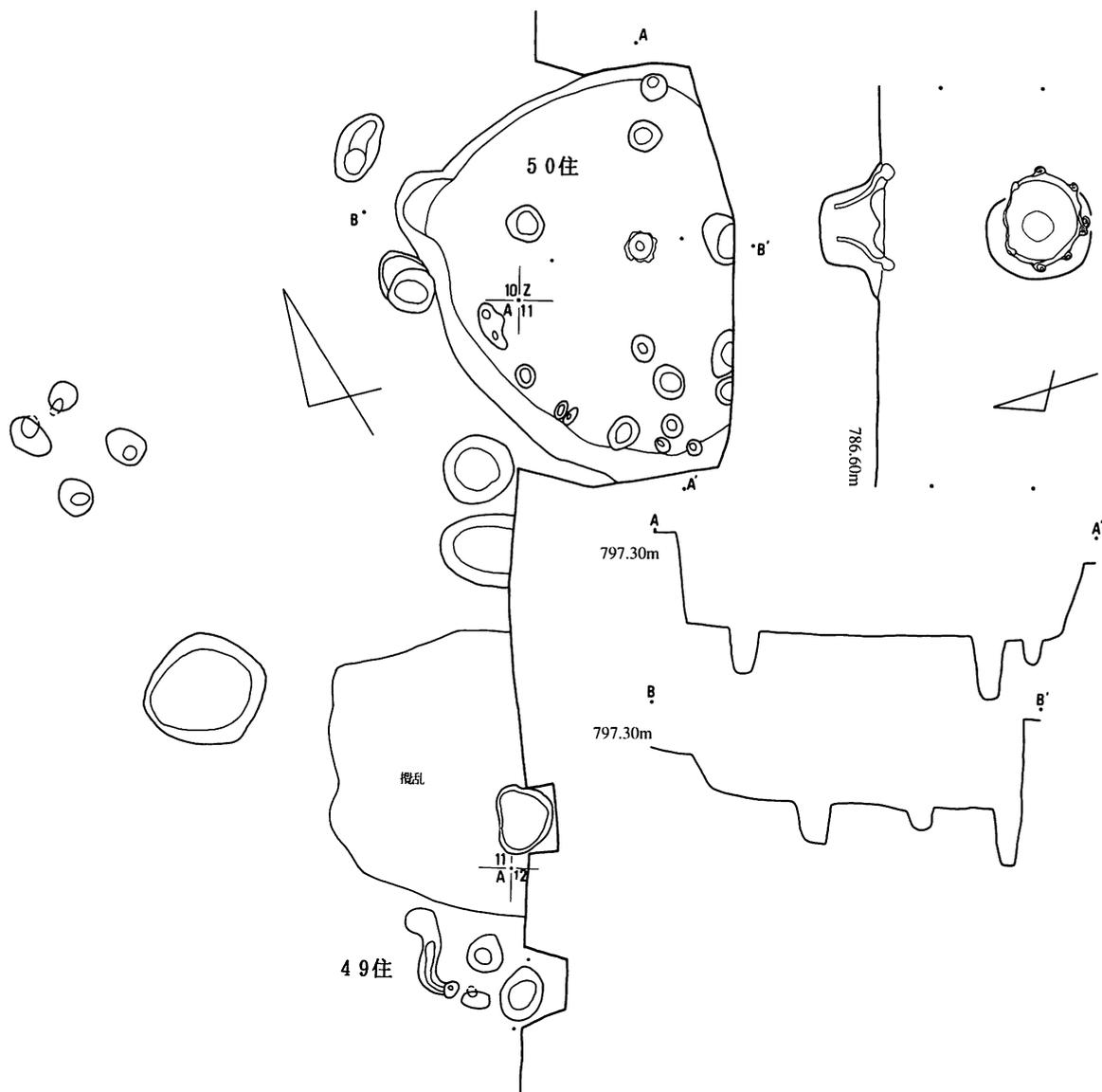
- 調査年度 1996年度 (第6次調査)
- 位置 A-13.14グリッド
- 平面形 楕円形を呈するものと思われる。
- 規模 住居跡の半分以上が調査区外のため、不明である。
- 周溝 途切れ途切れであるが、存在する。
- 炉 石囲炉であり、壊される。
- 柱穴 周溝のやや内側に存在するものと思われる。
- 埋甕 認められない。
- 時期 炉および出土遺物から中期中葉と思われる。
- 備考



第98図 47・48号住居跡 (1/60) 及び炉 (1/20)



第99図 48号住居跡出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)



第100図 49・50号住居跡 (1/60) 及び埋壺炉 (1/20)

遺物説明 (第99図)

1は口縁部の破片で、「く」字状に折れ曲がった口縁部で、頸部には横位に沈線文が引かれた痕跡が認められる。藤内式期に属するものと思われる。2は緩やかに内弯するもので底部を欠損するものである。3は口縁部には、半円形状の隆帯が巡らされるものである。5・6・7は楕円形区画文が施され、区画内にはキャタピラ文・ジグザグ文が施される。8はp i t 1の出土遺物で、交互の刻みが施された隆帯によって区画がなされ、区画内にはキャタピラ文・ジグザグ文が施される。14は曾利Ⅲ式期、11・15は諸磯c式期に属するものである。

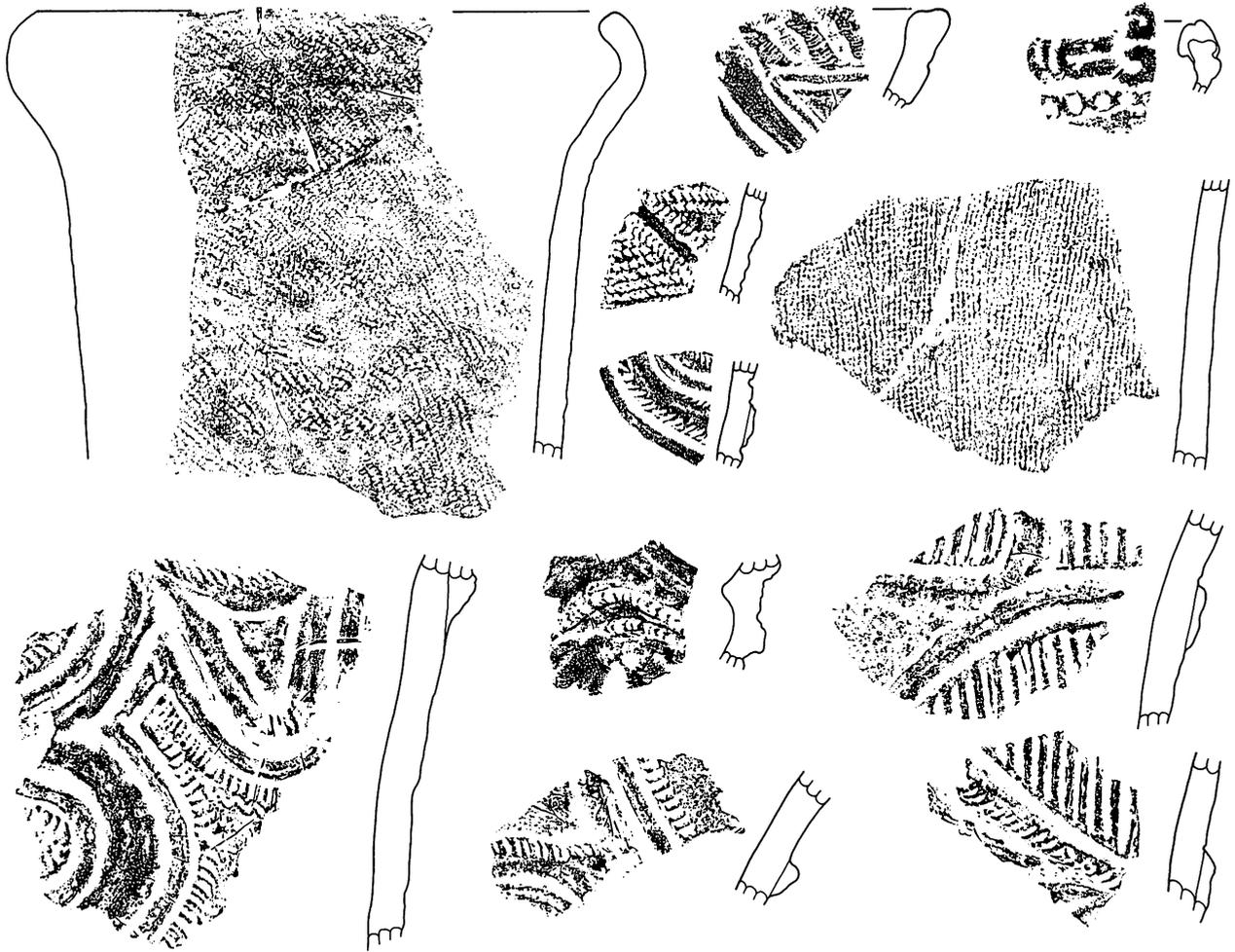
49号住居跡 (第100図)

調査年度 1996年度 (第6次調査)

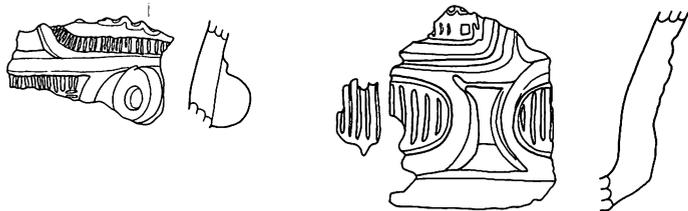
位置 A-11.12グリッド

平面形 本住居跡は調査区外に広がり、また攪乱されていることから不明である。

規模 不明である。



第101図 49号住居跡出土遺物実測図（1/4）及び拓本（1/3）



第102図 49号住居跡出土遺物実測図（1/4）

- | | | |
|---|---|------------------------|
| 周 | 溝 | 一部存在する。 |
| | 炉 | 認められない。 |
| 柱 | 穴 | 1本認められる。 |
| 埋 | 甕 | 認められない。 |
| 時 | 期 | 井戸尻式期 |
| 備 | 考 | 炉は、調査区外に存在しているものと思われる。 |

遺物説明（第101・102図）

2, 3, 11,13は井戸尻式期に属するものと思われる。2は底部付近の遺物で、「く」字状に折れ曲がった直上には、楕円区画が横帯させられる。また区画内には、縦位に沈線文で充填させられる。3は縄文を地文として器面全体に施文される。口縁部は、キャリアー状に内弯させられる。11,13は幅広の隆帯によって縦位の沈線文を区画する。9は藤内式期に属するものと思われる。

50号住居跡 (第100図)

調査年度 1996年度 (第6次調査)

位置 A・Z-10.11グリッド

平面形 ほぼ円形を呈するものと思われる。

規模 炉を中心として、3.50mを計測する。

周溝 存在しない。

炉 埋甕炉である。

柱穴 南壁側で多数認められる。

埋甕 存在しない。

時期 新道式期

備考 ほぼ住居跡の半分は、調査区外に存在する。本住居跡から出土した土器は、おおむね投げ捨てによる廃棄である。土器片は重ねられ、周辺の遺物と接合される。

遺物説明 (第103・104図)

1は炉体土器で、胴下半部から底部までを欠損させる。口唇部には小突起が4単位に付され、突起部の一部は第1文様帯に垂下して一体となる。第1文様帯は口縁部で構成され、変形した楕円状区画が施される。区画内にはペン先状工具による刺突文が施される。第2文様帯は空白部を形成し、第3文様帯は楕円形状区画文が横帯させられるが、逆「U」字状の隆帯によって分断され、さらに胴部の文様帯も左右に分ける。文様の構成は、横帯する区画を分断する縦区画の文様の割り込みで、45-B号住居遺物の9と類似する。

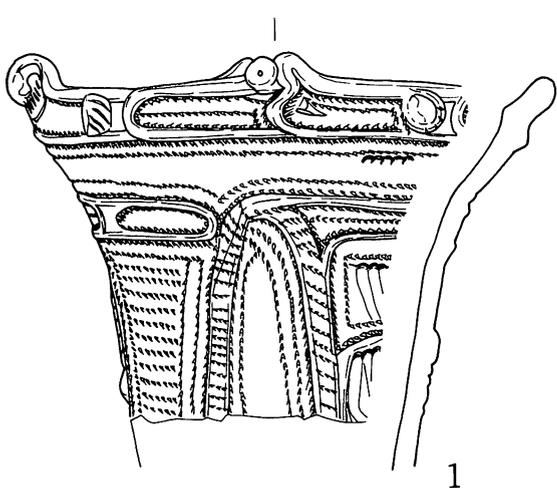
2は底部を欠損するもので、口縁部は無文帯を形成し、第2文様帯は短い隆帯と耳状の把手が貼り付けられ区画帯を形成し、区画内にはペン先状工具によって充填される。第3文様帯は、横走する隆帯と短い隆帯で区画され、区画内は第2文様帯と同様な手法で充填される。第4文様帯は、斜行する隆帯で区画され、隆帯に沿ってペン先状工具による刺突が施文される。第5文様帯は、縦位の隆帯で区画される。

3の口縁部文様帯は、隆帯による楕円形区画が施され、区画内の中央には3ケの円形文が彫りだされ、周囲には刺突文で囲まれる。また直下には隆帯による三角区画や菱形の区画が形成される。頸部には幅の狭い無文帯が形成され、第3文様帯は胴上半部の最上段に隆帯の貼り付けがなされ、そののち指頭による押圧が施される。第4文様帯の胴部中位には、ペン先状工具によるジグザグ文が施される。第5文様帯は胴下半部に形成され、隆帯による三角区画文が横位に展開される。

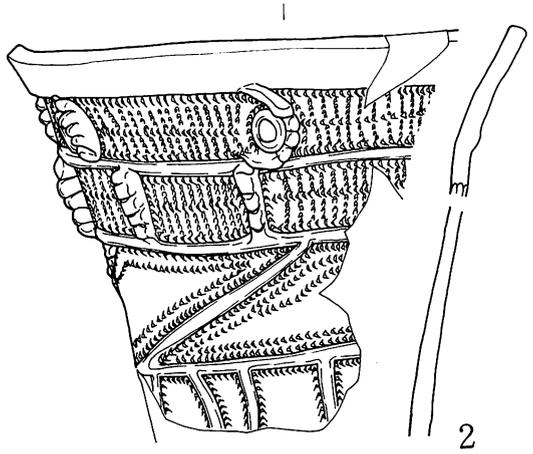
4は胴部中位から底部までを欠損するもので、口唇部には無文帯が形成され、直下には第2文様帯として縦位の隆帯によって長方形の区画帯が横位に巡らされ、区画内にはペン先状工具によるジグザグ文が施される区画帯と空白の区画帯が交互に並列される。第3文様帯は、第2文様帯と同様な手法で構成され、区画を半分ずらした位置で形成される。以下無文帯で構成される。

5は胴上半部から底部までを欠損するもので、第1文様帯は楕円形状の区画がなされ、区画が接する箇所は口唇部にせり上がり、渦巻き状の小突起が4単位に形成される。また楕円形状の区画内には角押文が施される。頸部までの空間にはペン先状工具によって充填される。第2文様帯は頸部に形成され、楕円区画が横位に巡らされる。区画内には、連続する角押文で充填される。第3文様帯は頸部直下に施され、隆帯による区画がなされ角押文で充填される。

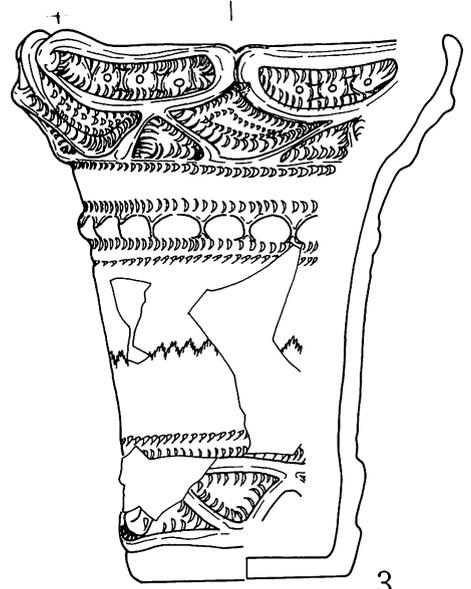
7の口唇部は無文帯で構成され、第2文様帯は隆帯による半円形状区画・台形状の区画がなされ、刻みが施される。また区画内にはペン先状工具による刺突文で充填される。第2文様帯と第3文様帯を分かち箇所に耳状の把手が付される。第3文様帯は隆帯による楕円形区画文が横位に展開され、区画内にはペン先状工具による連続施文が施される。第4文様帯は空白部を形成するが、ほぼ中央にペン先状工具によるジグザグ文が施される。第5文様帯は第3文様帯と同様な手法で展開され、更に第6文様帯は隆帯によって区画文が形成される。



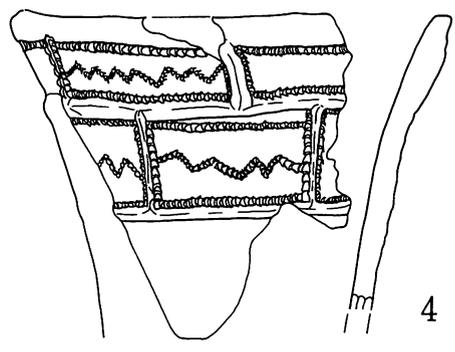
1



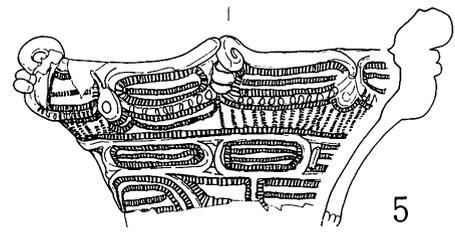
2



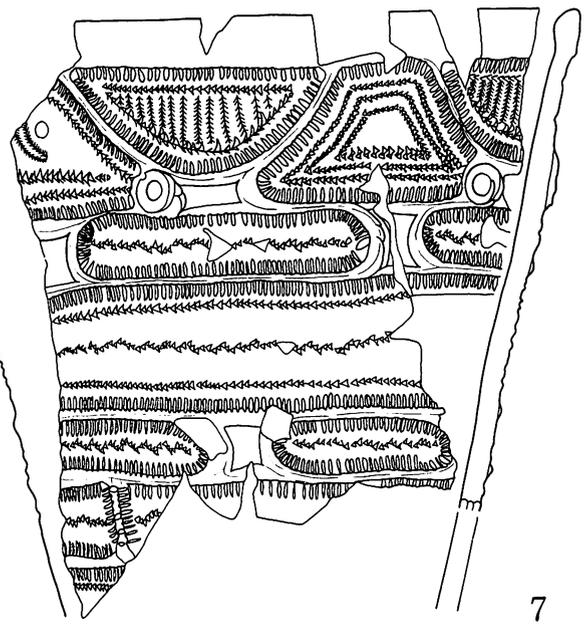
3



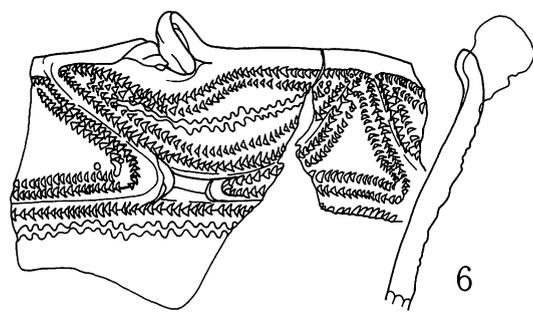
4



5

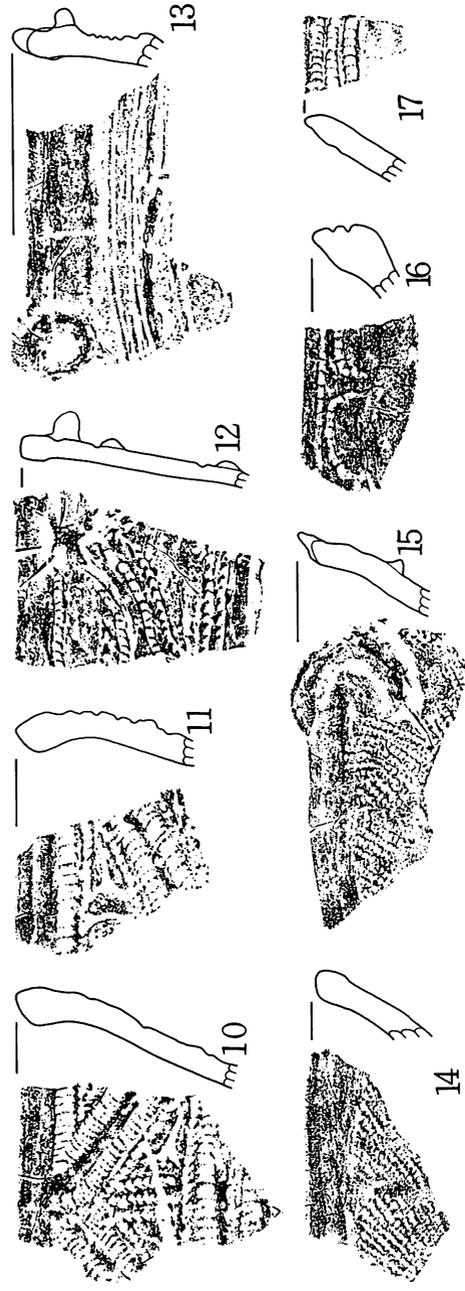
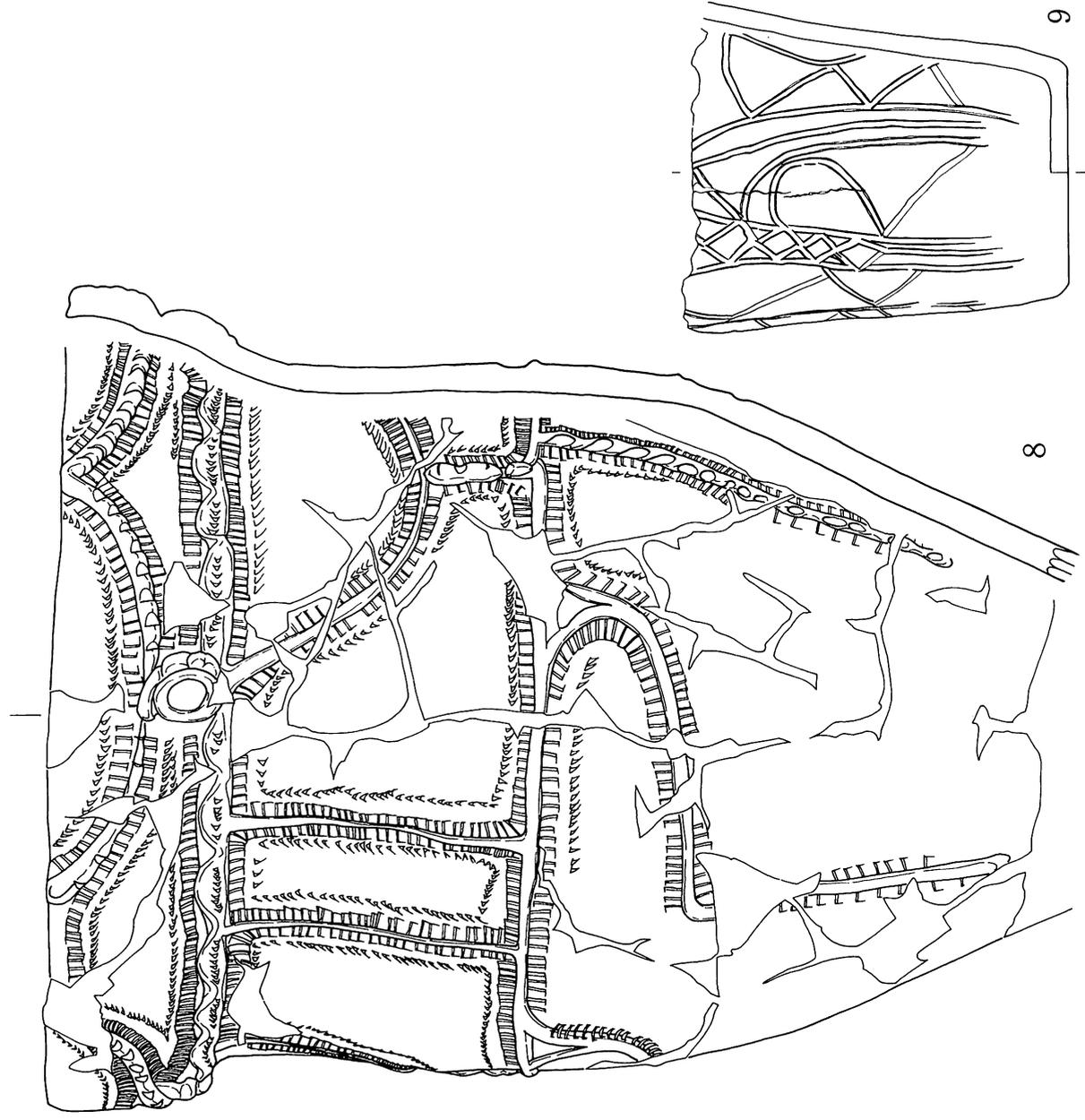


7



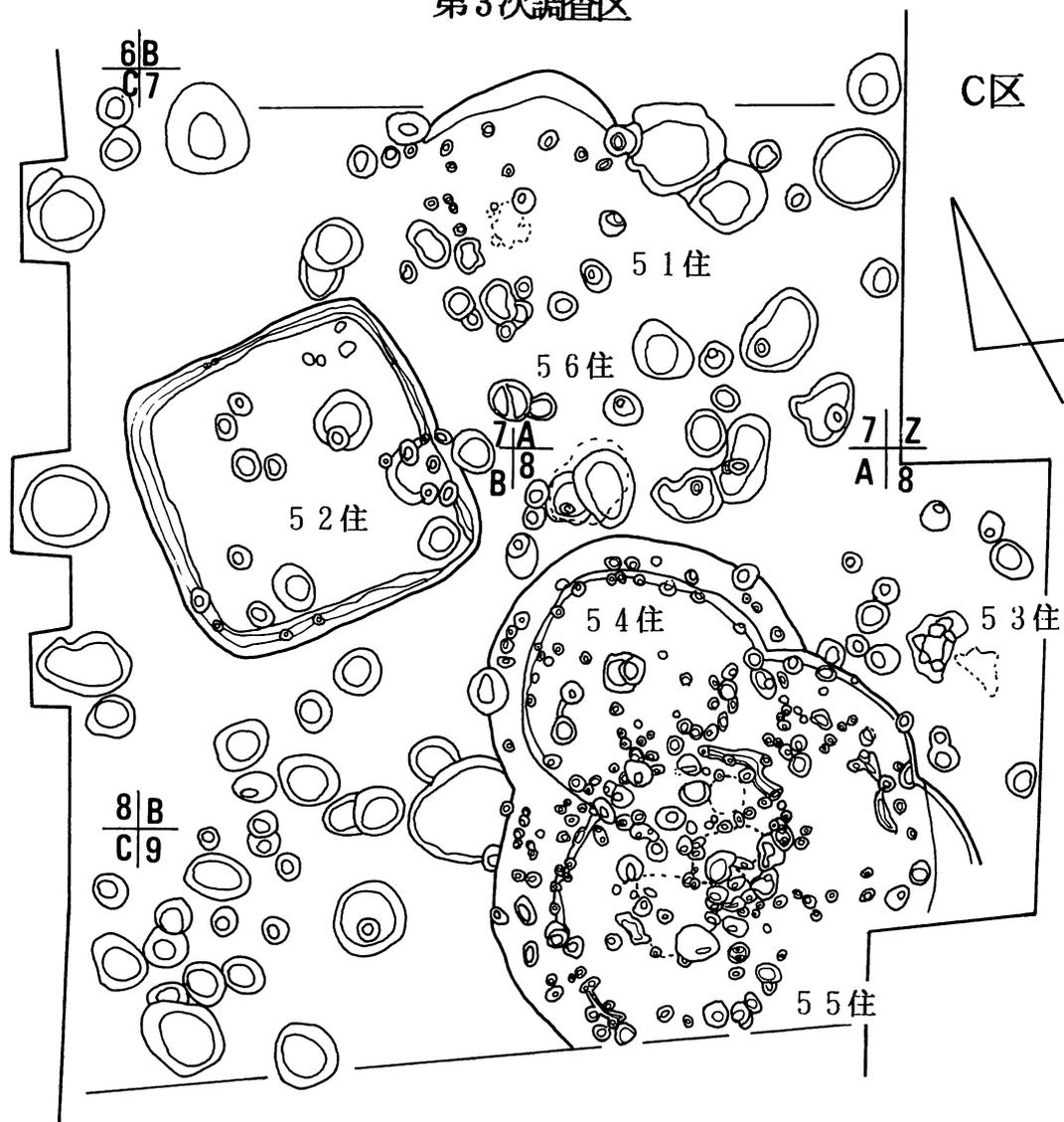
6

第103图 50号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第104图 50号住居跡出土遺物実測図(1/4)及 ϕ 拓本(1/3)

第3次調査区



第6次調査区

第105図 第7次調査区 (1/100)

8は大型の深鉢で、第1文様帯は半円形状の区画が施され、隆帯の脇には角押文がその脇にはペン先状工具によってさらに区画される。頸部の直上には、耳状の把手が付される。第2文様帯は、半円形状区画と長方形の区画で構成され、文様構成は第1文様帯と同様である。以下第3文様帯は楕円形状の区画がなされるが、途切れた箇所から隆帯がクランク状を呈し垂下させられる。

9は口縁部を欠損させるもので、平行沈線文を地文とするものである。

10から17までは、以上の遺物とほぼ同一時期のものと考えられる。

第105図は、第7次調査区の全体図である。A・B・C-1から6グリッドまでは第3次調査区で、A・B・C-9グリッドの調査区の約半分から南は第6次調査区である。第7次調査区は1997年度に実施され、約137㎡が対象となり、本調査においてC区は全て終了した。

本調査区は畑であったこと、そして遺構確認面まで非常に浅いことから遺構の上面は攪乱を受けている。また壁の立ち上がり認められない浅い住居も存在している。特に56号住居跡のように、遺構確認を行っている際に焼土が確認された遺構もあり、54号住居跡の調査を行った時にはじめて住居跡と認定された住居跡である。

また第3次調査区と第6次調査区との間であることから、遺構の密度はかなり薄いものと考えられたわけで

あるが、結果的に6軒の住居跡が発見されることとなった。

このように狭く攪乱を受けた調査区内ではあったが、遺物出土の量も多くその成果は大きいものであった。

51号住居跡 (第106図)

調査年度 1997年度 (第7次調査)

位 置 A・B-7グリッド

平面形 円形を呈するものと思われる。

規 模 3.46m×3.32m前後と思われる。

周 溝 存在しない。

炉 埋甕炉で、土器が埋設していた掘り込みは非常に深いものである。

柱 穴 小型の柱穴が巡らされる。

埋 甕 存在しない。

時 期 五領ケ台式期

備 考 確認作業の際、土坑よりもやや大きめで不定型の落ち込みが認められた。結果的には、この落ち込み部分は炉跡であった。

遺物説明 (第106図)

1は、炉体土器と考えられるもので、底部は、0-Pの断面図より斜めになった位置で出土し、また土層図より、攪乱を受けた可能性が考えられる。口縁部及び胴部は、炉の周辺に散乱し接合される。埋設された土器の口縁部は、隆帯による「S」字状の貼り付けがなされ、半截竹管状工具による連続の刺突が施される。その後、沈線文で充填される。頸部には、交互刺突によってジグザグ文が形成される。以下平行沈線文が、横位と縦位に施文される。

2は住居内からの出土遺物で、1と同様な手法で沈線文が施されるが、口縁部の文様帯は空白部が形成されるとともに、1と類似した口縁部の形態で丸みをもって内弯させられる。

3は浅鉢の口縁部の破片である。口唇部には刻みが施され、波状を呈する波頂部の直下の外面は、平行沈線文が横位と縦位に施文される。内面は、波頂部に渦巻き状に連続する角押文が施される。以下、底部まで無文帯が形成される。

4は3と同一個体と考えられるが、接合されない。3と同様な手法で文様が構成される。内面には、交互刺突によってジグザグ状の文様が施される。

5は胴部中位から底部まで現存し、平行沈線文が縦位に施される。

52号住居跡 (第107図)

調査年度 1997年度 (第7次調査)

位 置 B-7・8グリッド

平面形 方形を呈する。

規 模 3.80m×3.40mを計測する。

周 溝 全周する。

竈 石組みされた竈であるが、その大部分は破壊される。

柱 穴 3本確認される。

埋 甕 存在しない

時 期 平安時代

備 考 壁際には、床面から浮いた状態で焼土ブロック・炭化物が認められた。竈の燃焼部を構築る礫は、



第106図 51号住居跡 (1/60)・遺物出土分布図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/4) 及び拓本 (1/3)

長手の礫を縦に4か所配置される。天井部を構成していたものと思われる礫は、竈から住居の中央にまで広がっており、ほぼ床面に接するような状況で確認されたことにより、住居の放棄時に竈を破壊したものと考えられる。遺物は非常に少なく、竈周辺で出土している。床面は、竈の炊口部から住居の中央にかけてよく踏みしめられている。第107図の右の図は貼り床された面の掘り下げを行った際、確認された遺構である。本住居に伴うものと、それよりも古いものと混在している可能性がある。

遺物説明 (第107図)

- 1は底部付近がヘラ削りされ、底部には糸切り痕が認められる。内面には、暗文が施される。
- 2は口縁部と体部を分かつ箇所に、浅い沈線が3条に巡らされる。内面には、暗文が施される。
- 1と2は、土師器である。
- 3は須恵器の坏で、底部には回転糸切り痕が明瞭に認められる。

53号住居跡 (第108図)

調査年度 1997年度(第7次調査)

位置 Z・A-8グリッド

平面形 楕円形を呈するものと思われる。

規模 4.42m前後と思われる。

周溝 存在しない。

炉 石囲炉で、炉は壊されている。また本炉の南側の脇には、地床炉が存在する。

柱穴 数本確認される。

埋甕 存在しない

時期 井戸尻式期

備考 炉の直上で、底部を欠損する深鉢(第108図1)が出土している。

土層説明 1-耕作土 2-茶褐色土 3-暗褐色土(ローム粒子混入) 4-暗褐色土(ローム小ブロック混入) 5-黒褐色土 6-暗褐色土 7-暗褐色土(6よりやや暗い:炭化物少量混入) 8-暗褐色土(6よりやや暗い) 9-暗褐色土(8より暗い:炭化物混入) 10-暗褐色土(褐色土粒子混入) 11-暗茶褐色土(ロームブロック混入) 12-暗黄褐色土 13-暗茶褐色土 14-暗褐色土 15-暗褐色土(ローム小ブロック混入:炭化物混入)

遺物説明 (第108図)

1は炉の直上出土のものである。口縁部は丸く内弯させ、2本の隆帯は垂下させられる。頸部には幅広の隆帯が巡らされ、刻みが施され波状を呈する。胴部には、縦位の平行沈線文が施される。また口縁部から垂下させられた隆帯は、胴部で「U」字状に曲げられ刻みが施される。

2は頸部で「く」の字状に屈曲され、口縁部には渦巻き状の隆帯で構成される。

3は口縁部の破片で、口縁部は無文帯が形成され、頸部には隆帯が巡らされ刻みが施される。

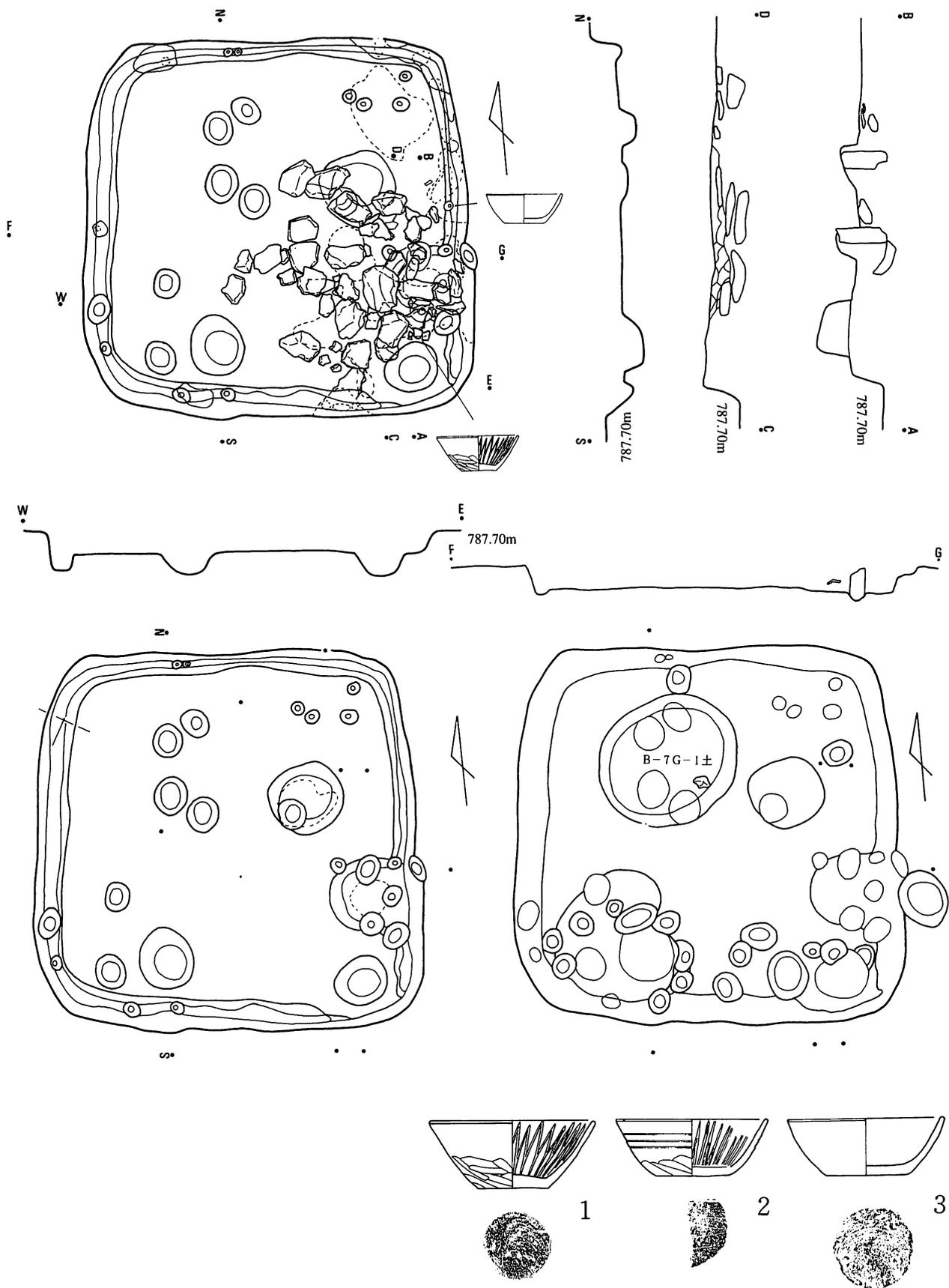
54号住居跡 (第109・110図)

調査年度 1997年度(第7次調査)

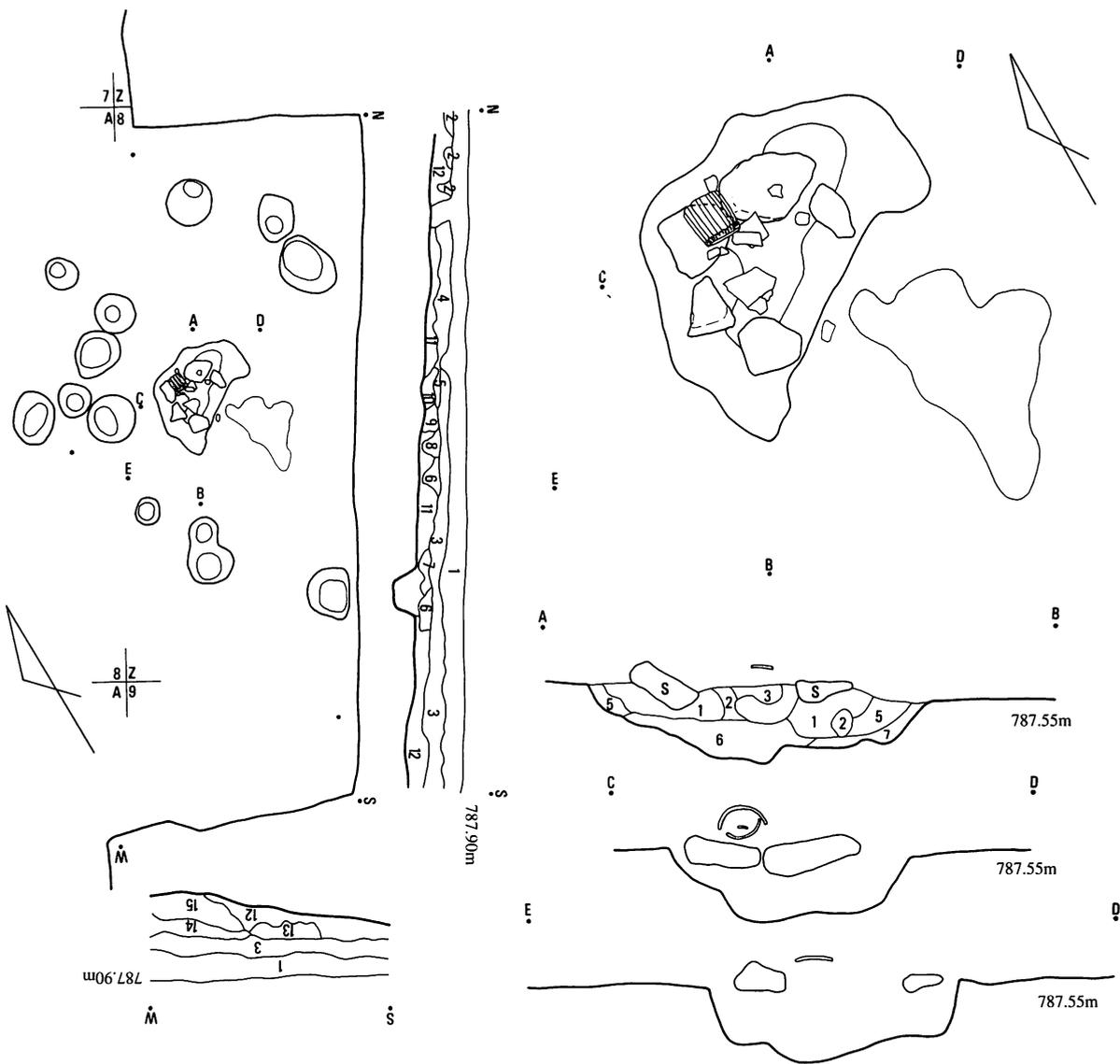
位置 A-8グリッド

平面形 円形を呈する。

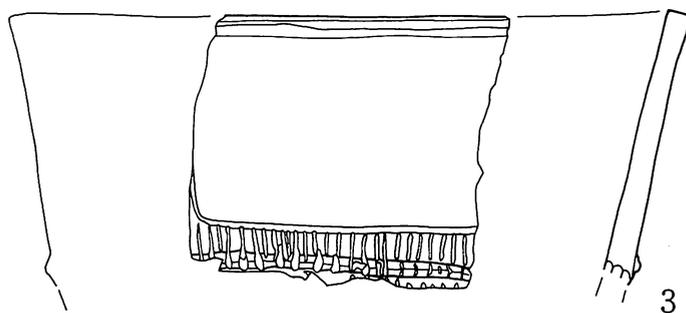
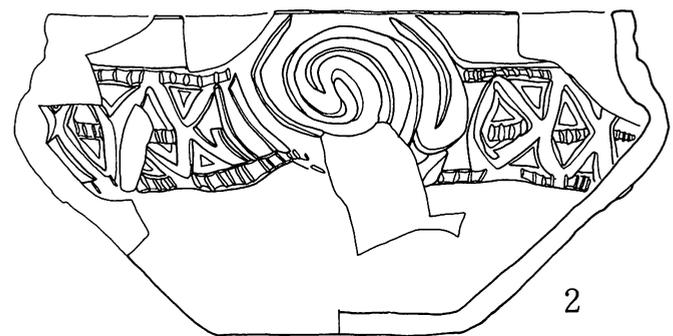
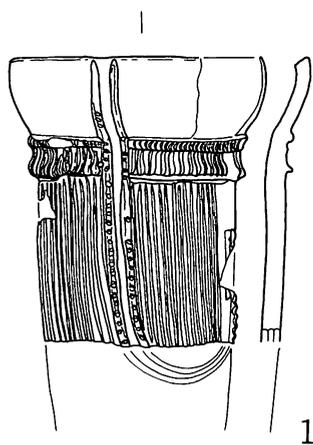
規模 4.38m×4.20mを計測する。



第107図 52号住居跡 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/4)



- 炉土層説明
- 1-暗褐色土 (茶褐色土粒子混入)
 - 2-ローム土
 - 3-暗褐色土 (焼土粒子および焼土小ブロック混入)
 - 4-茶褐色土 (ローム粒子混入)
 - 5-茶褐色土 (ローム粒子混入)
 - 7-暗黄褐色土
 - 8-暗黄褐色土 (ロームブロック混入)



第108図 53号住居跡 (1/60)・炉 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)

周溝	存在しない。
炉	埋甕炉で、口縁部を欠損する土器が埋設される。
柱穴	柱穴は認められるものの、主柱穴の存在は不明である。
埋甕	存在しない
時期	五領ケ台式期
備考	壁際に小穴が巡らされる。また壁の上面はすり鉢状を呈し、小穴が認められる。床面は、炉の周辺ではよく踏みしめられる。また55号住居と重複し、土層断面から本住居のほうが新しい。

55号住居跡 (第109・110図)

調査年度	1997年度 (第7次調査)
位置	A-8. 9グリッド
平面形	円形ないし楕円形を呈するものと思われる。
規模	6 m前後と思われる。
周溝	ほぼ半周する。
炉	埋甕炉で、底部を欠損する土器が埋設される。また本炉の他に焼土跡が2ヶ所存在し、そのうちの一か所は、深い柱穴によって一部壊される。
柱穴	多数認められ、深い柱穴も存在する。
埋甕	存在しない。
時期	五領ケ台式期
備考	床面は、炉から東側にかけてよく踏みしめられている。このことから入口部は東側に存在しているものと思われる。本住居の遺物の出土は極めて豊富で、覆土中のものがほとんどである。柱穴の本数より、建て替え・重複等が考えられるが不明である。

遺物説明 (第110・111・112・113図)

1は54号住居の炉体土器で、口縁部を欠損する。胴部の器面には、文様は施されない。

2は55号住居の炉体土器で、胴部中位から底部まで欠損する。口縁部は無文帯が形成され、直下には交互刺突によるジグザグ文が形成され、貼り付け文によって区画される。胴上半部の屈折部には、縦位の沈線文で充填され、頸部には網状に沈線文が施される。

3はほぼ床直出土の遺物で、器面全体に縄文を地文として施される。口縁部は緩やかに外反させ内面の口唇部は「く」の字状を呈する。小突起が形成された口縁部直下には、刻みが施された円形の貼り付けがなされる。頸部には、交互刺突が施された隆帯が貼り付けされる。胴部には、沈線文によって4段の文様が形成されるとともに、縦割りの区画が渦巻文をともなって構成される。

第111図の4は口縁部を「く」の字状に屈折させ、逆「U」字状の貼り付けがなされる。直下には器面を沈線文で充填させ、以下無文帯が形成される。頸部には、爪型文が施される。胴部上半部には網状に沈線文が施され、4条の沈線文が引かれた下部には、縄文を地文として器面に施文される。

5, 6, 7は口縁部の破片で、7は縄文を地文として器面に施されている。6は4の口縁部の文様構成と類似する。また5は、9の浅鉢の文様構成と類似し、約半分が現存する。

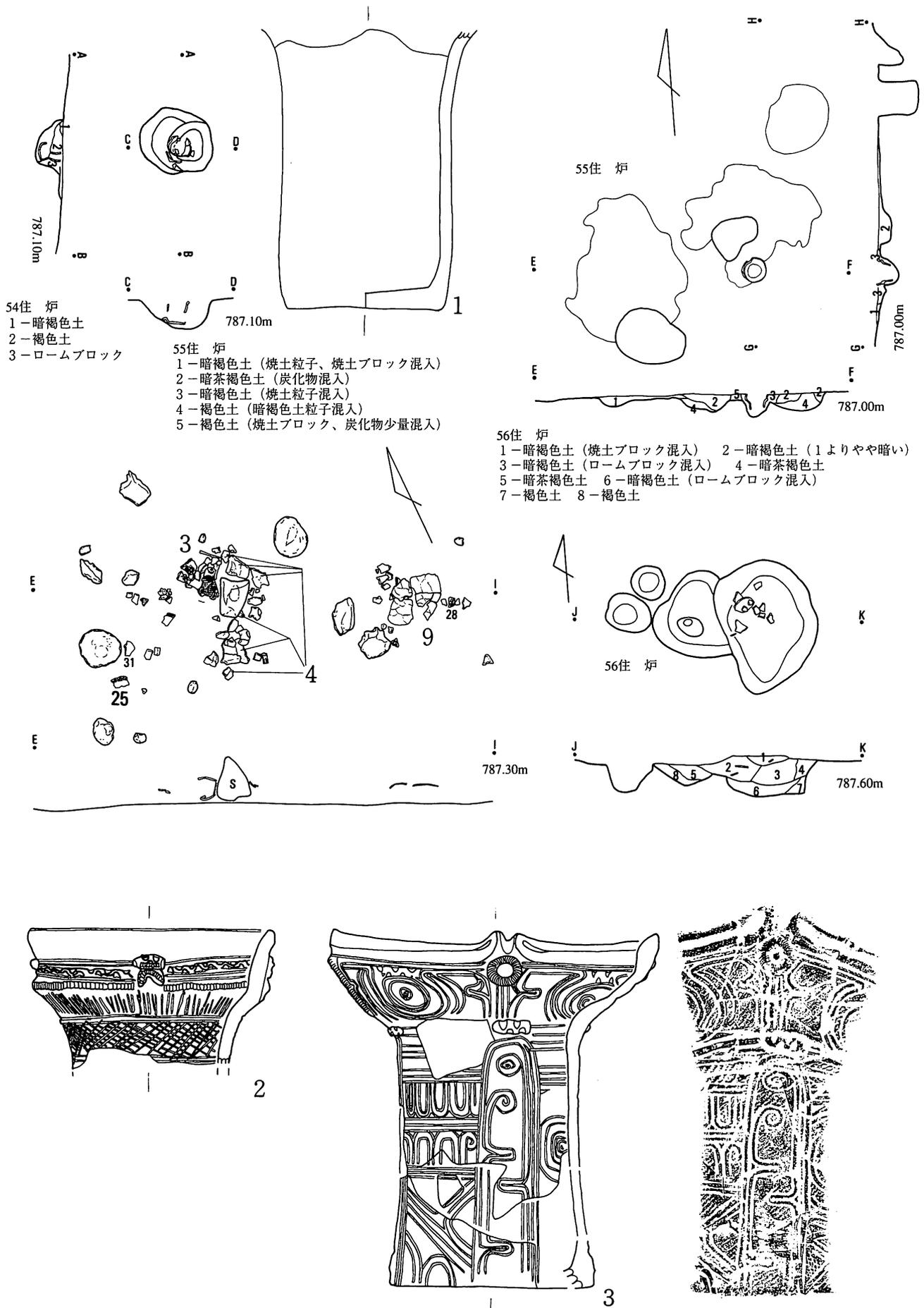
第112図の10から第113図の31までは55号住居出土遺物で、32から38までは54号住居出土遺物である。また39から41は56号住居出土遺物で、42は52号住居(平安時代)の出土遺物である。

39は炉からの出土遺物で、縄文を地文として沈線文によって区画される。

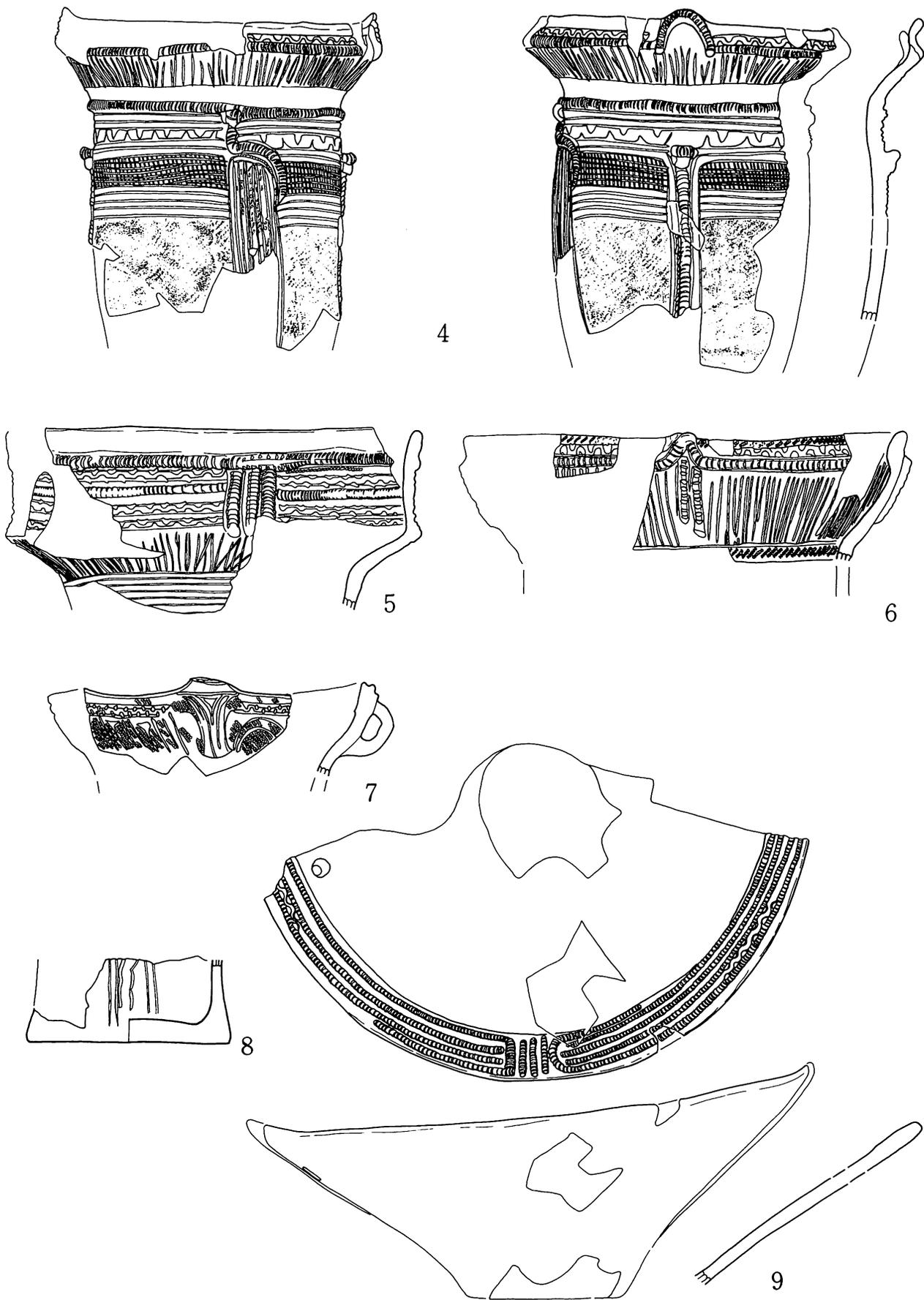


土層説明 1-暗褐色土 2-黒褐色土 3-黒褐色土(暗茶褐色土粒子混入) 4-暗褐色土(1より暗い) 5-褐色土 6-黒褐色土(2より暗い:炭化物混入)
 55住 7-暗褐色土(褐色土粒子、ローム小ブロック混入) 8-暗褐色土(ローム小粒子混入) 9-暗褐色土(ローム粒子、ローム小ブロック混入)
 10-暗茶褐色土 11-茶褐色土 12-暗褐色土 13-褐色土 14-暗茶褐色土(ローム粒子、ロームブロック、炭化物混入)
 B-8-1土 ①黒褐色土(暗茶褐色土粒子混入) ②黒褐色土(ローム粒子少量混入) ③黒褐色土(炭化物、ローム小ブロック混入)
 54住 I-暗褐色土(茶褐色土粒子混入) II-暗褐色土(ローム小ブロック混入) III-暗褐色土(IIよりやや暗い) IV-暗褐色土(ロームブロック、炭化物混入)
 V-暗茶褐色土(しまりあり、炭化物少量混入) VI-暗黄褐色土(壁の崩壊土)

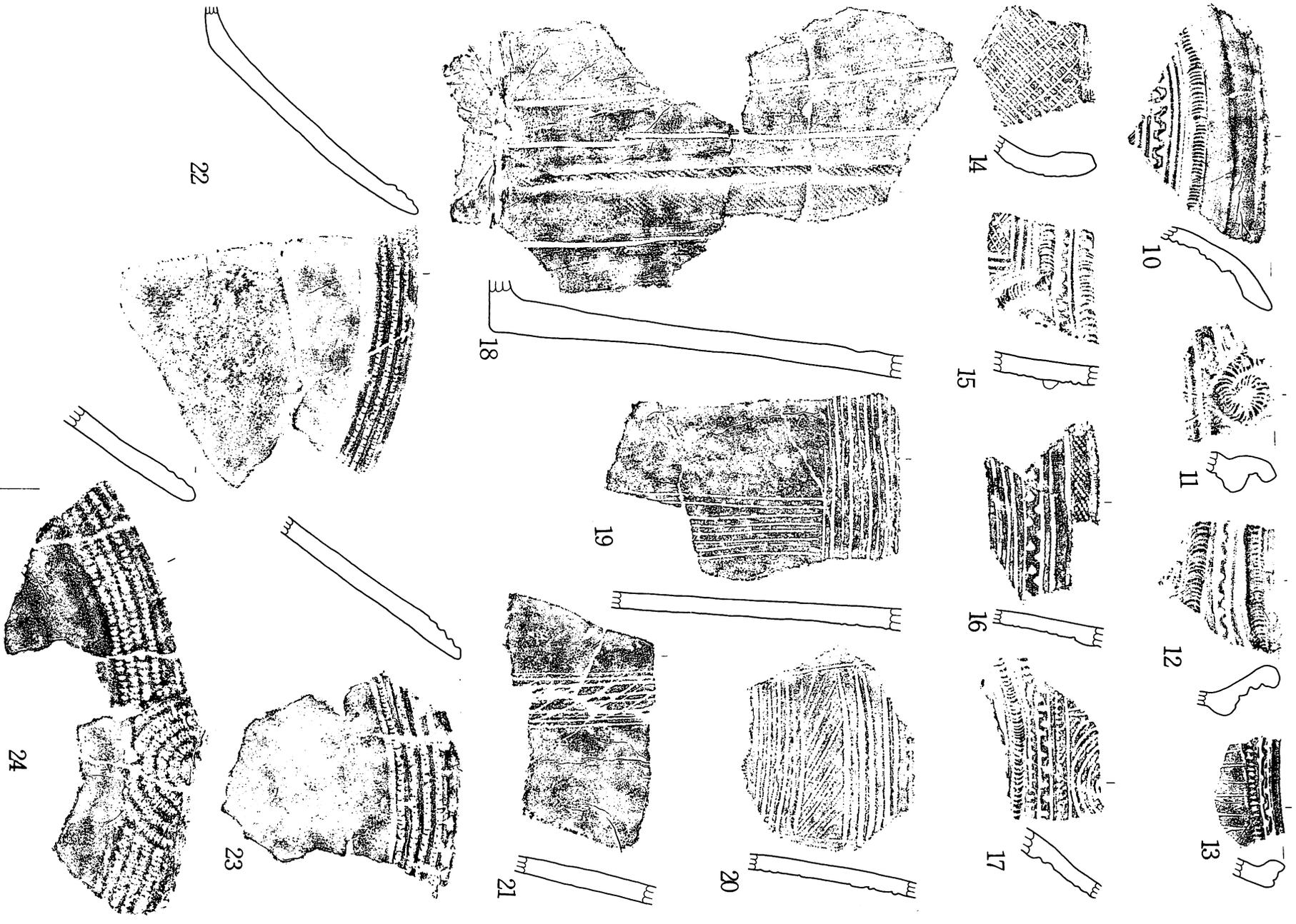
第109図 54・55・56号住居跡 (1/60)



第110図 54・55・56号住居炉 (1/30)・55号住居遺物出土分布図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/4)



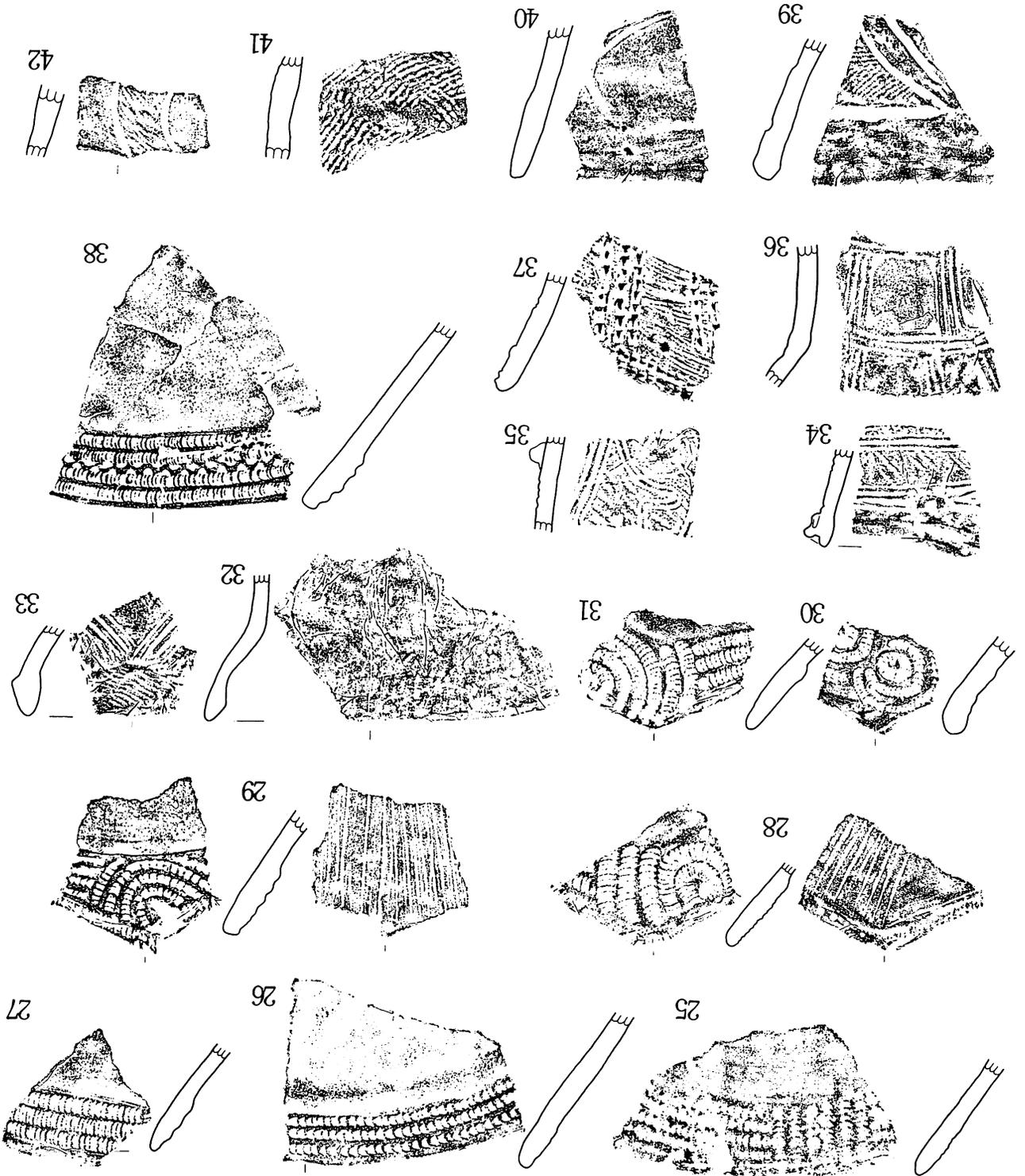
第111图 55号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



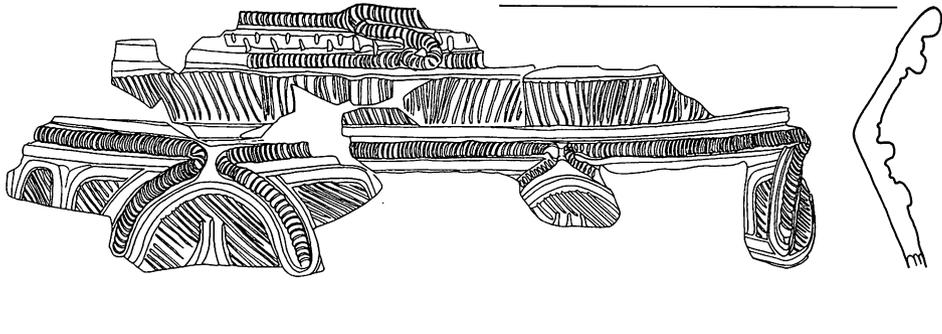
第112图 55号住居跡出土遺物拓本 (1/3)

56号住居跡 (第109・110図)
 調査年度 1997年度 (第7次調査)
 位置 A-7・8グリッド
 平面形 不明である。
 規模 推定ではあるが、4.50m前後と思われる。
 周溝 存在しない。
 炉 地床炉か。炉石は確認されない。

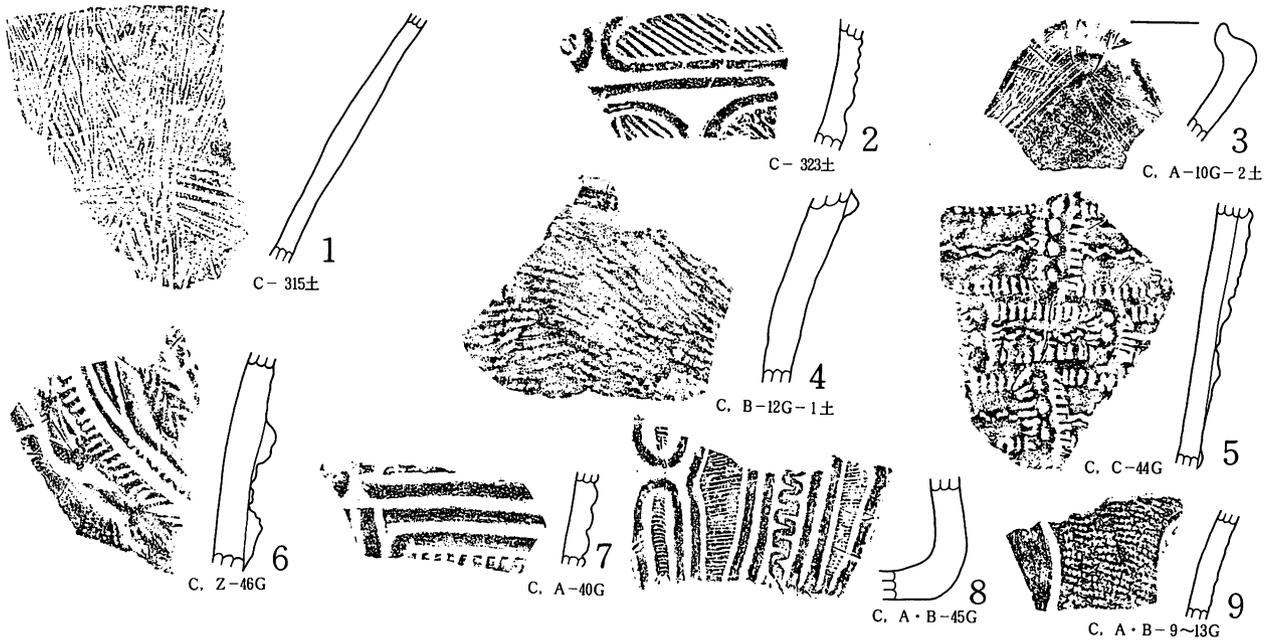
第113図 54・55・56号住居跡出土遺物拓本 (1/3)



柱 穴 4本確認される。
 埋 甕 存在しない。
 時 期 炉から出土した遺物より、中期末から後期初頭と思われる。
 備 考 確認作業の段階で焼土跡が発見され、柱穴の存在から住居跡とした。本住居の炉は、耕作等により攪乱されたものかどうか不明である。また焼土の周辺では、掘り込みは確認されない。
 54号住居の覆土上面で貼り床が認められる。

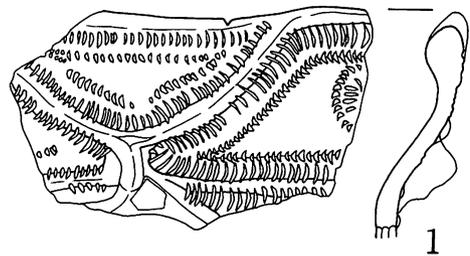


第114図 C-323土坑出土遺物実測図 (1/4)



第115図 C区土坑及びグリッド出土遺物拓本 (1/3)

第115図および第116図は、第6次調査区で発見された土坑出土遺物およびグリッドからの出土遺物である。



第116図 C区Z-48G-1土遺物実測図 (1/4)

第2節 埋 甕

1989年（第1次調査）から1997年（第7次調査）までの間で、発見された単独埋甕の総数は、わずか4基である。また、A・B・C区の調査区の3区画で発見された単独埋甕は、全てA区に存在するものである。

単独埋甕が存在する集落での位置としては、住居跡群が密集する場所で土坑群が形成される場所より外に位置しているものと思われる。

本遺跡のA区での集落の構成は、環状を呈する集落と考えられ、土坑群が集中する中央部とその土坑群を取り巻くかのように住居跡群が広がり、各時期を通して重複する。

そして、中央の土坑群とそれを取り巻く住居跡群の間には、掘立柱建物跡が巡らされている。掘立柱建物跡から、A区の集落のおおよその範囲がつかむことが可能である。特にA区の集落は、北辺につくられた住居跡群を境として、密集していた住居跡はここで途切れる形となる。この北側の住居跡群と重複する形で1・2号埋甕が存在し、北に位置する17号住居の覆土中より出土した3号埋甕が位置し、集落の北西側に位置する54号住居と重複する形で4号埋甕が位置している。

埋設された埋甕の時期としては、井戸尻式期末から曾利I式期のもので、集落の南側では、住居跡が密集するものの井戸尻式期に属する住居跡の軒数は少なく、そのために井戸尻式期の単独埋甕が認められないのであろうか。

また、C区で構成された井戸尻式期の集落では、調査区内においては単独埋甕の存在は見当たらず、埋甕の本来の意味を十分検討することと同時に、集落内に埋設された場所、埋甕に使用された土器の規模や文様等の検討も必要となってくるのであろう。

単独の埋甕を埋葬用と考えた場合、A・C区の集落の規模からしてもっと多くの埋甕が発見されてもよいのではないだろうか。

総数わずか4基が発見されただけの単独埋甕であるが、とりわけこの3基の埋設された土器の規模はかなり大形のもので、住居の覆土中より出土した土器片或いは完形に近い土器と比較すると日常的に使用されたものとは考えがたく、その目的に合わせて土器が作成されたものであることは疑いようのないものである（山本）。

1号埋甕（第117・118・119図）

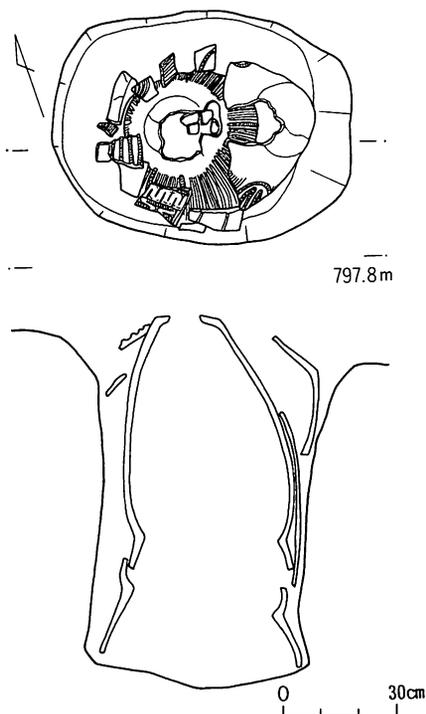
第1次調査で発見され、B-6グリッドに位置する。形態は楕円形を呈し、長軸78cm、短軸60cm、深さ95cmをそれぞれ計測する。

発見された土器は、二個体が入れ子状に出土し、いずれも逆位で出土した。同時に埋設したものではなく、わずかな時間差をもって再度埋設している。追葬するがごとく、まず古い埋甕を掘り出して、新しく埋設する土器を設置し、その後取り出した古い埋甕をもとと同じになるようもとに戻している。意図的に追加埋設しているのである。

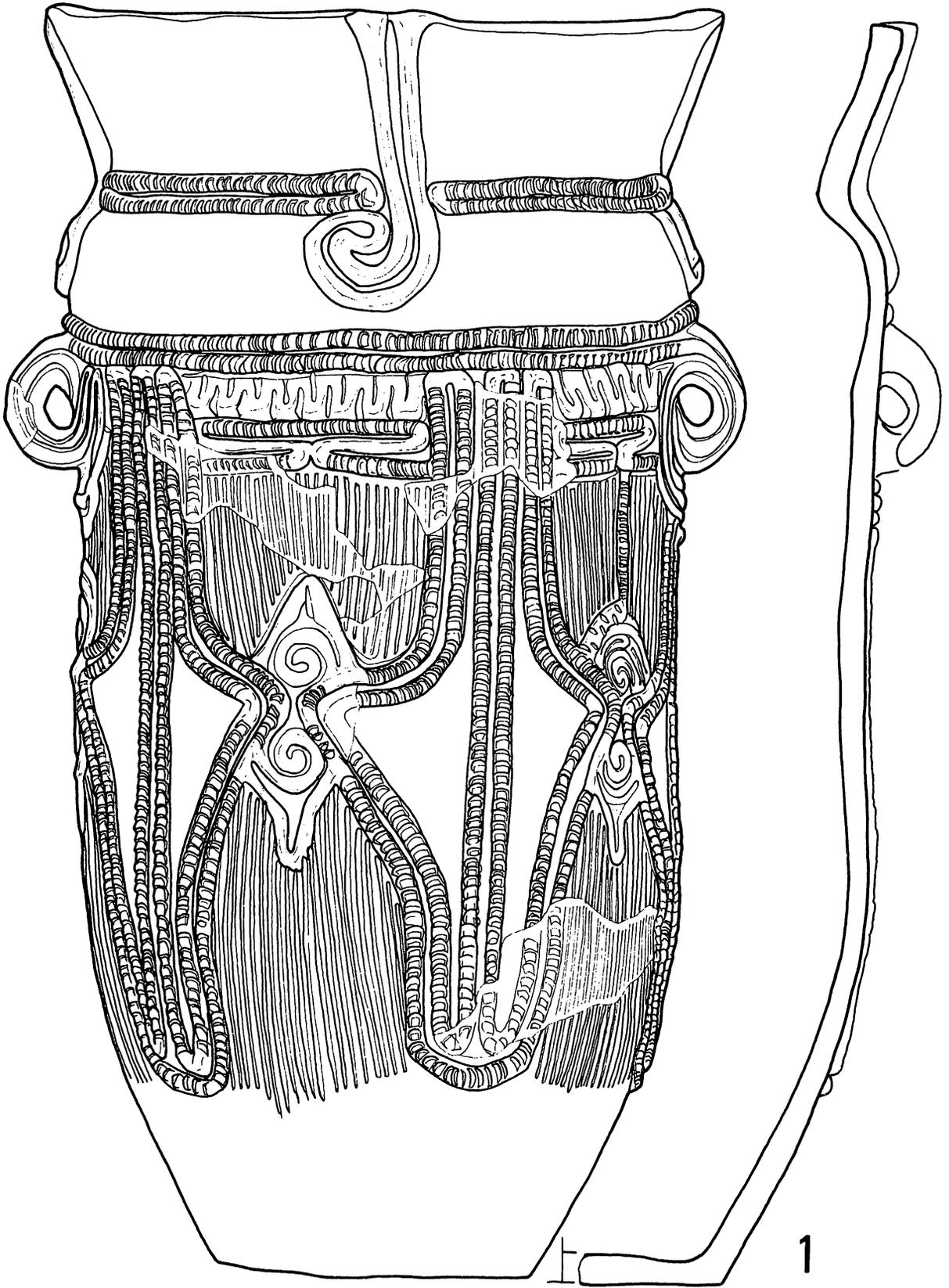
土器はいずれも大形である。1は埋甕を最初に構築したときに埋設されたもので、高さ約80cm、重量は約26kgとなる。2は1を取り除いた後埋設されたもので、高さ約60cm、重量15.5kgをはかる。

いずれも同じ文様構成をとるもので、胴部のモチーフはU字形のモチーフを組み合わせ、そのなかを半截竹管状工具による平行沈線文で充填している。四単位を基本とするが、1の胴部の文様は五単位となり口縁部の構成とずれる。

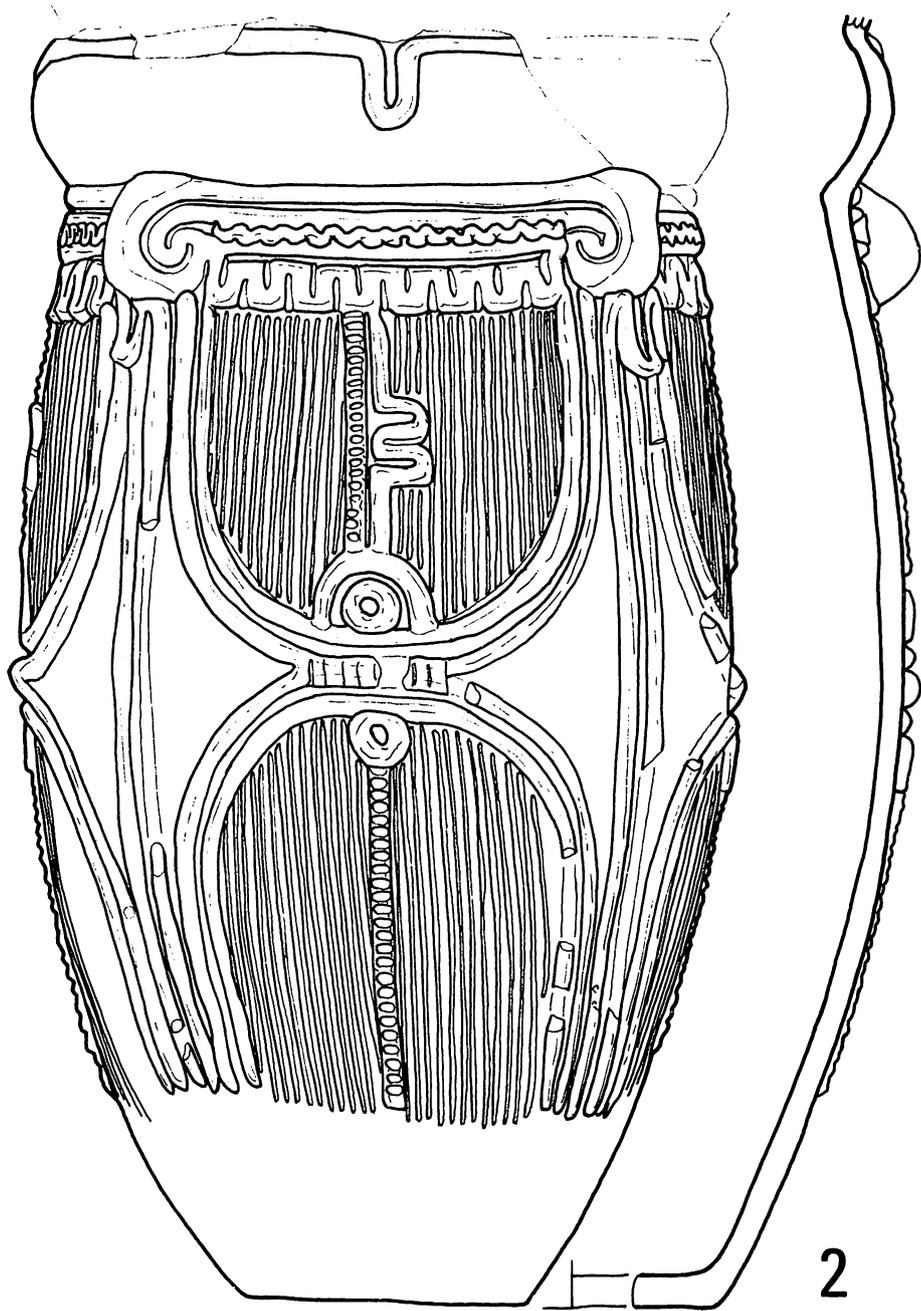
いずれも底部は穿孔されている。曾利I式土器の古い段階に位置づけられ、形式的に時間差はみられない。



第117図 1号埋甕（1/20）



第118图 1号埋甕实测图 (1/4)



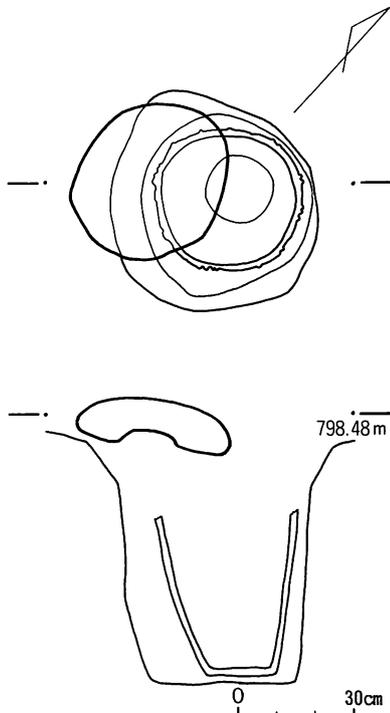
第119图 1号埋甕实测图 (1/4)

2号埋甕 (第120・121図)

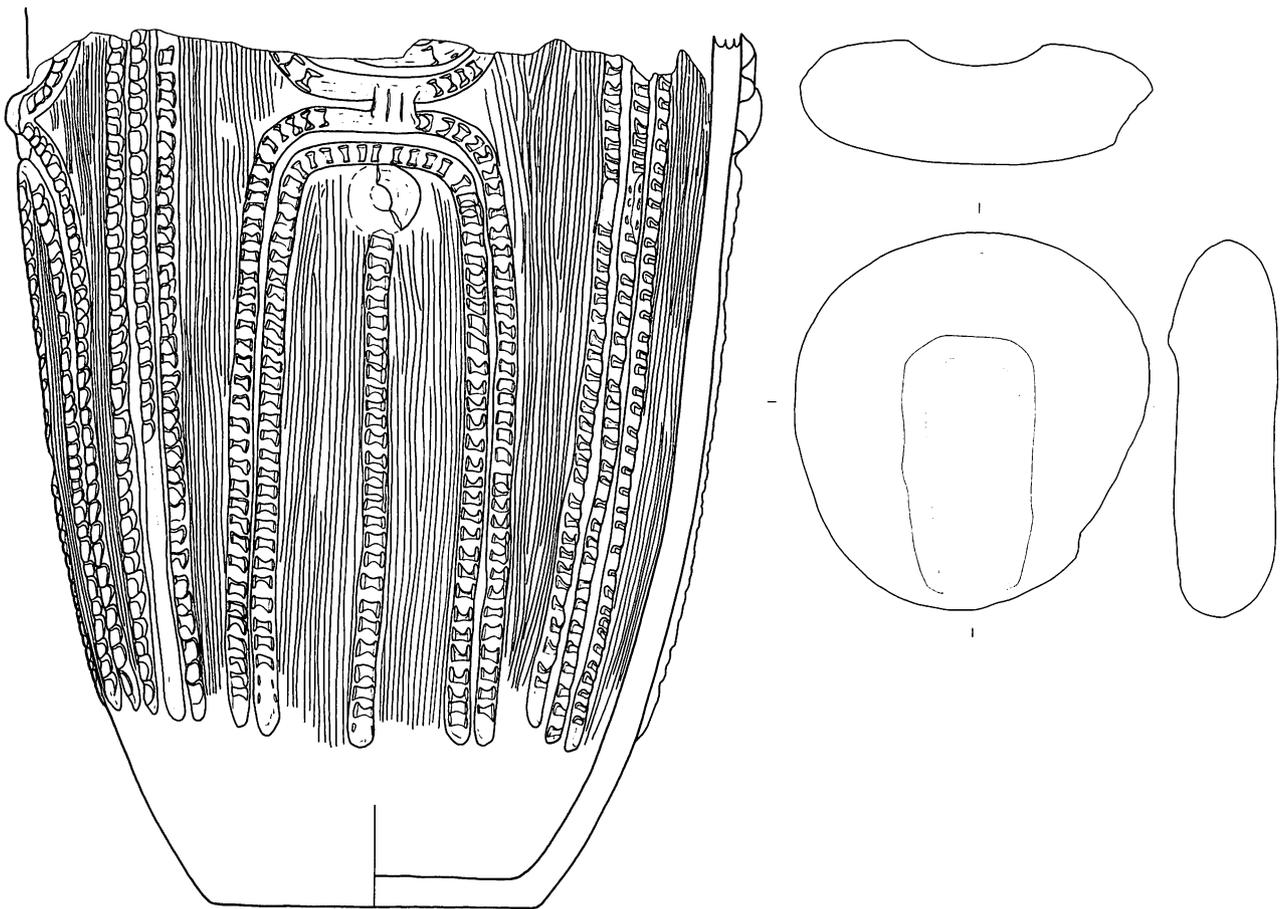
第1次調査で発見され、B-7グリッドに位置する。形態は楕円形を呈し、長軸60cm、短軸55cm、深さ65cmをそれぞれ計測する。発見された土器は正位に埋設され、石皿が伏せられた状態で発見された。石皿は、あたかもフタがされたような状況を呈し、土坑が掘られた上面で確認された。また石皿は、掘り方の中心部ではなく端によった位置で、中心部に向かって傾斜している。この状況は、埋甕のなかに腐食物等が入られていた可能性を示すもので、腐食したことにより上面の土が中へ落ち込んだことを意味するものと考えられる。

土器は胴部上半を欠損するもので、現存する胴部の文様は四単位に区画され、U字形のモチーフが組み合わせられ、隙間を櫛歯状工具による条線で充填されている。

底部は1号埋甕の2点のように穿孔されておらず、口縁部を欠損するタイプである。重量は約11.5kgで、曾利I式土器の古い段階に位置づけされる。石皿は輝石安山岩製で、扁平な自然石を利用しており側面部が一部欠損している。石皿の最大長は39cmで、幅は37cm、厚さは12.5cmをそれぞれ計測し、ほぼ円形状に作成される。皿部は長方形を呈し、浅く凹まれた皿部はU字状をなす。また手前から奥までほぼ平

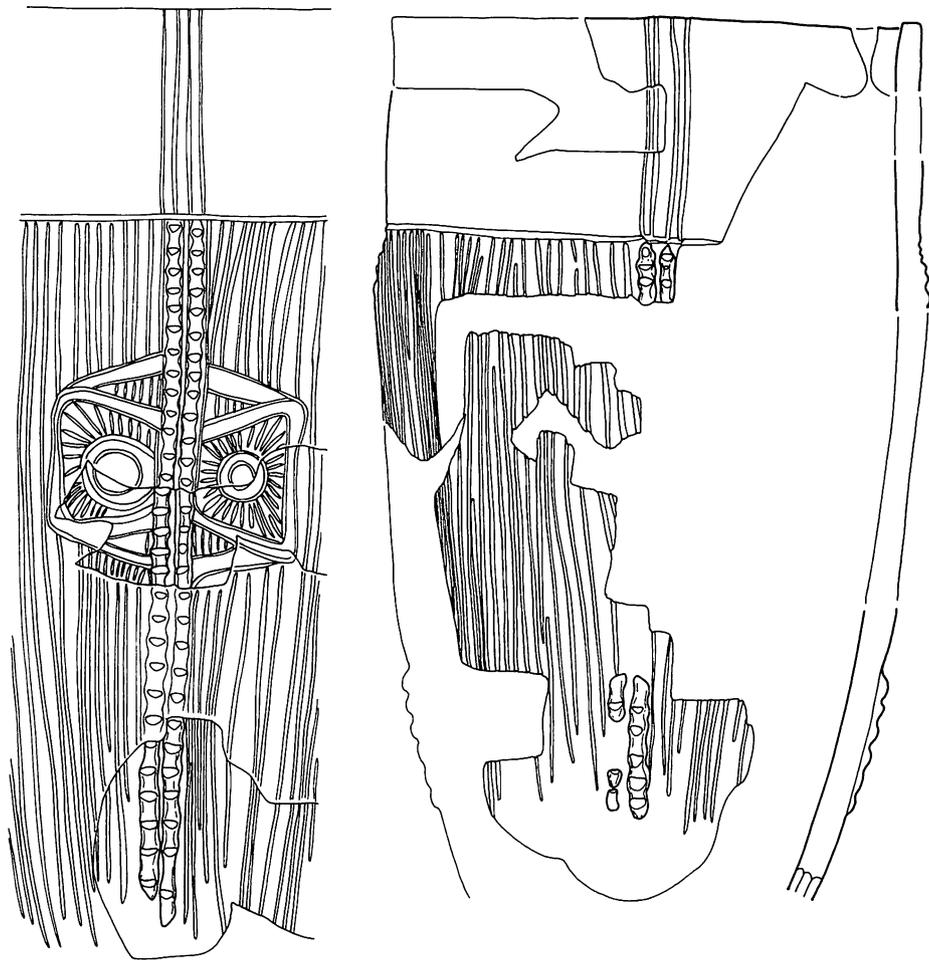


第120図 2号埋甕 (1/20)



第121図 2号埋甕 (1/4) 及び石皿 (1/8)

坦につくられる。深さは2.3cmである。重量は、約25kgである (今福)。



第122図 4号埋甕 (1/4)

4号埋甕 (第122図)

54号住居と重複し、本埋甕のほうが新しい。C-16グリッドで柱穴と考えられる遺構が確認されたことから、このグリッドを拡張するはこびとなった。結果的に拡張したことによって54号住居が発見されるとともに、3号埋甕も確認された。しかし、現表土から掘り下げを行ったために、埋甕の出土状況図の作成が不可能となってしまった。多量の土器片が掘り込みの内外から出土し、掘り方のみの図面作成となってしまった。また本埋甕と重複する形で土坑が存在し、磔の出土状況から本埋甕は土坑によって壊されたものと思われる。

掘り方の長軸は、重複する他の遺構によって壊されているため計測することはできないが、短軸については55cmを計測し深さは37cmで、形態は楕円形を呈するものと思われる。

土器は底部を欠損するもので、胴部および口縁部もかなり欠損している。現存する口縁部の正面図には、二条の平行沈線文が頸部まで引かれ、本図の左の一部口縁部が残存している箇所では沈線は施されず、この一箇所のみ沈線文が認められる。胴部は条線で器面全体に縦位に施され、二条の刻みをもった隆帯で四区画される。正面図の左図は、同一個体であるが接合されず、文様構成および土器の色調から本土器の後面に施された文様と思われる。ほとんど復元させたもので、図の中央部分と底部付近の一部が残存する。隆帯に施された刻みは、正面の隆帯と共通するもので、左右側面の二条の隆帯に施された刻みは斜行する形状のものである。色調は、赤みを帯びた灰褐色である。

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、環状を呈する住居跡群の内側に建てられており、住居跡の形成される方向に長軸を有する。1号掘立柱建物跡（第123図）は、東西方向に長軸をもち4×2本の柱で構成され、北側で10.10m、南側で9.92mをそれぞれ計測する。短軸は2本の柱穴で構成され、東側で2.90m、西側で2.70mを計測する。炉および床面は、確認されない。面積は、28.0m²である。

2号掘立柱建物跡（第123図）は、東西方向に長軸をもち2×2本の柱穴が確認され、北側で2.96m、南側で3.00mをそれぞれ計測する。短軸は東側で2.60m、西側で2.44mを計測する。炉および床面は、確認されない。本建物跡は、10号住居跡を破壊して建てられている。面積は、7.50m²である。

3号掘立柱建物跡（第123図）は、東西方向に長軸をもち4×2本の柱穴で構成され、長軸は北側で7.26m、南側では調査区外に伸びているため不明である。短軸は西側で2.08mを計測する。炉および床面は、確認されない。面積は、15.10m²である。

4号掘立柱建物跡（第124図）は、東西方向に長軸をもち3×2本の柱穴が確認され、長軸は北側で6.90m、南側で7.10mをそれぞれ計測する。短軸は東側で2.66m、西側で2.22mを計測する。炉および床面は、確認されない。本建物跡は、20号住居跡の炉の一部を破壊して建てられている。面積は、17.10m²である。

5号掘立柱建物跡（第124図）は、ほぼ南北に長軸をもち4×2本の柱穴が確認され、長軸は西側で12.10mを計測する。短軸は北側で2.64mを計測する。

南側の柱穴については、他の柱穴と比較した場合規模が小さいため北へのびる可能性がある。炉および床面は、確認されない。面積は、31.90m²である。

1. 2. 3. 4号掘立柱建物跡の長軸の向きは、集落が構成されている北側の向きと平行に建てられ、5号掘立柱建物跡の長軸の向きは、集落の南側の向きと平行する。また、集落に直行する掘立柱建物跡は、確認されていない。

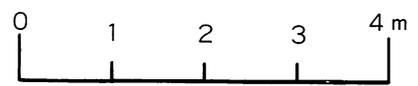
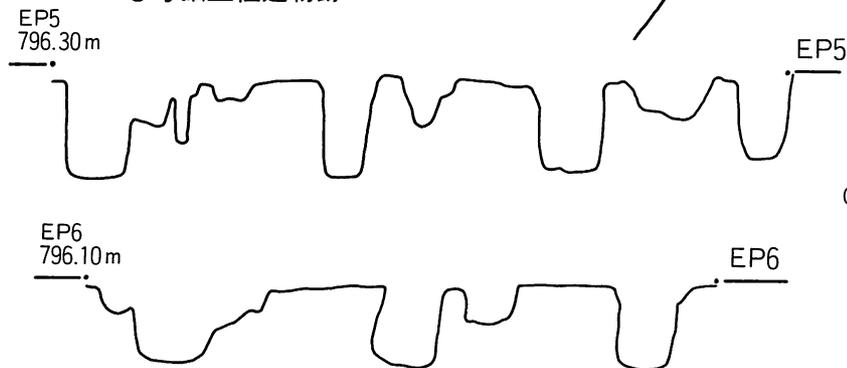
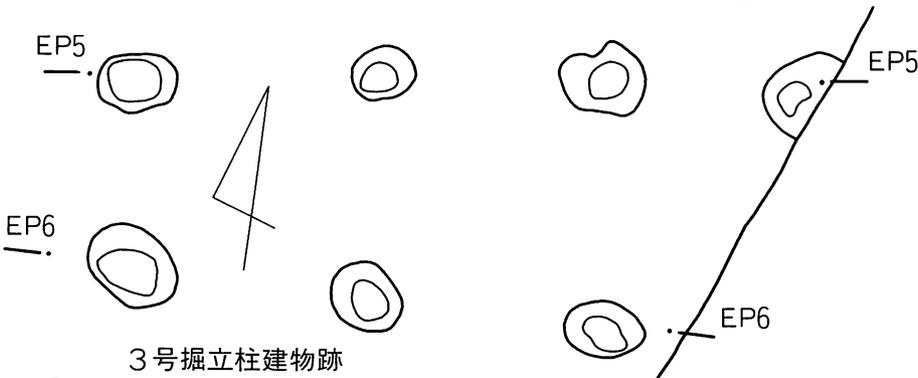
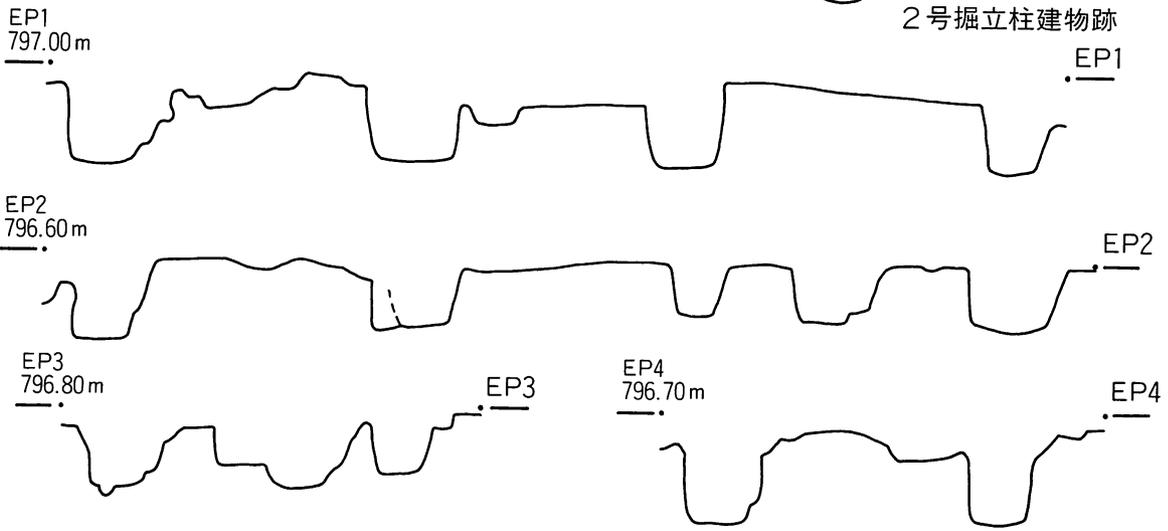
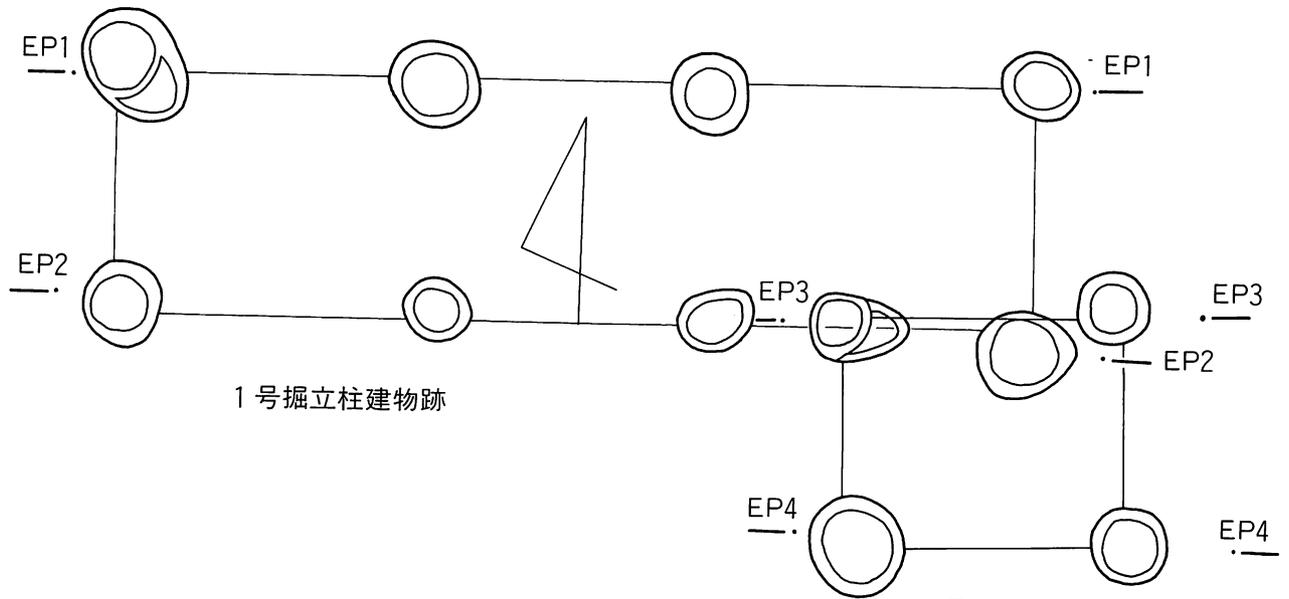
1号掘立柱建物跡は、曾利Ⅳ式期の12号住居跡を破壊して建てられていることから曾利Ⅳ式期ないしそれ以降建てられたものと思われる。

2号掘立柱建物跡は、井戸尻式期の終末から曾利Ⅰ式期に相当する10号住居跡を破壊して建てられている。形態は、調査区内で確認されたところでは2×2本であるが、全体的にみると4×2本の建物跡の可能性が高いと思われる。また1号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかではない。

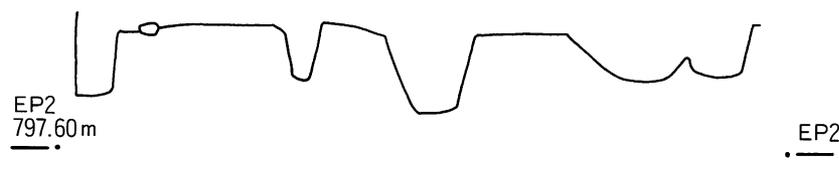
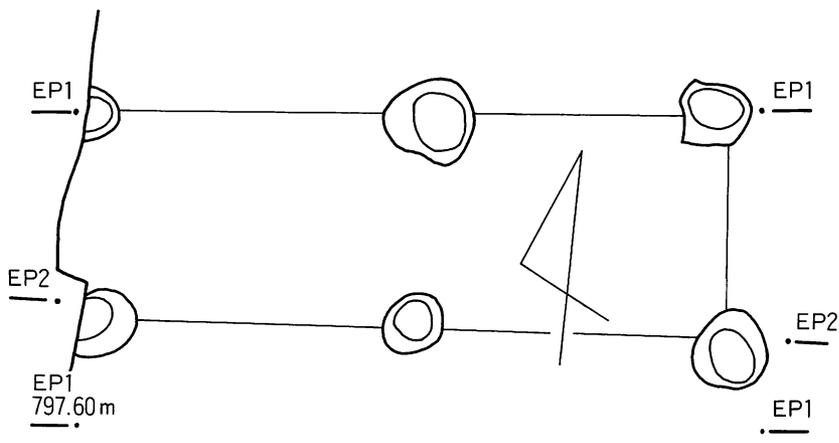
3号掘立柱建物跡は、住居群の内帯に存在し、密集する土坑群と重複して建てられている。時期的には、不明である。

4号掘立柱建物跡は、曾利Ⅰ式期と思われる20号住居跡を破壊して建てられている。本建物跡も調査区外に伸びるものと考えられ、4×2本の柱穴構成をとるものと思われる。

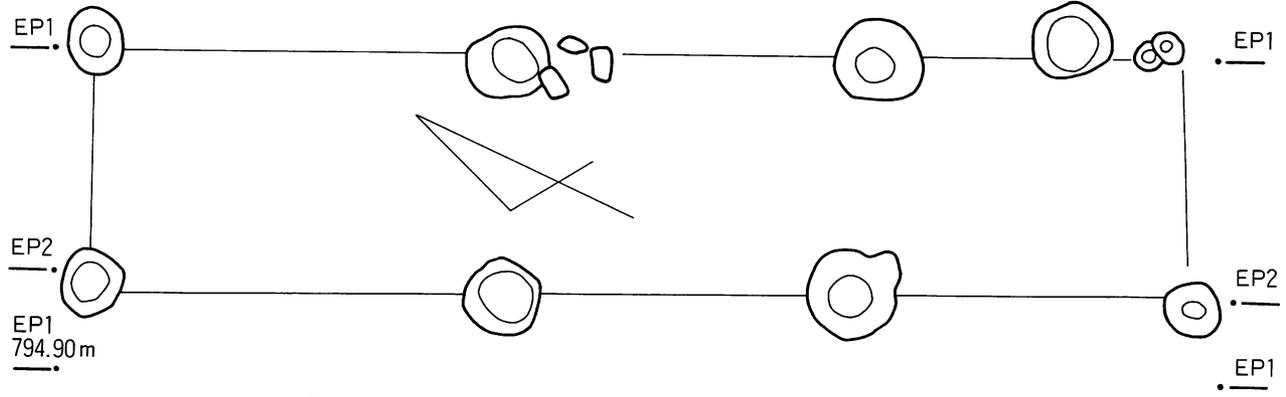
5号掘立柱建物跡は、井戸尻式期の住居跡と思われる31号住居の炉石の下に柱穴が存在する。また、南の4本目の柱穴については、規模がやや小さく深さも他の柱穴に比べ浅く、本建物跡に伴うものであるのか疑問の余地があり、北側へ伸びる可能性を含んでいる（山本）。



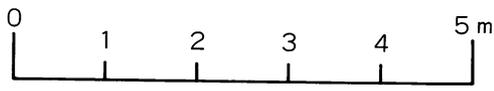
第123図 1・2・3号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡



5号掘立柱建物跡



第124图 4・5号掘立柱建物跡

第4節 土坑

第1次調査から第7次調査までの土坑の総数は669基で、そのうちA区では306基・B区では10基・C区では353基まで番号を付した。また土坑の発見数が多いため全てを図化することは不可能であるため、紙数が許すかぎり図版化し、残りの土坑については表にまとめた。

A-7号土坑 (第125・126・127図)

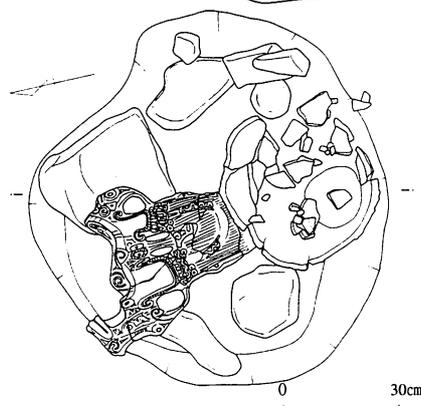
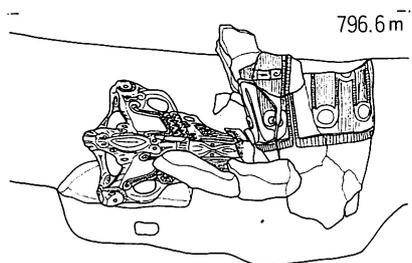
諸磯b式期の住居跡に掘り込まれており、土層の観察によっても明確なプランの検出は困難であったが、住居跡の床面を掘り込んでおり、ここで長径100cm、短径95cm、確認面からの深さ50cmほどの円形を呈する。土器が二個体完形で出土し、それぞれ曾利式土器と井戸尻式土器といったように時期が異なるものである。曾利式土器は横位に置かれた状態で、正位におかれた井戸尻式土器と底部で接し、押されたように割れていた。このため両者は共存していると判断した。

また井戸尻式土器は、曾利式土器と接する部分で外圧によって1/3

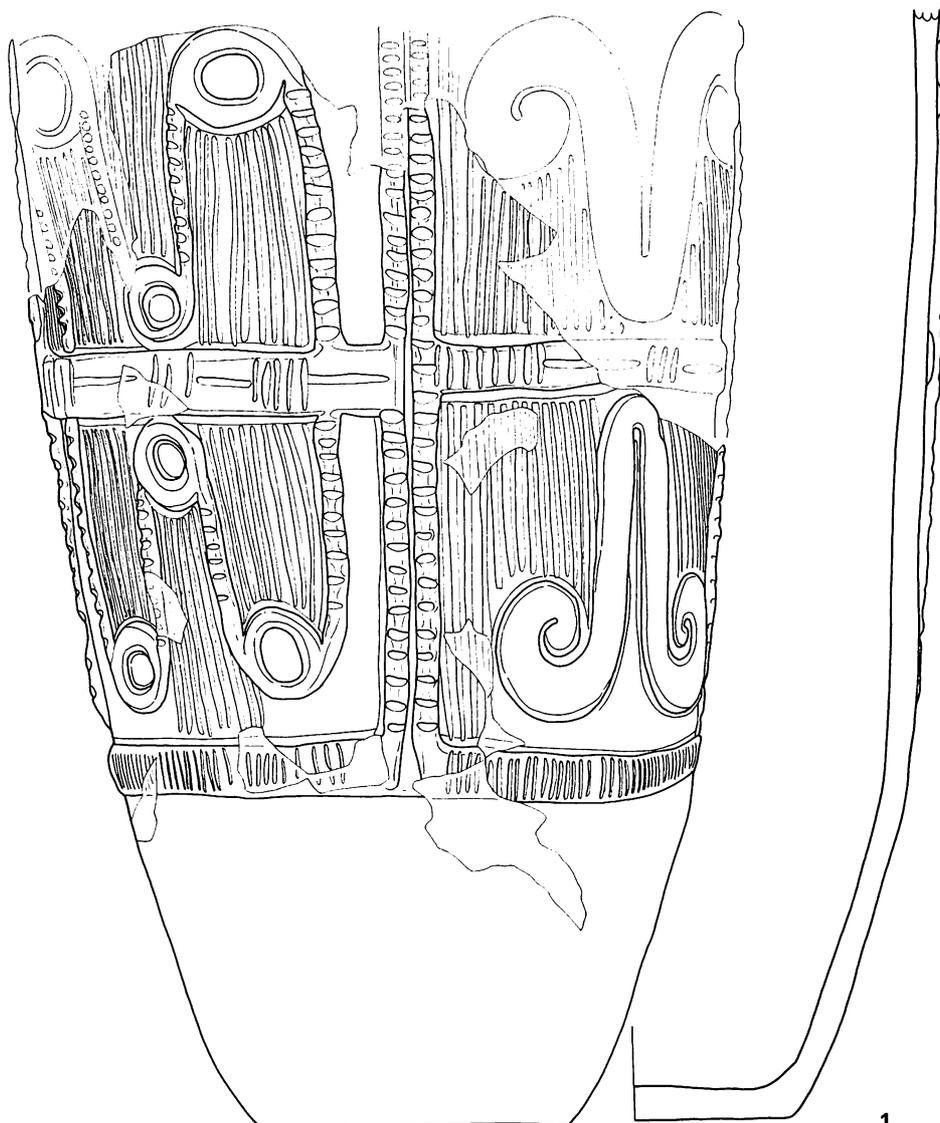
ほどが内部に押し込まれるように割れていた。それぞれ土器の内部の土は周囲の土と同じで、流れ込んだものである。

出土土器で2の曾利式土器は、中空の四単位の大把手を持つもので、内一つが突出して大きくイノシシと思われるモチーフがのる。これらの把手は井戸尻式期に見られるもので、曾利式期には見られないものである。胴部は横位に粘土紐を波状に貼付したものがみられ、その下にU字形の懸垂文が二単位に配される。このモチーフの間は半截竹管状工具による縦位の沈線で充填される。完形で、重量は6.54kg、曾利I式の新段階である。

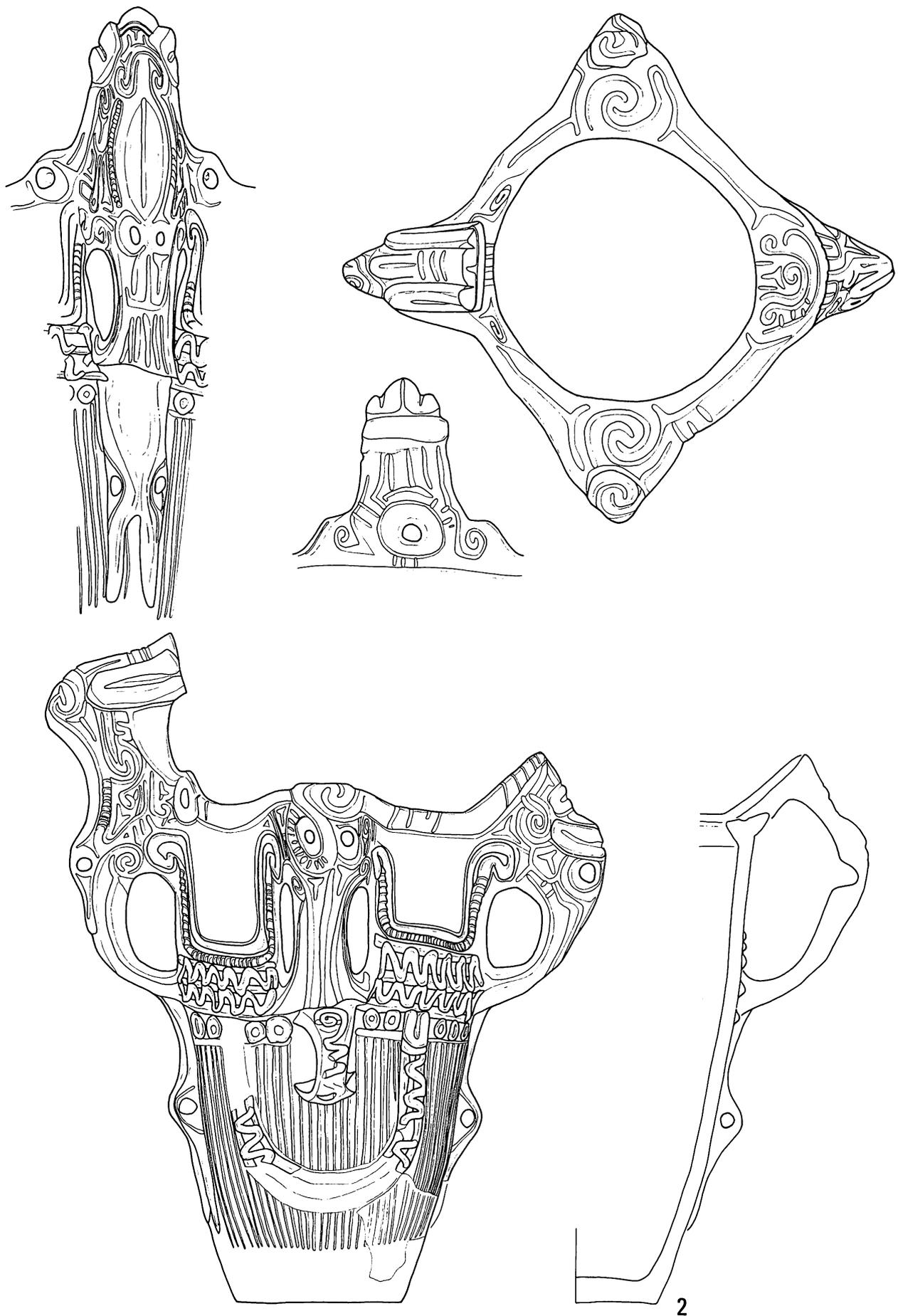
1の井戸尻式土器は、胴部上半を欠損する。文様は二本の縦位の隆線によって四単位に区画される。また



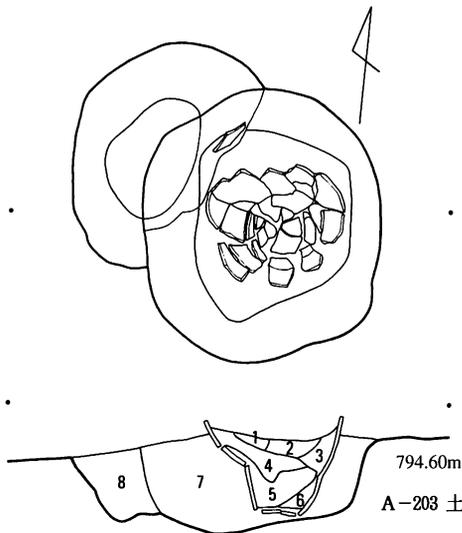
第125図 A-7土坑 (1/20)



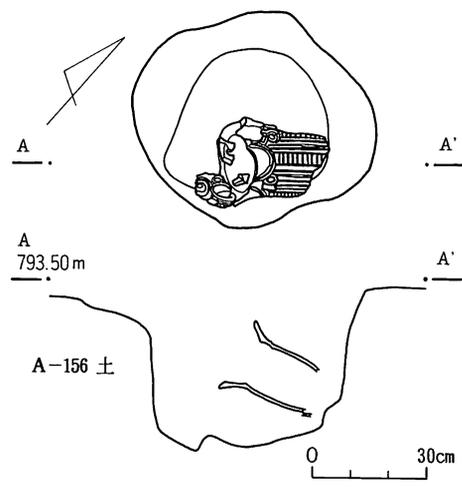
第126図 A-7土坑出土遺物実測図 (1/4)



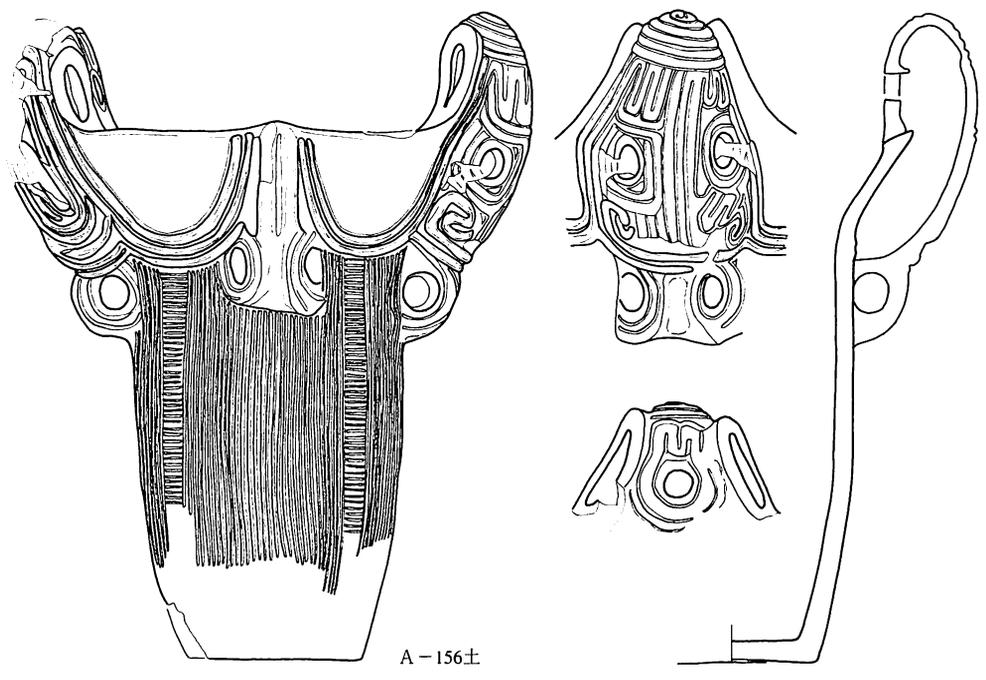
第127图 A-7 土坑出土遗物实测图 (1/4)



A-203土

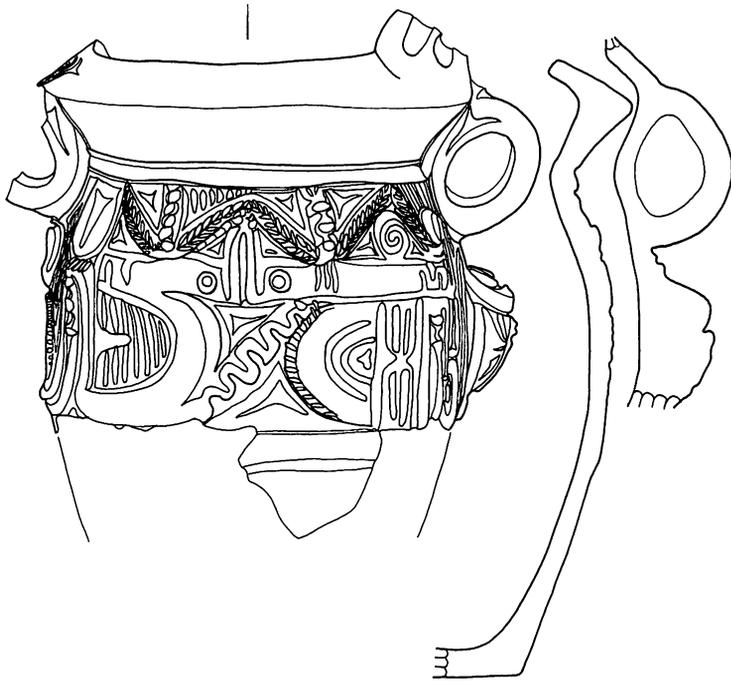


- 1-暗褐色土 2-黒褐色土 3-暗褐色土
- 4-暗褐色土 (黒褐色土粒子混入) 5-暗褐色土 (褐色土小ブロック混入)
- 6-褐色土 7-暗褐色土 (褐色土粒子混入)
- 8-褐色土 (暗褐色土粒子混入)



A-156土

第128図 A-203土・A-156土坑 (1/20) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第129図 A-3土坑出土遺物実測図(1/4)

それぞれ計測する。坑底は、凹凸が認められ中央が窪む。立ち上がりは、垂直に近い。土坑の東壁よりの中位から土器が出土し、口縁部を斜めにして置かれている。

出土土器は、水煙形土器と呼ばれるもので、把手の一部と底部を約半分ほど欠損するが、ほぼ完形である。口縁部には中空のドーム型把手を二つ相對する位置につけられる。この把手の一つは欠損しているがそれぞれモチーフが異なり、半截竹管状工具による平行沈線と隆線によって表現される。頸部には眼鏡状の把手が四単位みられ、内二つは中空把手に連続し、他は口縁部に向かって橋状把手となる。これらの把手は、隆線によるU字形のモチーフで連結される。胴部は半截竹管状工具によって縦位の集合沈線が施されるが、中空把手の下と把手間においては横位に施されている。

この手法は、長野県南部に分布する唐草文土器に多く見られる文様である。外面は暗褐色を呈するが、胴部下半以下は淡赤褐色をなす。また内面の底部付近にはお焦げが付着し、煮炊きに使用されていたことが窺える。

本土器の重量は、2.15kgである。帰属する時期は、曾利I式期の古い段階に位置づけられる(今福)。

A-3号土坑 (第129図)

本土坑は、A区B-7グリッドに位置し、号住居に存在する。長軸は70cm、短軸は62cm、深さは50cmを計測し、袋状を呈する土坑から出土した。口縁部を一部欠損するとともに、胴下半部から底部までを欠損するが、一部ではあるが、底部まで接合された。口縁部は「く」の字状に屈折させられ、左右に環状の把手が付けられる。左の把手の口縁部には渦巻文と三叉文が施される。右側の把手の口縁部には、さらに把手が付けられた痕跡が認められる。

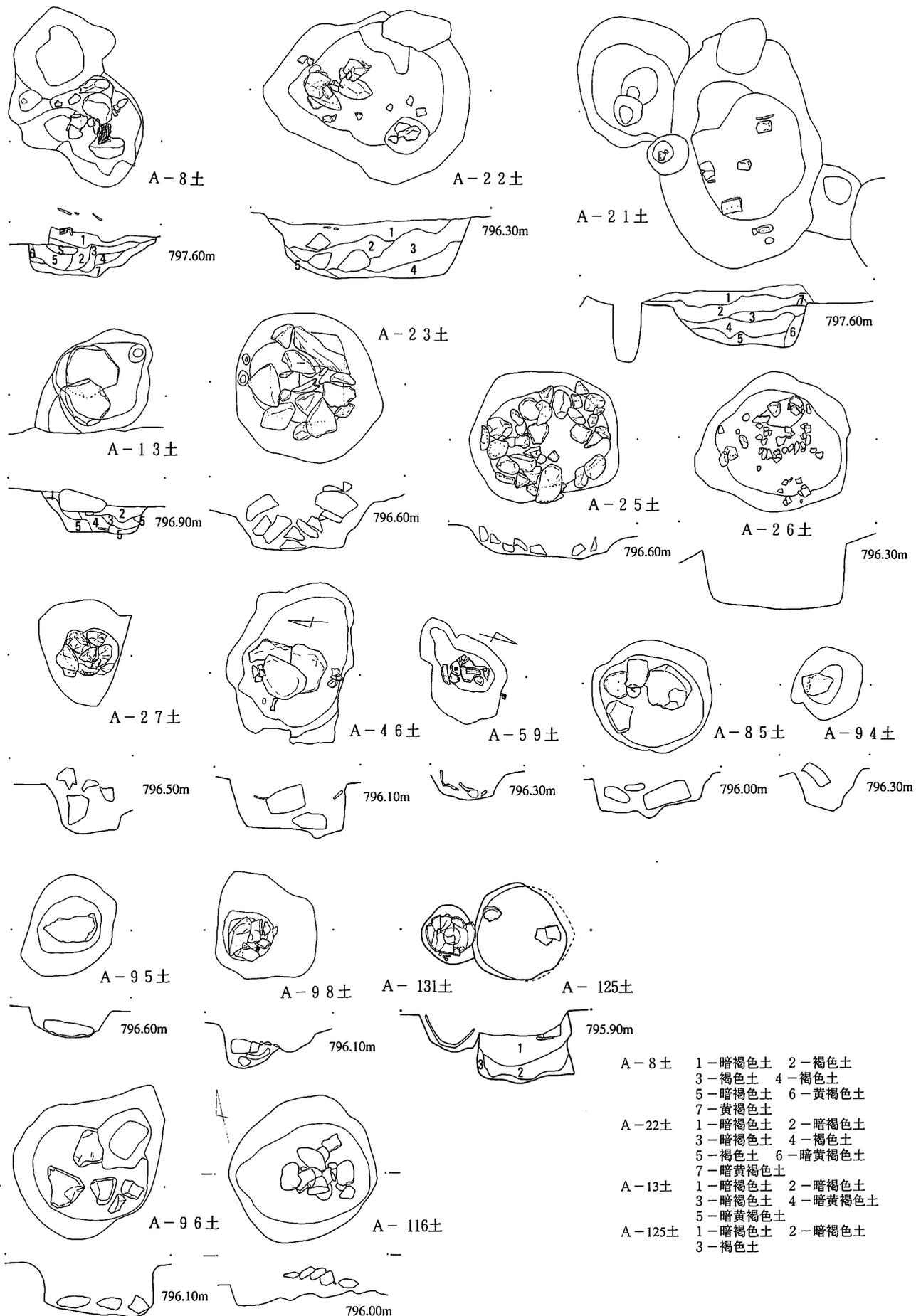
幅広の隆帯によって上下二段に区画され、文様モチーフは上下で鏡像反転となる。井戸尻式土器の終末期に比定される。土器の重量は、8kgを量る(今福)。

A-203号土坑 (第128図)

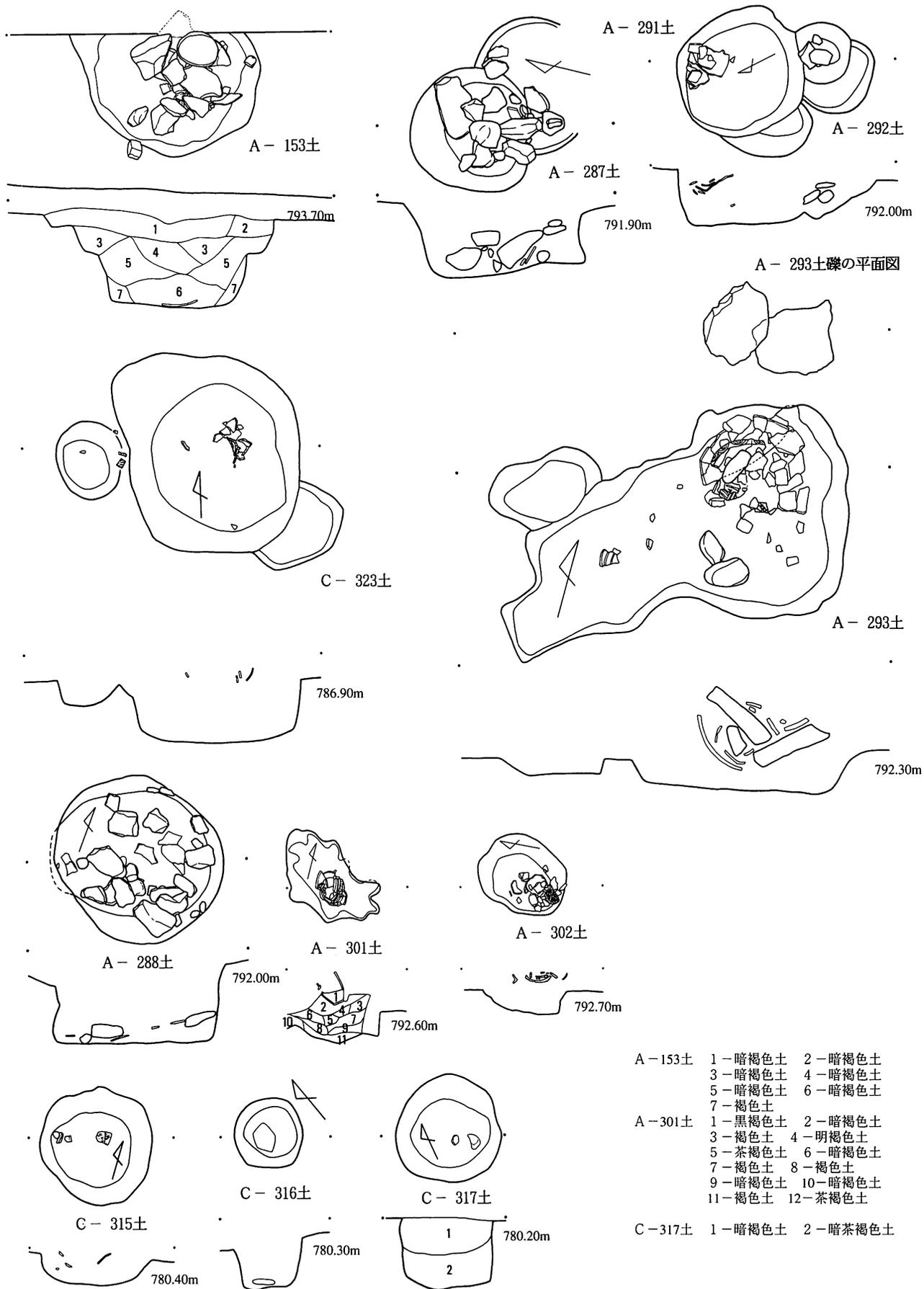
本土坑は、A区C-20グリッドに存在する。長軸72cm、短軸64cm、深さ23cmを計測し、ほぼ円形を呈するものである。口縁部を欠損するほかは、底部まで残存する。器面には縦位による条線で充填され、その後頸部および胴部に細い粘土紐が貼り付けされる。曾利III式期に属するものと思われる。

A-156号土坑 (第128図)

本土坑は、A区B-25グリッドの28号住居と重複する。土坑の形態は不整円形を呈する。規模は長径66cm、短径55cm、深さ40cmをそれ

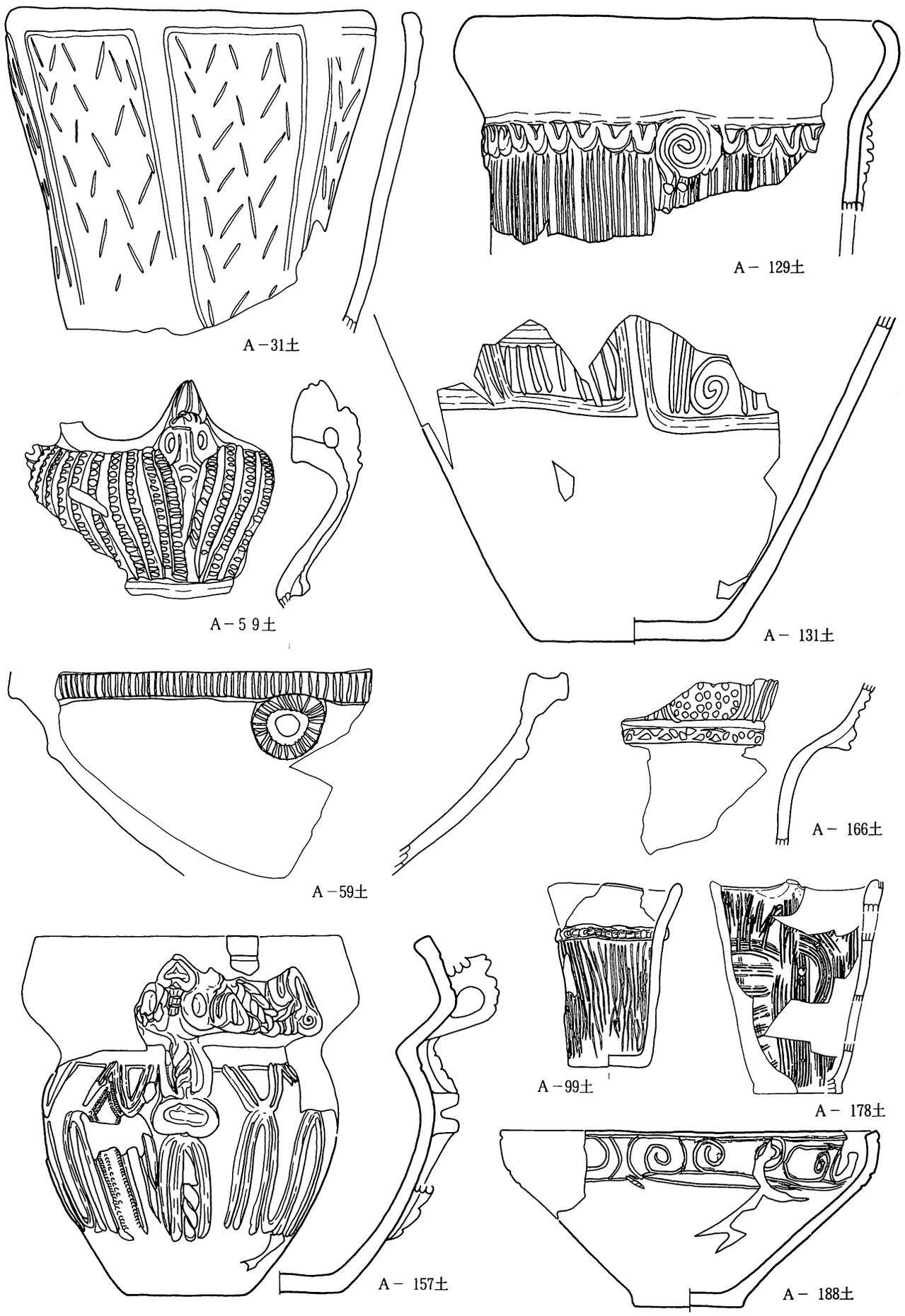


第130图 土坑(1)(1/40)

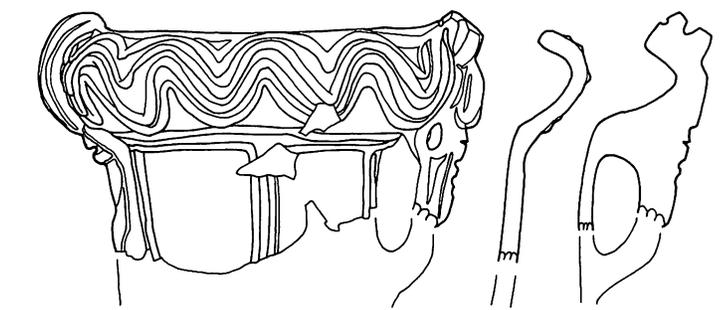


- A-153 1-暗褐色土 2-暗褐色土
3-暗褐色土 4-暗褐色土
5-暗褐色土 6-暗褐色土
7-褐色土
- A-301 1-黒褐色土 2-暗褐色土
3-褐色土 4-明褐色土
5-茶褐色土 6-暗褐色土
7-褐色土 8-褐色土
9-暗褐色土 10-暗褐色土
11-褐色土 12-茶褐色土
- C-317 1-暗褐色土 2-暗茶褐色土

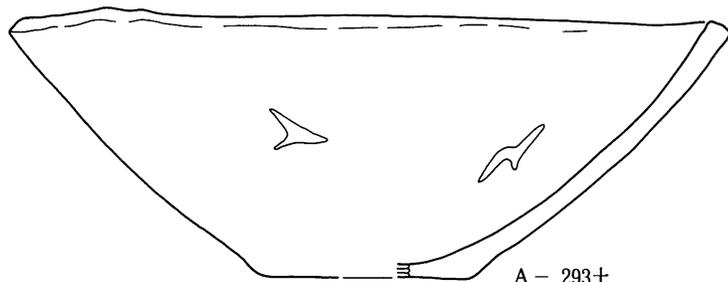
第131図 土坑(2) (1/40)・A-293土 (1/20)



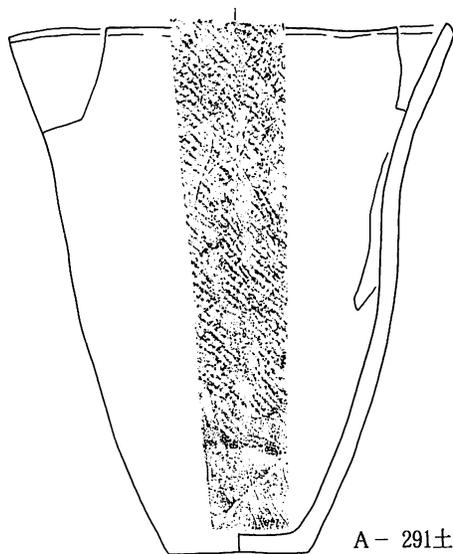
第132图 土坑出土遺物 (1/4)



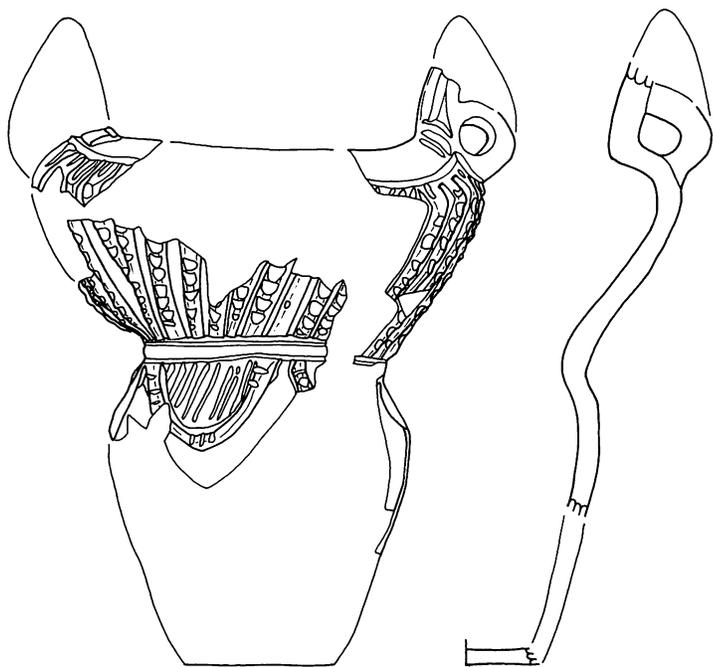
A - 293土



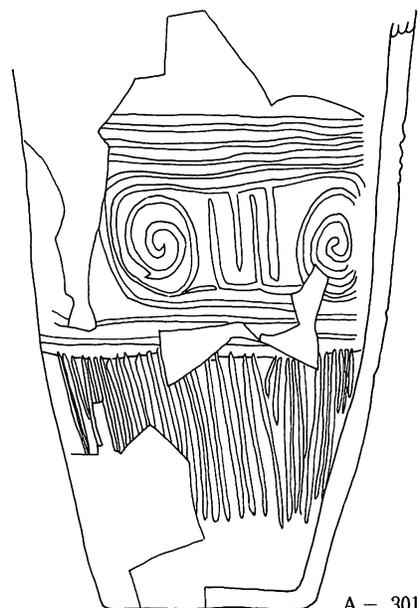
A - 293土



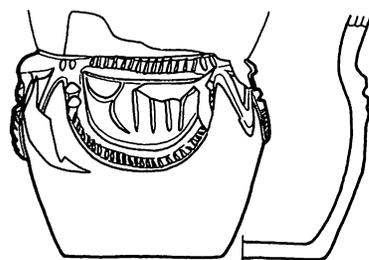
A - 291土



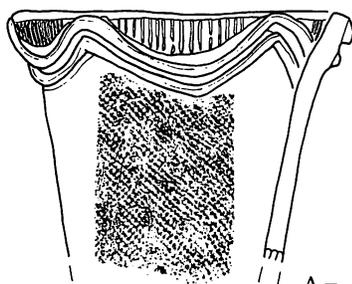
A - 302土



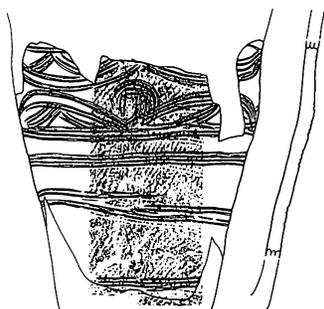
A - 301土



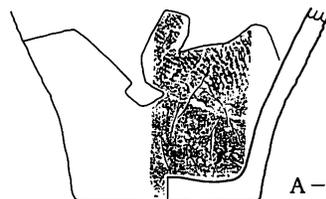
A - 225土



A - 188土



A - 223土



A - 222土

第133图 土坑出土遺物 (1/4)

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
36	90	50	1.8		曾利Ⅳ? 諸磯b?			B-10G
37	115	65	1.77	26	曾利Ⅰ			A-11G
38	92	82	1.12	48	諸磯b			B-11G
39	90	72	1.25	54	諸磯b		○	B. C-11G
40	105	90	1.17	56	諸磯b			C-10G
41	65	60	1.08	93	3号掘立柱			A-11G
42	90	85	1.06	28				A-11G
43	61	52	1.17		曾利Ⅰ		○	A-12G
44	105	90	1.17	32	曾利Ⅰ			A-11. 12G
45	70	45	1.56	26				A-12G
46	123	83	1.48	36	曾利Ⅰ	○	○	A-12G
47	80	78	1.03	55	曾利Ⅰ 54と接合			A. B-12G
48	130	100	1.3	58	諸磯b			A-11G
49	70	60	1.17	55	曾利Ⅲ?			A-11G
50	85	49	1.73	65	曾利Ⅰ		○	B-11. 12G
51	62	55	1.13	45	中期			A-11G
52	105	83	1.27	33	曾利Ⅰ		○	A-11G
53	70	60	1.17	96	諸磯b 3号掘立柱			A-11G
54	95	70	1.36	17	曾利Ⅰ 47と接合		○	B-12G
55	60	57	1.05	26				B-12G
56	70	63	1.11	102	諸磯b 3号掘立柱		○	B-11. 12G
57	120	50	2.4	18	曾利Ⅴ			B-11G
58	75			45	曾利Ⅳ		○	D-11G 20住内
59	82	58	1.41		井戸尻			D-12G
60	48	45	1.07	50				B-12G
61	54	50	1.08	75		○	○	D-11G 20住内
62	103	85	1.21	15	諸磯b			D-11G 20住内
63	145	58	2.5	55				A-11. 12G
64	75	70	1.07	94	3号掘立柱			A-12G
65	125	45	2.78	16				C-12G
66	123	82	1.5	25				B-12G
67		70		98	4号掘立柱			D-11G 20住内
68	75	45	1.67	10				C. D-12G
69	90	65	1.38	85	3号掘立柱			B-12G
70	60	46	1.3	24				B-12G
71	65	45	1.44	46				B-12G
72	145	90	1.61	25				C-11G
73	105	73	1.44	44				C-12G

甲ッ原遺跡A区土坑表

(単位cm)

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
1	78	60	1.3	95				B-6G 1号埋甕
2	60	55	1.09	65				B-7G 2号埋甕
3	70	62	1.13	50	井戸尻		○	B-7G 袋状
4	96	78	1.23	68				B-7G
5	102	95	1.07	70				B-8G
6	90	80	1.13	53			○	B-7G
7	100	95	1.05	50	井戸尻終末	石鏃		C-10. 11G 20住内
8	140	85	1.65					B-10G
9	118	90	1.31	60	2号掘立柱	石鏃	○	A-10G
10	145	130	1.12	23	2号掘立柱	石鏃		土偶
11	90	70	1.29	75	1号掘立柱			B-9G
12	115	96	1.2	42			○	B-9G
13	83	72	1.15	30			○	B-9G
14	132	80	1.65	35			○	B-9G
15B	55	40	1.38		磨製石斧			A-9G 5住内
15A	100	70	1.43					A-9G 5住内
16	112	100	1.12		諸磯b		○	B-9G 11住内
17	318	240	1.33	89	石匙・石鏃		○	B-10G
18								
19	200	130	1.54	28				D-10G 17住内
20	83	80	1.04	29	4号掘立柱			C-10G
21	170	122	1.39	52	諸磯b		○	C-10G 13住内
22	150	127	1.18	50	諸磯b 石匙		○	B-10G 13住内
23	112	110	1.02	35			石皿	C-11G 20住内
24	90	90	1		井戸尻		○	D-11G 20住内
25	106	95	1.12	21			○	D-10G 20住内
26	120	100	1.2	51	諸磯b 石鏃		○	C-10G 18住内
27	80	75	1.07	36			○	A-10G
28	130	70	1.86	33	曾利Ⅳ-V			A-11G
29	180	93	1.94	19	諸磯b 井戸尻			A-10G
30	150	40	3.75		曾利Ⅴ		石鏃	A-10. 11G
31	184	75	2.45	90	曾利Ⅴ		○	A-10. 11G
32	160	125	1.28	67	曾利Ⅳ			A-10G
33	88	65	1.35	95	諸磯b 3号掘立柱			A-11G
34	70	65	1.08	45	諸磯b			A-11G
35	115	90	1.28	19	曾利Ⅰ?			A-10G

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
112					曾利Ⅲ			B.C-13G
113								B-12.13G
114	53	48	1.1	31	曾利Ⅲ	○	○	B-13G
115	125	80	1.56	27	諸磯b			B-13G
116	115	100	1.15	16	石皿	○		A-13G
117	116	102	1.14		井戸尻		○	A-12.13G
118	98	87	1.13	23	井戸尻		○	A-12G
119	63	54	1.17	53				B-13G
120	78			16		石棒		A-13G
121	58	53	1.09	66				
122								C-13G
123	68	65	1.05	15	曾利Ⅳ	○	○	
124	45	35	1.29	25		○		C-13G
125	72	70	1.03	50	井戸尻		○	A-12G 袋状
126	61	56	1.09	46				
127								C-13G
128					井戸尻			A-13G
129					井戸尻-曾利Ⅰ			B-13G
130								B-13G
131	45	40	1.13	27	井戸尻			A-12G
132	101	60	1.68	15	井戸尻			
133	64	60	1.07	14	磨製石斧・石皿	○		
134	150	95	1.58	17		○	○	
135	44	40	1.1	19	井戸尻		○	
136								B-14G
137								B-14G 25住内
138						石鏃		B-13G
139								
140	68	63	1.08	20	諸磯b	○	○	B.C-26G
141	95	95	1	20	諸磯b			C-26G
142	122	85	1.44	30			○	C-25.26G
143	150	142	1.06	63	諸磯b		○	A-26G 26住内
144	175	115	1.52	30				A-26.27G
145	160	55	2.91	30				Z.A-26G
146	160	80	2	21	諸磯b			A-26G 26住内
147					曾利Ⅱ?			
148	68	45	1.51	16	曾利Ⅱ?			B-26.27G 26住内
149	154	84	1.83	32				B-27G

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
74	70	40	1.75	25				C-12G
75	70	45	1.56	50				C-12G
76	145	140	1.04	23				A-12G
77								B-11G
78	35	29	1.21					A-12G
79	110	110	1	35				A-12G
80	41	40	1.03	20				C-12G
81	70	45	1.56	60				C-12G
82	125	100	1.25			○		A-10. 11G
83	100	55	1.82	20				B-11G
84	60	55	1.09					A-11G
85	90	80	1.13	26	磨石	○凹		B-12G
86	140	110	1.27	43		○	○	B-12G
87	83	80	1.04	82	4号掘立柱			D-10G
88	50	34	1.47	10	4号掘立柱			D-10G 20住内
89	90	75	1.2	10				D-11G 20住内
90	90	82	1.1	65				A-6G 24住内
91	100	55	1.82	37				C-10G
92	55	43	1.28	22				D-12G
93	80	70	1.14	16				C-11G 20住内
94	53	49	1.08	26				C-12G
95	74	63	1.17	21				D-10G 20住内
96	130	100	1.3	37		○		B. C-12G
97	75	50	1.5	83				C-12G
98	80	74	1.08	32	曾利Ⅰ	○	○	C-12G
99	220			35	曾利Ⅰ	石鏃	○	C-12G
100	93	78	1.19	22				A-9G
101	100	70	1.43	85		○		C-12. 13G
102	120	85	1.41	20				B-11G
103	60	23	2.61	19				D-12G
104	100	90	1.11	25		○凹	○	C-12G
105	80	75	1.07		2号掘立柱			A-10G
106								
107	85	80	1.06	40		石斧		A-7G 河の中
108	75	60	1.25	32				B-11G
109								C-12.13G
110								
111	110	90	1.22	20	曾利Ⅲ			C-13G

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
188	86	82	1.05	56	井戸尻 曾利Ⅲ	○	○	
189	80	55	1.45	27				C-19G
190	60	56	1.07	22				C-19G
191	100	70	1.43	33	曾利Ⅲ			35住内
192	75	70	1.07	48	5号掘立柱	石匙		C-20G
193	90	65	1.38					B-19G
194	85	55	1.55	32				
195	100	95.5	1.05	27				C-19G
196	93	82	1.13	36	曾利Ⅲ 200と接合	○		B.C-20G
197	90	90	1	57	5号掘立柱			B.C-20G 31住内
198	63	52	1.21	18	諸磯b	石皿		C-20G
199	98	86	1.14	18		○		C-20G
200	100	50	2			石斧		C-20.21G
201	85	54	1.57					B.C-20G
202					中期?			
203	72	64	1.13	23	曾利Ⅱ		○	C-20G
204					曾利Ⅳ			
205	110	100	1.1	75	曾利Ⅲ			A-24G
206	110	70	1.57	46	諸磯b			
207	140	104	1.35		諸磯b	○		B-22G 34住内
208					新道?			
209	123			15	曾利Ⅲ-Ⅳ	○	○	A-24G
210	91	84	1.08	10		○		B-24G
211	105	93		25	諸磯b			A-23G
212	102	85	1.2	30		○		A-23G
213	70	55		32				A-22.23G
214								
215								
216	92	74	1.24	12	新道?	○		A.B-21G
217	81	66	1.23	66	曾利Ⅲ			A-23G
218		85		10		○		A.B-21G
219	105	90	1.17	20				B-21G
220								
221	87	87	1	20		○		B-21G
222	102	90	1.13	70	5号掘立柱 曾利Ⅲ		○	B-21G
223	140	115	1.22	25	諸磯b		イブツ	A-23G
224	75	58	1.29	5	曾利Ⅲ		イブツ	A-23.24G
225	145	68	2.13	13	井戸尻			B-21G

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	磔	土器片	そ の 他
150	40	35	1.14					B-26G
151								A-26G 26住内
152	80	45	1.78		中期			A-27G 26住内
153	146			66		○	○	A-25G
154	110			25	諸磯b	○	○	A-25G
155	90	70	1.29	12		○		B-25G 28住内
156	65	55	1.18	42	曾利Ⅰ		○	28住内
157	96	94	1.02	28	5号掘立柱 井戸尻		○	A.B-20G 31住内
158	75	70	1.71	21	曾利Ⅲ	凹石		A-25G
159	50	50	1					A-25G
160	138	130	1.06	55				B-20.21G 31住内
161	170	150	1.13		曾利			
162	110	87	1.26	30	諸磯b			A-25G
163	167	107	1.56	19				A-25G
164	85	83	1.02	30	曾利Ⅰ? 石皿片	○	○	A-25G 36住内
165	90	65	1.38	90	5号掘立柱 中期			B-20G 31住内
166	102	95	1.07	50	井戸尻	○		B-19G 31住内
167	142	130	1.09	20		○		B-19.20G 31住内
168	130	110	1.18	30				B-20G 31住内
169	104	85	1.22	48				B-20G 31住内
170	90	30	3					B-20G 31住内
171	175	110	1.59	50	曾利Ⅲ	○		B.C-19G 32住内
172	95	95	1	11	曾利Ⅱ			C-18.19G 32住内
173	80	68	1.18	58	井戸尻			C-18G
174	100	65	1.54	15	井戸尻			C-18G 32住内
175	60	50	1.2	29	曾利Ⅲ			C-19G 32住内
176	90	75	1.2	25				C-19G 32住内
177	95	77	1.27	86				C-19G
178	90			51	中期			C-18G 32住内
179	145			64	曾利Ⅲ			C-19G
180	150			16				C-19G
181	65	50	1.3	11	中期			C-20G
182	70	67	1.04	56				C-18G 32住内
183	100	88	1.14	55				C-18G 32住内
184	60	50	1.2	23	中期			B.C-19G
185	75	65	1.15		5号掘立柱 曾利Ⅱ-Ⅲ			C-19G
186	87	80	1.09	41				C-19G
187	84	75	1.12	38	曾利			B-19G

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	礫	土器片	そ の 他
330	64	62	1.03	12				A-11G pit-1
331		64		14				A-11G pit-2
332	73	70	1.04	40				A-12G pit-1
333	160	95	1.68	24				B-11G-1土
334	92	50	1.84	22				B-11G pit-1
335		80		23				B-12G-1土
336		60		20				B-12G-2土
337	86	80	1.08	29				B-12G-3土
338	102	63	1.62	21				B-12G-4土
339		92		21				B-12G-5土
340	70	48	1.46	44				B-12G-6土
341		45		16				B-12G-7土
342	51			27				B-12G-8土
343	50	36	1.39	22				B-12G-9土
344	52	45	1.16	22				B-12G-10土
345	115	90	1.28	31				B-12G-11土
346	115			24				C-10G-1土
347				23				C-11G-1土
348	78	72	1.08	12				C-11G-2土
349	110	96	1.15	45	五領ケ台		○	C-8G-1土
350	120	77	1.56	36		石皿		C-8G-2土
351	130	110	1.18	20				A-7G-2土
352	82	73	1.12	20				A-7G-3土
353					諸磯			A-7G-1土

No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	礫	土器片	そ の 他
226	120	105	1.14	20		○凹		B-21G
227	から284までは「甲ッ原遺跡I」に記載済、ここでは省略する。							
285	58	45	1.29	43		○		
286	82	73	1.12	13		石皿		
287	96	93	1.03	50		○		
288	124	120	1.03	52		○	○	
289	90	75	1.2	33		○		
290								
291	97	93	1.04	38	曾利Ⅲ		○	
292	44	40	1.1	30		○		
293	77	65	1.18	13	井戸尻	○	○	
294	113	68	1.66	23		○	○	
295	303	170	1.78	30	曾利Ⅲ	○	○	
296	90	82	1.1	58				
297	48			32	曾利			
298	46	36	1.28	25		○		
299	67	53	1.26	12		○		
300	72	57	1.26	31	曾利Ⅴ	○	○	
301	83	40	2.08	25	井戸尻		○	
302	67	51	1.31	16	井戸尻		○	

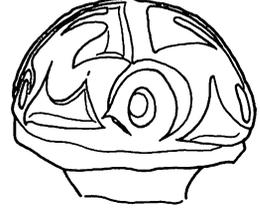
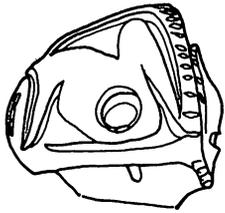
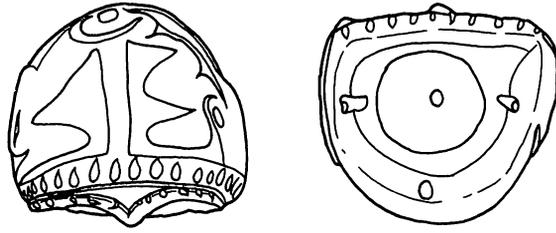
C区土坑表

(単位cm)

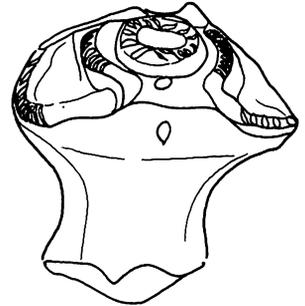
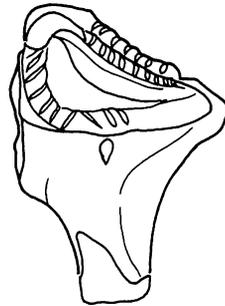
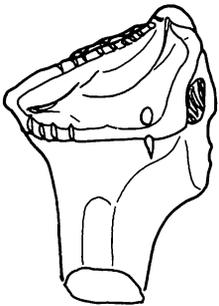
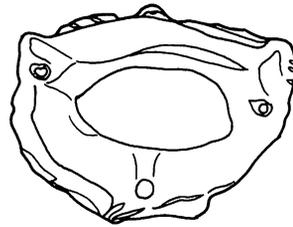
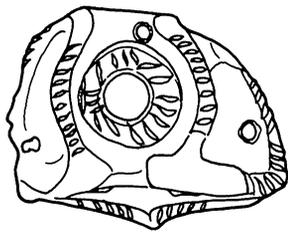
No	長軸	短軸	長/短	深さ	時 期	礫	土器片	そ の 他
315	86	80	1.08	24	諸磯c		○	
316	50	50	1	31		○		
317	80	80	1	52		○		
318	91	83	1.1	42		○		
319	110	95	1.16	50		○		
320	56	35	1.6	59		○		
321		40		30		○	○	
322	138	110	1.25	54		○		
323	167	144	1.16	48	五領ケ台		○	
324					新道			Z-48G-1土
325	120	115	1.04	15		○		46 住内土坑
326								
327	45	35	1.29	50				A-9G-1土
328		75		16				A-10G-1土
329	75			15				A-10G-2土

第5節 土製品・石製品等

- 土 偶 頭：1 (C-45住)・両耳と後頭部に貫通孔・黒褐色・頸に竹串状の孔・新道式期：2 (C-48住)・顔面に赤彩・両耳と後頭部に貫通孔・全体的に褐色、顔面は黒褐色：3 (C-40住)・C-45住の頭頂部の文様と類似・頸部に空洞有り・赤褐色・新道式期？：4 (A-14住)・黒褐色・後頭部は剥離している：5 (C, A. B-13G-1)・両耳と後頭部に貫通孔・赤褐色、顔面黒褐色・頸から頭頂部まで竹串状の孔：6 (C, A. B-13G-2)・前頭部に孔・赤褐色、顔面黒褐色・頸に竹串状の孔
- 土 偶 腕：7 (A-33住)：8 (A-10土)：9 (A-12住)：10 (A, B-8G)
- 土 偶 足：11 (A-10住)・足裏から足首まで竹串状の孔：12 (A, C-10G)：13 (A-188土)：14 (A-27住)：15 (B区)・足首に竹串状の孔・新道式期：16 (A, C-6G)
- 土 製 円 盤：17 (A-27住)：18 (A-31住)：19 (A, C-8G)：20 (A区)：21 (C-15住)：22 (C-21住)：23 (C-21住)：24 (C-24住)：25 (C-24住)：26 (C-26住)：27 (C-26住)：28 (C-55住)：29 (C区)
- 土 製 品：30 (A, D-7G)・内外面黒褐色・内面凹凸(手涅槃)：31 (A-10住)(ミニチュア)：32 (A-21住)：33 (A-27住)(土 鈴)：34 (A-18住)・棒状工具によって丸く磨られている・一部縄文が認められる(土器片加工製品)：35 (A, B-8G)(土製匙)：52 (A区)(ドロメンコ)
- 抉 状 耳 飾：36 (A-1住)・土製品：37 (A-26住)・石製品：38 (A-27住)・石製品：39 (A区河)・石製品・折れ面を修正・滑石製：40 (A区河)・滑石製小玉：59 (A区C-6G)・滑石製小玉
- 赤彩土器片：41 (A-10住)：42 (A-10住)：43 (A-13住)：44 (A-27住)：45 (A-33住)：46 (A-34)：47 (A-21土)：48 (A-26土)：49 (A-178土)：50 (A-10土)：51 (A-217土)
- 古 錢：53 (A区)・寛永通宝：54 (A, A-37G)・文久永宝
- 土 偶：55 (A-18住)：56 (A-33住)・両耳に貫通孔・頭頂部から後頭部にかけて貼り付けされた痕跡有り：57 (A-23住)・臀部から太股に渦巻文・左右の腰から太股にかけて沈線文：58 (A, A-3G)・腹部にへその突起・臀部には渦巻文・両体側に沈線文



C-45住



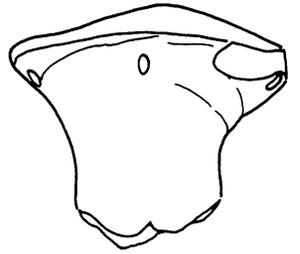
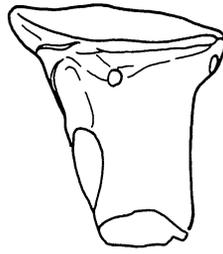
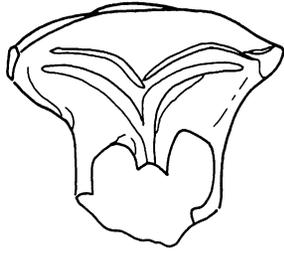
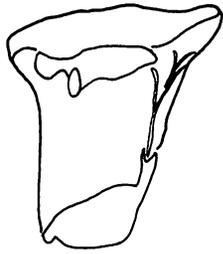
C-48住



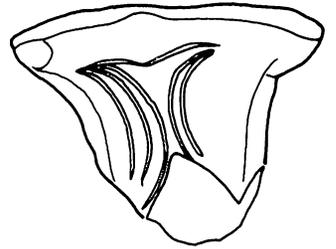
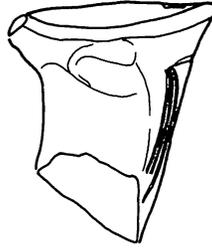
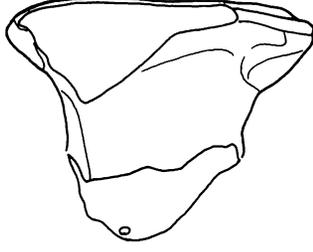
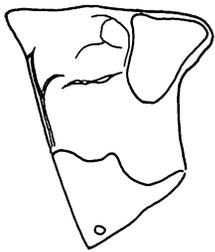
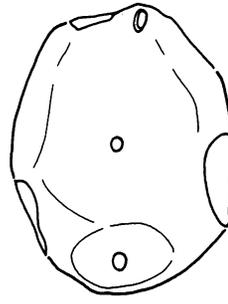
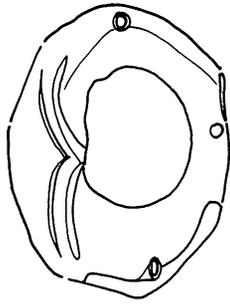
C-40住

A-14住

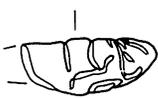
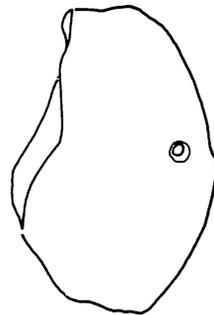
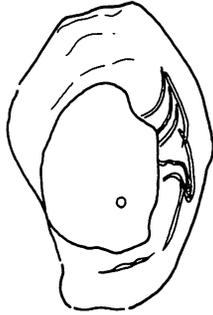
第134図 土製品 (1/1.5)



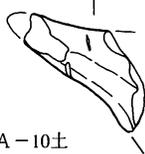
C、A・B-13G



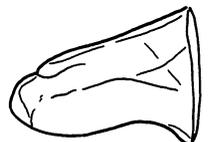
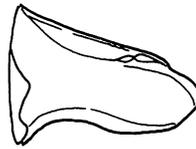
C、A・B-13G



A-33住

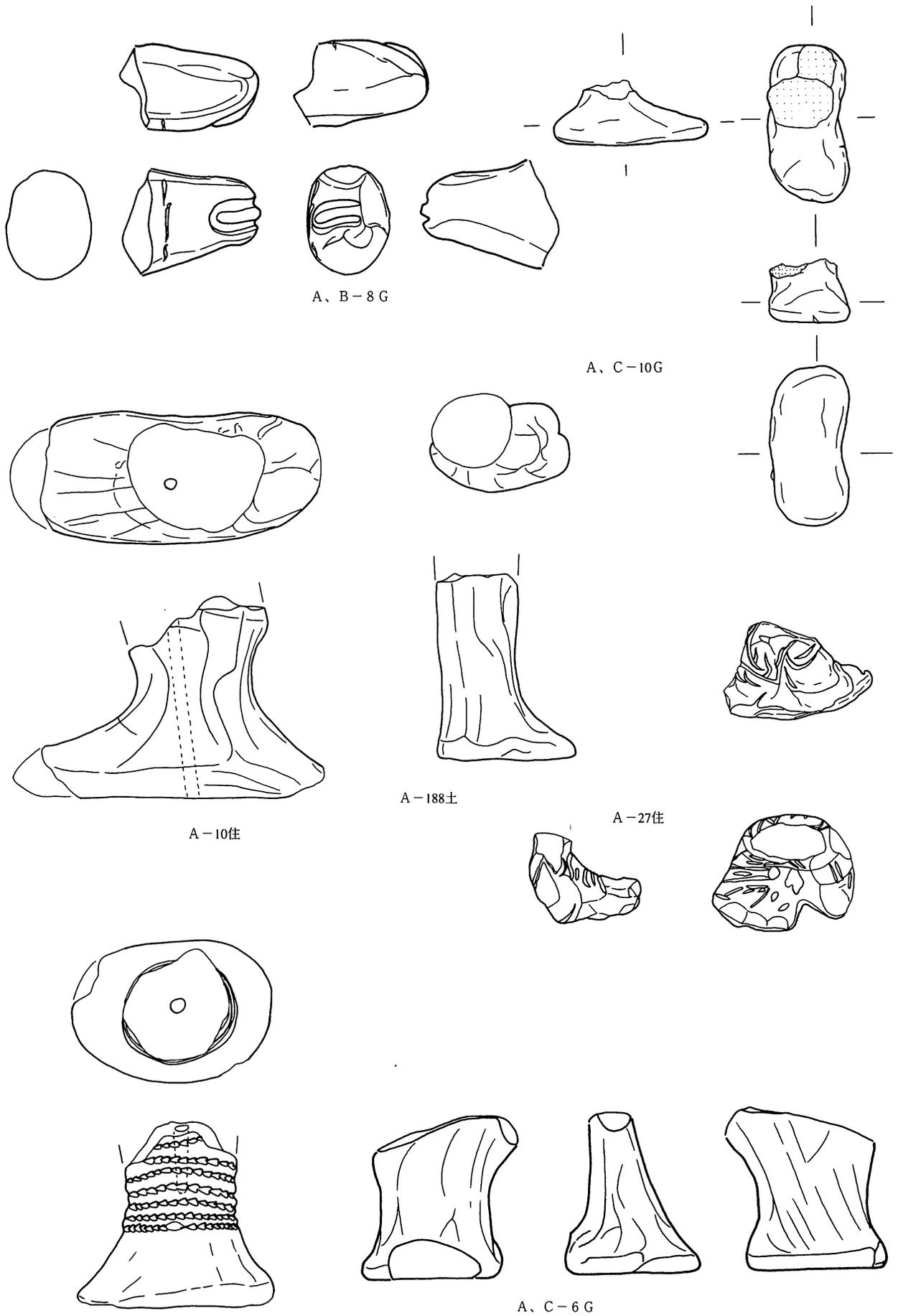


A-10土

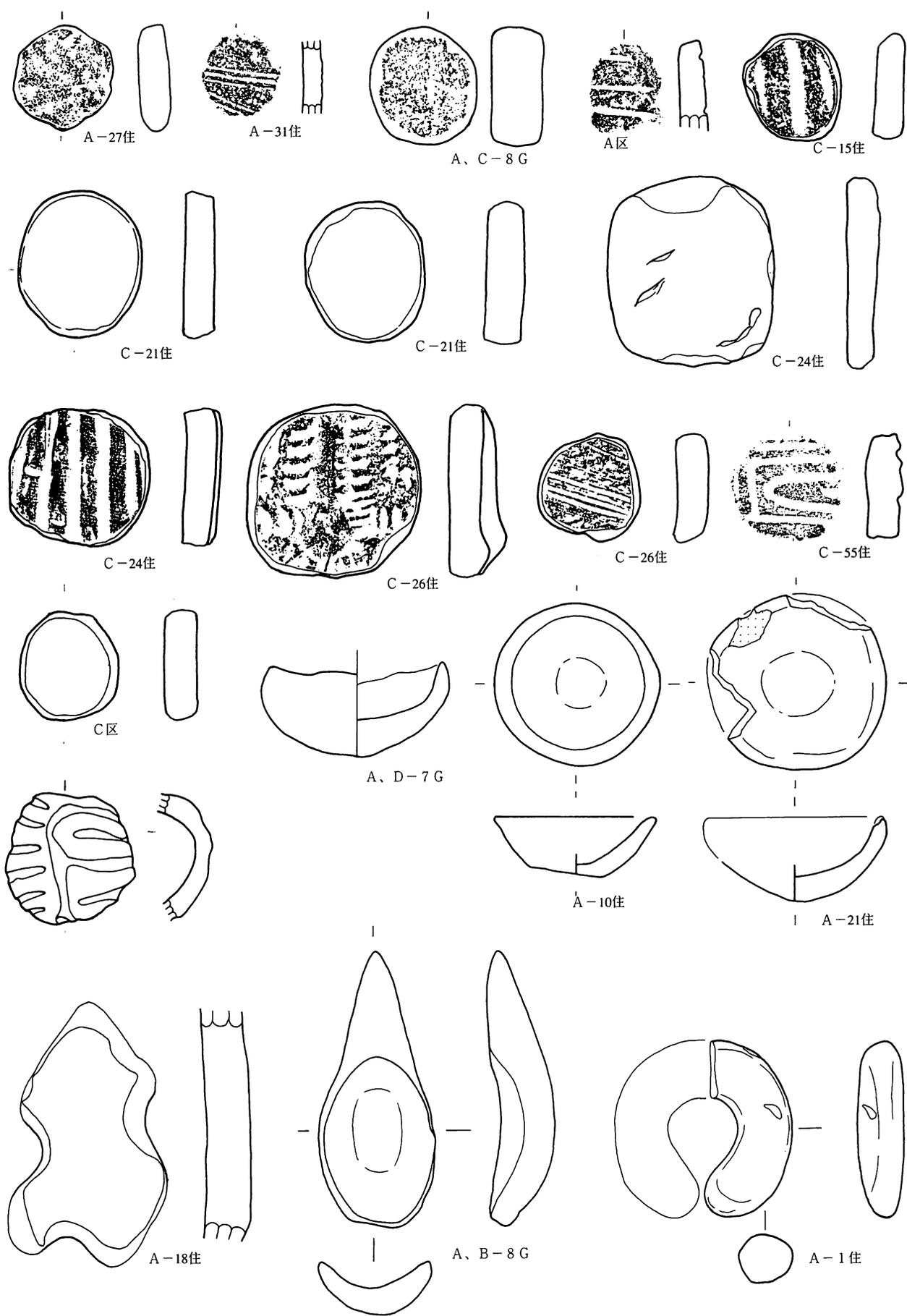


A-12住 ビット4

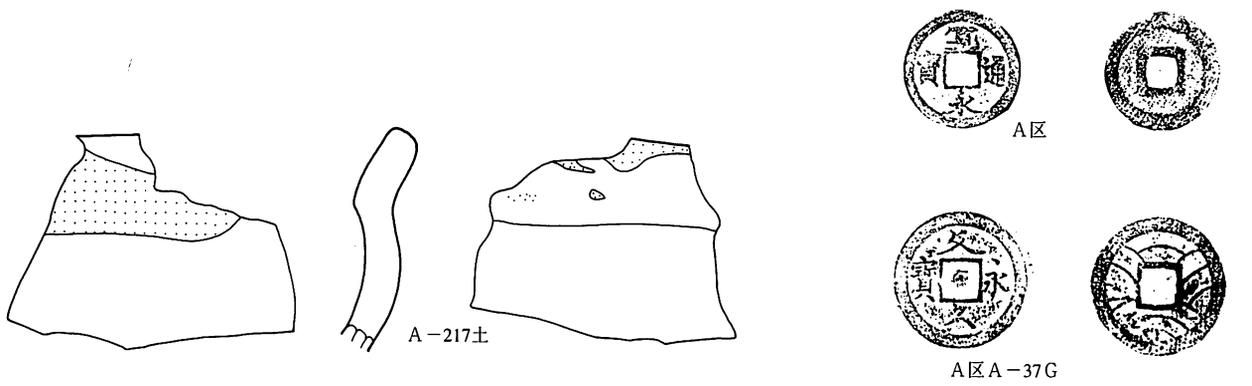
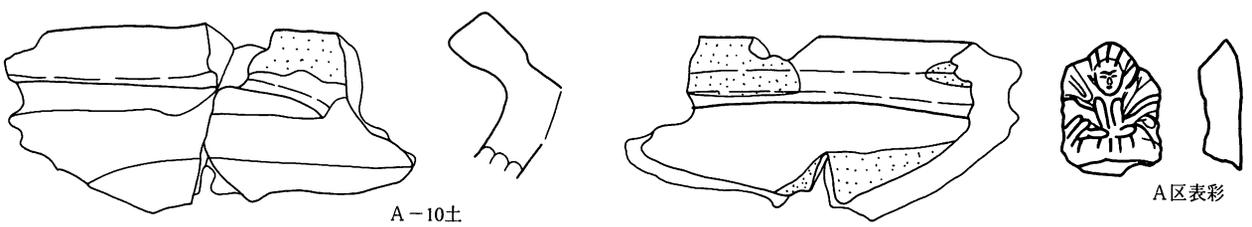
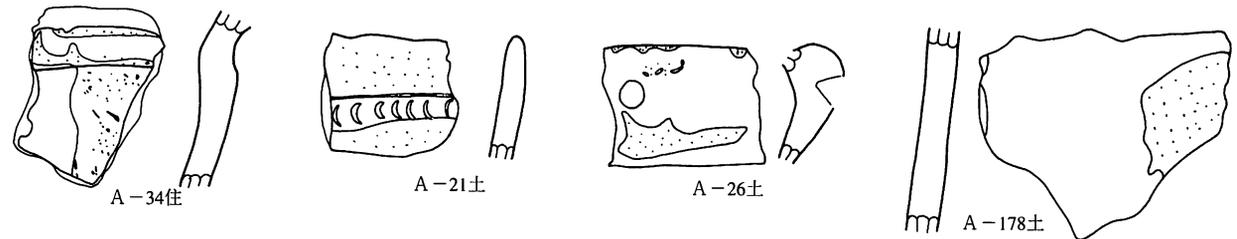
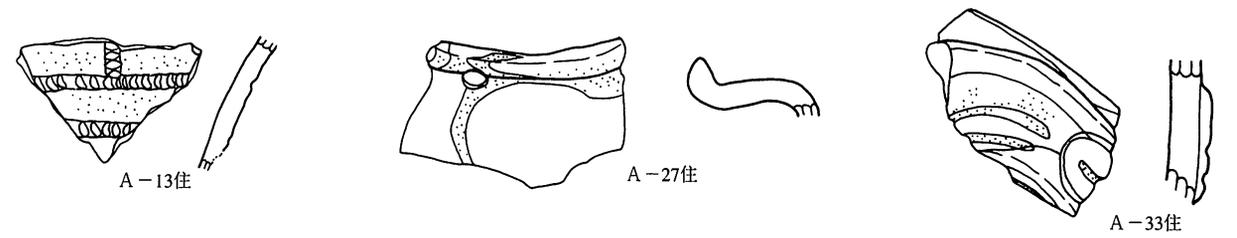
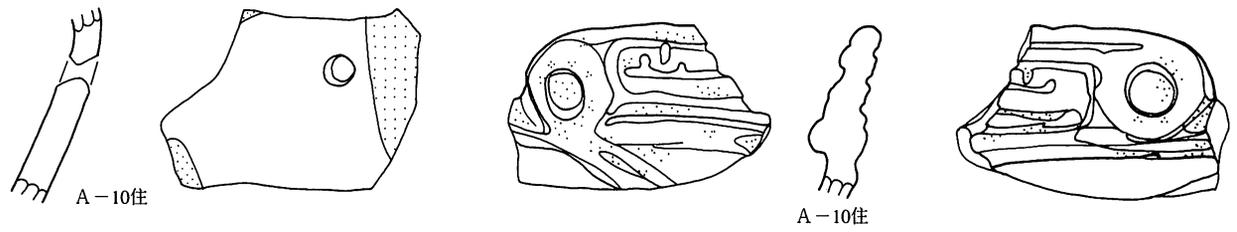
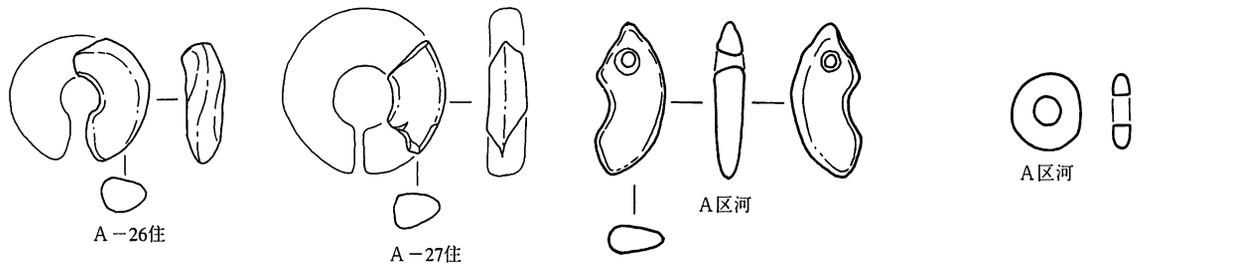
第135図 土製品 (1/1.5)



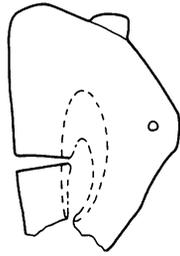
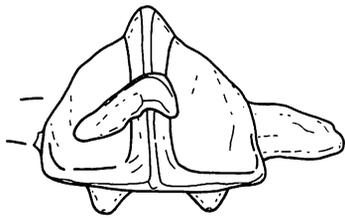
第136图 土製品 (1/1.5)



第137図 土製品及び耳飾 (1/1.5)

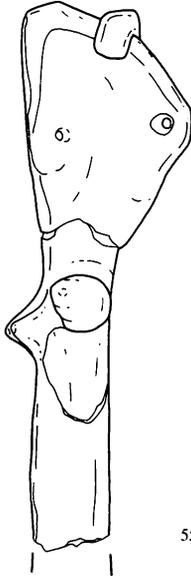
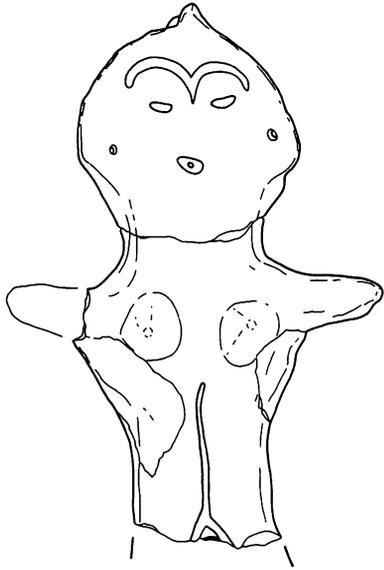


第138図 耳飾・赤彩された土器片・土製品及び古銭 (1/1.5)

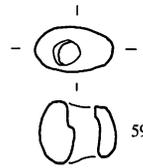
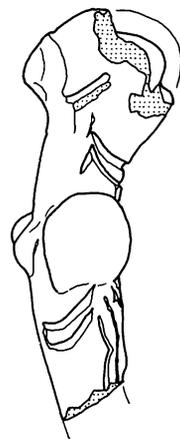
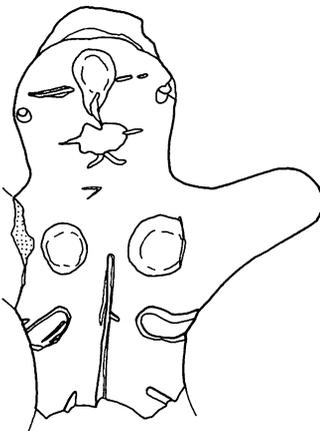
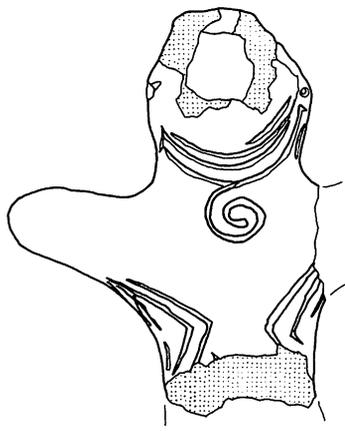
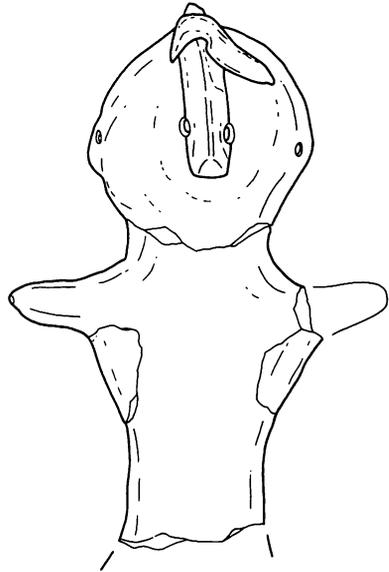


中空

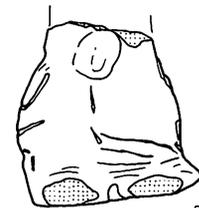
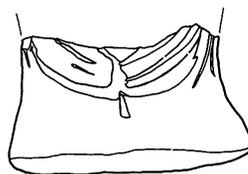
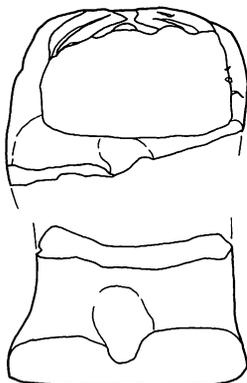
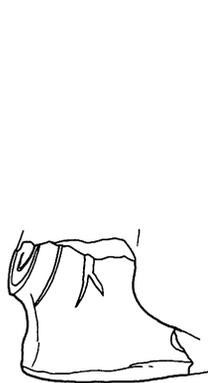
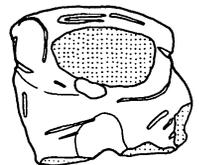
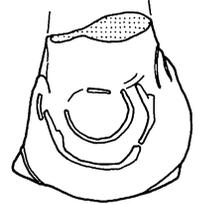
A-18住



55



59



57

58

第139图 土偶 (1/1.5)

甲ツ原遺跡A・B・C区住居別表

(単位m・面積)

住居No	時期	住居形態	長軸m	短軸m	面積	炉の形態	炉石の状態	周溝
甲A-01住	諸磯b	円形	5.7	5.5	24.62	地床炉		なし
甲A-02住	曾利I	多角形	7		38.47	石囲炉	全て残存	有り
甲A-03住	曾利III	不整円形	6.7		35.24	石囲炉	全て残存	有り
甲A-04住	曾利II	円形	3.3	3.1	8.04	地床炉		なし
甲A-05住	中期?	隅丸方形	4.9	不明	不明	地床炉		有り
甲A-06住	中期?	円形?	不明	不明	不明	不明		有り
甲A-07住	諸磯b	円形	6.85	5.5	29.93	地床炉		なし
甲A-08住	井戸尻	不明	4.21	3.63	12.06	石囲炉	全て残存	なし
甲A-09住	曾利III	不明	5.2	4.61	18.89	石囲炉	全て残存	なし
甲A-10住	井戸尻-曾利I	円形	7.06	6.2	34.51	石囲炉?	壊される	なし
甲A-11住	諸磯b	楕円形?	不明	不明	不明	不明		なし
甲A-12住	曾利III	円形	3.88	3.6	10.98	石囲炉	全て残存	有り
甲A-13住	曾利II	円形	5.55	4.9	21.43	石囲炉	全て残存	なし
甲A-14住	不明	不明	不明	不明	不明	不明		なし
甲A-15住	諸磯b	方形?	3.9	3.6	14.04	地床炉		なし
甲A-17住	井戸尻	円形	5.42	4.94	21.06	不明		なし
甲A-18住	諸磯b	楕円形	6.8	6.25	33.42	地床炉		なし
甲A-19住	曾利I	円形	5.42	5.2	22.13	石囲炉	壊される	有り
甲A-20住	曾利I	円形?	8.76	8.5	58.46	石囲炉	一部抜かれる	有り
甲A-21住	不明	不明	5.64	不明	24.97	不明		なし
甲A-23住	曾利III-IV	不明	7.63	不明	45.7	不明		なし
甲A-24住	中期中葉	円形?	6.34	不明	31.55	不明		有り
甲A-25住	井戸尻	円形	4.4	4.32	14.92	石囲炉	全て残存	有り
甲A-26住	井戸尻	円形?	6.67	5.91	31.06	石囲炉	壊される	なし
甲A-27住	曾利III	円形	5.51	4.9	21.27	石囲炉	全て残存	なし
甲A-28住	曾利I	円形	5.31	4.93	20.58	石囲炉	全て残存	なし
甲A-29住	諸磯b	円形	4.62	3.9	14.25	地床炉		有り
甲A-30住	曾利V	円形	4.26	不明	13.85	石囲炉	壊される	有り
甲A-31住	井戸尻	円形	6.56	6.1	31.16	石囲炉	壊される	有り
甲A-32住	五領ヶ台	円形	4.53	4.43	15.76	埋甕炉		なし
甲A-33住	曾利III	多角形?	9.1		65	石囲炉	壊される	有り
甲A-34住	前期初頭	長方形	4.52	3.94	17.81	地床炉		なし
甲A-35住	曾利II	円形	5.43	5	21.23	石囲炉	全て残存	有り
甲A-36住	曾利III	円形	5.1	4.8	19.23	石囲炉	壊される	有り
甲A-37住	曾利II	不明	不明	不明	不明	不明		なし
甲A-39住	曾利I	円形	4.9		18.85	不明		なし
甲A-40住	井戸尻	円形?	6.06	不明	28.83	不明		有り
甲A-41住	五領ヶ台	円形	5.12	不明	20.58	埋甕炉		有り
甲A-42住	諸磯b	楕円形	5.06	3.84	15.54	地床炉		有り
甲A-43住	諸磯b	円形	3.56	3.2	8.97	地床炉		有り
甲A-44住	狹沢	長円形	5.4	4.3	18.47	埋甕炉		有り
甲A-44住	諸磯b	長円形	6.08	4.92	23.75	不明		なし
甲A-45住	曾利V	楕円形	4.35	不明	14.85	石囲炉	壊される	有り
甲A-46住	狹沢	楕円形	3	2.8	6.6	埋甕炉		なし
甲A-47住	諸磯b	円形	4.3	4.1	13.85	地床炉		有り
甲A-48住	諸磯b	円形?	4.2		13.85	不明		なし
甲A-49住	諸磯b	不整円形	3.8		11.34	不明		なし
甲A-50住	曾利III	円形	5.1		20.42	石囲炉	壊される	有り

住居 No	時 期	住居形態	長軸m	短軸m	面 積	炉の形態	炉石の状態	周溝
甲A-52住	井戸尻	円形	5.66	5.2	23.15	石囲炉	河に壊される	有り
甲A-53住	井戸尻	円形?	4.8	不明	18.09	石囲炉	壊される	有り
甲A-54住	中期?	円形?	3.36	3.28	8.65	地床炉?		なし
1号掘立柱	曾利Ⅳ・Ⅳ以降	4×2本	10.1	2.9	28	存在しない		なし
2号掘立柱	曾利Ⅰ以降	2×2本	3	2.6	7.5	存在しない		なし
3号掘立柱	不明	4×2本	7.26	2.08	15.1	存在しない		なし
4号掘立柱	曾利Ⅰ以降	3×2本	7.1	2.66	17.1	存在しない		なし
5号掘立柱	井戸尻?	4×2本	12.1	2.64	31.9	存在しない		なし
甲B-01住	藤内	円形	5.94	5.5	25.73	石囲炉	壊される	なし
甲B-02住	不明	不明	不明	不明	不明	不明		なし
甲B-03住	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
甲B-05住	中期?	不明	不明	不明	不明	不明		
甲B-06住	平安	方形	3	2.4	7.2	カマド		なし
甲B-07住	平安	方形	不明	不明	不明	カマド		なし
甲C-01住	井戸尻	多角形	5.8	5.7	26	石囲炉	壊される	有り
甲C-02住	五領ヶ台	不明	4.2	不明	25.95	地床炉		なし
甲C-03住	井戸尻	円形	6.1	不明	29.21	石囲炉	全て残存	有り
甲C-04住	不明	掘立柱建物	5.4	2.54	13.72	地床炉		なし
甲C-05住	不明	不明	不明	不明	不明	地床炉?		なし
甲C-06住	井戸尻	不明	4.5	不明	15.72	石囲炉	壊される	なし
甲C-07住	中期後半	円形	6	不明	28.26	不明		なし
甲C-08住	井戸尻	円形	5.6	不明	24.62	石囲炉	壊される	有り
甲C-09住	井戸尻	円形	6	不明	28.26	石囲炉	全て残存	有り
甲C-10住	藤内-井戸尻	円形	5.1	不明	20.42	不明		有り
甲C-12住	諸磯c	楕円形	5.5	不明	23.75	地床炉		有り
甲C-13住	諸磯c	楕円形	4.3	不明	14.51	地床炉		有り
甲C-14住	藤内	楕円形	4.88	4.2	16.8	不明		有り
甲C-14住	不明	方形	3.06	2.94	9	地床炉		
甲C-15住	曾利Ⅴ	不明	5.2	5.2	21.23	石囲炉	壊される	なし
甲C-16住	井戸尻	多角形?	6.5		33.16	石囲炉	全て残存	有り
甲C-16住	井戸尻	円形	5.5		23.75	不明		有り
甲C-17住	不明	不明	5.2		21.23	地床炉		なし
甲C-18住	井戸尻	不明	5		19.63	石囲炉	壊される	なし
甲C-19住	狛沢	不明	5.2		21.23	埋甕炉		なし
甲C-20住	藤内	円形?	3.5		9.62	石囲炉	全て残存	なし
甲C-21住	諸磯c	円形	6	5.65	26.64	地床炉		有り
甲C-22住	曾利Ⅱ	不明	5.4		22.89	不明		なし
甲C-23住	中期	不明	不明	不明	不明	不明		なし
甲C-24住	藤内	円形	6	5.65	26.64	石囲炉	壊される	有り
甲C-25住	中期	不明	4.8		18.09	石囲炉	壊される	なし
甲C-26住	藤内	円形	4.4	4.2	14.51	石囲炉	壊される	有り
甲C-27住	藤内	不明	4		12.56	地床炉		なし
甲C-27住	不明	不明	2.8		6.15	地床炉		なし
甲C-28住	C-26住より旧	楕円形	6.85	5.55	30.18	不明		有り
甲C-29住	狛沢	円形	3.7		10.75	埋甕炉		なし
甲C-30住	井戸尻	不明	4		12.56	不明		なし
甲C-31住	狛沢	円形	3.85		11.64	地床炉		なし
甲C-32住	曾利Ⅱ	円形	7.15	6.45	36.3	不明		有り
甲C-33住	諸磯c	円形	3.73		10.92	地床炉		有り

住居 No	時 期	住居形態	長軸m	短軸m	面 積	炉の形態	炉石の状態	周溝
甲C-34住	諸磯c	円形	3.15		7.79	地床炉		なし
甲C-35住	諸磯c	円形	4.35		14.85	地床炉		なし
甲C-36住	藤内	円形	6		28.26	石囲炉	全て残存	なし
甲C-37住	五領ケ台	円形	4.9		18.85	埋甕炉		なし
甲C-39住	平安	方形	5.5	5.5	30.25	カマド		有り
甲C-40住	狛沢	円形	3.98	不明	12.43	埋甕炉		
甲C-41住	諸磯	円形?	3.6	不明	10.17	地床炉		
甲C-42住	井戸尻	円形	6.1	不明	29.21			
甲C-43住	諸磯b	円形?	3.5	不明	9.62			
甲C-44住	諸磯	円形	3.5	不明	9.62			
甲C-45住A	新道	円形	3.1	2.99	29.11	石囲炉	全て残存	なし
甲C-45住B	新道	方形	3.6	3.62	14.3	石囲炉	全て残存	有り
甲C-46住	諸磯c	円形	5.5	不明	23.75	地床炉		
甲C-47住	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
甲C-48住	中期中葉	円形?	不明	不明	不明	石囲炉	壊される	
甲C-49住	井戸尻	不明	不明	不明	不明	不明		
甲C-50住	新道	円形	3.5	不明	9.62	埋甕炉		なし
甲C-51住	五領ケ台	円形	3.46	3.32	9.02	埋甕炉		なし
甲C-52住	平安	方形	3.8	3.4	12.92	カマド	壊される	有り
甲C-53住	井戸尻	楕円形?	4.42	不明	15.34	石囲炉	壊される	なし
甲C-54住	五領ケ台	円形	4.38	4.2	14.45	埋甕炉		なし
甲C-55住	五領ケ台	楕円形	6.1		29.21	埋甕炉		有り
甲C-56住	中末-後期初頭	不明	4.68	4.54	16.68	不明		なし

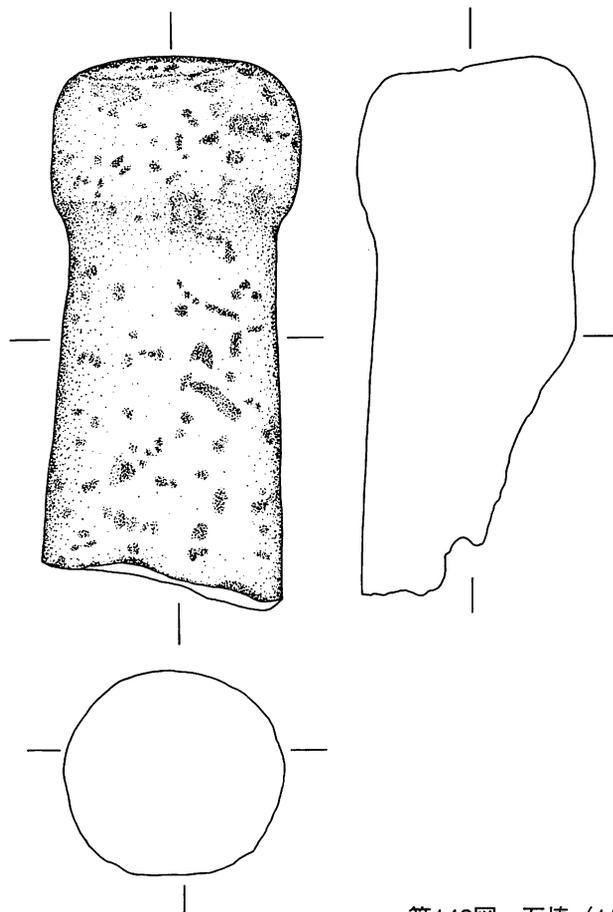
第6節 石 器

1 石 棒

第142図は、A区50号住居の入口部に設置された埋甕の確認面から出土したものである。

本遺跡から出土したこの形態の石棒は、はじめてのものである。重量6kgで、有頭部の直径は13.2cm、現存する長さは29.2cmである。また頭頂部は擦られたと思われ、平坦で滑らかである。出土状況は頭部を南に向け、主軸方向の入口部に存在する。床面直上の出土であること、また掘り込みが確認されなかったことから、石棒は横位に置かれたものと考えられる。石棒を取り上げたその下には掘り込みが認められ、その掘り込みは埋甕の設置に伴うものであった。

本遺跡で発見された無頭部の石棒は、そのほとんどのものは炉石として転用されている。



第142図 石棒 (1/4)

2 石器観察

1は片理面で分割された角礫を素材とした砂岩製の打製石斧である。裏面から表面への刃部作出を目的とした剥離痕には、階段状剥離が発達している。刃部側の縁辺は顕著に摩耗し、表面に微弱な線状痕が存在する。

2は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。礫面を残置し、調整はいずれも散漫である。

3は縦長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。基部右側に折れ面を有している。刃部が折損しているため、使用痕などの情報は得られない。なお、背面基部側の黒い剥離痕はガジリである。

4は縦長剥片を素材とした砂岩製の打製石斧である。刃部の調整は浅く、側縁がほぼ平行する形状を呈する。

5は縦長剥片を素材とした頁岩製の打製石斧である。調整が密であり、背面に礫面を残置する。

6は砂岩製の打製石斧である。折れ面が周囲の調整を切っていることから、事故折れだと推定できる。

7は横長剥片を素材とした砂岩製の打製石斧である。左右側縁において敲打による潰れが認められ、刃部側の調整において階段状剥離が発達している。両側縁がほぼ平行する形状を呈すが、基部と刃部の厚さが異なる。

8は縦長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。右側縁において敲打による潰れが認められ、両側縁がほぼ平行する形状を呈す。背面から腹面への調整によって打面を除去し刃部を作出したと考えられる。

9は横長剥片を素材とした砂岩製の打製石斧である。刃部側の右側縁において潰れが認められ、腹面右側において階段状剥離が発達している。刃部の折損は、背腹両面へのステップエンド状の折れと右側縁の折れがある。

10は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。右側縁において潰れが認められる。

11は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。基部側の右側縁において潰れが認められる。

12は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。基部側の左右側縁において敲打痕を有す。

石器計測表

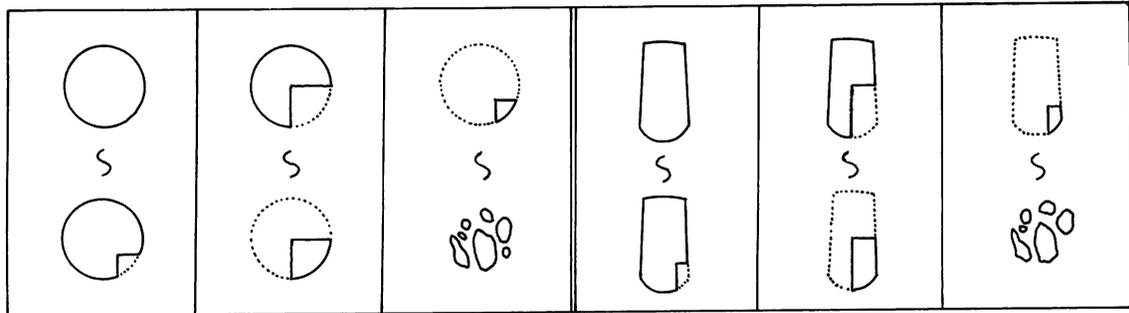
(単位mm)

石器No	種別・場所	長さ	幅	厚さ	重さg
1	打斧A-10住	134	53	30	208
2	打斧C-6住	119.5	52	19.5	109
3	打斧C、表採	102.5	49	19.5	110
4	打斧A、表採	107	58	25	146
5	打斧A-6住	100	56.5	16	106
6	打斧A-52住	88.5	48	17.5	79
7	打斧C、表採	108	49	20.5	139
8	打斧A-52住	109	43.5	19	106
9	打斧A-54住	110.5	49.5	20.5	122
10	打斧A-27住	100.5	43.5	16.5	71
11	打斧A.A-18G	89.5	43	14.5	54
12	打斧A.B-8G	83	46	14	46
13	打斧A.A-3G	92.5	46.5	12.5	69
14	打斧A-53住	86	49	15.5	63
15	打斧A-10住	74.5	45.5	15.5	53
16	打斧A.A-20G	109	53	19	119
17	打斧A.B-18G	92.5	45	16	62
18	打斧A-19住	100	56	14	102
19	打斧A.C-11G	88.5	44	16.5	79

石器計測表

(単位mm)

石器No	種別・場所	長さ	幅	厚さ	重さg
20	打斧A.C-11G	93.5	48	3.5	76
21	打斧A-50住	97.5	61.5	7	105
22	石匙A-52住	91	50.5	12	48
23	大形A-52住	50	78	24.5	66
24	削器A-54住	50.5	51	18	25
25	石鏃A区	18	16.5	4	0.72
26	石鏃C-54住	13.5	21.5	6.5	0.99
27	石鏃C-52住	23.5	13.5	5.5	1.17
28	石鏃A.C-15G	15.5	12.5	3	0.34
29	石鏃A.B-15G	20	11.5	6	0.87
30	石鏃A.A-20G	16	14.5	3.5	0.74
31	石鏃C-55住	16.5	14	5	0.62
32	石鏃A-54住	20.5	18.5	7	1.9
33	石匙A-53住	31.5	30	7.5	4.54
34	削器A.A-19G	19	21	5	1.43
35	削器A.A-19G	19.5	29	5	2.06
36	削器A.A-20G	20	26.5	10	3.64
37	削器A.A-18G	30	26	6	2.56
38	削器A.B-16G	34	24	9.5	5.67



第143図 石器の残存模式図

(註) 完形及び一部欠は完形品もしくは1/8以下の破損を有するもの、欠損は3/4～1/4を残存するもの、破片は1/8以下を残存するものとする。左図は磨石、右図は打製石斧における残存状況の模式図であるが、他の器種も上記と同様の基準において分類してある。例外として、完形品及び一部欠に分類されるものであっても機能部(石鏃の尖頭部など)に破損を有するものであれば、欠損としてカウントした。

甲ッ原遺跡出土石器分類および点数表

	磨石	磨凹	磨凹	凹石	敲石	磨石	石皿	多孔石	石棒	砥石	磨製石斧	打製石斧	大形石匙	大形削器	礫器	石鏃	石鏃	削器	搔器	楔形石器	抉入石器	円盤石器	小形石匙	合計
完形もしくは一部欠損	138	522	49	5	5	7	37	2	0	1	21	413	64	440	9	84	61	55	18	10	4	6	26	1977
欠損	42	102	3	0	1	1	26	0	14	1	31	483	15	94	2	151	43	9	1	4	0	0	19	1042
破片	74	9	0	0	0	0	56	1	2	0	42	61	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	248
総点数計	254	633	52	5	6	8	119	3	16	2	94	957	81	534	11	236	104	64	19	14	4	6	45	3267

- 13は縦長剥片を素材とした頁岩製の打製石斧である。右側縁において潰れが見られ、基部に調整が集中する。
- 14は縦長剥片を素材とした安山岩製の打製石斧である。基部側の左側縁において敲打による潰れが見られる。
- 15は頁岩製の打製石斧である。腹面右側縁において階段状剥離が発達しており、調整が密である。
- 16は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。左右側縁の抉り部を中心に敲打痕が見られ、縁辺が鈍角を呈す。抉り部と刃部において階段状剥離が発達しており、刃部に線状痕が認められる。
- 17は縦長剥片を素材とした砂岩製の打製石斧である。左右側縁の抉り部に敲打による潰れが認められる。
- 18は頁岩製の打製石斧である。左右側縁の抉り部に敲打痕が見られ、階段状剥離が発達している。
- 19は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。左右側縁に敲打による潰れを有している。
- 20は縦長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。左右側縁の抉り部に敲打痕を有する。
- 21は縦長剥片を素材とした砂岩製の打製石斧である。左側縁に潰れを有し、刃部は鋸歯状を呈する。
- 22は縦長剥片を素材としたホルンフェルス製の石匙である。腹面の右側縁には階段状剥離²が発達している。
- 23は横長剥片を素材とした砂岩製の大型削器²である。形態的に破損した打製石斧の基部とも考えられるが、背面右側の剥離痕が刃部作出を目的とした調整によって切られているため、大型削器と認定できる。
- 24は横長剥片を素材とした泥岩製の削器である。折損のため石器の形態を推定するのは困難であるが、交互剥離が行われた辺を刃部とした。折れ面において、腹面中央に収束するネガティブバルブが認められる。
- 25は黒曜石製の凹基無茎鏃である。左右側縁が緩やかに外湾し、基部が浅く調整されている。腹面へ調整する意図は乏しく、背面に礫面を残置している。尖頭部や腹面左脚部への調整を含めて散漫である。
- 26は黒曜石製の凹基無茎鏃である。左右脚部の形態が異なるが、腹面側の基部調整が腹面右側縁を取り込んで剥離されたため形態が変化したと考えられる。尖頭部は折損し、腹面側に収束するネガティブバルブがある。
- 27は黒曜石製の石鏃未成品である。両面調整の意識があり他器種と認定し得る様な技術的特徴を有さないことから石鏃と考えられるが、左右非対称であることや尖頭部作出が中途半端であることから未成品と認定でき

る。

28は調整が密であり、体部に基部方向からの剥離痕が見え左右側縁の調整が連続することから凹基無茎鏃と認定できる。基部側に折れ面が2面あり、背面右側の折れ面が左側の折れ面を切っている。

29は黒曜石製の石鏃未成品である。尖頭部作出への調整が散漫なことや左右側縁が非対称であることから、未成品と認定できる。基部側に折れ面が存在するが、ポジティブ状を呈し裏面にリングが収束している。

30は黒曜石製の平基無茎鏃である。腹面中央で折れ面と接している剥離痕は主要剥離面であるが、フラットでありバルブの発達がないことから両極剥片素材の可能性もある。折れ面は腹面中央にリングが収束する。

31は黒曜石製の凹基無茎鏃である。尖頭部は表面から裏面へのステップエンドを起こした剥離によって取り込まれている。折れ面は二面あり脚部の折れが裏面左側縁に接する折れを切り、リングは背面に収束している。

32は黒曜石製の石錐である。背面に残置する素材面から考えると転礫素材の石核から剥離された剥片を用いている。端部に認められる折れ面において、リングは背面側に収束している。使用痕は認められない。

33はチャート製の石匙である。調整は形態作出か刃部作出かのいずれかに分かれている。下辺は鋸歯状を右辺は発達した凹刃状を呈すが、両辺を構成する剥離単位の切り合いから刃部再生が推定できる。

34は黒曜石製の削器である。転礫を素材とした石核から剥離された剥片を用いている。腹面から背面への調整によって折れ面が一部除去されているが、両面調整は行われていない。折れ面のリングは腹面側に収束する。

35は硬質頁岩製の削器である。一部において両面調整を指向する剥離も存在するが無調整の部位を残すことや折れ面を除去しようとしなから削器と認定できる。折れ面のリングは背面方向に収束している。

36はチャート製の削器である。形態からは石匙のつまみ部を想起させるが背面において折れ面を切る調整が認められるため、折損したつまみ部とは考えられない。調整が密な左右の凹辺を刃部とする削器だと認定できる。

37は黒曜石製の削器である。腹面中央の折れ面は剥片剥離の前段階で石核が潜在割れを起こしていたことに起因する。素材面に残置する2枚の剥離痕から同一打面上で左右に打点を移動させて剥片剥離したことが分かる。

38は転礫素材の黒曜石製削器である。裏面から表面への調整によって下半部に階段状剥離が発達し、階段状剥離のフラットな面から裏面へ細かい調整を施している。裏面上半部には平坦剥離が認められる。

3 甲ッ原遺跡における石核分類と石材

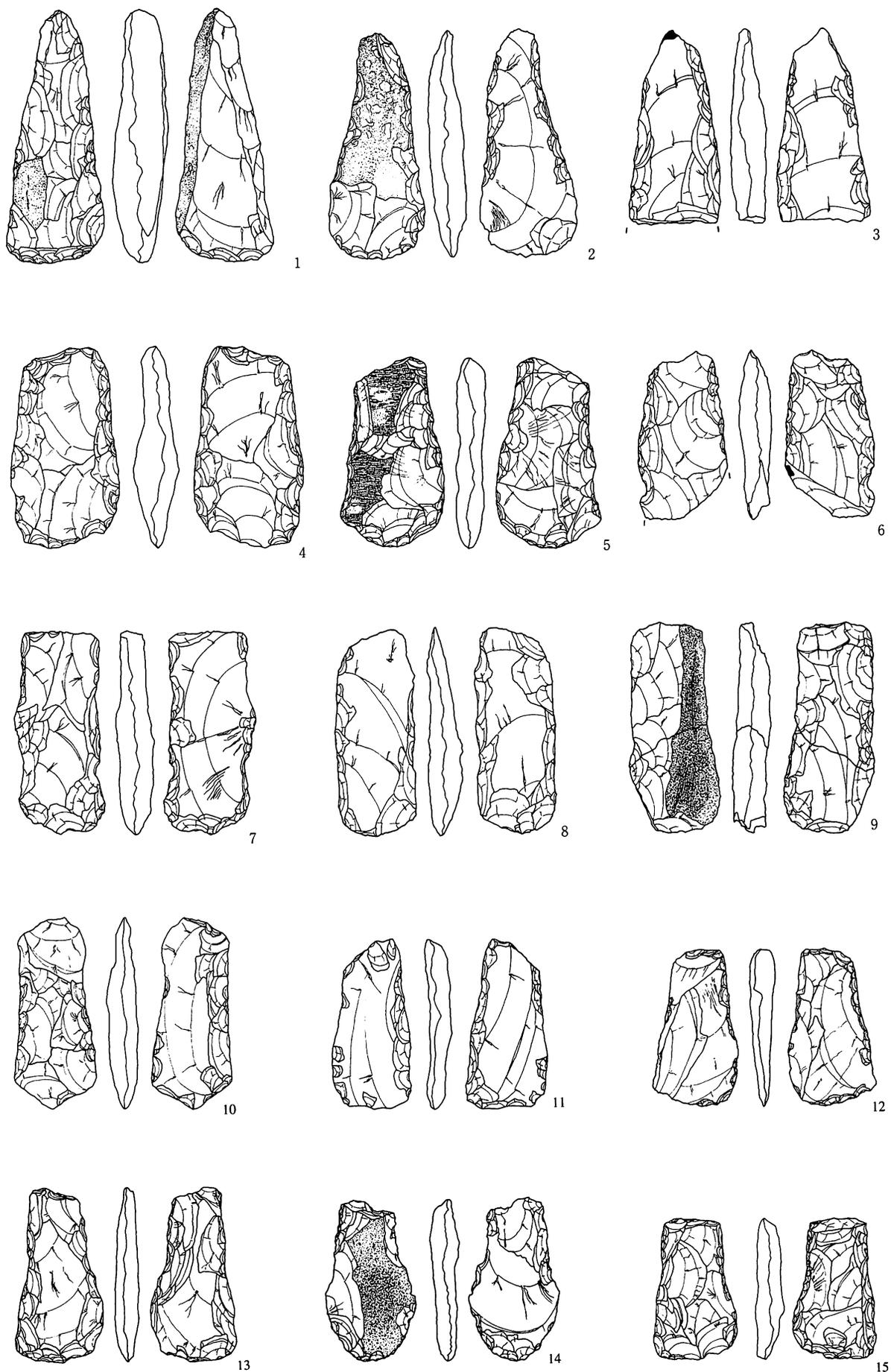
甲ッ原遺跡の石核は石核素材と作業面形状から2つに、打面と作業面の関係から5つに分けることができる。

I (礫・分割礫素材で作業面において連続した剥離痕を有する石核) - aは打面と作業面を複数設定する石核で作業面を保持する意図を有するもの、I - bは打面と作業面を頻繁に移動する石核で打面・作業面を保持する意図が無いものである。II (剥片・碎片を素材とし素材の形状を大きく残すもので、数枚の剥片を剥離した後作業を終える石核) - aは角礫の端部を剥離した剥片を素材とし主要剥離面を作業面に設ける石核で求心状に剥離するもの、II - bはII - aと同様の素材を用いて作業面を背・腹両面に設けるものである。II - cは碎片を素材とし背・腹面、折れ面、端部を任意に打面・作業面としている。I類の石核が最大長4cm前後の多面形を呈するのに対し、II類はウトラパッセ状に剥離した剥片の端部を石核に転用するなど、形態・素材共に多様である。

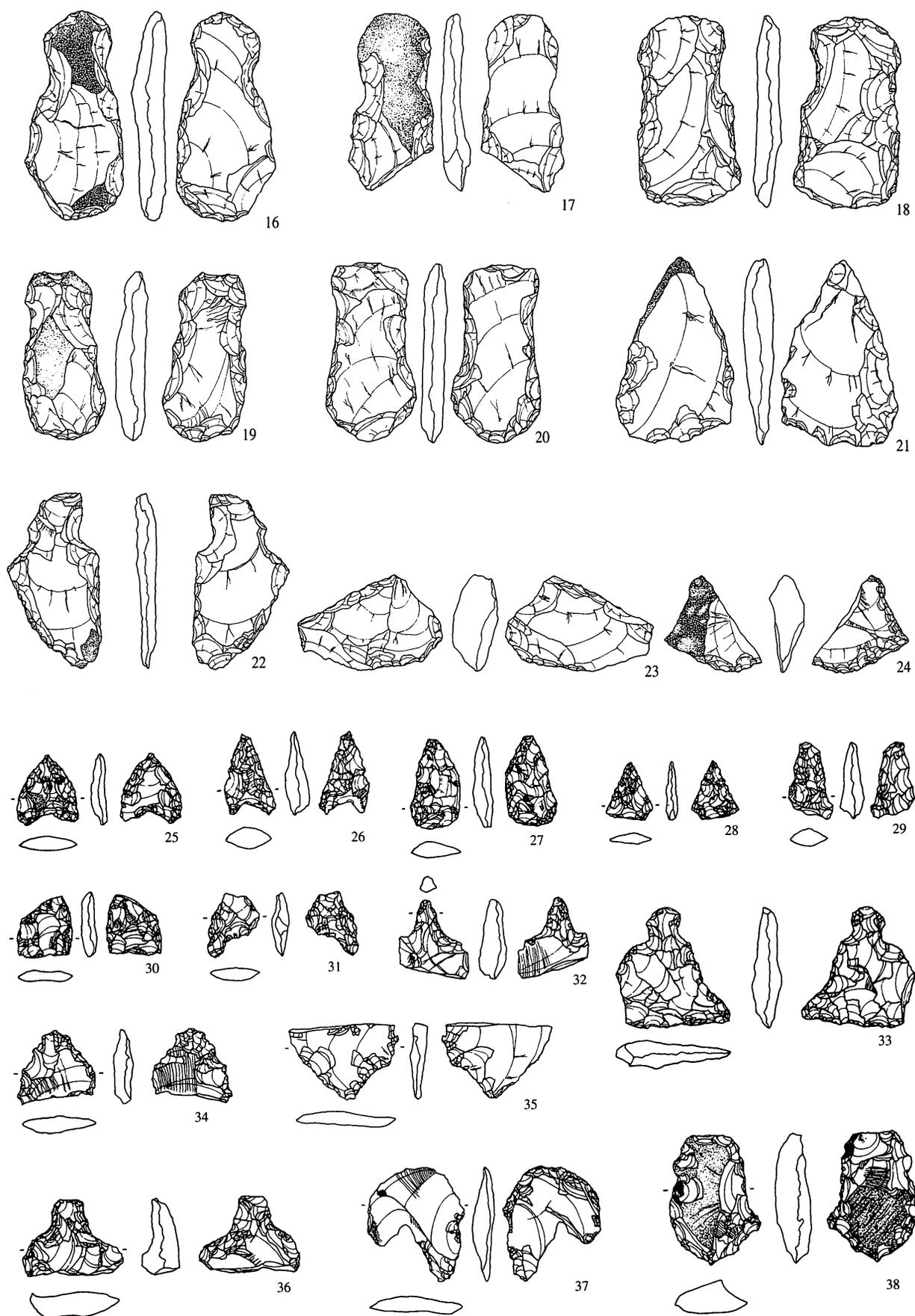
石材別に石核の分類を見ると、硬質頁岩が主にI - a類を占めるのに対し、黒曜石はII - b類が多い。これは硬質頁岩は素材面形状が刃部に関係してくる削器を目的として剥片剥離作業が行われているのに対し、黒曜石は石鏃など両面調整が必要とされるため作業面形状が問題にならない器種を目的とすることに起因する。石材別に器種を選択している理由は、剥片剥離・調整技術と石材との適合性ではなく、石材の割れに依存するからである。

(註)

- 1 素材面・主要剥離面の区別がつく場合は背・腹面、つかない場合は表・裏面と呼ぶことにする。
- 2 主に堆積岩を石材とし、一つの辺に連続した調整を施すか、素材縁に平行する辺を刃つぶり調整か切断する石器と定義する。「横刃型石器」も含むが素材剥片や形態において形態を有さない。



第140图 石器 (1) (1/3)



第141图 石器(2) 16~24 (1/3) · 25~38 (1/1.5)

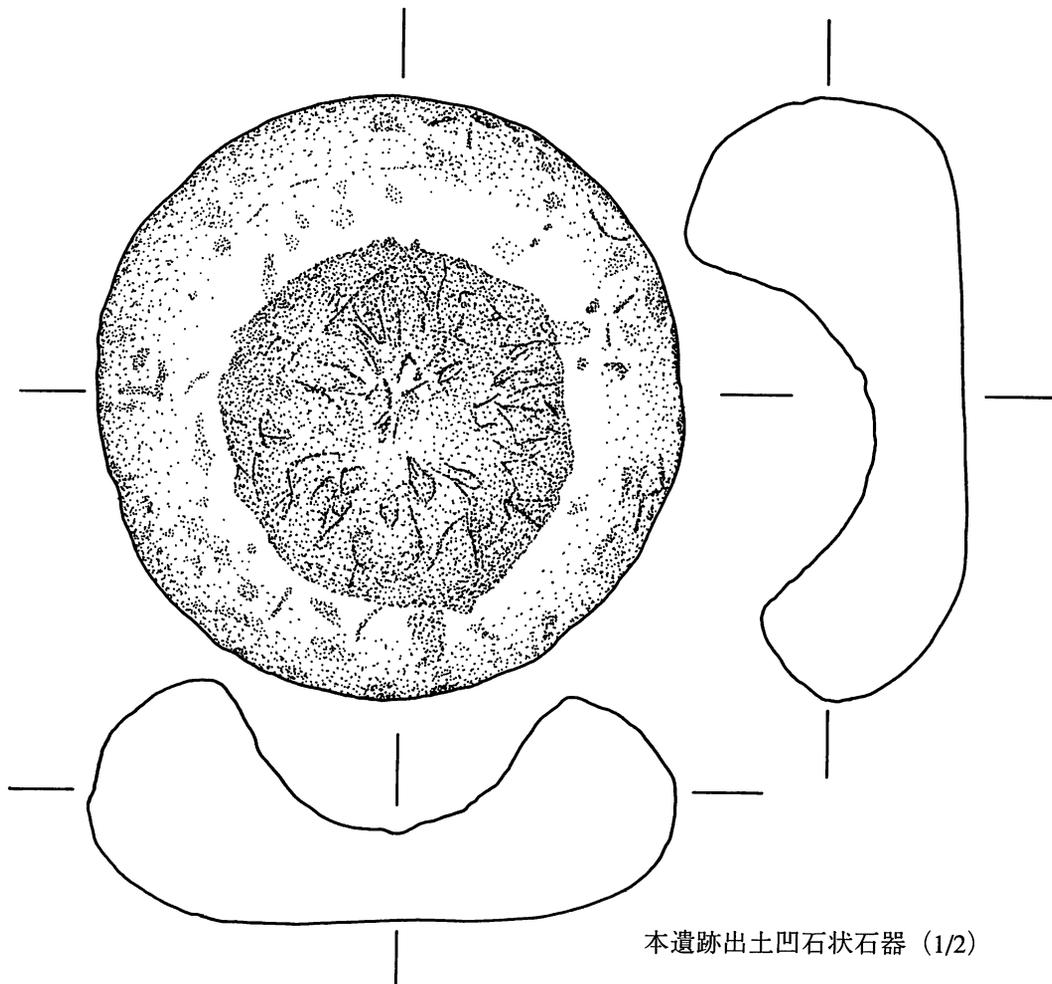
4 凹石状石器

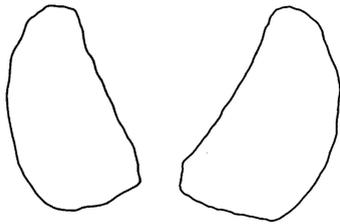
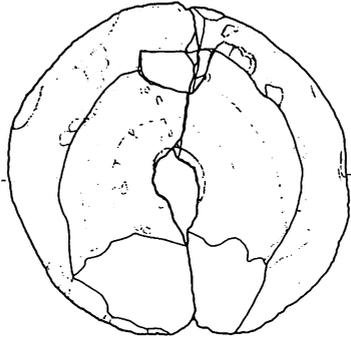
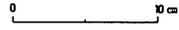
本遺物はA区A-19グリッド内において、単体で確認されている。このグリッド内では、縄文時代の土坑数基とそれらに伴った縄文土器片などの遺物数点が確認されているが、本遺物出土地点から半径50cm～60cm程の範囲に遺構は確認されていない。

本遺物の石質は安山岩で、直径約17cmの楕円体の比較的平たい礫を使用して凹をつけた石器であり、凹部分の直径は約10cm、深さ約5cmを計る。また凹部分内側には磨滅した形跡は見受けられないが、いくつかの敲打痕は窺える。底部においては、使用時の劣化と思われる若干の磨滅状態と、表面の剥離が見られるが、坐りは安定している。また上面は約12度で傾斜しているが、人為的なものではないと思われる。

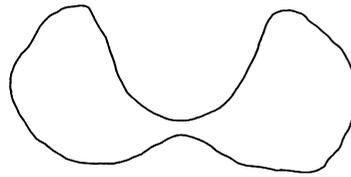
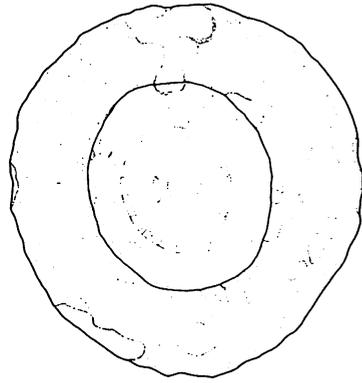
本例の類例は県内では、若草町二本柳遺跡・白州町坂下遺跡・教来石民部館跡遺跡・高根町社口遺跡・葦崎市大輪寺東遺跡・明野村神取遺跡などから検出されている。また製作時期については、葦崎市宮ノ前遺跡などからは平安時代住居跡からの出土例が見られ、平安時代にはすでに存在していたことは確実であり、中世になると白州町坂下遺跡など、多くの出土例を見出すことができる。また用途については、いずれも明確ではないとしながら、大きく分けると二つの用途が考察されている。一つは、井戸掘り等を行う際の「かくらさん」とよぶ轆轤の回転軸を支える石に使用したとされるもので、凹部分内側に回転によって形成されたような磨滅状態がみられたり、貫通しているものもあり、葦崎市大輪寺東遺跡などの類例がそれにあたる。もう一つは、ものを砕いたり、擦りつぶすために使用したとされるもので、凹部分内側に磨滅または敲打痕がみられるもので、若草町二本柳遺跡などの類例がこれにあたる。

本遺跡から出土した凹石状石器はおそらく、後者の部類の石器であることが推測される。また出土地点が、耕作によって攪乱を受けている可能性が高く、しかも単体での出土のため、時期については特定できない。

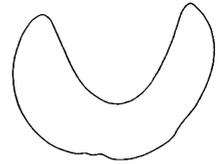
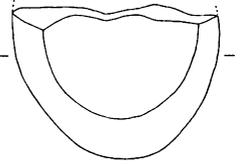




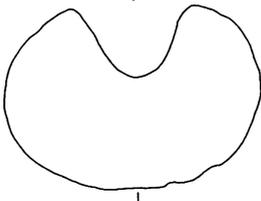
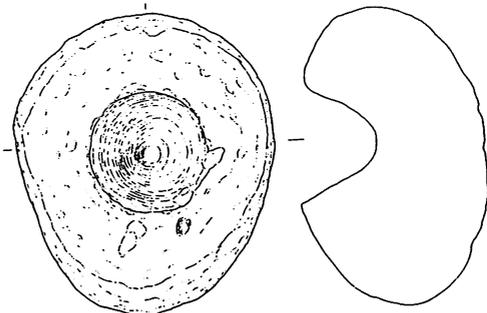
韮崎市大輪寺東遺跡出土



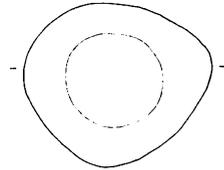
韮崎市大輪寺東遺跡出土



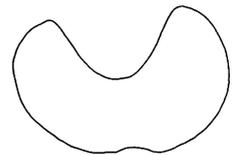
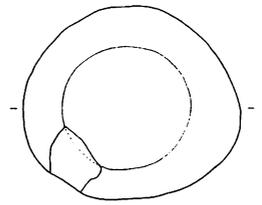
白州町教来石民部館跡遺跡出土



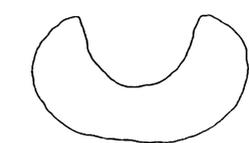
高根町社口遺跡出土



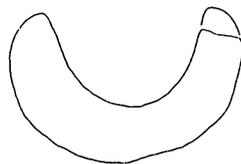
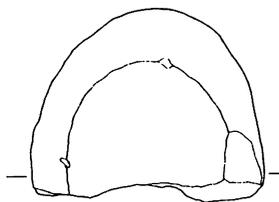
白州町坂下遺跡出土



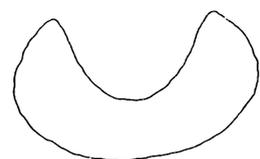
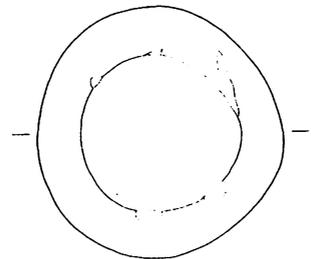
白州町坂下遺跡出土



若草町二本柳遺跡出土



若草町二本柳遺跡出土



若草町二本柳遺跡出土

ま と め

1989年度に第1次調査が実施されてから、1997年度の第7次調査までにA・B・C区で発見された縄文時代の住居跡は114軒にのぼり、平安時代の住居跡は4軒であった。特に縄文時代の住居の軒数であるが、拡張された住居も含まれている。そのうち縄文時代中期において炉の形態が明確にわかる住居も存在している。

そこで、先に刊行された「甲ッ原遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と本書の炉形態の残存状況の良好な住居を取り上げ、甲ッ原遺跡の炉形態の変遷を追ってみたいと思う。

炉形態の変遷（A-○号住居はA区○号住居を意味し、B・C区も同様である）

【中期初頭】の五領ヶ台式期の炉の基本形態は、土器を埋設する炉形態である。A区では、32.41.44号住居が該当する。C区では2.37.51.54.55号住居が該当し、このうちC-37号住居の埋甕炉は、2個体の土器を有するもので、時期的にも五領ヶ台式期の末に属するものと思われる。

【貉沢式期】の炉の基本形態は、前段階と同様の埋甕炉である。A-44.46号住居とC-19.29号住居が該当する。またA-44、C-19号住居の埋甕炉は、前段階の炉体土器と比較した場合、接触することなく離れているのが特徴であるが、住居の建替えによって2個体となったものであるのかは不明である。

【新道式期】の炉の基本形態は、埋甕炉と石囲炉とに分かれる。まず埋甕炉を設置する住居はC-40.50号住居で認められ、石囲炉を設置する住居はC-45A.45B号で認められる。特にこの時期の石囲炉の規模は小さく、旧住居である45B号の炉については台形状を呈するが、新住居である45A号の炉は、4ヶの板状の礫で構成され、方形を呈する。

【藤内式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。C-20.36号住居で認められ、C-20号住居の炉は壊されているのかどうか不明であるが、手前の炉石は存在しない。両脇の炉石はやや小さめの礫2ヶで、奥は土器片で構成されている。C-36号炉-2は5ヶの小礫で構成され、数ヶは取り除かれたものと思われる。C-36号炉-1は小礫で構成され、形状は不定型を呈する。B-1号住居は、炉が破壊されているため形状は不明であるが、石囲炉であったと考えられる。C-14.24.26.27号住居も同時期に相当するものであるが、形態および形状は不明である。

【井戸尻式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。A-8.25.26.31.35.52.53号住居、C-1.3.6.8.9.16.18.30.53号住居で認められる。C-9号住居の炉は、比較的小さな礫を多数使用し、1ヶは石皿で代用される。形状は不整円形を呈し、C-36号住居に類似する。A-52号住居の炉は、平坦な礫で構成され平坦面を上に向けて設置される。ただし、旧河道によって一部破壊されているため、形状は不明である。C-3号住居の炉は、壊されることなく炉石は全て残存する。炉石は6ヶの礫で構成され、平坦面を上に向け設置される。また炉石の1ヶは、石皿で代用される。形状は、円形を呈する。A-35号住居の炉の形状は、楕円形ないし長方形を呈するもので、炉石は平坦面を上に向けて設置される。A-25号住居の炉は、炉石に石棒が使用されており4ヶの礫で構成される。C-16号住居の炉は、大型の礫4ヶで構成され、隙間には小礫が使用される。形状は、方形を呈する。A-8号住居の炉は小型で小礫で構成され、形状は長方形を呈する。

【曾利Ⅰ式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。A-2.20.28号住居で認められる。A-2号住居の炉は、長い3ヶの礫で構成され、右の炉石は他の炉石と設置の方法が異なる。右の炉石は平坦面を上に向け、据えられたような状況が窺える。また手前の炉石は、当初から設置されていなかったものと思われる。形状は、方形状で「コ」の字を呈する。A-20号住居の炉は、掘立柱建物跡によって炉石の一部が抜き取られているが、住居を放棄した段階では炉石が全て残存していたものと考えられる。炉の形状は長方形を呈し、奥の炉石は縦に設置されている。また炉の手前には、台石が存在している。A-28号住居の炉は、壊されることなく全て残存している。炉の形状は長方形を呈し、手前の炉石を除いた全て

の石は、縦に設置される。

【曾利Ⅱ式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。A-13.35.37号住居で認められる。A-13号住居の炉は、壊されることなく全て残存する。炉の形状は、五角形ないし六角形を呈する。またあまり大きくない礫が使用され、一部小礫で構成される。奥の炉石は縦に設置され、手前の炉石は平坦面を上に向けられる。左右の炉石は、縦に設置される。

【曾利Ⅲ式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。A-3.9.12.27.50号住居で認められる。A-12号住居の炉は、壊されることなく全て残存する。炉の形状は五角形を呈するもので、炉石はややこぶりの礫が使用され、礫は縦に設置される。A-3号住居の炉は、大型の板状の礫が使用され一部破壊されている。炉の形状は、方形を呈する。A-9号住居の炉は、3号住居と同様大型の板状の礫が使用され、炉石は全て残存する。炉の形状は、方形を呈する。A-27号住居の炉は、一部炉石が壊れているが状態からすると、使用時に壊れた炉石を一部残してそのまま使用したのと考えられる。この住居の炉は、A-3.9号住居と同様に、大型の板状の礫が使用され、炉の形状は方形を呈する。炉石は、全て縦に設置される。

【曾利Ⅴ式期】の炉の基本形態は、石囲炉である。A-30・C-15号住居で認められる。A-30号住居の炉は、大型の礫を使用したものであるが壊されたのと考えられる。それは炉から離れた手前に礫が存在しており、炉石であった可能性がある。炉の形状は、方形を呈するものと思われる。C-15号住居の炉は、故意に壊されたのか、あるいは耕作時に壊されたのか判断することはできない。炉石は、大型の板状の礫が使用され、縦に設置される。炉の形状は、方形を呈していたものと思われる。

【中期末葉】に属する住居はC-56号で、炉の形態は不明である。遺構確認の時点では、焼土跡が確認されており炉石等の礫は認められなかった。

以上のことから、炉の形態の変遷を行ってみたい。まず五領ヶ台式期について、第1段階の炉の形態は、埋甕炉で1基を基本形態とするものである。A-32.41号住居、C-2.51.54.55号住居が考えられる。第2段階の炉の形態は、C-37号住居のように、炉体土器が2ヶ接触するように設置されたのと考えられる。このことは次の時期の猪沢式期第3a・3b段階では、炉体土器が2ヶ使用されており、A-44・C-19号住居が存在していることである。また炉体土器2個体使用の第2段階では、五領ヶ台式期末のC-37号住居の炉体土器は接する形で埋設されており、第3a・3b段階となると埋設土器は離れていく傾向が窺える。そして次の猪沢式期第4段階では再び炉体土器は1個体となり、C-29号住居へと継続していくものと思われる。

新道式期の第5・6段階では、炉体土器は1ヶ埋設される。この第5段階では、炉の掘り方は埋設された土器より大きく、第6段階では埋設土器とほぼ同規模で掘られ、掘り方は縮小化するようである。また第7段階の新道式期後半では、C-45A.B号住居のように石囲炉が出現する。第7a段階のC-45B号住居は、ややこぶりの規模で不整形を呈する石囲炉であるが、第7b段階となるとC-45A号住居のように、整然とした方形の石囲炉へと変化していく。

しかし藤内式期の第8段階となると、この形態に変化が起きる。整然とした方形を呈していた石囲炉が、こぶりの礫を使用したものとなり、C-36号住居の形態となってしまう。特に炉-2のように、井戸尻式的な形態も見られる。C-20号住居の炉は、方形を呈するような形態となっているものの、炉の奥は土器片を使用している炉である。この第8段階は、第7段階と時期的に時間差が開きすぎているための結果であるが、その差を埋める炉の形態は認められていない。C-14号住居が時間差を縮めるものであるが、この住居は新旧関係が認められてはいるものの新しい住居の炉の形態は残念ながら不明である。旧住居については、炉石の存在は不明で掘り込み等も確認されなかったことから地床炉であった可能性が高い。またC-24.26号住居については、石囲炉である。

第9段階の井戸尻式期になると、石囲炉の形態にバリエーションが認められる。C-9号住居の炉の形態は、

C-36号住居に類似するものかなり整った形態を示し、前段階の面影を強く残す。第10a段階になるとC-3号住居のように平坦で比較的丸みを持った礫が、平坦面を上に向けて円形状に据えられるものとなる。第10c段階ではC-16・A-25号住居のようにやや方形を呈するもので、石棒を使用したA-25・C-8号住居の形態も認められる。また第10a段階と第10c段階の中間形態をとる第10b段階も存在し、A-35号住居のように円形とも方形ともとれる形態が認められる。第11段階では、A-8号住居のように板状の礫が縦に設置される形態で、次の段階に継続するものと受け取れる。第12段階の曾利Ⅰ式期の炉の形態は長方形を呈し、第11段階に比較して炉は整然とした形状を呈する。炉の手前の石は平坦面を上に向け、奥の炉石と両脇の石は縦に設置される。また炉石は、前段階より大型の礫が使用され、掘り方は炉の規模より若干広くつくられる。

第13a段階は曾利Ⅱ式期で、第12段階の形態と大きく異なり、長方形を呈していた炉から五角形状ないし六角形状となり、炉の手前の石は平坦面が上に向けられる。第12段階と第13a段階において炉の形態に変化が認められるが、それを埋める形態は認められていない。この第13a段階を引継ぎ、第13b段階の曾利Ⅲ式期A-12号住居のように五角形状を呈する炉が形成され、この段階をもって手前の炉石は縦に設置される。

第14段階では多角形を呈していた炉は、方形状の形態となっていく。またこの段階の炉石は扁平で大型化し、4ヶの礫で構成される。第16段階の曾利Ⅴ式期では、残存状態の良好な石囲炉はほとんど存在せずわずか2基のみである。そのため炉の形態は不明であるが、A-30号住居については炉の奥の炉石がほぼ直立していることがあげられよう。

時 期	変遷段階	炉の形態	炉 の 形 状	住 居 番 号	住居内の炉の位置
五領ヶ台式期	1 段階	埋甕炉	1基・炉体土器1ヶ	A-32. 41 C-54. 55	中央
	2 段階	埋甕炉	2基・炉体土器2ヶ	C-37	中央
貉沢式期	3 a 段階	埋甕炉	2基の炉・土器2ヶ	A-44	中央
	3 b 段階	埋甕炉	2基の炉・土器2ヶ	C-19	中央
	4 段階	埋甕炉	1基・炉体土器1ヶ	C-29	中央
新道式期	5 段階	埋甕炉	1基・炉体土器1ヶ	C-40	中央
	6 段階	埋甕炉	1基・炉体土器1ヶ	C-50	中央
	7 a 段階	石囲炉	不整形	C-45(B)	中央
	7 b 段階	石囲炉	方形	C-45(A)	中央
藤内式期	8 段階	石囲炉	不整円形・コの字形	C-36. 20	ほぼ中央・奥壁
井戸尻式期	9 段階	石囲炉	不整円形	C-9	中央
	10 a 段階	石囲炉	円形	C-3 A-52	ほぼ中央
	10 b 段階	石囲炉	楕円形ないし長方形	A-35	ほぼ中央
	10 c 段階	石囲炉	方形	A-25. 31 C-8. 16	奥壁・中央
	11 段階	石囲炉	長方形	A-8	不明
曾利Ⅰ式期	12 段階	石囲炉	長方形・コの字形	A-2. 20. 28	奥壁・やや奥壁
曾利Ⅱ式期	13 a 段階	石囲炉	六角形	A-13	奥壁
曾利Ⅱ～Ⅲ式期	13 b 段階	石囲炉	五角形	A-12	奥壁
曾利Ⅲ式期	14 段階	石囲炉	方形	A-3. 9. 27	奥壁
曾利Ⅳ式期	15 段階	不明			
曾利Ⅴ式期	16 段階	石囲炉	方形?	A-30. 45 C-15	ほぼ中央

あ と が き

甲ッ原遺跡の発掘調査は、1989年（平成元年）度に第1次調査を開始し、図面班はわずか1組であったため調査担当者も図面班として遺構の図面作成にあたった。翌年1990年（平成2年）度には第2次調査を行ない、調査面積は約3000㎡であり調査期間が長いことによって、今後必要になる図面班の育成を行った。1991年1月から3月までの約2ヶ月半は前年度および1990年度の整理を行ったが、豊富な出土遺物の量は2ヶ月半の整理ではとても追いつくことはできなかった。1991年（平成3年）度には第3次調査が開始され、その調査区は飛び石状に行われた。調査された住居の軒数は掘立柱建物跡を含んで24軒、土坑の総数は約320基であった。整理の期間は昨年度と同様で、約2ヶ月半であった。

1992年（平成4年）度には、第4次調査を実施した。調査面積は約1720㎡が対象で住居が29軒、土坑約130基が調査された。中でも250・302号土坑からは、県内でも発見例の少ない琥珀玉が出土し、しかも縄文時代の遺跡からの出土は極めて珍しいものであった。この年の整理期間は約2ヶ月で、昨年度同様の状況であった。整理する遺物の量は、整理期間の関係で年々蓄積されていった。

1993年（平成5年）度の第5次調査は、約4ヶ月の期間で調査面積は約1000㎡であったため、整理の期間を長くもうけた。それは、調査報告書「甲ッ原遺跡Ⅰ」の作成のためと、蓄積された遺物の整理のためであった。この報告書が刊行されたことによって、整理の作業工程が順調に動きはじめた。

1994年度には整理だけの期間がもうけられ、県学術文化財課と発掘調査担当者との間で、報告書を3部作に分けて作成する運びとなった。そのため未調査区の少ないC区（第3・4次調査）を先に報告することを決め、1991年度および1992年度までの遺物の整理および図面の整理等を行うこととなった。そこで水洗いが済んでいないものから始め、注記・接合・石膏による補強作業・遺物の実測等が順調に流れ作業のラインにのった。このような経緯で1995年（平成7年）度には第6次調査が始まったことにより、担当者不在の中でも順調に整理作業が行われ「甲ッ原遺跡Ⅱ」が刊行された。

そして1996年（平成8年）度には、第2回目の整理だけの期間がもうけられ、「甲ッ原遺跡Ⅲ」の報告書の刊行に向けて整理作業が順調に行われた。接合・復元遺物の補強のための石膏詰め・遺物実測等の作業をはじめとし、遺構のトレース・遺物のトレースが行われ、石器の実測およびトレースについては業者に委託した。

1997年（平成9年）度には、甲ッ原遺跡の未調査区の全てが調査されて終了し、本報告書「甲ッ原遺跡Ⅳ」の刊行に向けて整理が行われた。

甲ッ原遺跡の報告書は、ⅠからⅣまで分冊された理由は以上のことによるためである。また本遺跡の規模・発見された遺構・出土遺物の量・さまざまな文様が施された土器・石器・琥珀製品等は、担当者である浅学の私にとって遙かに能力を越えたものであり、甲ッ原遺跡の報告書を手にした方にとって十分な書になっていないことと思っています。

そして1989年度第1次調査から1997年度第7次調査まで甲ッ原遺跡の発掘調査および整理に従事して下さった方々に厚くお礼を申し上げます次第です。

また発掘調査から報告書の刊行に至るまでご協力をいただいた大泉村教育委員会を始めとして、多くの機関・諸氏からのご指導・ご協力を賜ったことをここに記すとともに、伊藤公明氏には全体図の作成の際大変お世話になったことを末筆ではありますがお礼申し上げます次第であります。

第1次～第7次調査発掘担当者 主任・文化財主事 山本茂樹

1998年3月

第2地点
第3地点
第4地点
第5地点
第6地点
第7地点
第9地点
第11地点
第12地点
第13地点

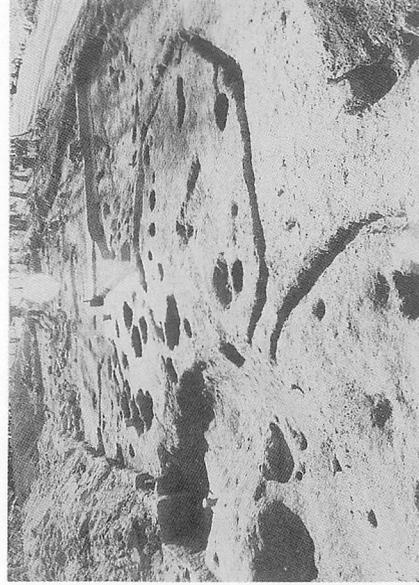
大泉教育委員
会によって調査
された地点
(9・11地点に
ついては調査
前に掘削され
た)



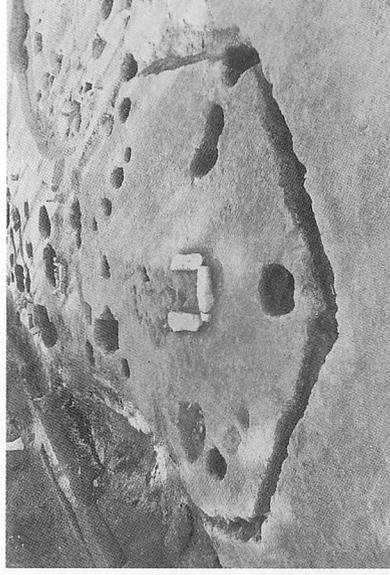
版 圖



甲ッ原遺跡全景（分岐して右へ延びる道路及びその周辺）



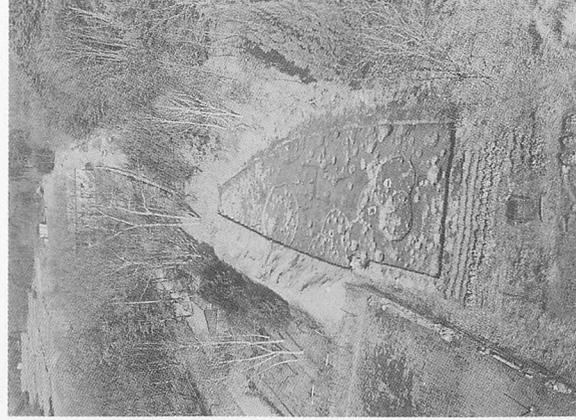
1989年度 A区第1次調査区



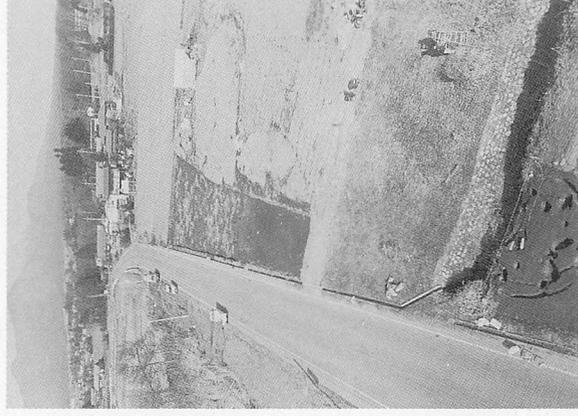
A区2号住居



1990年度 A区第2次調査区 (排土の下が第1次)



1991年度 A区第3次調査区
(調査区の右上部分は第7次調査区)



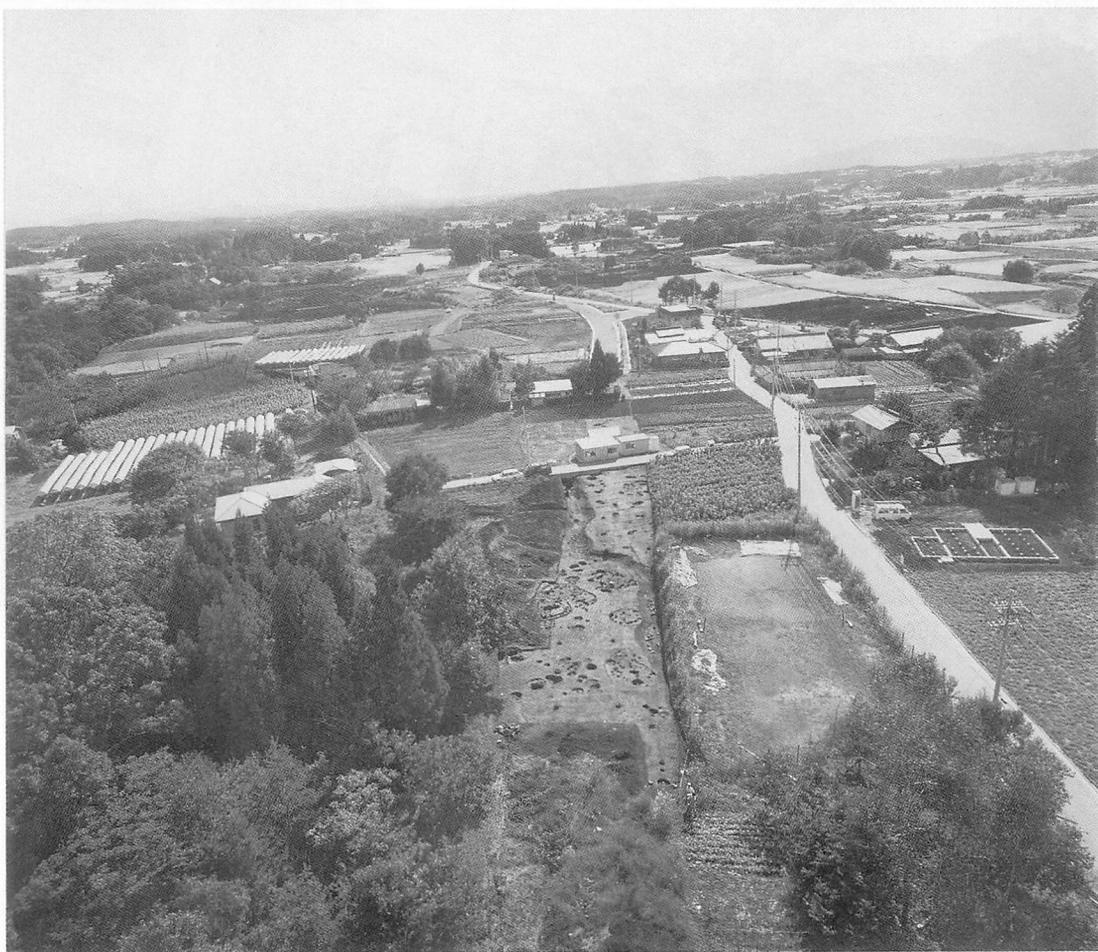
1991年度 C区第3次調査区



1993年度 A区第5次調査区
(調査区の上は、A区第3次調査区)



1997年度 C区第7次調査区



(上) 1992年度 C区第4次調査区 (下) 1993年度 A区第5次調査区
建築中の建物の位置は、甲ッ原第6地点 (大泉村教育委員会)



1996年度 C区第6次調査区（中央下と中央上の分岐する道路の右脇）



1989年度 A区第1次調査区 全景



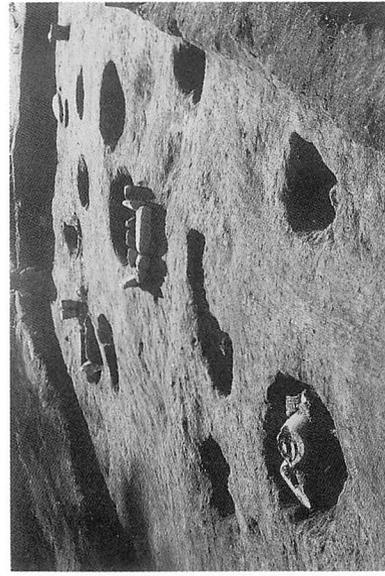
A区1・7号住居 (第1次)



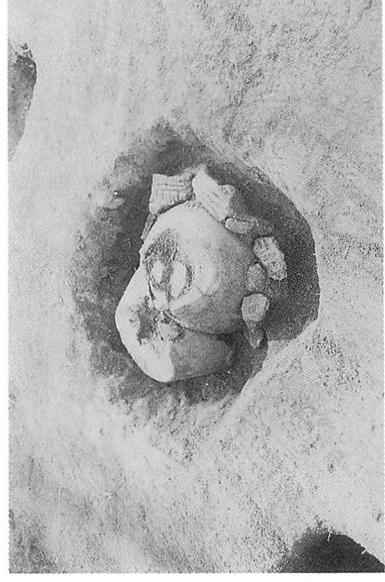
A区2号住居 (第1次)



A区3号住居 (第1次)



A区8号住居 (中央)・9号住居 (左奥) (第1次)



A区1号埋甕 (入れ子状) (第1次)



A区1号埋甕



A区1号埋甕



A区 2号埋甕 (第1次)



1990年度 A区第2次調査区 (北から南)



1990年度 A区第2次調査区 (西から東)



1990年度 A区第2次調査区 (南から北)



A区 15号住居 (炉石は13号住居) (第2次)



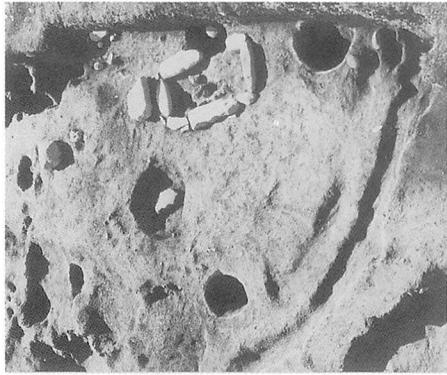
A区 13号住居 (第2次)



A区 17号住居 (左は19号住居) (第2次)



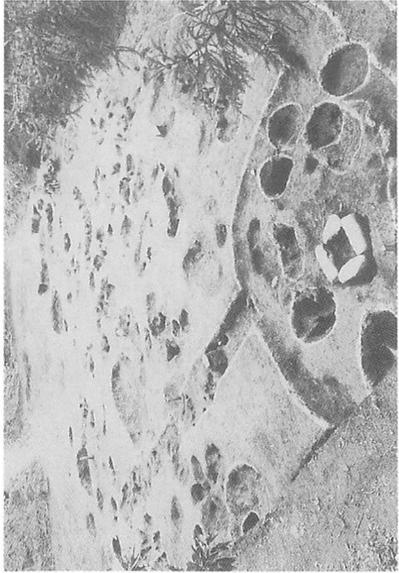
A区 19号住居 (第2次)



A区20号住居
(第2次)



A区20号住居と3号掘立柱建物跡(第2次)



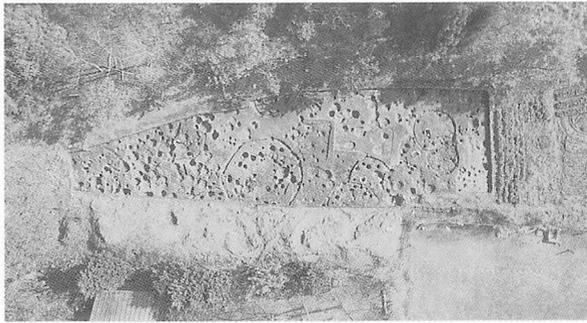
1991年度 A区第3次調査 25号住居



A区25号住居 炉及び遺物出土状況



A区第26号住居(第3次)



1991年度 A区
第3次調査区全景



1991年度 A区調査区
調査区の上に見える舗装道路
部分は、1989・1990年度の調
査区

A区26・27・28・29号住居
(左27号・下28号・右29号・奥26号)



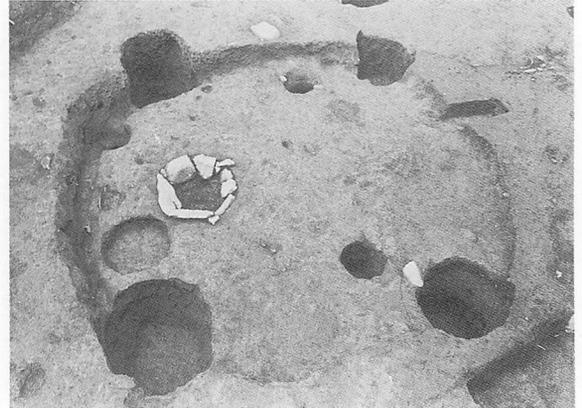
A区 5号住居 (第1次)



A区 10号住居 (第2次)



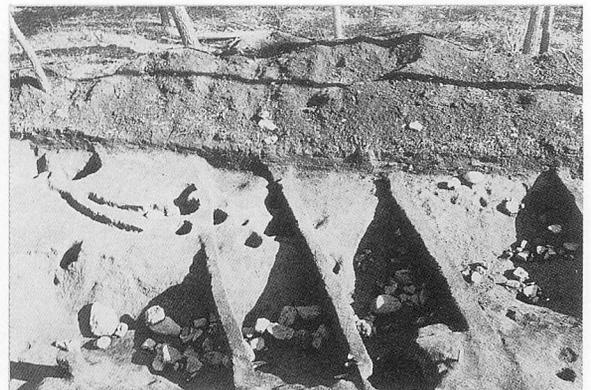
A区 11号住居 (第2次)



A区 12号住居 (第2次) 四隅の柱穴は1号掘立柱



A区 18号住居 (第2次)



A区 23・24号住居と旧河道 (第2次)
(左24号住居・右23号住居)



A区 31号住居 (第3次)



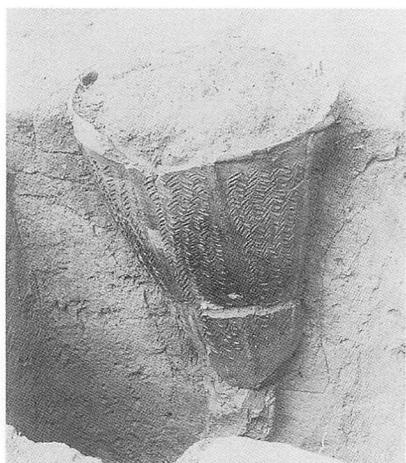
A区 32号住居 (第3次)



A区30号住居（第3次）中央左に埋甕



A区30号住居遺物出土状況



A区30号住居埋甕



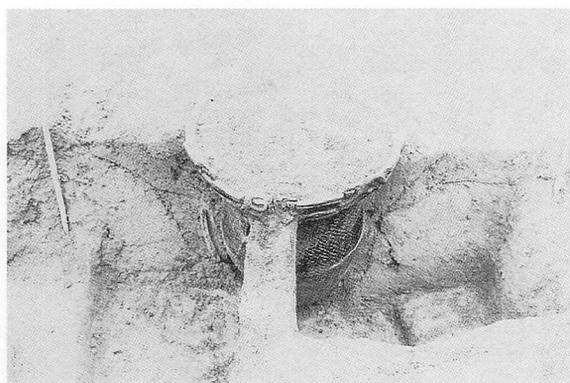
A区33号住居（第3次）



A区33号住居遺物出土状況



A区33号住居遺物出土状況



A区33号住居埋甕



A区35号住居と遺物出土状況（第3次）



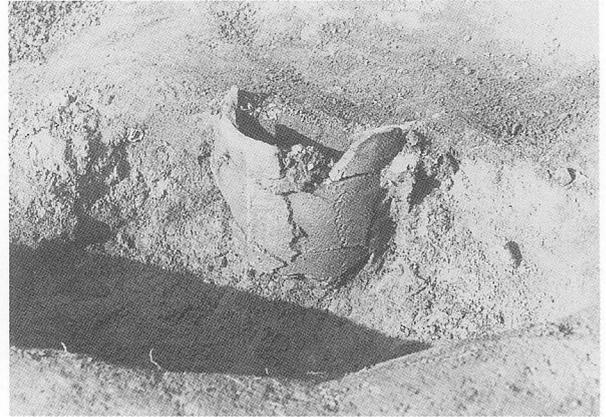
A区34号住居 (第3次)



A区35号住居 (第3次)



A区36号住居 (第3次)



A区36号住居埋甕



A区37号住居遺物出土狀況 (第3次)



A区39号住居 (第3次)



A区40号住居 (第3次)



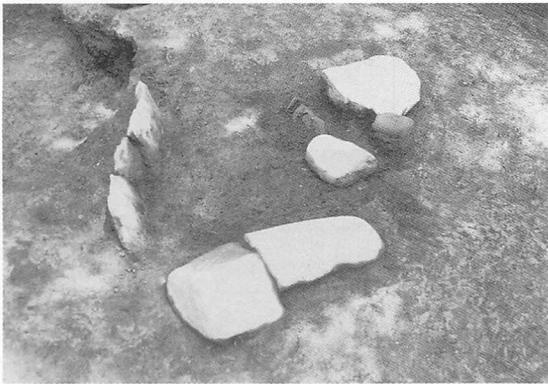
A区35号住居調查風景



A区50号住居遺物出土状況
右上に石棒（杭の左下）



A区50号住居石棒出土状況



A区50号住居炉



A区50号住居埋甕



A区50号住居埋甕



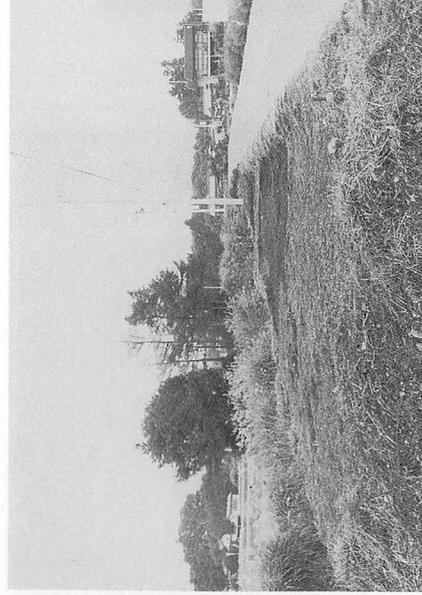
A区 52号住居（手前）・53号住居（左奥）



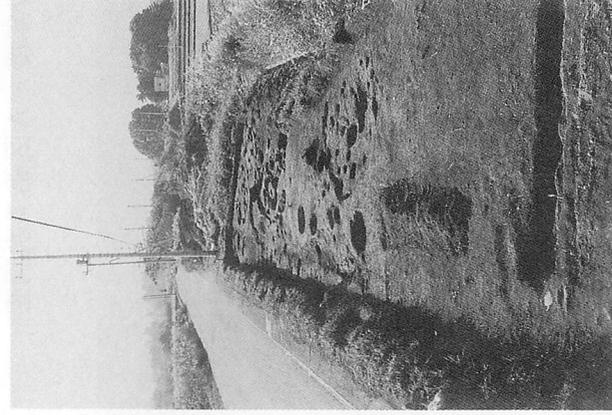
A区52号住居
遺物出土状況



A区53号住居
袋状土坑



1996年度 C区第6次調査区（南から北）



第6次調査区全景（北から南）



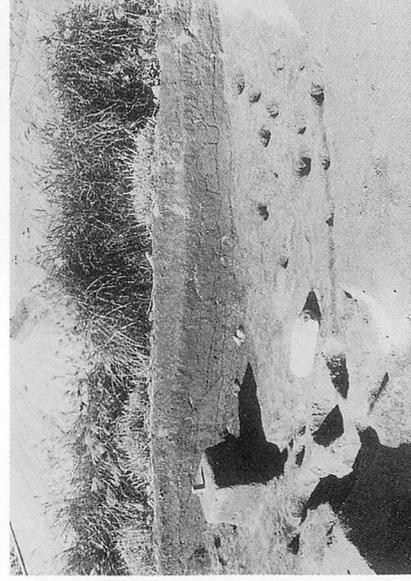
C区40号住居遺物出土状況



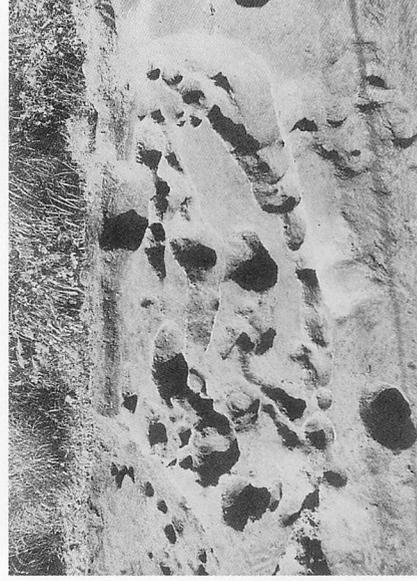
C区40号住居



C区40号住居埋葬炉



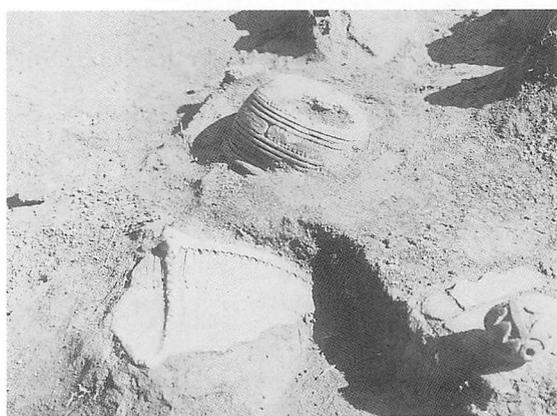
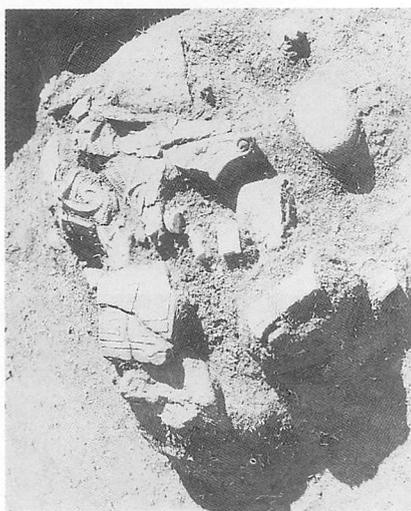
C区46号住居



C区42号住居



C区45(A)号住居 (左)・45(B)号住居 (右) (第6次)



C区45号住居遺物出土状況



C区47・48号住居 (第6次)



C区50号住居遺物出土状況 (第6次)



C区50号住居



C区50号住居埋葬炉と出土遺物



A区53号住居内 303土坑 (第7次)



A区53号住居 (第7次)



A区 54号住居 (第7次)



C区52号住居カマド



A区第7次調査区全景



A区旧河道土層断面



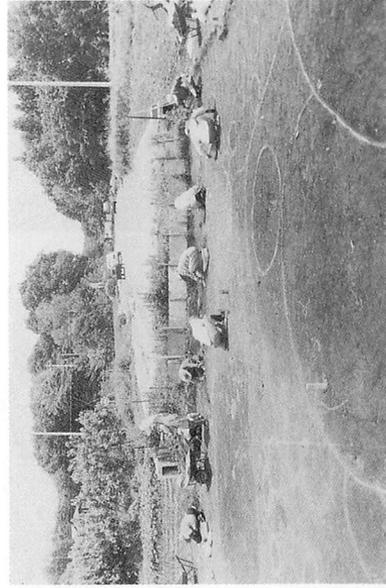
A区旧河道



C区52号住居 (第7次)



C区52号住居遺物出土状況



1997年度 C区第7次調査遺構確認



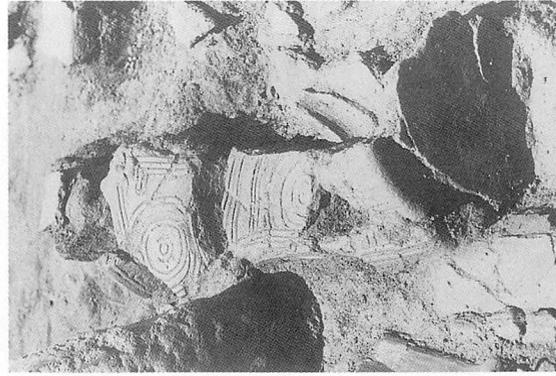
C区54号住居埋甕炉



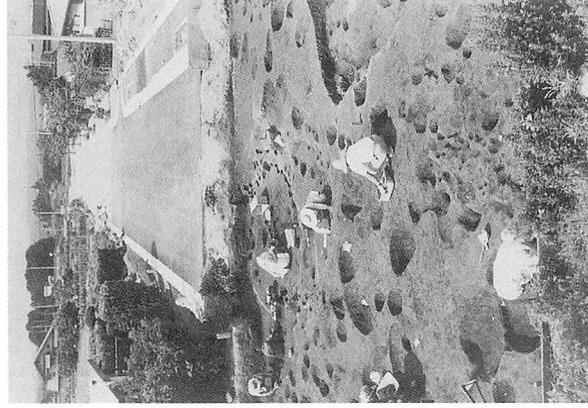
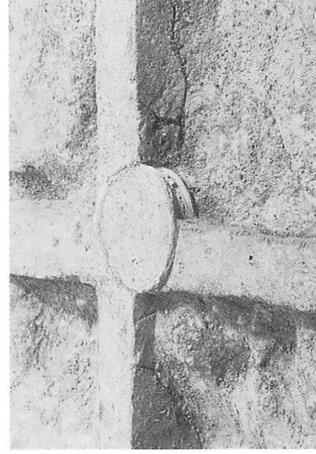
C区54・55号住居（手前55号）



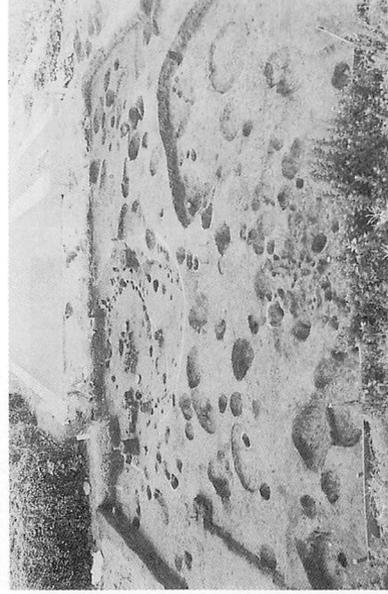
C区55号住居遺物出土状況



C区55号住居遺物出土状況



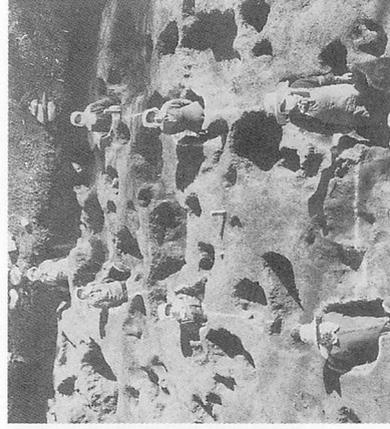
(中央上・下) C区55号住居埋甕炉



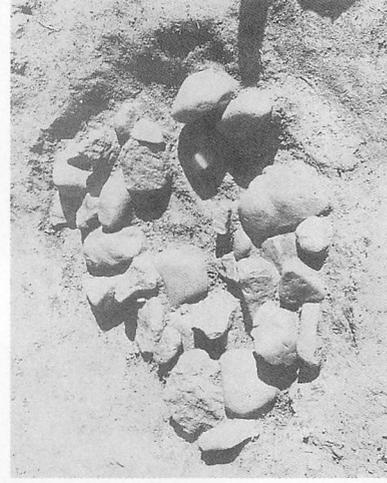
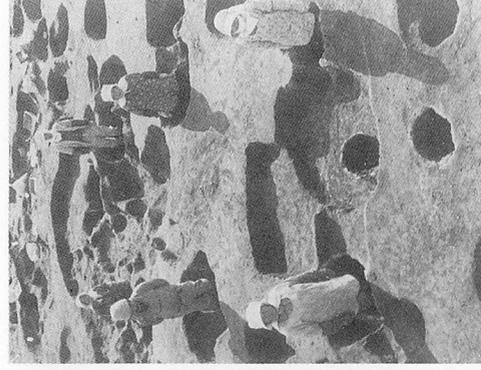
1997年度 C区第7次調査区全景（中央奥54・55号）



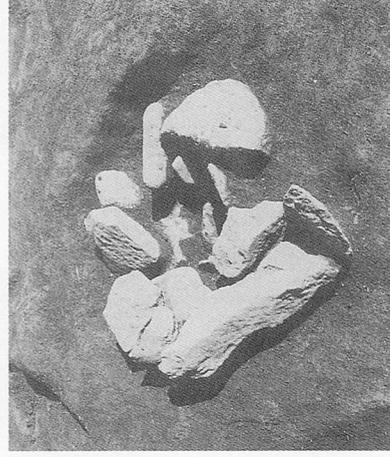
1997年度 B区第7次調査区全景



1号掘立柱 (左)
3号掘立柱 (中)
1号掘立柱 (左下)
C区4号住居 (右)
C区4号住居 (右下)



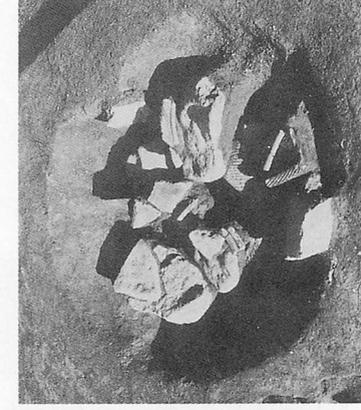
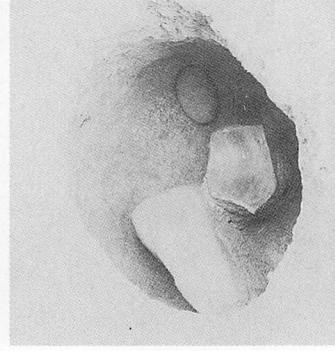
A区25土坑

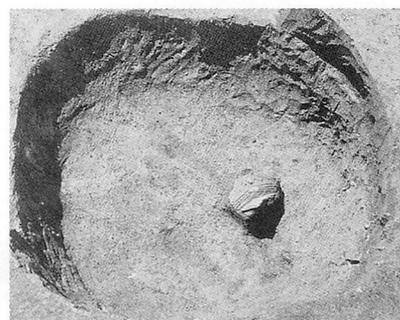


A区61土坑 (左)
A区140土坑 (左下)
A区23土坑 (中)
A区100土坑 (中下)



A区31土坑 (上)
A区153土坑 (下)





A区 156±	A区 188±	A区 287±
A区 288±	A区 291±	A区 291±
A区 293±	A区 293±	A区 302±
A区 303±	C区 323±	C区 C-8G-1±
A区53住内 袋状土坑		C区 C-8G-1±



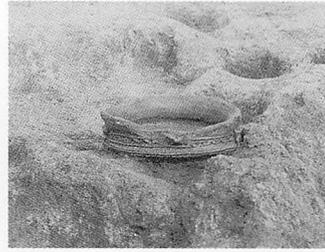
炉の形態



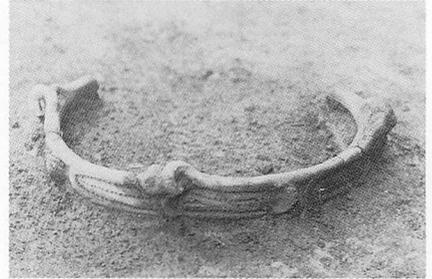
A区32号住居



C区37号住居



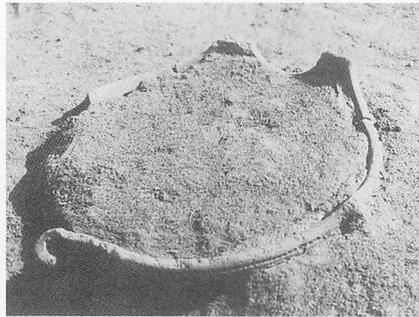
C区55号住居



C区50号住居



C区19号住居



C区40号住居



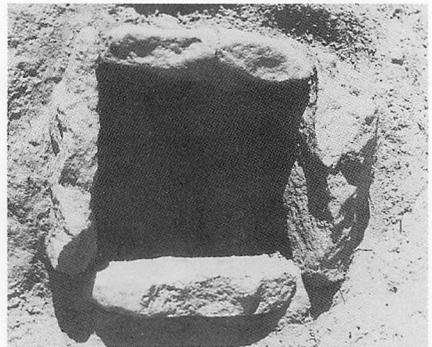
C区50号住居



C区20号住居



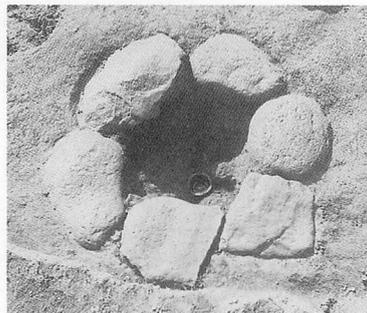
C区45B号住居



C区45A号住居



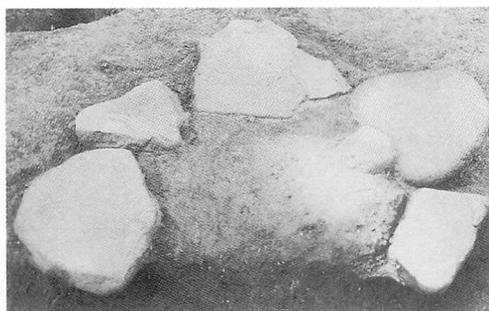
C区36号住居



C区3号住居



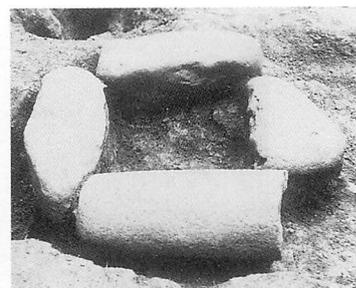
A区31号住居



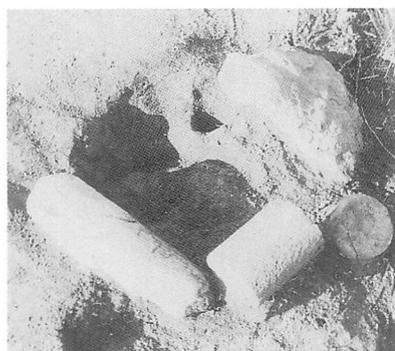
A区52号住居



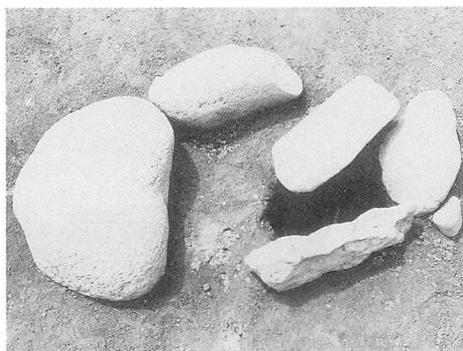
C区16号住居



A区25号住居



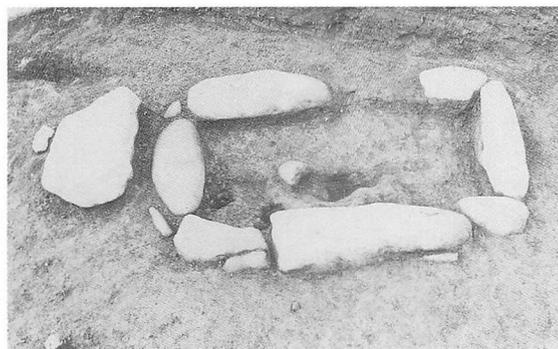
C区8号住居



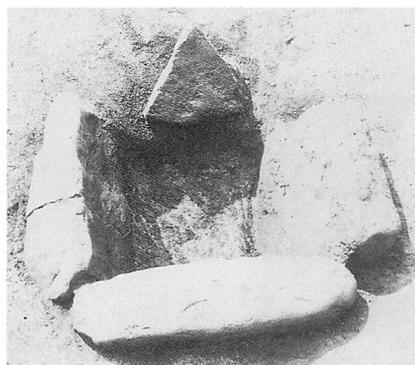
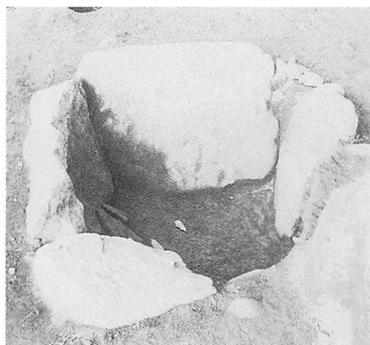
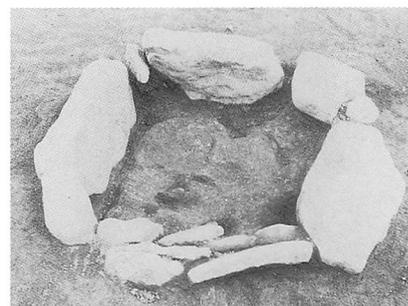
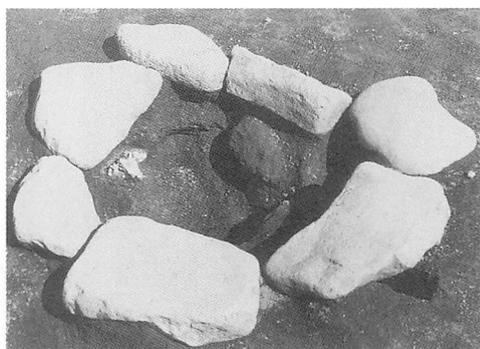
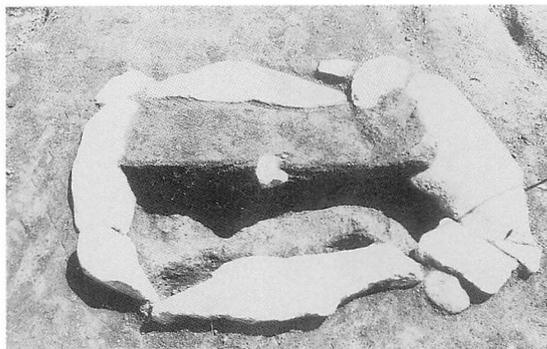
A区26号住居



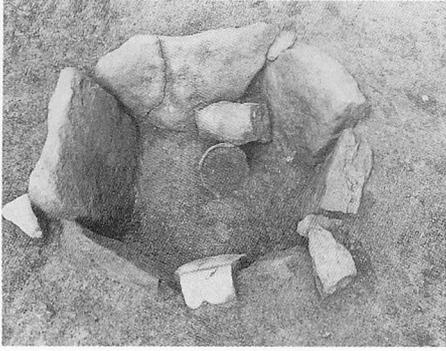
A区8号住居



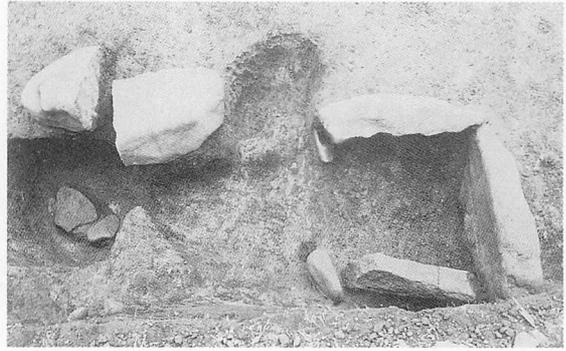
A区20号 (左)
A区28号 (右)
A区2号 (左下)
A区35号 (中下)
A区13号 (右下)



A区9号 (左)
A区3号 (中)
A区27号 (右)



A区12号住居



A区30号住居



A区1号住居



A区1号住居



A区2号住居



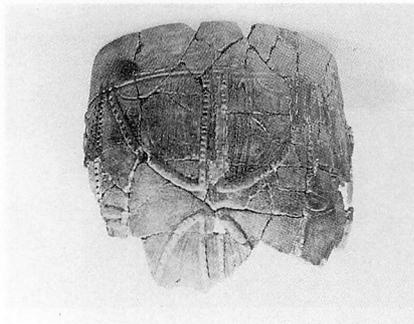
A区4号住居



A区10号住居内9土坑



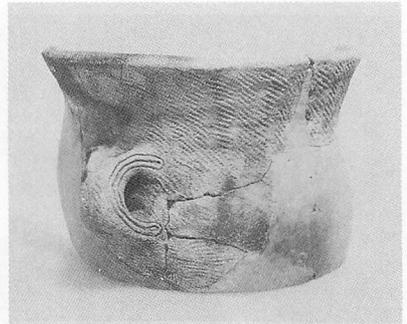
A区10号住居



A区10号住居



A区12号住居内9土坑



A区13号住居



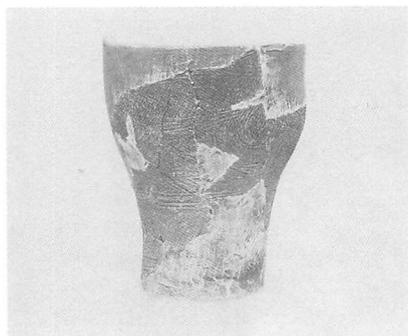
A区17号住居



A区19号住居埋甕



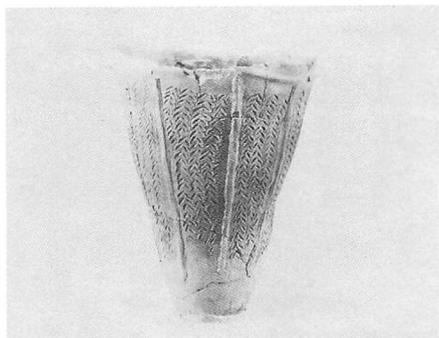
A区25号住居



A区29号住居



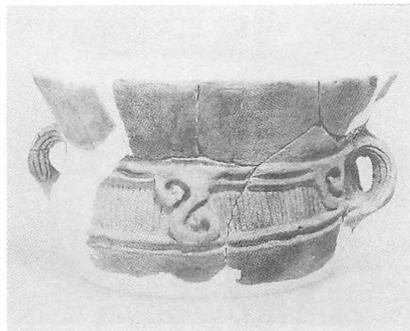
A区30号住居



A区30号住居埋甕



A区31号住居



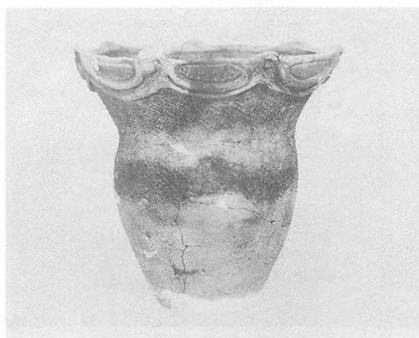
A区33号住居



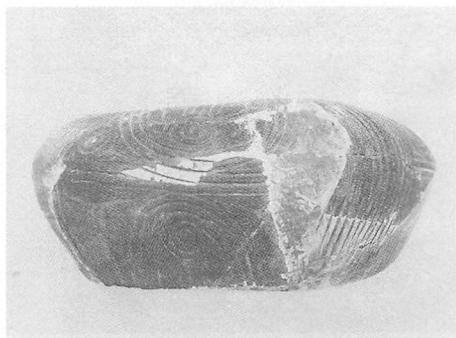
A区33号住居



A区33号住居



A区33号住居埋甕



A区39号住居



A区50号住居



A区50号住居



A区50号住居埋甕



A区50号住居



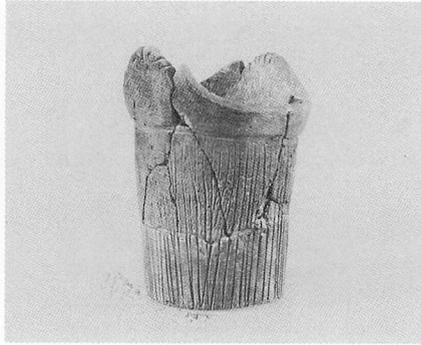
A区52号住居



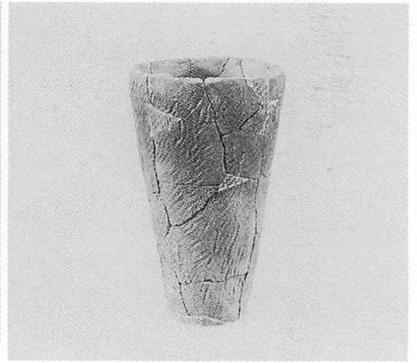
A区52号住居



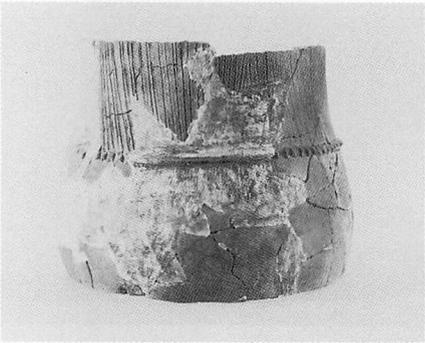
A区52号住居



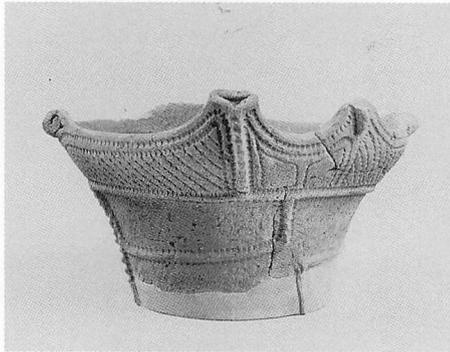
A区52号住居



A区52号住居



A区53号住居



C区40号住居炉体土器



C区40号住居



C区45号住居



C区45号住居



C区45号住居



C区45号住居



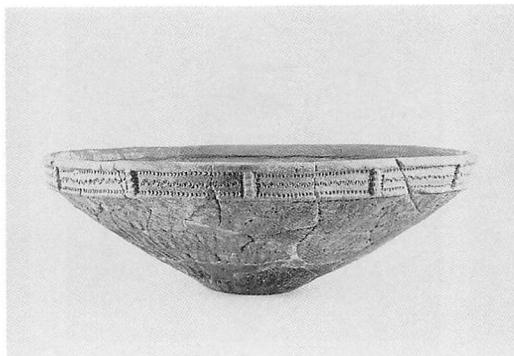
C区45号住居



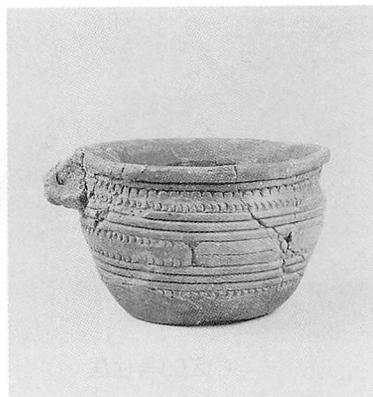
C区45号住居



C区45号住居



C区45号住居



C区45号住居



C区50号住居



C区50号住居



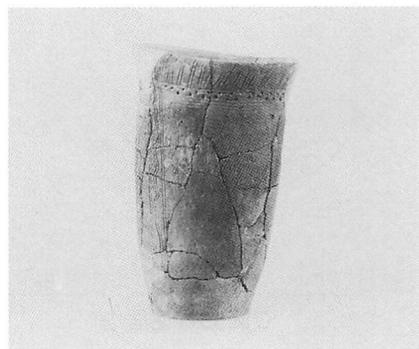
C区50号住居



C区50号住居



C区51号住居炉体土器



C区51号住居



C区52号住居



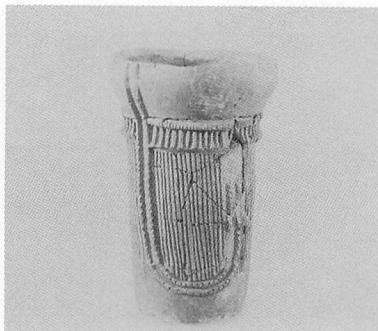
C区52号住居



C区52号住居



C区53号住居



C区53号住居



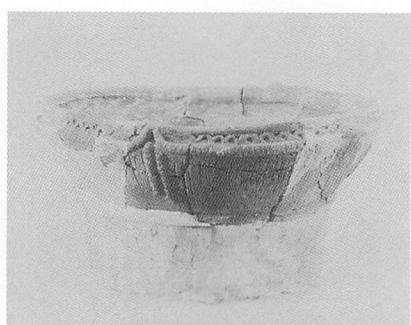
C区54号住居炉体土器



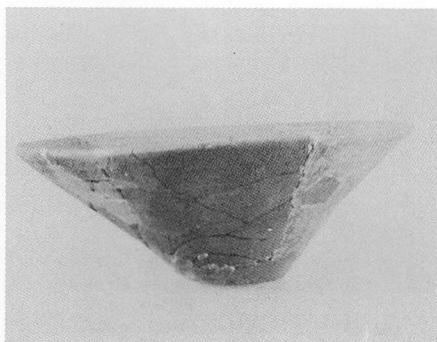
C区55号住居炉体土器



C区55号住居



C区55号住居



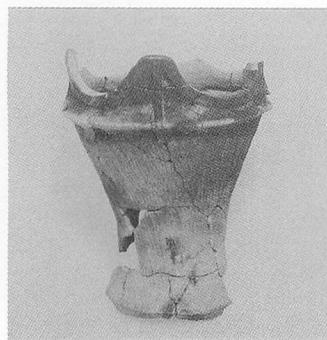
C区55号住居



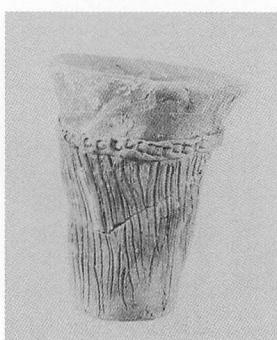
C区55号住居



C区55号住居



A区58土坑



A区99土坑



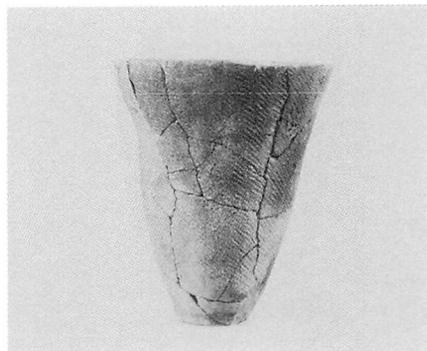
A区99土坑



A区156土坑



A区157土坑



A区291土坑



A区301土坑



A区293土坑



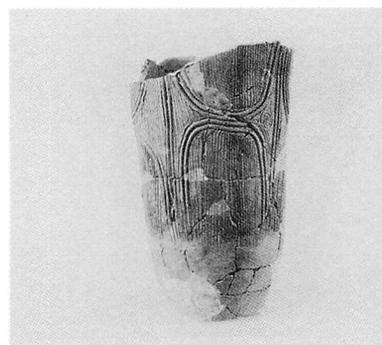
A区188土坑



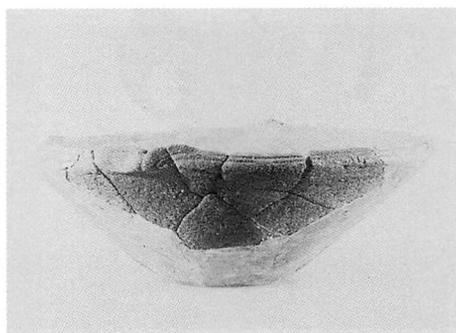
A区302土坑



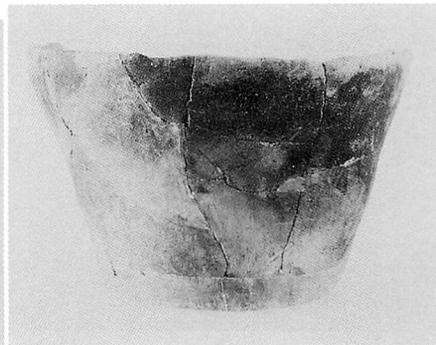
A区293土坑



A区302土坑



C区A-7G-2土坑



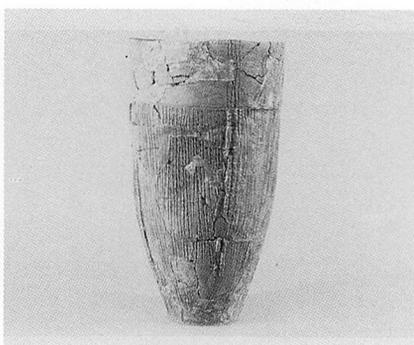
A区288土坑



A区2号埋甕



A区3号埋甕



A区4号埋甕



A区2号土坑



A区203土坑



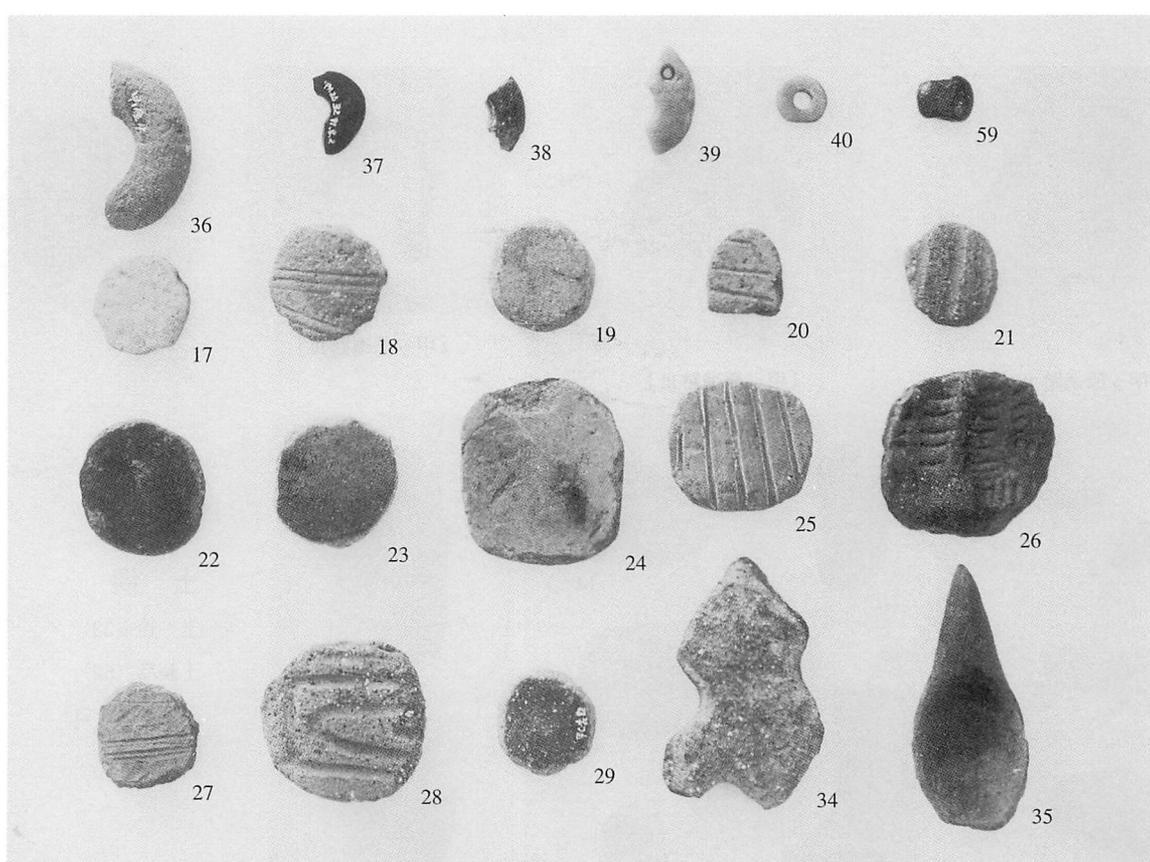
A区7土坑



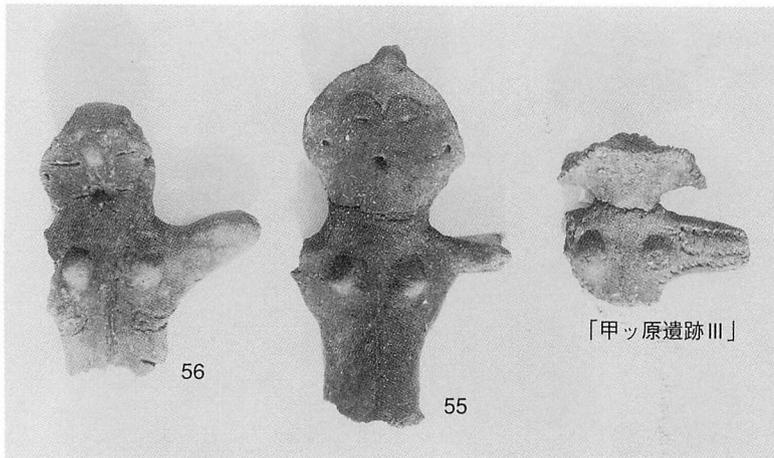
C区45号住居



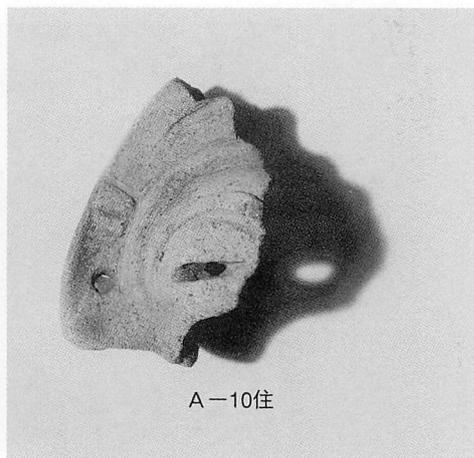
土製品・玉類



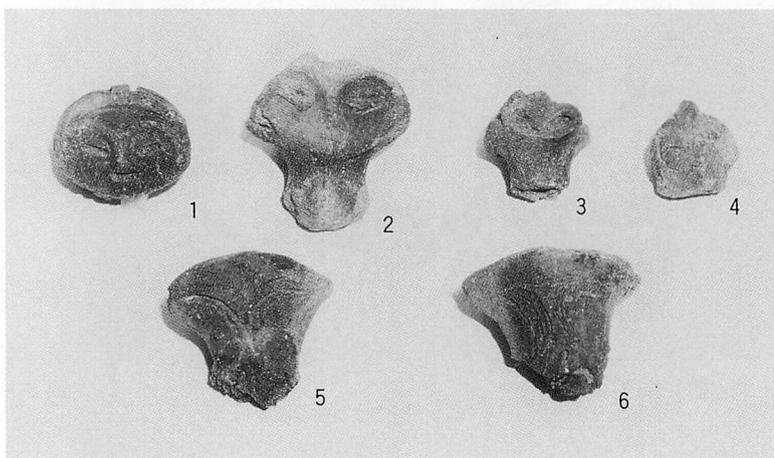
块状耳飾・小玉・土製円盤・土器片加工製品 (34) ・土製匙 (35)



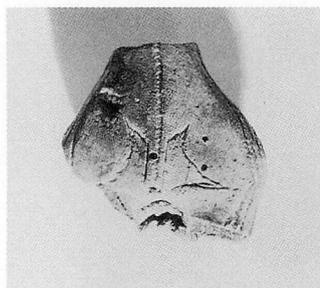
「甲ッ原遺跡Ⅲ」



A-10住



「甲ッ原遺跡Ⅲ」



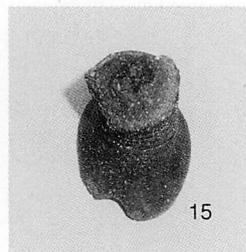
「甲ッ原遺跡Ⅲ」



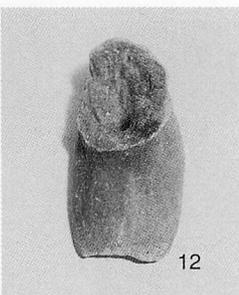
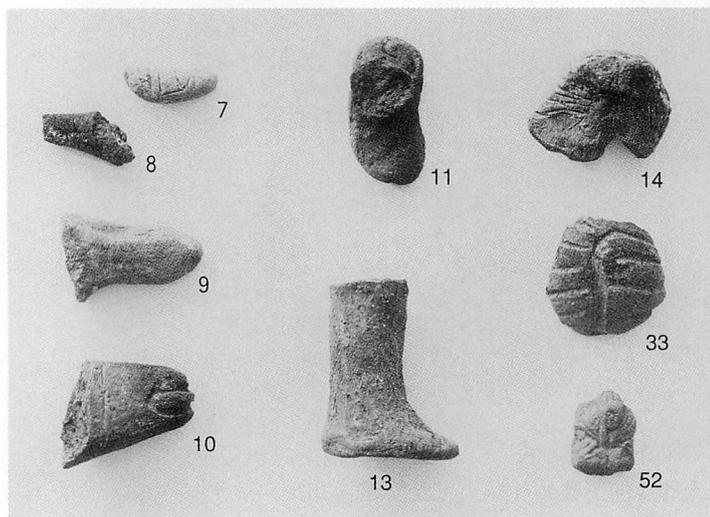
「甲ッ原遺跡Ⅲ」



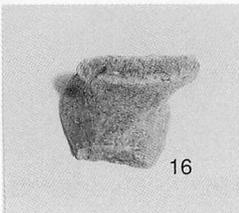
「甲ッ原遺跡Ⅲ」



15



12



16

土 偶

土 鈴 (33)

土製品 (52)

(ドロメンコ)



1989年度 A区調査前



1989年度 A区試掘坑
による遺構確認



1989年度 遺構確認



1989年度 1号埋甕調査風景



1989年度 調査風景



1990年度 礫の出土状況
および調査風景



1990年度 遺構確認



土坑調査風景



A区26号住居跡と27・28・29
号住居跡の重複(左)

1990年度 調査風景(下)

A区27号住居跡調査風景(下)





1989年度 調査風景



1989年度 調査風景



1989年度 調査風景



1989年度 調査風景



1990年度 調査風景



1991年度 調査風景



1992年度 調査風景

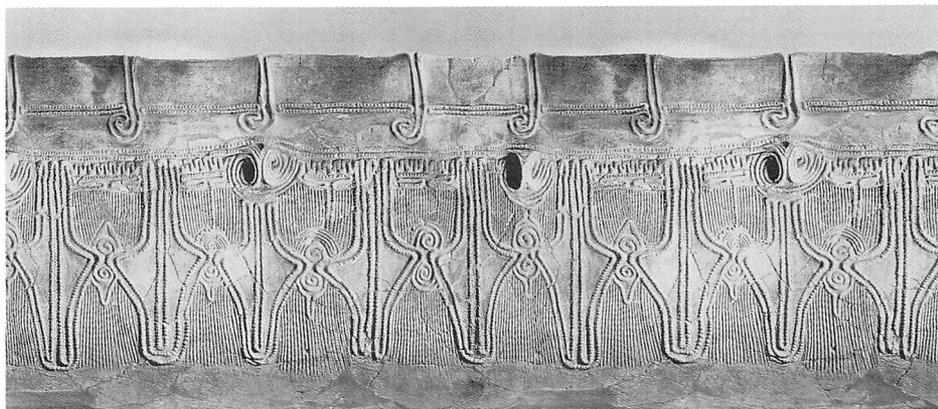


1997年度 調査風景

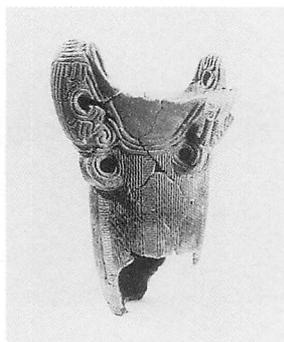
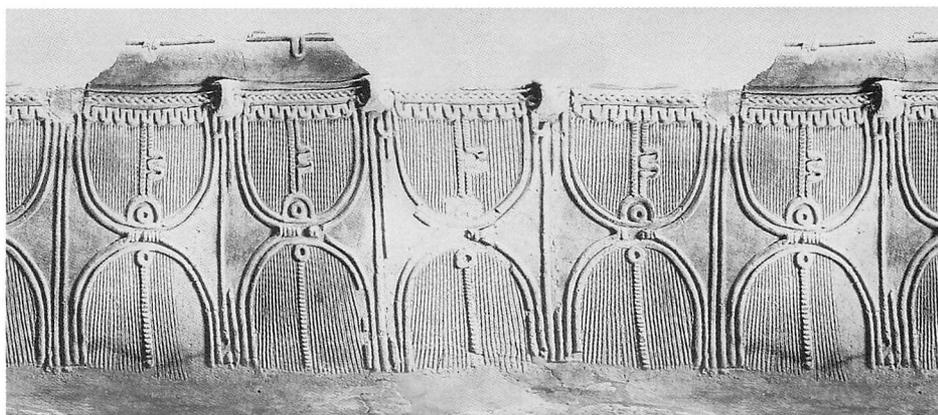




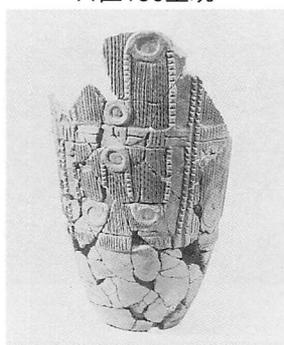
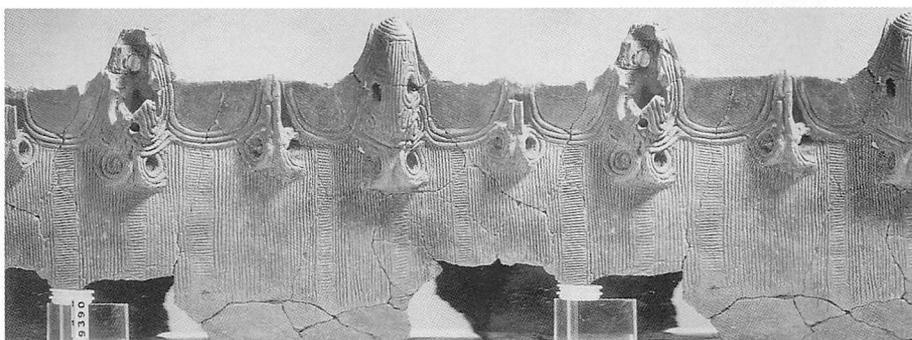
A区1号埋甕



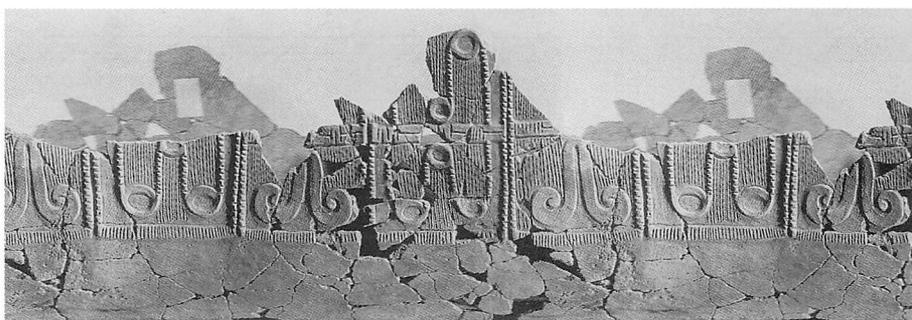
A区1号埋甕



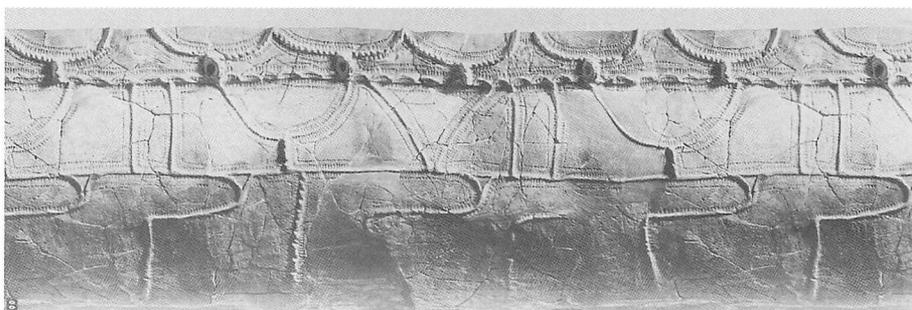
A区156土坑



A区7土坑



C区50号住居跡

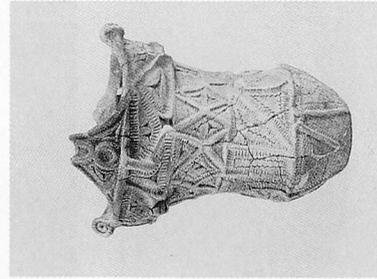




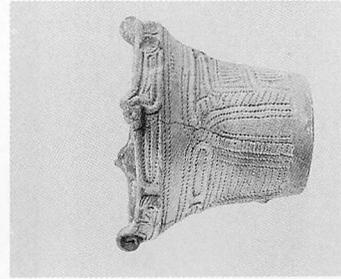
A区7土坑



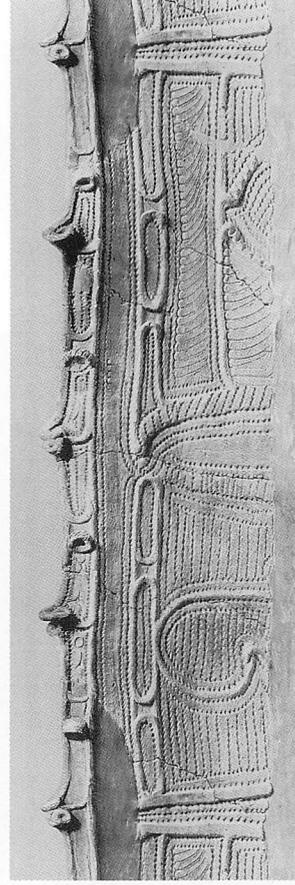
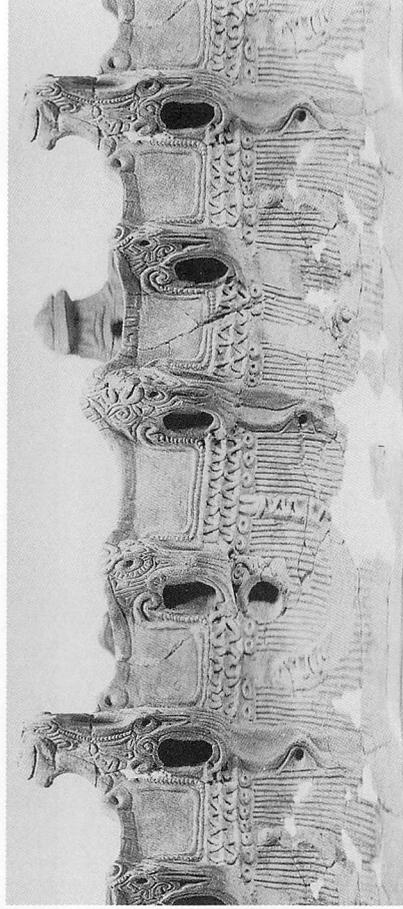
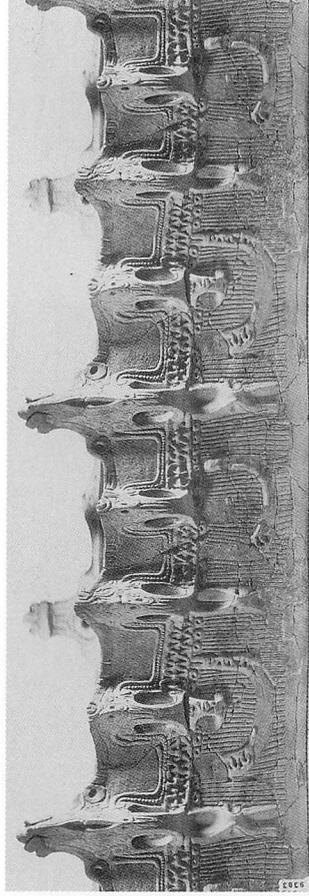
A区7土坑



C区45号住居



C区50号住居
埋設土器



報 告 書 抄 録

ふりがな	かぶつっぱらいせき							
書名	甲ッ原遺跡Ⅳ							
副書名	—第1.2.3.6.7次調査— 一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名・集	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第145集							
著者氏名	山本茂樹・川手昌英・今福利恵・網倉邦生							
発行者	山梨県教育委員会							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016							
発行年月日	1998（平成10）年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
甲ッ原遺跡	やまなしけんきたこまぐんおおいずみむら 山梨県北巨摩郡大泉村 にしいであざわだ あざおほはやし 西井出字和田・字大林			35° 51'	138° 24'	19891106 19891212 19900514 19901227 19910520 19911227 19950920 19951128 19970519 19970828	4,800㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
甲ッ原遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	住居跡 61軒 土坑 約300基 住居跡 1軒	縄文土器 石器 土偶 須恵器・土師器	旧河道が蛇行しながら南北方向に流れ、平安時代の住居跡を壊す。この旧河道は更にA区までつながり、長い距離を流れていた事が明らかにされた。			

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集

甲ッ原遺跡 Ⅳ

—第1.2.3.6.7次調査—

一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴う発掘調査

印刷日 1998年3月25日
 発行日 1998年3月30日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会
 印刷 株式会社 少国民社

